THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第廿四年　第一號

トルストイ著　徳田秋江氏譯

生ひ立ちの記

【最上製函入美本】

定價九拾錢
小包料八錢

再版出來

▲何人も一讀の價値あり▼

本書はト翁が少年時代の耳目に映せる人生自然の批評と云ふべきもので、文豪が少年時代の面目を偲ぶことが出來る。殊に其官能的描寫は筆の先きでなく、燃犀なる觀察の自然の結果であることは、自然派の先蹤をなしたものとして深き興味と意味とがある。譯者秋江氏の筆は、やはらかに情味が饒かで、よく原著の氣分を髣髴たらしめてゐる。片々たる言行錄や傳記風の書と異り、何人も一讀の價ある好著である。（文章世界評）

小説

三人叢書

小栗風葉
徳田秋聲
柳川春葉
共著

總洋布製最美本
金壹圓五拾錢
小包料貳拾錢
（第二版）

▲時代の要求に應じて現る▼

現代作家中の流行兒を以て知らるゝ三家が佳作十數篇を集めしもの時代が如何なる小説を要求するか時代の要求に應じて現はれたる小説の形式内容の如何を知らんには勢ひ本書に指を屈せざるを得ず。三子の艶麗清楚絢爛たる花の如き文章に至つては世既に定評あり、紙質良好にして印刷鮮明也（報知新聞評）▲三人の筆致も抱負も此書で窺ふ事が出來るとせば此書は豫期以上の歡迎を受くるであらう（朝日新聞評）

東京神田區
駿河臺袋町

東京國民書院

電話本三千四番
振替四千二百番

七大家校訂

袖珍名著文庫

第卅一編

新春の讀物

大納言公任撰　芳賀矢一先生校訂

和漢朗詠集　全

美本全一冊上製卅錢並製廿三錢郵稅四錢

和漢の名詩秀歌を調節朗吟するもの之を朗詠といふ、朗詠は上代催馬樂風俗に次いて起り中世以後上は九重の雲の上より下は賤が伏屋に至るまで春花秋月の莚、探涼圍爐の邊、時として所として劉亮の聲を聞かざる無きの流行を極めしもの。本書は一條帝の時四條大納言公任の撰せし朗詠集と崇德帝の頃藤原基俊の撰みし新撰朗詠集とを合冊としたるものにして優美風雅、家庭娛樂の絕好讀物たり。

（名著文庫既刊目次　每編定價郵稅同格）

▲芭蕉翁繪詞傳附句集 ▲近松淨瑠璃三種 ▲雨月物語 ▲小三金五郎娘節用 ▲今昔物語選 ▲近江縣物語 ▲狂言二十番 ▲西行山家集 ▲風流志道軒傳 ▲春花五大力 ▲俳諧水滸傳 ▲よものあか ▲國姓爺合戰 ▲謠曲二十番 ▲世間娘氣質
▲日本永代藏 ▲日本新永代藏 ▲萬載集方藏集選 ▲花月草紙 ▲鳩翁道話 ▲綟手摺昔木偶 ▲夢想兵衛胡蝶物語 ▲同後編 ▲假名手本忠臣藏 ▲慶長見聞集 ▲源氏物語忍艸 ▲松の葉 ▲春雨物語 ▲世間用心記 ▲をりく草

謹賀新年

圖書目錄往復ハガキニテ御申越次第送呈

文學博士　坪內雄藏先生著

訂正再版

倫理と文學

菊判紙數五百六十頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

七版

通俗倫理談

菊判紙數五百餘頁
定價一圓七十錢
送料八錢

取次

神田 文會堂
仝 東京堂
日本橋 至誠堂
京橋 目黑書店

冨山房

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●新年の良師友●

市川鹽泉先生選

最新刊

正氣涵養 愛吟愛誦

菊半切約四百頁
高尚製本
定價金五十錢
郵税金六錢

●向上的青年諸君に推薦す

本書は高雅雄倘なる漢詩和歌俳句英文英詩金言等より通俗卑近の俚言に至るまで所謂古今東西の聖人偉人の高教遺訓を網羅したるものにして殊に英文英詩に至りては原語を以てこれを記述し加ふるに其意義の難解なる箇所には正確なる註釋を施して讀者の便を計れり。北風吹いて天正に寒く吾人修養の好氣刻下に迫れり、委靡として振はざる現代青年の士氣を鼓舞するもの本書也乞ふ一本を備へて高吟し愛誦し、以て大和民族の正氣を涵養せられんことを希望す

ペスタロッチ原著 久保天隨譯

高等小説 **醉人の妻**

第十七版（高評嘖々）

製本高尚優美
定價金五拾錢
郵税金八錢

巨熊居士評 渡部審也、尾竹國觀畫 蟠穴庵主人著

教育小説 **理想の小學教師**

第四版

製本高尚優美
定價金五拾錢
郵税金八錢

發兌 東京本郷森川町一 振替貯金口座九三〇八 **育成會** ◆ 關西賣捌 大阪市備後町 **寶文館**

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一金七圓五拾錢也　同　径三寸[illegible]　同　目方正味[illegible]匁付
一金拾圓九拾錢也　同　径三寸[illegible]　同　目方正味[illegible]匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同　径四寸[illegible]　同　目方正味[illegible]匁付
一金拾六圓五拾錢也　同　径四寸五分丸　同　目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同　径五寸丸　同　目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製径二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同　径三寸丸　同　目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同　径三寸五分丸　同　目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同　径四寸丸　同　目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同　径四寸五分丸　同　目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同　径五寸丸　同　目方正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寶堂

（電話下谷特九六五・一二四四）

[illegible]さ居舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割増（年増契約）の代りに保險金控除（或ル年限内ニ死亡セバ）の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に渉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角（電話 七貳貳番）**京都本店**
東京市京橋區南槇町壹番地（電話本局五壹八番）**東京支店**
大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五参番）**大阪出張所**
長崎市榎津町六十五番地（電話 七貳六番）**長崎出張所**
廣島市紙屋町（秦 忠兵衛方）（電話 六〇八番）**廣島出張所**

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

田山花袋著
再版
生
石井柏亭裝
定價九十錢
郵税金八錢

德田秋聲著
再版
秋聲集
滿谷國四郎裝
定價九十五錢
郵税金八錢

正宗白鳥著
再版
何處へ
太田芳雪裝
定價八十五錢
郵税金八錢

田山花袋著
再版
花袋集
齋藤松洲裝
定價九十五錢
郵税金八錢

北原白秋著
新刊
邪宗門
定價壹圓
郵税拾錢

混亂せる詩界に立ちて嶄然として頭角を現し來れる白秋氏の新詩集なり魔睡、朱の伴奏、外光等六章約百三十篇は皆著者が心血を濺たぎるものならざるはなし

（挿畫）石井柏亭　山本鼎　太田正雄
裝幀　石井柏亭

詩界空前の美本也

東京麹町區飯田町
易風社
振替一二〇三四番

此廣告により御申込の力は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●大附錄 ●書美人 岡田三郎助筆

新小說新年號

實價壹册貳拾五錢
六册壹圓五拾九錢
本號郵稅金參錢

表紙 松羽衣（一中節二十題）和田英作

▼第拾四年第壹卷（一月元旦初刷號）本欄小說目次

●子福者……小栗風葉
●鷄……德田秋聲
●噺……上司小劍
●堀田の話……小山内薰
●音樂家……高崎春月
●境妙……本多嘯月
●廢める……伊藤左千夫
●振武軍……塚原澁柿
●クサカ……上田敏
●お使ひ……登張竹風
●七草……泉鏡花
●松の南……後藤宙外
●題未定……小杉天外
御題雪中松（コロタイプ版）佐々木信綱咏

▲口繪
◎石版彩色 鰭崎英朋
◎寫眞色刷 岡野榮 谷洗馬 田代曉舟
◎木版駒繪 山中古洞 鏑木清方 鰭崎英朋
◎寶來宮談話者寫眞二葉入

藝壇 寶來宮（本號附錄談話）

▼杵屋てる ▼市川旭梅 ▼鶴藤家いね ▼三谷屋小桝
▲市川翠扇 ▲金布袋家さだ ▲市川松蔦 ▲岩井米花
▼歌澤芝金 ▼河原崎紫扇 ▼松本錦糸

發兌元 東京市日本橋區通四丁目角 振替貯金口座東京一六一七 春陽堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

仕谷天東君譯補

詩聖ダンテ之教訓

定價六十錢　郵税六錢

ダンテが**世界一等の詩人にして古今絶倫**のシーヤーたり**生命の教師**たるは世既に定評あり本書は即ち此詩聖の一代と**神劇**に含まれたる**無限の教訓と暗示**とを明白に細叙せるもの若夫れ其傑作**人生の惑と宇宙の謎**と**社會の煩**と文明の惱に遇ふて苦悶懊闘に堪へざる者は來て此詩聖の決解を仰け果して然は一切の疑問と一切の苦痛は宛ら雪の如く融解して汝は再び若き強き新なる幸福の人たるを得む

文學士波多野精一郎著

基督教の起源

定價九拾錢　小包八錢

本書に對する帝國文學の批評　本書は「基督教起源」の問題に關する眞摯な精緻な研究である始に基督教の母たる猶太教の始源變遷の跡を叙し、次に耶蘇の膝下にその史料事蹟福音の事を述べ、更にイエルサレムの教會ペテロのことよりパウロの閲歷神學の問題に及び、第四福音書の論に終つて居る。著者は教義に關しても、史的研究に就ても、公平嚴正な立場から觀察して居るので、よく一部基督教徒の著出に見るが如き偏見專斷に陷つて居ない。故にその福音書を說くに當つても奇蹟を論ずるにしても附會の憶說に入ることがなく、常に公平なる見解を下して居るところを見ても本書の價値が甚だ大なることを知るに足ると思ふ。吾人は基督教に關する最も有力なる學術的研究の發表として本書を宗教研究の人に推奬する。本書は言文一致で力ある活々したる文體頗る齒ぎれよくわかりがよい。

留岡幸助君編

報德之眞髓

定價六十五錢　郵税八錢

○二宮翁の人格と現今の教育	牧野伸顯
○二宮翁の人格と學說	井上哲次郎
○二宮翁と倫理主義	中島力藏
○二宮翁の倫理說	加藤弘之
○二宮先生の七誓願	岡田良一郎
○經濟道德と報德主義	早川千吉郎
○國本は田舍に在り	岡田良平
○自治と報德	一木喜德郎
○産業組合と報德主義	平田東助
○報德實業論	鈴木藤三郎
○報德と時弊	岡田良平
○荒地開發主義の實行	鈴木藤三郎
○二宮翁と品川子爵	平田東助
○報德一夕談	古橋源六郎
○二宮翁のと柴田順作	西ヶ谷可吉
○二宮家に事へたる老人	秋田要藏
○二宮家に事へたる老嫗	仝
○栢山詣ての記	國府犀東
○報德の歌	湯淺半月
○報德教と報德社	留岡幸助

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目（振替貯金五五三番）　警醒社書店

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

見本呈上

疑團解決

送料四錢

處世之要訣在這裡

▲諸君專門外の知識を要せんとせば如何

▲諸君萬有科學の知識を得んとせば如何

▲諸君藝術の異同を闡明せんとせば如何

▲諸君治亂興亡の跡を究めんとせば如何

▲諸君思潮の變遷を了解せんとせば如何

▲諸君宗教教育につき知らんとせば如何

▲諸君古今の怪異を探知せんとせば如何

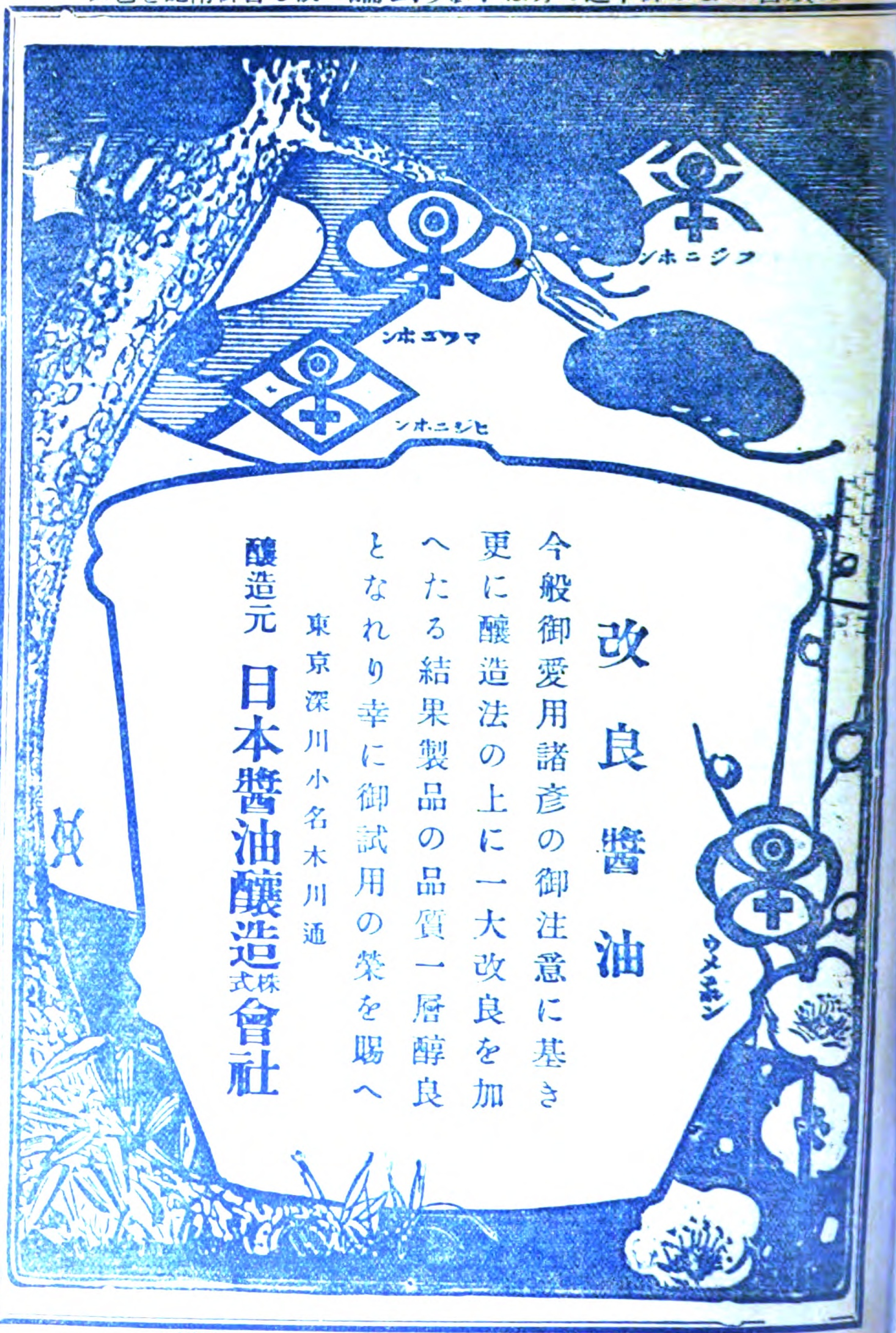
日本百科大辭典 全部七卷

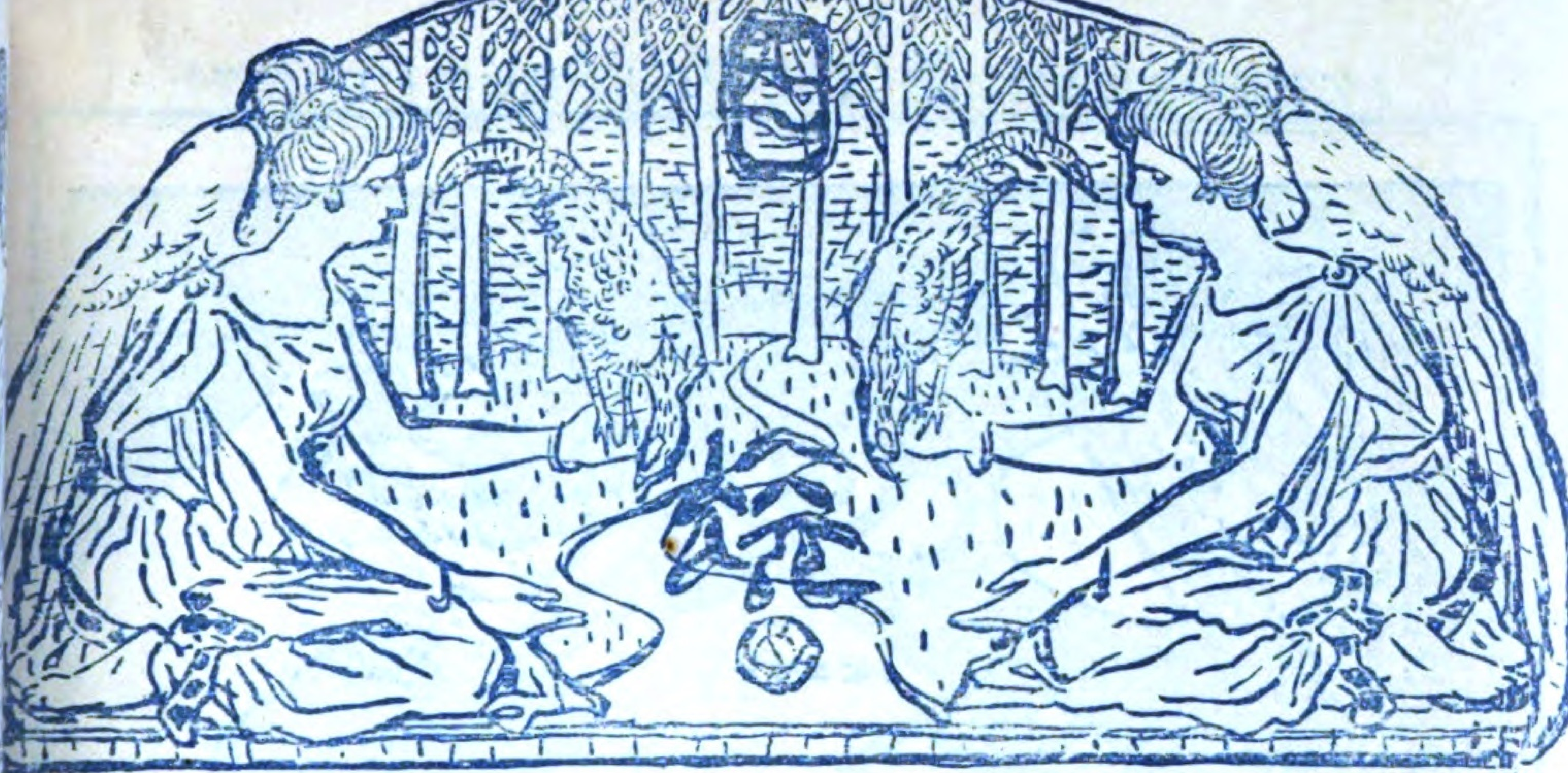
參萬部限特價發賣即刻申込

東京神田 三省堂書店 振替一五九七

第壹卷特價金七圓 送料四十八錢

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す


フジニホン
ヒシニホン
ウメニホン
改良醬油
今般御愛用諸彦の御注意に基き更に醸造法の上に一大改良を加へたる結果製品の品質一層醇良となれり幸に御試用の榮を賜へ
東京深川小名木川通
釀造元 日本醬油釀造株式會社



中央公論第二十四年第一號目次

▲公論

日本の大外交
政友會大同派合同論……社論……一―一六
所謂文明の弊の源……丘浅次郎……一七―二七
先覺者は後覺者となれり……志賀重昂……二七―三一
國家、人道、個人……藤井健治郎……三二―四〇
京都大學論……戸川秋骨……四一―四九
日米協約を評す……池邊吉太郎……四九―五二

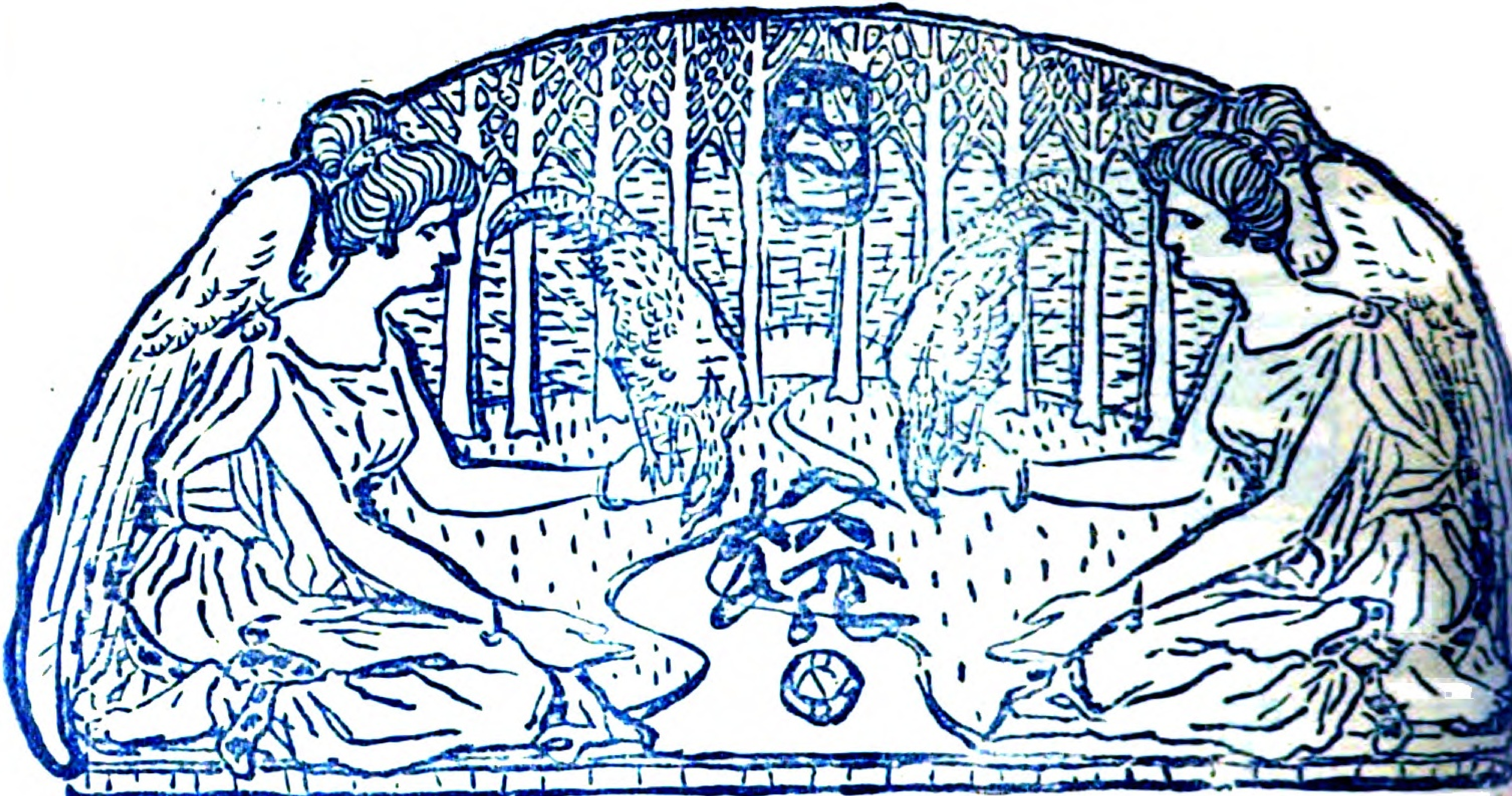
▲説苑

清國の將來……伯爵 大隈重信……一―一三
海外消息……無念庵……三―七

時子……杉村楚人冠……一―二〇

人相談片……大町桂月……二一―二三
帝都の新聞經營者……黑頭巾……二三―二九

首相桂侯論
○桂侯論……冷眼子……二九―三一
○桂侯を論ず……三宅雪嶺……三一―三四
○桂侯……松井柏軒……三五―三七



○桂の人物を論ず……局外人……三七―四四
○桂侯論……島田三郎……四四―四九
○桂侯と予との接觸點……建部遯吾……五〇―五六
○政治家軍人……靜觀居主人……五六―五八
○桂侯論……田川大吉郎……五八―六二

▲小説

耽溺……小栗風葉……一―五〇
一夜……島崎藤村……五一―六四
埋立地……眞山青果……六五―八二
藁……田山花袋……八三―九二
強者……正宗白鳥……九三―一二六
四十女……德田秋聲……一二七―一五〇

▲詞藻

笹鳴……大谷繞石……一―一
長詩三章……太田正雄……一―三
和歌……尾上柴舟選……三―七
俳句……大谷繞石選……七―一二

▲評論

過去一年間の政治、……X生……一―九
外交、宗教、文學……松逕子……九―一二
……楞陰生……一二―一八

▲雜俎

廿五議會の夢……黒顔子……一―五
攝津大椽の一座……空明子……五―六
▲新刊批評數件……

明治四十二年の春を迎て

光輝ある聖世も亦一を加へて、明治四十二年に達す、我が中央公論亦創刊以來年を閲すると實に二十有四、吾人は回想して無限の感興と多大の欣悦を禁ずる能はず

皇謨の悠遠にして而して確實なる、今や帝國をして名實共に世界一等國の伍伴に入らしめ、双肩に東洋平和の大責任を負荷するに至れり、義重しと雖も光榮も亦大也

我が中央公論は幸ひに聖代の恩澤と、江湖の愛顧とに浴して、幸ひに健全に發達し來りしのみならず、社運年を逐ふて盛んに、其の發賣部數のみを以てするも、尙ほ我が雜誌界の上流に加へられ、殊に世上の信用益々厚きに至れるは、吾人の感謝に堪へざる所也、吾人が寤寐と雖も尙ほ且つ期待せる公平中正、剛も茹はず柔も吐かず、偏に天下の爲めにせんと欲する微心の、竟に聊か昊天に徹せんとする乎、吾人は深く之を佛陀神明に拜謝すると共に、又併せて愛讀者の渥き眷愛に感佩し、且つ此の心を以て益々微力を致さんことを期せんと欲す

今紙筆を新たにして春初第一の文壇に立つに方り、世界の平和と、我が讀者諸君の淸榮とを祝福するに代へて、謹みて此の蕪辭を綴る

反省社同人



第二十四年
第一號
（第二百卅八號）

日本の大外交

（一）

英國と攻守同盟を締結して再び之を重ね、更らに佛露米と協約を結ぶ、世界の一等國中直接に相結ばざるは唯だ獨逸あるのみ、我が日本の地位や實に偉なりと謂ふべし

顧みて二十餘年前の狀態を看るに、幾んど隔世の感なき能はず

明治政府創立後の外交は、主として條約改正にありき、然り、治外法權の撤去にありき、岩倉大使が木戶、大久保、伊藤の諸俊材と夙く歐米を巡回せしも之がためならずや、勿論韓國討伐を企てたるものあり、其の目的一は韓國を統一し、併せて勢力を滿洲方面に伸張して、以て大に國光を發揚すると共に、彼の鬱勃たる全國士族の銳氣を外に傾注せしめて、以て治平を計らんとする政略に在ると言を俟たず、

其の主張者は言ふまでもなく西郷、江藤、副島、板垣の諸傑にして、其の言議は岩倉大使の一行に由て阻止せられたりき、大使一行と雖も素より韓國討平の大志無かりしに非ず、唯だ新たに歐米文明の實狀を目擊し來りて、其の意一に内治の改善に在り、以爲らく先づ教育を盛んにし、産業を奬勵し、兵備を完成して國民の利福と國家富强の基礎を建て、然る後餘力を外に加ふるを順序とすと、此の主張竟に廟議を制して征韓論なるもの一時頓挫したりしも、然るも此の爭議の結果は、萩の亂となり、佐賀熊本の變となり、外に發しては臺灣征討となり、所謂西南の亂を以て辛ふじて其局面を結び得たりき

此の亂後、岩倉大使一行廟堂に主となり、政策を内治整頓の一方に偏して、鋭意文物の更新を圖ると共に、外に向ては條約改正に全力を傾注したり、蓋し治外法權を存置するは、國家當面の恥辱にして、之を拂拭し去るにあらざれば、國の體面全からず、維新の鴻謨完成すると能はずとせる也、彼の征韓論者の一部に由て提唱せられたる立憲政體論を抑へたるも全力を條約改正に盡さんが爲めに外ならず、刑法を始め、多くの法典を編纂せしも、亦外國人の信用を得て條約改正を行はんがためのみ、多くの洋館を建造し、顯官貴族が男女を擧げて強いて洋風の生活を爲し、鹿鳴館を建て丶舞踏まで催ふし、盛んに歐化主義を鼓吹したりしも、亦條約改正を急がん爲めのみ、明治政府に於て最も材能あり、最も勢力ある人を擧げて陰に陽に外務の局に當らしめたるも、唯だ急に條約を改正せんが爲めのみ、當時我が外交は條約改正を以て唯一の大業とし、外交の全部は實に條約改正の事業に存したりき

隨つて彼の征韓の志望を繼續するが如きは、全く政府殊に外交當局の顧盻する所と爲らず、唯だ軍人

中の遠圖あるものに依て、陰暗の間に密かに其の計策を進められしのみ

(二)

幸ひにして條約改正は成れり、主として其の局に當れる陸奥宗光氏が、明治政府の謀叛人より一躍して子爵の榮位に昇れるも其の功績に出て也、陸奥氏が副島、寺島、井上、大隈の諸先輩よりもより大なる外交家たるとを認識せられたりしも此のため也、陸奥氏をして明治政史に不朽ならしめたるも此のため也

明治政府の顯官等は、常に英國公使パークス氏の一顰一笑を喜憂するの外殆んど何の餘裕もなかりき、内治に於ては時にクデタアを斷行する剛氣あるも、外國人に對しては常に毅然として容を改ためざるを得ざりき、斯くて唯だ一の條約改正に盡瘁す、當時の我が外交なるもの丶規模の細小にして而して氣力の尫弱なる、殆んど自から憫れむに堪えたりと謂はざる可らず

(三)

明治政府の樞機を執れる英傑が、一意唯だ條約改正に憔悴しつ丶あるに當つて、獨り密かに其の手を進めたる軍人の遠略は、西郷、江藤諸家の征韓論よりも一歩を進めて先づ清國と開戰するに至れり

當時我が外交は、我が外交家中の白眉と稱せらる丶陸奥氏其の局に立てるに拘らず、卷舒進退の多く機宜に適中したりしは、外交家よりも寧ろ主として軍人の機略に出でたりと做すも不當に非ざるが如し

開戰の始め、東洋に最も多くの關係あり、最も大なる勢力ありし英國は、尙ほ清國側の同情者なりし

に似たり、少くも其の東洋にある艦隊は、明かに清國側に立ちたりき、日本軍が海陸共に連戰連勝するに至つて、彼れの態度は一變したり、然かも斷じて日本を助くる程までには至らざりき

日清講和成り、當局の大臣等得意滿面、太白を滿引して乾坤を傲睨したりし時、獨佛露の三國は聯合して干渉し來れり、爲めに我れは遼東半島を還附して戰勝の一半を放棄せざる能はざりき、然かも我が在外公使は、一人として明白に之を豫知する能はざりき、流石の陸奥外務大臣も、巧みに三國の干渉を受應したるのみ、竟に之を挫くと能はざりき、英國の好意に由らんとして、却つて三國に聽くの可なる所以を忠言せられたりき

我が外交年來の不振不活動は、玆に於て最も切實に我が國民に感知せられざらんと欲するも得べからざりし也

然れども失敗は最も高價なる教訓也、而して我が國民は失敗に由て徒らに沮喪し哀弔するが如き痴人に非ず、況んや明治政府の聰明なる、何ぞ此の高價なる教訓を無にせんや

(四)

獨佛露三國干渉の結果は、東洋の局面を一變せんとしたり、獨逸は膠州灣を租借して玆に大に清國に伸ぶるの地歩を占め、將さに楊子江流域に於ける英國の勢力を窺はんとす、露國に至ては、旅順大連を租借して玆に大なる軍港と商港とを建造し、且つ漸を以て北滿洲より南滿州を席捲し、竟に西伯亞鐵道を南下せしめて大連と聯絡し、玆に幾んど其の雄志を成すに至れり、去れば韓國の如き當然我れに歸依

すべくして、然かも却つて露國の袖裏に入らんとす、玆に至つて我が日清戰役なるものは、全然無意味に歸せんとする也

思ふに東洋に於ける獨佛露の同盟は、何程の深度と、何程の力量とを有するや、之に對しては、英國殆んど顏色なきが如く、我が國民また徒らに涙を呑みて十年の臥薪嘗膽を口裏に唱ふるの外なかりき此の時に方つて、我が覺醒せる外交家は幸ひにして呆然自失するが如き陋態に出でず、先づ百方して三國聯合の態度を測量するに努むると共に、主として其の發頭たる獨逸の意を損せざるに努めたりき、吾人は未だ多く之を記述する機會を得ずと雖も、但だ我が外交家が三國聯合に反抗して益々其の結合を堅くせしむるの愚なるを看破し、勉强して彼等の意を迎へ、肩を縮めて自から謙抑する間、尙ほ其の結合を緩くするに鋭意したりし苦心に至つては、深く之を諒とせざるを得ざる也

（五）

英國の外交家も、亦恐らくば獨佛露の三國聯合に壓迫せらるゝことを自覺せしなるべし、淸國に於て、否東洋に於て最も勢力ありし英國も、獨逸が膠州を租借し、露國が旅順大連を租借するに比して何の顏色ありや、日本の外交家は、威海衛の假占領を繼續して、徒らに三國聯合の張本たる獨逸を警戒せしむるの愚を識認して、巧みに之を英國に轉讓し、聊か英國の顏を立てたるも、竟に實際の効なきに及びて、英國も亦之を淸國に還附したりき、而して此の間獨逸は山東鐵道の敷設權を得、鑛山採掘權を併せ収めて、着々經略の歩武を進め、露國は又其の鐵道を大連旅順に出でしめて歐亞の聯絡を大成せしめたるに、

英國のみは殆んど何の得る所もあらず、却つて揚子江流域に於ける日本の勢力範圍を侵害せられんとする傾向すら之なきにあらざりき

此等の事實は、啻だに日本外交家に由て指摘し誡示せらるゝに止まらず、沈重にして利害に執着强き英國人の齊しく自覺する所なりしなるべし、自覺の結果は、いふまでもなく獨佛露と對抗して以て其の利權を張るにあり、即ち一方には三國の結合を緩くすると共に、一方には東洋の有力者を引きて味方とするの外なきのみ

斯くして日英接近の必要は順次に識認せられ來れり、然かも所謂「光榮ある孤立」を傳統政策とせる英國政府は、斷乎として日本と握手するには至らず、頗ぶる徘徊顧望の體度を持したりき

明治三十三年の北清事變に於て、日本が清國に於ける最有力者なるとは、列國識者の看破する所となりき、當時團匪なるもの蜂起して列國公使を北京に包圍するや、滿州に散在せる露國兵は、最も多く天津まで迫りたりき、然かも彼等は公使救助よりも、其の勢威を張るに急なるが如き形迹を示せしのみならず、其の軍紀は頗ぶる列國民をして疑惧せざる能はざらしめたりき、故に一個大隊の日本兵が始めて天津の居留地に入るや、列國の男女は涙を揮つて歡迎し、同時に始めて安堵したりしといふ、既にして列國は兵を送れるも、其の遠く勞するの苦に堪へず、日本が一師團餘の軍を出すに及びて、始めて北京を取り、諸公使を救出するを得たりき、然かも日本軍の勇猛にして紀律の嚴肅なる、嶄然として異彩ありしとは、識度ある列國の皆之を看取する所なりき、英國の如きは殊に其の然りしものにして、其の漸

く日本と相信依せんとする動機は實に茲にありき

(六)

我が外交家は、英國が進んで我と握手せざるに就て、少からず懊惱したりしが如し、何となれば露國の滿州に於ける勢力着々として建立せられ、將さに牢平として拔く可らざるに至らんとするのみならず、韓國も亦動もすれば折れて其の勢圏内に入らんとする虞あれば也、滿韓兩つながら露に皈せば、日本は殆んど自衛する能はざる虞あれば也

茲に於てか日本の採るべきもの二途あるのみ、一は英國と結びて飽まで露國と對抗して以て自から完くする也、一は露國と親みて韓國を我が勢力に皈せしめ、滿州を擧げて露の自由に一任すると是れ也

吾人の了解する所によれば、伊藤公が歐洲に漫遊するや、政府は寧ろ露國と結ぶの外なしとし、公に托するに露都に於いて彼の政府と交渉すべきと以てしたりしが如し、然かも公の足未だ露都に入らざるに先つて、英國は竟に猛然として起つて日本と同盟を結ぶに至れり

解するもの或は曰く、日本の露國と締盟せんとせしは、以て故らに英國を激せしのみ、日本若し露國と同盟せば、而して獨佛其の後援たらば、英國は彌よ孤立すべく、淸國に於ては殆んど何事をも成すと能はざるに至るべし、英國豈默して止む可けんやと、理は洵に然り、然れども我が外交家が果して斯の如き機略を以て故らに露國と結ぶの態度を暗示(寧ろ明示)したりしや否やは、吾人と雖も未だ之を斷言する能はず、但だ我が外交家の希望の初めより日英同盟にあり、露國との締盟は寧ろ餘議なき窮策なり

しヿ丈けは之を明言し得、見よ英國より同盟の議あるや、直ちに伊藤公に電報して其の使命を取消したりしヿを

日英同盟成立の結果は、素より露國との衝突のみ、日本國民を擧げて臥薪嘗膽を叫び、十年鋭意して軍備を擴張せるも、亦唯だ一蹴して露國に報復し、我が地位を鞏固ならしめんがためのみ、幸ひにして十年經畫成りたりとも、獨佛にして依然露と聯合するに於ては、我が力到底之と較す可らず、或は三國の交情また舊時の如くならず、聯合の態度大に緩みて、其の有無すら疑ふべしとするも、然かも全く解滅したりとも斷ず可らず、乃ち少くも獨佛を牽制して露國に與みせしめざるため、英國と同盟するの必要あり、而して英國我が同盟となり、我が二國以上と戰ふ時、英國起つて我れと共に倶にするヿを誓約せば、獨佛の兩國必らず露を助けずして、我れは單獨に露國と戰ふを得べし、今や我が力の單獨に露と戰ふに足るヿは、識慮ある軍人の信ずる所にして、國民の多數も亦少くも韓國を我が勢力範圍に收め、露國と對等の地歩を占め得べしと確信したりき、左れば看よ、日英同盟の締結以來、我が國内に於ける討露論頓に氣勢を高め、而して我が外交家の施設も亦着々として露國と對抗すべく其の線路を進めて、翌三十六年の暮には、形勢既に著るしく必迫したりしヿを

曾て條約改正のみを畢生の大事業とし、若くば三國の干渉を豫知するヿ能はざりし時代の外交に比すれば其の活動や實に目覺しと謂べし

ポーツマスに於ける日露媾和談判に就て、世或は露國全權ウィッテ伯が巧みに米國の輿論を一變したりしを激賞する者あり、一變するは素より一變せざるに優さる、然かも之を以て大成功とし、由て以て媾和の成否に大關係ありと做すが如きは、解せざるも亦甚だし、思ふに當時の形勢多く露國に利にして我れに然らざるものありき、一個人に在ても、債務者を破產せしむるとは、債權者殊に大なる債權者の好まざる所たり、債務者を倒さんよりも、寧ろ助けて以て其の債務を返辨せしむると素より利なれば也、國家と雖も然り、露國の如き多大なる外債を有する國をして、外交にまで全敗せしむるとは、債權國民の欲せざる所ならん、露國の財政家として信用あるウィッテ伯は、此の情理を解して多く露國の公債を所有する國民の援助を求めしや勿論ならん、且つ戰期を彌久するとも、露國の利にして日本の不利也、露國は漸次歐露の精鋭を送り得るも、日本は之に反すれば也、最も露骨に之をいへば、日本は奉天の大勝を好機として必らず戰局を收めざるを得ざる地位に在りたれば也、此がため媾和の結果の思はしからざりしも亦實に餘儀なし、必らずしも責を外交にのみ歸す可らざる也

當時の事情に就ては、吾人尙ほ大に辨論を欲するものあるも、力めて之を避けざるを得ず、本論の目的は主として日本外交の局面の擴大したるとを論叙するに在り、外交上の失敗を剔抉するが如きは問題外に屬すれば也

媾和條約の成立と殆んど同時に、日英同盟を再訂し、純然たる攻守同盟と做し、且つ其の區域を東方印度にまで擴張したるは、更らに我が外交の大を加へたる所以也

熟々日露戰役後の情勢を視るに、戰役中に日本に集中せる同情は、却つて多く他の方面に去れるが如し、是れ弱小として憐みたる日本が其の實强大なるを視て俄かに畏怖せしにも由らん、然れども日本の地位は之に止まらざる也、列國は多く以爲らく、日本は勃興の勢ひに乘じて更らに益々手を四方に延ばすべしと、現に佛國は緬甸方面に危惧し、露國は日本が竟に浦鹽斯德を屠らずんば已まずとし、或は更らに清國を倂呑すべしと做し、彼の米國すら日本が滿洲を獨占し、比律賓を奪取すべしと思ひ做せり、斯くして猜忌の暗雲は實に日本を包圍するに至れる也

茲に於て日本政府は、淸國の領土保全を基礎とし、相互に其の畛域を侵犯せざることを聲明して、先づ佛國と協約し、次て露國とも協約したりき、一方に英國主となりて露佛と其の交情を溫むるあり、而して一方に日本と東洋の平和を保障すべく協商す、吾人は英國の活動の旺盛なるを嘆稱すると共に、又我が外交の無爲ならず、時に臨んで宜しきを制するを悅ばざる能はず

（八）

最近に交換せられたる日米覺書は、更らに最も悅ぶべきものゝ一也

米國には日本を猜忌するもの少からず、日米開戰說の妄なる辨を待たずと雖も、米國内には隨時之を皷吹する躁狂者あり、而して其の政事家中には又日本が滿洲の利權を壟斷するが如く推する者なきに非ず、而して我が國民の之を見聞するもの、竟に日米間の交情に危惧することなきを得ず

之を利用して密かに漁夫の利を占めんと欲する者あり、否、之ありと信ずる神經過敏家あり、我が政

界の一部には、現に唐紹儀の東京に來るや、霞ヶ關の當局を脅喝し、米清同盟を締結せんと揚言したりと傳ふる者すらあり

此の時に當つて、日米兩國が堂々として太平洋の平和を保障し、清國の領土保全を聲明し、兩國の親和を表彰するは、此等一切の疑惑を掃蕩するもの也、少くも日英米の三國主となり、露佛また之に加はりて東亞の平和を確保することを彰明するもの也、其の効果の大なる何ぞ多言を要せんや

吾人は我が日本主となり、英米露佛と共に東洋、殊に清國の領土を保全して以て其の平和を確保するに至れるを視、轉た其の外交の大なるを自覺せざる能はず、曾て汲々乎として一意條約改正に急なりし小外交を以てして、僅々二十餘年の後、今や東洋の主となりて双肩に其の平和を保證す、恐らくば西鄕・江藤、岩倉、木戸、大久保の諸傑も、竟に夢想し得ざりし所なるべし、二十年後の今にして當年を回顧するに、豈隔世の感なからんと欲するも得んや、抑も清國は大なる未知數也、我が外交が世界の一等國を聯結して之に對する、實に遠大なる識慮に出づ、吾人は是に由て殊に我が外交の大なるを視る、啻だに三國干渉後の形勢を一變し得たるのみに止まらざる也

(再び) 政友會大同派合同論

吾人は曾て政友會と大同倶樂部との提携し合同するの當然なるを主張したりき、今また之を繰返すの頗ぶる時宜を得たるを感ず。

然る所以は他なし、政友會の地位形勢最も合同を便とするに至りたれば也。

政友會の多數は、情に於て素より桂內閣を攻擊して一快戰を欲するなるべし、然れども爾かすること能はざるを奈何ともすることなし、桂內閣は初めより積極主義なるに於て、同じく積極を標榜し來れる政友會は、理に於て正面の敵たるを得ず、强いて敵たらんとせば、三百代言的小理窟を牽强し附會し來るの外あらず、而して是れ堂々たる大政黨の面目に非ざる也、桂內閣の財政計畫といふも、畢竟西園寺內閣の計畫を踏襲せるのみ、六年計畫を十一年計畫に延ばしたるのみ、其の延したるも財政の窮乏上餘儀なき結果のみ、大博覽會の延期も、實は西園寺內閣に於て既に中止の底意あり、少くも西園寺侯、原氏、松田氏の間には其の意見を同じくしたり、爾かも是れ小問題のみ、未だ政治問題と做すに足らず、日米覺書の交換も、政友會に於て素より反對する謂れなく、彼の三稅廢止案も、西園寺內閣は財政補塡の途なきを以ての故に反對の態度を執り、而して其の提出せる稅制整理は、却つて議會の容るゝ所とならずして止みたりき、揣るに桂內閣の態度も亦甚だ西園寺內閣と異ならざるに似たり、政友會たるもの其れ何を以て桂內閣に反對す可けんや。

且つ西園寺侯と桂侯との間には、數次の會合往復あり、松田氏も亦密かに財政計畫の内示を受けたりしと聞く、政友會は誼に於ても未だ俄かに桂内閣の敵たる可らず、然れども政友會にして公然桂内閣の下に立て政府黨たると能はず、乃ち敵たらんとするも得ず、味方たらんとするも得ず、恰かも半上半下の地位に立たざるを得ざるべし、嗚呼是れ堂々たる大政黨の面目ならんや。

殊に近時政界の趨勢は、政府黨たるを以て政黨の最大利益とす、總選擧後、政友會が絶對に過半數を占むべくして占めざりしは、突如政權に離れたれば也、既にして若干の入會者を得て、兎にも角にも過半數に達するを得るに至りたるは、其の政府に反對せざると明白となりたるが故也、推して考ふるに、政友會は寧ろ大同倶樂部と合同して、桂侯等の與黨たるを利とせずや。

政友會は衆議院に多數を制するがためには、已に多く顧慮するの要なきも、唯だ貴族院を奈何ともする能はざるが故に、先づ同院に於ける山縣派桂派の勢力を打破し、然る後自黨の勢力を植ゑ付けんと欲して前期議會以來殊に苦心慘憺たる形跡あり、彼の大木伯を背後より指嗾して伯爵の會合を分裂せしめ、若くは西園寺侯の知遇に感激する秋元子をして公然子爵の會同を分離せしむるが如き、若くは堀田子を研究會より拔きて同會の基礎を搖かさんとするが如き、苟くも乘ずべき機會あれば曾て之を逸せず、其の志望の小ならずして而して謀圖の密なる、頗ぶる嘆稱すべきものあり、然れども記せよ、大同倶樂部と合同して山縣派桂派と爲らば、貴族院を左右するが如きは尋常茶飯事のみ、また多く勞するの要を見ざるにあらずや。

故に政友會は大同倶樂部と合同し、一黨を舉げて西園寺桂兩侯の共有物たらしむべし、原、松田、長谷場の諸氏をして、淸浦、大浦、關の諸氏と歡然握手せしめよ、然らば則ち天下は短かくも十年二十年の間、卿等一黨派の物たるべし。

或は曰く「大同倶樂部は穢多組也、誰か之と相倶にす可けんや」と、然れども思へ、政友會の幹部なる大岡、元田の諸氏は、大同倶樂部の前身たる國民協會の出にして、現に大同派の安達、原田の諸氏と濃かなる舊交あるにあらずや、大同派の柴、橫田の諸氏亦長谷場、杉田氏等と同一黨派として斡旋したりしにあらずや、更らに思へ、政友會には今現に大同派の落武者あり、其の落武者は所謂穢多組中の殊に錚々佼々たるものなりしとを、且つ夫れ政友會が今日の如く能く大を致したる所以は、星亨時代より心機を一轉し、曾て仇敵視したりし藩閥の一部と合同したるが故にあらずや、傳統の自由黨なる名稱をすら愛惜せず、藩閥の巨頭と視目したりし伊藤公の膝下に俯伏して、全黨を舉げて殆んど降伏するも厭はざりしが故ならずや、所謂淸濁併せ呑むと唱へて、如何なる經歷ある者を好んで歡迎し包容したりしが故ならずや、名節大義を問はず、垢を含み耻を忍びて一意専心唯だ大なるとを欲せしがために、竟に今日あるを致せしにあらずや、苟くも其の初心を點檢せば、而して從來の經路を討尋せば、今日全黨を擧げて桂侯に降伏する亦可なるのみ、漢來れば漢を現じ、胡來れば胡を現ず、政友會たるもの今にして何ぞ此の宏量無しと謂ふべけんや、况んや桂派と合同し、大同倶樂部と合同するは、同じく積極主義たるに於て名分正しきをや、又况んや衆議院に大多數を占め、併せて貴族院にも亦自在なる大權威を立つ

十年二十年に及ぶをや。

桂侯及び其の同志並びに幕下と雖も、苟くも政黨を有害物視せず、永く政權を執て其の經綸を行ふ大志あらば、また區々の感情を一擲して、斷然政友會と倶に共にすべき也。

政友會大同倶樂部と合同し、西園寺侯桂侯の共有とならば、是れ再び伊藤公山縣公を一致せしむる所以也、貴族院の一部には、其の勢力の過大なるを憎惡して、寧ろ强ひて反對せんとする者素より之あるべし、然かも大勢の合同黨に與みすると疑ふ可らず。

合同黨獨り政權を占有して、貴衆兩院を左右せば、天下悉く之に雌伏すべし、然れども得意久しきに渉れば過咎必らず生じて、而して民心自から他を思ふに至ると勢ひ也、進步黨の一部には、政權を欲すると食色よりも甚だしきものあり、然かも傳統の主義の消極なるに於て、竟に政友會大同倶樂部と混一す可らず、水と油とは假令一器に盛り得るも、竟に混淆せざれば也、故に進步黨及び新團體其の他の消極を主義とするもの、亦合同して大黨に對峙するに至つて、政界の分野始めて鮮明なるべし。

吾人は素より小黨分立の世界の大勢なるを知り、我が政黨界亦必らず然るを信ず、然れども分裂の前には大合同を要す、大合同の後分裂するものは、其の主義政見によつて然るものなれば也、抑も利害より斷せば、必らず先づ斯の如くならざる可らざる也。



所謂文明の弊の源

理學博士　丘淺次郎

近頃の新聞や雜誌には、文明の弊を論じたものが大分見える、物質的文明が進んだために世道が廢頽したとか、二十世紀の文明は人をして野獸たらしめざれば止まぬとか云ふて、孰れも今日の人心の墮落を以て、文明の進んだために生じた直接の結果である如くに見做して居るが、之に反對した議論が一つも出ぬ所を見ると、恐らく斯かる考へは新聞や雜誌に筆を執る人々の間に一般に存するものと思はれる、我等の見る所は大に之と異なる故、試に其大要を左に述べて見やう、若しもそれが眞に世を憂ふる人々の參考ともならば甚だ仕合せてある、

現今世道の頽れ、人心の墮落して居ることは目前の慨な事實て、我國の將來を考へると實に憂慮に堪えぬ次第てある、世道とか人心とか、品性とか人格とか云ふ議論の喧しいのは、皆世の墮落して居る證據て、誠に情ないことてはあるが、又一面には此墮落を憂ふる人の尙多少世に存する徵と見做せば、聊か心强い如き感じも生ずる、然しながら凡そ一の弊を改めやうとするには、先づその因て起る眞の原因を究めて、之を除くことを圖らねばならぬ、若しも其原因を究めることを忽にし、眞の原因でもないものを原因であるかの如くに思ひ誤り、之を基として矯正の方法を講ずる如きことがあつたならば、其結果は唯世を益せぬのみならず、或は民族發展の上に取り返しの附かぬ妨害を生ずることが無いとも限らぬ、

今日多數の論者が、人心の墮落を以て物質的文明の

進んだ結果と見做す理由は何であるかと尋ねると、單に我國では維新以後物質的文明の進歩したと同時に、人心も墮落したと云ふだけに止まつて、唯時が相重なり合ふて居ると云ふのに過ぎぬ、同時に起る事柄の中には、互に原因結果の關係のあるものもあれば、又斯かる關係の全く無いものもあるは明なこと故、單に同時に起つたと云ふ理由だけで、一を原因と見做し、一を結果と見做すのは頗る輕卒な議論である、物質的文明の進歩を以て、人心墮落の原因と見做すのは、即ち斯かる輕卒な皮相的の觀察である故、我等は到底之を承認することは出來ぬ、特に我國の如き、維新以來西洋の文明を急いで輸入することを務めたとは云へ、未だ顯微鏡一つ滿足には造られず、茶や生絹の如き天産物を輸出して機械其他の人造品を輸入し、首府に下水の設備さへ行屆いて居ない所で、物質的文明が進歩して居るとは如何にも云ひ難いことであり、又維新以前とても今日と同樣に賄賂も行はれ、淫風も盛であつて、人心は已に相應に墮落して居たのであるから、今頃になつて、急に思ひ付いたかの如くに文明の弊を論ずるのは、愈々取るに足らぬことである、眞に今日の墮落を救はんと志す人は、更に一層深く且綿密に研究して、終極の原因まで探り求め、根本より改めることを圖らねばならぬ、

然らば所謂文明の弊なるものの眞の原因は何に存するかと云ふに我等の考へに依れば、主として社會の制度、特に財産に關する制度に缺點があるに因るのである、元來人間には他人の迷惑は少しも顧みぬと云ふ性質が生れながらに備はつて居るもので、汽車の客車中で長く横に臥ながら、後から入り來つた人に座席を與へぬ如き、立食の宴會の席で、他人を押しのけ突き倒し、前に居る人の肩の上からフォークを持つた手を延ばして僅ばかりの肉を取らんとする如きは、その最も手近な例であるが、之に類することは誰も自身に經驗のあることと故、態々揭げるにも及ばぬ、斯かる根性を持つた人間が集まつて社會をなして居るのであるから、到底蟻や蜂の如き完全な社會が成り立つ理窟はない、道德も法律も皆人間に斯かる性質が備はつて居る

ために必要であり、警察や裁判所の繁昌するのも皆人間に斯かる性質が備はつて居るからである、若しも人間に聊ても生れながらにして他人の迷惑を顧みて、己れの欲せざる所を他人に施さぬと云ふ性質が備はつてあつたならば、蟻や蜂の社會と同樣な眞に協力一致して毫も爭のない社會が出來るてあらうが、蜂や蟻の社會の斯く完全であるのは長い年月を歴て、多くの代を重ねる間に、自然淘汰の行はれたる結果として、漸々發達し來つたのである故、今日の人間が假に斯かる境遇に達しやうと思ふても、之は到底出來ぬことである、禮儀作法によつて、少數の人々の間に、恰も互の迷惑を顧慮する如き體裁を粧ふことは或は出來るであらうが、先祖代々遺傳し來つた腦髓を練り直して、急に本來の性質を改めることは到底不可能である故、先づ當分の間は、他人の迷惑を顧みぬと云ふ人間の性質は、直らぬものと見做して置くの外に致し方はない、畢竟人心が墮落したとか、世道が廢頽したとか云ふのは、唯人間の此性質を表面に現はす程度が、從來よりも尙一層劇しく成つて來たと云ふに過ぎぬのである、今日まで人間が、他人の迷惑を顧みぬと云ふ本來の性質を、或る程度まで押さへ隱して現さぬのは、全く社會の制度に基づくこと故、若し社會の制度に不備の點があつたならは、此性質は忽ち劇しく現れ出ざるを得ない、英國の或る政治家の云ふた言葉に「政治の要は容易に惡を爲し難き社會を造るにあり」とあるが、人間の此性質が到底直らぬものと定まつた以上は、社會の制度の方を充分に研究して、其缺點を調べ、若し爲し得べくば、之を改めて、人間の此性質の劇しく現はれ得ぬ樣な社會を造らんと務める外に道はないであらう、

今日の社會は新に誂へて造つたものではなく、太古野蠻時代から漸々進歩し變遷して出來上つたのである故、其現在の制度の中には、太古野蠻時代からの遺風として存する不條理なものも決して少なくはない、之は恰も人間の身體に、尾の骨や、尾を動かす筋肉の尙存して居るのと同じで、素より當然のことであるが、其中には、全く無害なものもあり、大に趣味あるもの

もある、然しまた甚だ有害であらうと思はれるものもある、特に財産に關する制度の中には、社會的生活に不適當であり、隨て世道人心に取つて慥に有害であると我等の信ずるものが一つある、

我等は決して現今の財産制度を悉く有害と考へるのてはない、他人の迷惑を顧みぬ人間が集まつて、財産を共有することの出來ぬは見易い理である故、各個人が財産を私有すべきは素より當然なことである、僅に三四名の同業者が聯合して商賣を始めても、利益を等分に取ることにすれば、多く働いた者は損をした譯になり、怠けた者は得をした譯になり、結局働くは損と云ふやうな考へが生じて、忽ち紛紜が起る位である故、何百萬、何千萬の人が財産を共有にするなどとは夢にも出來ることでない、また人に賢愚強弱の別がある以上は、各個人の財産にも貧富の別あるべきは素より當然である、働いた者が富み、怠けた者が貧乏し、賢い者が瞞して儲け、愚なる者が瞞されて損し、若い時に苦勞した者が老後を安樂に暮し、若い時に道樂をした者が老後に困窮して暮すのは自然のことである故、誰も之に對して不服を唱へることは出來ぬ、また各個人が財産を私有する以上は親が財産を子に讓ることも素より當然である、親と子とは身體こそ離れては居るが、同一の生命の引續きとも云ふべきもの故、たとひ愚な息子が親の一生掛かつて溜めた財産を讓られたとて、他人が彼此云ふべき筋は少しもない、他の動物の中にも、親が私有の財産を子に讓るものは幾らもある、

今日の財産制度の中で、社會的生活に適せず、隨つて人心墮落の原因となるものは、唯土地物品、金錢等を貸して個人が利子を取ると云ふ制度である、之も單に一個人に就て考へて見ると別に不正なことであるとは云はれぬが、その社會全體に及ぼす影響を調べて見ると、頗る有害なものであることは爭はれぬ、物を貸して個人が利を取ると云ふ制度の行はれて居る上は、或る手段に依つて一定額以上の財産を獲た者は最早少しも働かずに贅澤に暮して行くことが出來るが、一社會の中に遊んで居ながら他人の造つた米を食ひ、他人

の纏つた衣服を被て、他人よりも贅澤に暮して居る者の存することは、其社會のために有益であるや否や頗る疑はしい、特に其者の一生涯のみならず子孫代々、未來永刧まで遊んで贅澤に暮せると云ふに至つては、實に何と評して宜しきや解らぬ、また斯樣に財產を有する者等が尙働いたならば如何に成り行くかと云ふに、其結果は今日實際に見る通り、富者は益々富み、貧者は益々貧乏し、一方には遊んで居ながら贅澤の有りたけを盡す者が生ずると同時に、他方には日夜休まずに稼ぎ續けて飯の食へぬ者が無數に生ずる、社會が斯樣な狀態になつては、世道の廢頹し、人心の墮落するは素より避くべからざることである、

池や湖でも輕い塵は表面に浮び、重い埃は底に沈んで、常に最上層の水と最下層の水とが最も不潔であると同樣に、人間の社會に於ても、最も墮落するものは何時も最上層の富者と最下層の貧者とであつて、世道の廢頹は先づ此二層から始まり、漸次社會一般に移り弘まるのである、特に己れよりも尙一層上に位する者に倣はんとするは人間の通性であつて、上の好む所は下て直に眞似する故、上層の墮落は暫時の中に社會全部を墮落せしめるに至る、人は今日の世の中を黃金萬能の世と呼ぶが、實際其の通りて、黃金さへあれば隨分不正なことをしても社會の制裁を免れることがあり、代議士や新聞や博徒などを買收して、無理にも自分の思ふことを押し通して實行することも出來る、斯かる有樣を眼の前に見て居る世間一般の人間が、黃金を渴望し、如何なる手段に依つてゞも黃金を獲んと腕き狂ふは、人情の弱點として止むを得ない、唯でさへ人口增加のために次第に困難に成り行く生活が、富者が益々富む結果として、更に速に困難となり、富者の贅澤を目の前に見て、知らず知らず借金をしてまで表面を飾る風俗が生じ衣食の足らざるために禮節を顧みるべき餘地がなくなつて、終に道義は地に墜ちるのである、

近來驕奢の風の盛になつたことは普く人の知る所であるが、之が上層の富者より起り始まつたものである

ことは誰も疑はぬ所であらう、また男女間の風儀も墮落したと云ふが、學校の教師が爲たならば忽ち免職になるべきことでも、富豪若しくば、之に關係ある有力者が爲れば何等の制裁をも受けぬのみならず新聞紙上に風流韻事として傳へられ、世人は唯之を羨むばかりである、其他近頃世人の射倖心の盛になつたことも驚くべき程であるが、之も其原因を尋ぬれば、世に遊びながら贅澤を盡し得る境遇の人が在る故である、人は勤勉力行に依て富は得られると云ふが、勤勉力行に依らずして、勤勉力行に依つて得べきより以上の富を有する人が有る以上は、人情の常として正直に勤勉力行することを愚なるが如く感じ、一攫千金の手段を考へざるを得ぬ故、今日の如く富籤が盛に流行し、相場が流行し、工藝の奬勵を目的とする博覧會の入場券にも富籤を附け、學校生徒の用ゐる字引の書物にまで福引券を添へて賣り出すに至るのである、斯樣な類は數へ始めたならば實に際限がない故、此所に列擧することを略するが、以上述べた如く今日の人心墮落の原因は、主として富者が益々富み、貧者が益々貧乏になるやうな制度が存ずるのに因ると斷言せざるを得ない、

然らば今日の人心墮落と物質的文明の進歩との間には何等の關係もないかと云ふに、全く關係が無いとは云はれぬ、然し、其關係は決して原因と結果との關係ではない、元來物質的文明なるものは、便利を增すために人の苦心し研究した結果である故、何事をも著しく速にするものである、例へば昔し步いて一ヶ月掛かつて旅行した所も、今日では汽車に乘つて一日で行ける、昔一日掛かつて手で細工した物も、今日では機械を用ゐて一時間に製造する、斯くの如く物質的文明なるものは、萬事甚だしく時を縮めるもの故、財産制度に不備の點がある場合には、其惡結果の現はれるまでに要する時日を著しく短縮する、土地、物品、金錢を貸して個人が利子を取ると云ふ制度が存する以上は、其自然の結果とし、富者が益々富み、貧者が益々貧乏することは到底免れぬ故、たとひ物質的文明が進まなくても、何時か一度は世道人心に著しい惡影響を及ぼす

時期が來るには違ひないが、物質的文明が進歩すれば、此變化の速力を劇しく增し、忽ちにして少數の最富者と無數の最貧者とを生じて、人心の墮落が著しく現はれる故、恰も物質的文明が進んだ結果として直に人心が墮落する如くに見えるのである、之を物に譬へて云へば、恰も線香に火を點じて吹いて居る樣なもので、線香に火を點じた以上は、捨て置いても終りまで燃え盡さねば止まぬものであるが、側から之を吹けば、更に一層速に燃え盡すと云ふに過ぎぬ」

然らば物質的文明を一時見合せて、責めては人心墮落の速力を少しく緩めては如何と云ふ論が出るかも知れぬ、現に物質的文明の進歩を以て世道廢頽の原因と誤り見做す人々は「自然に歸れ」などと叫んで、現代の文明を呪ひ罵つて居るが、之は到底行はれぬのみならず、國力發展の上に頗る有害な議論である、抑も物質的文明なるものは、今日の世の中に於ける國家存立の必要な條件て、之を退けては生存が覺束ない故、一刻ても其進歩を止めることは出來ぬ、若しも地球上に國が唯一つよりなかつたならば、其場合には物質的文明を進めるも廢するも隨意であらうが、多數の國が互に睨み合ふて對立して居る現世では、物質的文明を止めることは即ち亡びることに當るのである、今日の戰は決して大和魂のみでは出來ぬ、敵と味方との愛國心の度が略相均しいときには、一歩でも先へ文明の進んで居る方が勝つ機會が多い、國際公法か如何ほど研究せられても、萬國平和會議が何回開かれても、また各國の元首が打揃ふて、「列國間の關係が今日ほどに圓滿なりしとは嘗てなし」と乾盃辭を繰返して述べても、強い國の強く、弱い國の弱いことは變らぬ故、其間に戰爭の起つた場合には、必ず狼と羊との間の爭ひと同樣の結果に終るべきは勿論である、されば苟くも自己の屬する民族の維持發展を希ふ者は、今日の世の中では一刻も物質的文明の進歩を休めて安心しては居られぬものと覺悟せねばならぬ、他國で十里走る風船を造つたら、我國では二十里走る風船を造り、他國で三日間水中を潜る水雷艇を造つたら、我國では十日間水中を潜

る水雷艇を造る位の心掛けを以て、軍事に限らず總て他の方面にも物質的文明を進めて行かねば、今日の劇烈な競爭場裡に優者の位地を保つことは出來ぬ、特に我國の如き、物質的文明に於ては遙に他の數國に劣つて居る國で、早くも物質的文明を呪ふ者のあることは、將來の國運進歩に對し、誠に憂ふべきことであらう、

物質的文明に進むことは國の存立上避くべからざることであるとすれば、今日の如き土地、物品、金錢を貸して個人が利子を取ると云ふ制度の存する間は、富者は忽ち富み、貧者は益々貧しくなり、隨て人心が墮落し、世道が廢頽することは到底免れぬとして我慢するの外はない、凡そ如何なることでも原因を舊のまゝに存せしめ置いて、結果のみを除き去らうとするのは、勞多くして効の誠に尠いことである、斯く考へて、今日世に行はれて居る救濟の方法を見ると、孰れも皆甚だ姑息なものばかりで、其効力の僅少なるべきは素より當然である、學校教育に於ては特に訓育に重きを置くと稱して、品性を陶冶するとか、人格を高めるとか喧しく云ふては居るが「論より證據」と云ふ諺もある通り、議論よりは實例の方が人心に深い印象を與へるもの故、不正なことをしても何の制裁をも受けず、甚だしい不品行なことをしても世間から尊敬せられて居る者の實例を、常に眼の前に見て居る生徒等に對して、倫理の講義の餘り有効ならざるは言ふまでもない、如何に第一流の學者が集まつて、我國將來の德育の方針如何と論じても、如何に精しく孔子の道と老子の道との異同を知り、山鹿素行の倫理説と伊藤仁齋の倫理説とを比較し得る良教員を各學校に配布しても、品行を愼まざる富者及び有力者を、社會の上位に立たしめ置く制度の存する間は、訓育上の好結果を得べき望は實に少ない、また勤儉貯蓄の奬勵を試みても、唯勤儉貯蓄のみに依つては、一生涯掛かつても到底僅かな財産より造ることは出來ず、今日莫大な財産を有して居る人々は、孰れも勤儉貯蓄以外の或る方法に依つて富を獲たことを世人が承知して居る故、矢張一擲千金の道のみを求め、投機事業や不正な計畫に熱中する輩が跡を絶

たね、或は宗教に依つて浮世の利慾を諦めしめ、他人は如何に貧窮に暮し、如何に世人から尊敬せられて居やうが、自分のみは清貧に安じ、世間以外に安心を求める様に導かうとしても、之また甚だ困難である、一人二人をして暫時斯く諦めしめることは或は出來るかも知れぬが、國民全體を斯樣に諦めしめて風俗を改めるなどとは、今日の宗教家の力では無論不可能である、以上述べた如く、今日各方面から人心の墮落、世道の廢頽を矯正せんと力を盡して居るに係らず、風俗の依然として改まらず、且尚墮落せんとする傾が見えるのは、取りも直さず、人心墮落の眞の原因が尙依然として存して居る證據である、今日行はれて居る各種の矯正の方法は、一として人心墮落の眞の原因を除くに有効なものは無い故、その絶えず熱心に行はれて居るに拘らず、世の風俗は毫も改まらぬ、原因を舊のまゝに存せしめ置いて、結果のみを除かうとするのは、恰も樹木の根に肥料を與へながら、梢の末端を摘み取つて居る様なもので、たとひ一時若干の者を濟い得たりとするも、到底根本的に風俗を改め得る望はない、

又已に墮落した者や貧困に陷つた者を助けるためには、今日多くの養育院感化院もあり、慈善會なども開かれるが、之は素より極めて結構なことである、目前に水に溺れる者を見た場合に、何故に水に入つたかと云ふて、其溺れるに至つた理由などを聞き糺す暇はない、理由に關する議論などは捨て置いて、先づ其者を救ふことが必要である、それ故今日行はれ居る如き救助の方法も、素より肝要なこととして奬勵しなければならぬが、毎日多數の墮落者を生ぜしむべき原因が社會の制度の中に存する間は、斯かる方法のみでは到底救助し盡せるものではない、今日多數の墮落者の生ずる有樣は、恰も中央の壞れ落ちた橋へ無數の群衆が押し掛けて來て、先の危險なことは知らずに、後から無暗に壓して居る如くである故、落ちた者を救ふと同時に、後から壓す者を制止することが必要である、單に落ちた者のみを救ふて居たのでは、一人を救ふ間には三人落ち、三人を助ける間には九人落ちて、到底手が廻ら

ぬ、されば今日の慈善事業の結構なることは素より論を待たぬが、之に依つて世の風俗を改良しやうとすることは、頗る望の少ない樣に思はれる、

以上述べた通り、世の論者が文明の弊と見做すものは決して物質的文明の進んだために生じた結果ではなく、其眞の原因は別に他に存するのである、今日文明の弊なりと稱せられる、人心の墮落、世道の廢頽に對して、種々の異なつた方面から、出來るだけ力を盡して、矯正を務めて居ても、辛うじて一時若干の個人を救ひ得るのみて、社會一般の風俗を改めることには少しも効能が無いのは、即ち今日行はれて居る矯正の方法が、總て人心墮落の眞の原因とは何等の交渉もない證據てあらう、世俗を善良ならしめんと務めることは、何時の世でも、如何なる所でも、誠に結構なこと故、從來行はれ居る如き方法も、益々盛にすべきではあるが、眞の原因が他に依然として存する間は、其効力は一定の極めて狹い範圍以外に出づること出來ぬものなるを初めから承知して居ねばならぬ、特に今後は物質的文明が、從來に比して尙數倍の速力を以て進むであらうと思はれるから、人心の墮落を防止することは今日よりも一層困難になり、矯正事業や慈善事業の効力を買ひ被つて居る人は、常に失望に陷るに違ひない、然して之を見て、罪を物質的文明の進歩に負はせる論者が、尙絕えず續出するのであらう、

終りに斷つて置くべきことは、我等は人間の財產に關する學問などを修めたことは全く無い故、之に關する知識は皆無である、隨て野蠻時代から今日までに自然に發達し來つた利子を私有する制度を改めて、利子を取ることを國家の特權とする如き變化が、俄に出來得べきことか否かは全く知らぬ、また假に改め得べきものであるとした所て、之を實行した曉に、今日以上に人心を墮落せしむべき新な事情が生ずることが無きや否や、之も全く知らぬ、また現今の制度を其儘に据え居いて、唯其惡結果のみを除き得べき不思議の妙案が無かるべきものか否か、之も全く知らぬ、我等は唯他の社會的動物の生活狀態に比較して、今日の人心墮落

の原因は、主として富者をして益々富ならしめ、貧者をして貧ならしめ、遊んで贅澤に暮せる者と、稼いでも生活の立ち兼ねる者とを社會の中に生ぜしめる現今の財産制度の缺點に存ずと信ぜざるを得ず、随て世道の廢頽を以て物質的文明の進歩せる結果と見做す如きは、原因を取り誤れる頗る見當違いの議論であり、斯かる論の廣く世に行はれることは、我民族の將來に對して偕に不利益であると考へるが故に、此所に其大略を述べたのみてある、

先覺者は後覺者となれり

志賀重昴

君、私の傲慢を許されよ、私は、自分に於て先覺者を以て自ら任じて居つたのである、君等が何と云はれても確かに先者覺なりと自任すべき點があつたのである。然るに今日となつては先覺者どころか、全く後覺者となり果てたことを悟つた。是れは私が後れたのか、今日に於ては然まで後れたるに非ずと自信し居る、如何に私の頭腦が凡庸なりとて、一日に少くも四間時は机に向ひて新舊の著述を讀みたり、又夜は枕上にて必ず相當の書籍を讀んで眠りに就くを例とする。然れば必ずしも私が後れたるに非ずして、私以外の社會が私よりも二倍三倍否五倍十倍の速度にて進んだのである、故に社會が私より進歩したるなれども、矢張事實は私が後れたのである。是に於てか私は今より愈々發奮する決心であるが、君にも亦た發奮せざる可らず、御互に發奮すべき刺撃の材料として、此半年中に私が各地にて見聞したる事實を有りの儘に御話し申すべし、議論よりも活きたる事實を語る方が遙かに御互に刺撃となればなり。

（一）三日別るれば刮目して視ざる可らず

四十年六月、韓國忠淸南道論山（Nolmoe）を經過せし際には、此處にも近頃數名の日本人居留せりとのみ聞き取つた。然るに四十一年六月には早く既に二十三戸となり、五十二名の男女は私の來遊を知りて途上に待ち受け居り、錦江の支流に臨める亭榭而も日本臺を敷ける所に案内し、パイナップルの罐詰を開き、麥酒を饗したるさへ打驚きたるに、其後間もなく小學校を設立せしのみか、電話すら架設して群山港と十四里の長距離電話を開通するに至つた。古語に三日別るれば刮目して視ざる可らずとあれども、誠に韓半島に於ける日本人の膨脹は此語の權化と云ふべきものである。

（二）是しきの事實は承知し居れり

四十一年の夏、愛媛縣宇摩郡夏期講習會に出講した。宇摩郡なる處は伊豫の東陽に僻在し、讃岐、阿波、土佐三國に介處し、是等境上の連山に三面を包まれたる極の四國の阪にて、平地とては海岸に沿ひ帶の如く細長く引けるのみにて、此處に三島なる一町あり、市街は『町よ〳〵、三島の町よ、帶の幅ほどない町よ』と歌へる如く、元々帶の如き平原に在る帶の幅ほどもなき此町に於て件の夏期講習會は開會されたるのである。然れば私は扨こそと心輕く思ひ居り、且つは先覺者の嶄新なる意見なりと自分に免許しつゝ、講演の當日『平原は總じて平坦肥沃に、且つ灌漑に便利に、交通も自在なれば、所謂社會なるものは先づ此處に發達し、山地は之れに與からず、然るに山地にも文明の利器を應用し、鑛山、山林、水力利用等を經營し、且つ隧道を穿ちて平原と連絡するに至れば、平原と山地との經濟力は平均し來り、合して一社會となるべく、既にして山地をも利用し盡したる後は、垂直線的にては空氣を占領して二階三階より、米國ハリマン鐵道王邸宅の五十階、エクイテーブル保險會社の六十二階に至り、而も空氣の層には限りあれば、地平線的に大に精力を盡すことゝなり、水面を利用して益々海洋開拓の氣運を促する至るべし云々』と得意になりて述べたるに、來聽者は是しきの事實は既に承知し居れりと言はぬ許

りの顏付を示した。ソコデよく〳〵同地方の事情を探間すると、此郡の山地にては既に一ヶ年一千萬圓餘を產出する別子銅山あり、別子の富は誰人も承知する處なれども、尙別に山地には煙草、棕櫚(しゅろ)、三椏(みつまた)、楮(こうず)を盛んに植え付け、三椏、楮の皮にて紙を製造し、此の地方のみにてピーター式叩解機十入臺を使用し(日本第一の製紙國土佐にて唯だ一回ピーター式叩解機を使用したることあり)、複寫紙は日本全國の郵便局、韓國統監府使用の全部を供給し、新式コッピー紙は英米各國に販路を擴げ、製圖紙は製圖家の特に珍重する所となつた。然れば山腹迄た溪間には三椏、楮を植ゑ、平地にはピーター式叩解機の響斷續し、又海岸の人民は韓海に出漁する始終をも承知し、さては平原の利用より山地の利用となり、平原、山地の利用より海洋開拓に移動すべし抔餘程嶄新なる意見なりと獨よがりつ講演せしとて、此の地方の聽講者が是しきの事實は既に承知し居れりと言はぬ許りの顏付を現はしゝは尤も至極の次第である。此の如き事實なりければ、私も平常の自負心も消滅し、氣焰頓に揚らず、僅に夏期講習の豫期丈けを了はりたるのである。

(三) 富豪の美擧

四十一年十一月、瑞典探檢家スエン・ヘヂン博士には東京地學協會の招待に應して來朝した。是より先き同博士が第三回探檢を了はるや、歐米の列國は何れも競ひて同氏を招待せんとするのてある、而も亞細亞大陸の不明地方を探檢せし同氏をば日本に招待せずとありては、日本の品位上如何あるべきかとて、親切にも某同盟國大使等は、日本の當局者に諷する所があつた。日本の當局者に於ては如何にも同感千萬なれども、何分に經費の出途なき爲め其儘に附し居つたのてある。然るに東京地學協會には、同博士を招待し、歐米列國の諸學會に對して然まで後れを取らざる招待の道と待遇とを盡したのてある。然れば地學協會は如何にして此の如き多分の費用を得たりやと、疑問は先づ政府の當局者より出てたのてある。元來ヘヂン博士の探檢費は瑞典先帝オスカル第二世陛下の御手許金より半額と

ノーベル家の奬勵金より出てた、ノーベル氏は現代に於ける最も猛烈に而も安全なる爆發藥を發明せし土木技師にして、是れが爲めに大富豪となつたのである、其の遺産一千七百餘萬圓は學問の奬勵と世界平和の奬勵との爲めに瑞典政府に提供し、世界萬國何れの人たるを問はず相當の資格ある者に寄贈すべしと遺言して明治二十九年に死したのである…御話が少し横道に入り樣なるが本年度のノーベル奬勵金八萬圓は人類の平和を歌ひたりと云ふ功績にて英國詩人スウインボーンに落つる筈である　：ヘヂン氏は先帝の御手許金と此ノーベル奬勵金及び二三富豪の補助にて十五年間前後三回の大探檢を成就したる者である、此の如き公明正大なる淨財にて探檢したる博士をば筋途の判りもせざる後暗き費用を以て日本に招待したりとありては、歡迎どころか、同氏の一生の履歴の汚點となりては相濟まぬことなればと、東京地學協會にても他人より指を差さるゝが如き金錢を以て氏を歡迎したのではない、德川公、德川侯、大谷伯等にて一千數百圓を寄附せられたるが、此等の諸君子は地學協會員なれば然まて云はずもがな、會員にも非ず又緣故もなく更に又協會より何等の申出でをなさゞりしに岩崎、三井、古河三家より一千數百圓を寄附すべしと申出でられ、かくて相當の淨財を得たるのみならず、博士講演の聽講券に至ても、私は某貴族に幾枚か購求あられたしと書送したるに、直ちに百五十枚送附ありたしとの返答を得、私の舊藩主にも書送したるに、直ちに五十枚送付せよとの電話ありたる樣の事實にして、私如き微力なる一會員にてすら直ちに三四百枚を捌き盡たれば、全體に此の如き事實にて地學協會は相當の淨財を集め得、かくてヘヂン氏を招待し歡迎し得たのである。私は今回のヘヂン氏招待にて日本の貴族や富豪が向上的の趨勢あるを認め、正しく日本の進歩せしのみならず、實に社會が我々より先覺したることを悟つたのである。

（四）　土豪の龜鑑

四十一年十二月、新潟縣中頸城郡有恒學舍主增村度次氏上京、同氏の招待にて同學舍に出講した。此の學

舍は增村氏が資產十萬圓を寄附して其の居邸に成したる法人財團にて、增村氏は更に自己の邸園を毀ちまでして年々數千圓を寄附し、明治二十九年創立以來、十二年の間、卒業生百五十一名を出し、是等卒業生は左の狀況である、

家業(農商)に從事する者	十八名
官廳又は會社、個人に雇はれ居る者	二十七名
公私立學校の職員	二十名
軍人(兵役に服する者を含む)	八名
醫士	五名
僧侶	二名
公私立學校に在學中の者	二十五名
內譯 東京帝國	一名
高等學校	四名
醫學專門學校	二名
農科大學實科	一名
東北大學	三名
海軍兵學校	二名
東京高等農學校	一名
東京高等商業學校	一名
早稻田大學	二名
西ヶ原蠶業講習所	一名
齒科醫學校	一名
縣立師範學校	四名
其他東京にて補習中の者	三名
米國にある者	四名
未定	三十四名
死亡	八名
計	百五十一名

此の如き先覺者、否な隱れたる先覺者がある、吾々は後覺者と成り了はつたのである。

（五） 蒸氣力の炬燵

四十一年十二月、長野縣諏訪郡岡谷林製絲場を一覽した。製絲場主林邦藏氏は日本第三製絲家の一人にして、私の平生よりの懇意なれば、一回立ち寄つたのである。既に場內を參觀し了り、將に去らんとせし時、幾

百枚の蒲團と一處に炬燵の矢倉の如きもの幾百となく列び居たれば、再び戻りて、コハ何物にやと問ひたるに、曰く炬燵なり、然かし火にては不要愼なれば蒸氣力を用ふなりと、矢倉の下を貫通せる鐵管を示し、コノ通り蒸氣が通つて居ります、數百の工女は職業の果てたる夕、此の蒸氣炬燵に中りながら、五日に一回、講話、蓄音機、オルガンなど聽き、連日の勞を慰むるなりと。私は此一分始終を見聞して、文明の利器を炬燵にまで應用する哉と思ひ詫ぶると同時に、弱性の勞働者を好遇すること亦た是に至れるかと、流石に社會の進歩に驚嘆したのである。

以上の事實の如く、吾々以外の社會は急激に進歩したのである、御互に此の進歩に置き棄てられては、全くの劣敗者と成り果てるより外はない、ドーカ今より倍舊否な三倍五倍十倍の發奮を致したく思ふ。

國家、人道、個人

藤井健治郎

一

今年十月十三日に發せられ給ひし詔書は世偏へに之を勤儉の詔書と稱し奉るが如しと雖も、余の拜讀し奉る處にては、大詔の御趣旨は決して啻に勤儉の二字に止まる者にあらず、實に國家、人道、個人に通ずるの大義、詳しくば、國家が人道と個人とに對して有する意義を宣示せられ給ひし者なりと拜讀し奉つるなり。

聖意のある處無量無邊、余の如き淺學非才の者の拜讀し奉る處は固より其の萬分の一に過ぎず。只試みに余の拜讀し奉る處を開陳せんか、余は實に次の如くに拜讀する者なり。

「朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ」といふより

「列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス」

といふに至るまで第一段にして、故には國家の人道に對する意義を宣じ給へること、

「顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ」といふより『自彊息マザルベシ』といふに至るは第二段にて、茲には第一段の意義を實現せんには必ず先つ國運の發展を期せざるべからず。國運の發展を期せんには、我等國民各自その人格を修養して、自敬の念を篤くし、獨立自治の氣象を旺盛ならしむべきの要を諭し給へること。

『抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト』といより『其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ』といふに至るは第三段にして、茲には右第一第二の兩段に宣へ給へることは祖宗の遺訓と國史の道を勵めよと命じ給へること。

余は右の如くに拜讀し奉る者なるが故に、世が之を勤儉の詔書と稱し奉るが如きは、其の名の其の實を去ること、餘りに甚しき者なるを感ぜずんばあらず。さて此の詔書に見えたる語を釋し、義を解し奉るが如きは世間別に其人あるべく、又余は少くとも此文に於いて之を爲さんことを企てず。只我等が此詔書を拜し奉りたるを機會として、余は倫理研究者の一人として平生懷抱する私見の一部を開陳して、大方諸君子の是正を請はんと欲するのみ。

二

一、國家の道德的旨趣　余は今國家學上より見たる國家の概念及びその職能を述べんとするにあらず、唯單に倫理學上より見て、國家は道德上如何なる旨趣を有するかを説かんとするなり。國家の道德上の職分は、一、外敵に對して其の自らを防衛し、二、內、國民に對して正義を保持し(イ)、三、福利を增進する(ロ)にあり。

一、國家は人類が長歲月の間、努力精進して作り出せる文明的制度にして、而かも所有人文制度中、比較的最も完全せる、最も堅牢なる基礎を有する制度なり。若し制度といふ語穩當を缺くことありとすれば、集團又は結合といふも可なり。然るに凡そ人は如何なる人にても唯單獨にては、其生活を支持すること難し。よし支持し得るとしても、決して餘裕ある、十全なる生

活を爲すこと能はずんば、文明の發展爾期し難し。故に人は自ら同類の他人と共存せんとの運命を有す。アリストテレースが人間は政治的生類なりといへるも、其意蓋し此にあり。然るに國家は、吾人々類の歴史的に作り出せる最高最完の制度なりとせば、國家は個人の生活上最も重要なる制度なりと謂はざる可らず。國家は斯かる旨趣を有する者なれば、若し外敵ありて其存在及び組織に危害を加ふる時には、國家は之に向つて反抗するは自家防衛の當然の權利なるのみならず、亦兼て道德上の旨趣ならずんばあらず。殊に我が日本國家は建國以來　上に萬世一系に渡られ給ふ皇室ありて能く下を保育し給ひ、下に忠孝を本義として、上を宗とし、克く敬し、克く服して上下の分未だ曾て紊れたることなく、上下輯睦して、萬國に卓絶する美なる一種の文明を發揮せる國なれば、其の道德上の旨趣も亦一層深甚なるを思はざる能はず。從て外敵に對して斯の文明の支持し發揮することも、我が國家に取りては一層重要なる意義ありと謂ふ可し。

二　國家は右の外、內、國民に對して正義を保持し、福利を增進するの職能を有す。國家が正義を保持すといふは何の謂ぞ。國民が各々其の堵に安じて、各々其の個人性の特質を發揮し、其の分に應じ、其の力に遵ひて文明の支持及びその發展に貢献し得る第一の條件は、國內の安寧秩序の能く整統せられ、履行せらるゝ事なり。具體的にいへば、生命、身體、財產、名譽、言論、知、情等の所有及使用に對して充全なる保障あることなり。若し此等の保障充分ならず、安寧、秩序不安固にして、正義國內に行はざれば、一國文明の發展期し難し。正義を保障する充分の力なき國家は、國家として未だ十全なる者と謂ふ可らず。是れ古來國家は、正義の維持者なり、保障者なりと謂はるゝ所以なり。

國家が福利を增進するの職能を有すといふは如何。右國家が正義を維持すといふは、國民が如何なることをなすも、そが國家の安寧、秩序を害せざる限りは、國家は之に向て毫も干渉せず、正義が紊るに至つて始

めて之に制裁を加ふといふ義なり。されば此點に於いては國家は唯々消極的職能を有すと謂ふべし。然るに國家の國民に對する職能は之に止らず、積極的に國民の福利を增進するの職能を有す。國家は其の國民の生活條件を豐富にし、高大ならしむるの職能を有す。換言すれば其の國民を幸福ならしむるの職能を有す。教育、產業、交通、衛生等の制度の如き唯々國民の一手に放棄しては、之を完成し、發展せしむる事、極めて望み難き事に屬す。されば國家自らが此等の事業に手を下して、國民を指導し、鼓吹し、示範することを要す。是れ國家が積極の職能を有すといふ所以なり。

國家が積極的職能を有すといふことは、最近に至るまでは、學者の一般に認むる所にあらざりき。殊に英國の學者の多くは極めて晩近に至るまで、國家の積極的職能について否定的意見を有したりき。されど獨乙の如きは、夙にウイルヘルム・フォン・フンボルトの如き具眼の政治家、學者出てゝ、國家の積極的職能を唱道せる以來、獨、墺兩國の國家學者は多く其の說に左袒せるのみならず、他面に於いては、ロードベルトウス、フェルヂナンド・ラッサル等國家社會主義を唱道する人々によりて、此說は助長せられたるのみならず、國家實際の施設は多く右の方針に出でたるが如し。從て英國の如きも、個人自由思想が啻に學者の意識内に於いてのみならず、國民の自覺に基ける者あるにも拘らず、その國家的施設は、帝國主義の敎の高まるにつれて、積極的方針に進めるが如し。

殊に我が國の如く、國民の、文明の學術、文學、美術、產業を咀嚼し、運用すること猶極めて幼稚なる時代に於いては、國家の積極的職能は一層重且つ大なる者あるを信ず。

前陳の如く、國家の職能は、之を分ては三となるといへども、之を收むれば一となる。一とは何ぞ、國民各自の自由なる人格の發展是れなり。

國家が外敵に對して、自を防衛すといふ、果して何を防衛するなるか、其の主權、その領土、其の國民を防衛することとなり。何故に、主權、領土、國民を防衛

するか、他なし、此等を防衛せざれば國家的生活を維持すること能はざればなり。國家的生活を防衛すること能はざれば、一國文明を維持、發展せしむること能はざればなり。一國文明なければ、其の世界史上に於ける存在の理由なければなり。何となれば國民の偉大は、領土の廣きが爲めにあらず、民衆の多きが爲めにあらずして、その國民的文明の他に卓絶したる所に存する者なればなり。故に曰く、國家が外敵に對して自を防衛すといふは、畢竟する所、その國の文明其者を防衛するにありと。

國家が正義を維持し、福利を増進する所以は如何。正義を維持し、福利を増進するは其れ自ら目的にあらず、畢竟國民各自をして文明の進運に貢献する所あらしめんとの意に外ならず。故に國家の、内、國民に對する職能も亦、その一國文明其者を助長發展せしめんとするに外ならず。

然らばその一國文明は如何なる根幹に開く所の花なるか。根幹剛健ならざれば花開かず、根幹旺盛ならざれば花萎靡す。一國文明の花亦然り。それをつくる所の各自の人格健剛旺盛ならざれば、安ぞ爛熳の花を開かしむるを得んや。而して人格の剛健、旺盛は那邊より來るか、叨りに人工之を纏繞し、之を剪裁する庭園の樹木は、其の本來の生氣を失ひ、唯々自由の發展をなせる深山の樹木が能く亭々として衝天の幹を爲すが如く、自由なる發展をなせる人格のみ、能く剛健旺盛なるを得べし。故に曰く國家唯一の職能は、國民各自の人格の自由なる發展を期するにありと。

三

二 國家と人道 個人が單獨にて其の十全なる發展を期し難きが如く、國家も亦單獨にては、其の十全なる發展を望むこと難し。是れ今日列國間に交際ある所以なり。加之個人の一國内に於ける存在の理由は、その一國文明の作成、進歩に貢献する所あるが如く、一國の世界列國の間に於ける存在の理由は、世界文明の作成、進歩に貢献する所にあらざる可らず。是れ今回の詔書の第一段ある所以なるか。

余が敬畏する碩學加藤博士は道德は國家以內に限らるゝ事實にして、國交際には道德なしと明言せらる。加藤博士は由來實證論（ポヂチヴイスムス）の上に脚を立てられつゝあるが故に、右論斷の論旨も、唯々今日の列國交際の實況は純乎利己的にして、その間に道德的旨趣あるを認むるを得ずといふにありて、道德は國家內に限らるべきもの、又は國家以外に擴充せらるべからざるものとの趣意にあらざるが如し。されば若し國交際が純乎利己的の範圍を脫するの域に達するに至れば、國交際の間にも道德ありてふことを許容しても、博士の根本意見と毫も矛盾する所あるに非らざるが如し。されば博士が今日に於いて、道德は國家內に限られ、國交際になしと論斷せらるゝは、今日の國交際は純乎利己的にして、道德旨趣を認めずてふ事實の認定に基つける者なることと疑なし。

事實の認定としての博士の意見は、果して妥當なりや否や。固より今日列國間の側面には、事實として弱の肉は强の食的暴力、威壓を以て事を最終に決定せんとする者あるは明白なり。殊に又或る[illegible]に之を曝露し、實際に運動する者あるも[illegible]なるが如し。然れども亦一側面には、機會均等主義、協存主義、正義主義を標榜し、又實際之を實行することあるも亦事實なり。されば、今日の國交際は全然利己的なりとの加藤博士の認定は決して妥當なりと服すると能はず。詔書に曰く、『人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス』と、聖意のあらせらるゝ所略〻察し奉るを得べきにあらずや。

且つ夫れ道德國家內にありといへども、各個人について之を觀れば、道德的に不善、暴惡なる人多々之れ有り、而かも是等不善、暴惡なる人々は、決して不善、暴惡にして止まるべきにあらず、必ず惡を舍て、善に移らざるべからず。國家人文に於けるも亦然り。縱令し今日の國家は、世界人文より觀て大に非議すべきありとも、而かも國家は、是れにして止まるべきにあらず、必ず世界人文に對して善國家たり、良國家たらんことを期せざるべからず。明德を明にし、民を新にし

至善に止るてふ『大學』の三綱領は、個人にのみ妥當なることにあらずして、一國家の上にも應用せらるべき者なるを信ず。是れ詔書に『朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ頼ラムコトヲ期ス』と宣じられ給ひし所以にあらざるか。

國交際現在の狀況は、人類が期待する理想を距ること極めて遼遠なりとはいへ、又此理想は終に實現の期を得ること極めて望み難きこととはいへ、而かも各人類が齊しく熱望する者なる以上、又各文明國の理想なる以上は、各國民は、飽くまで此の不完全、不圓滿なる狀態を進めて、一歩たりとも理想狀態に近からしむるやう盡力する所なかるべからず。

且つ一國内に於いて、一聖人の起るありて、其の教化四方に及び、民の德に歸すること、草の風に靡くものあるが如きは歴史上炳乎たる事實なり。國家の世界人文に於けるは此の如くならずと妄斷するを得ず。一國德に與らば四隣その風に伏すること必ずしも絶望なりといふべからず。況んや高風道德の君子國を以て自任する我が日本の國家の如きは、深く思ひ高く持して、人文に貢献する所なかるべからず。孟子の賢人は、春秋の戰國に處して而かも飽くまで覇を黜けて王道を推奬せるに非らずや。孟子の風格一代に高き所以、亦此に由らずんばあらず。

此の第一段の御旨趣は、明治二十三年十月三十日に下され給ひし　勅語の中に明らかに見えざる所なり。唯々『博愛衆ニ及シ』といふ中に、又『中外ニ施シテ悖ラズ』と宣せられ給ひしが中に、多少看取し得られざるにあらずといへども、今回の　詔書に見えたるが如く明らかに宣べられざりしが如し。そは彼の　勅語は國家教育の大根本を宣示せられ給ひしものなれば、事必ずしも此に及ぶの要なしと思考す。然れども彼の　勅語の御言葉の中に、今回の　詔書に宣示せられ給ひしこと見えずとも、其の御趣旨に於いては毫も杆格する所なきのみならず、國家の世界人文に於ける存在の理由は、今回の詔書によりて益々明瞭となり、彼の　勅語は益々其の光輝を發するの機を得たる者なりと

謂ふを得べし。

されば國家は、あらゆる意義に於いて最高至上なりとは言ひ難し。道德上より之を見れば、必ず世界人文を作成し、促進するを以て其の存在の理由となさゞるべからず。果して然らば、徒らに「中華的」思想を醞釀し、排外的機運に阿媚し、徒らに「國粹」のみに注意して、その國際のある所を察せず、尊大自ら居らしむるの氣風を國民に鼓吹する所の政治家は、賢明なる政治家にあらず、又斯かる思想、氣風を養成せんとする教育家は、決して賢明なる教育家にあらざるのみならず、維新の御誓文に背き、今回の　詔書の御趣旨に悖る人なりと謂はざるを得ず。

四

三　國家と個人　一國家の文明を發展して、以て世界人文に貢献する所あらんには、その國家を組成する所の各國民が必ず自由にして活達なる人格を有せざるべかず。

何を以て然か謂ふか。　詔書に「忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ云々」と宣らせ給ひ、又「自彊息マザルベシ」と宣らせ給へり。上長の視ざる所にその業を廢し、監督者の居らざる所にはその務を舍つるが如きは、是れ固より忠實にあらず、徒に機に投ぜんことを希ひ、千金を萬一に僥倖せんとするが如きも、是れ固より忠實にあらず、上長監督の居ると居らざるとに拘らず、己が務を務めとして苟くも荒怠するなき是れ忠實なり、人々その智力、金力、資本の程度に應じて、屹々として其の業を勵む是れ忠實なり。斯の如きのことと果して自由なる人格の信念薄き者のなすを得る所なるか。是れ余の前文の如く論斷せる所以なり。勤儉信義、醇厚、亦皆此の如し、然るに我國民は明治の教育によりて、或は忠、或は孝の如き、專ら他に對する道德のみを養成せしめられたれば、修己の道に於いて遺憾なしとせず。自由の氣象、活達の精神に缺如たるが如きは是れ寧ろ憂ふべきのことに屬す。

國家が國家として生存せんが爲めには、必ずその國

民に對して一定の强制力を有せざるべからず、强制力を有せざれば、國家は到底國家として其生存を維持すること能はず。即ち國家は其の正義を保障すること能はざるなり。而して今日の文明諸國家は明らかに事實として强制力を有す。而かも此の强制力は、强制を加へんが爲めの强制力にあらずして、國民を自由なる人格に導かん手段として强制を加へんが爲めの强制力に外ならず。故に若し一時の政治家、教育家等が、自己の政策の施行、自己の僻見の教授を標準として、漫りに國民の學術、文學、美術、産業に關渉して、只た彼等に便なるを擧げてその不便なるを抑ふるが如きは、決して國民を自由なる人格に導く所以にあらず、從ひて一國の文明を發展せしむる所以にあらざるべからず。然るに我が國に於ける一部の政治家、一部の教育家は、國民を機械化し、案山子化し、奴隷化するを以て、政治の要、教育の訣となす者、決して尠からざるに似たり。謬見の甚しき者と謂ふ可し。

殊に從來、或は國家、或は家門てふ外部的權威を以て强制的に養成せられし我國民の道德は、多くは他律的にして、人格の尊嚴を認めたる處の自律的道德の觀念極めて幼稚なる場合に於いては、一層注意して自由なる人格觀念を養成せざる可らず。愚なる政治家、愚なる教育家は、個人人格の尊嚴を認しむるの思想、教育を蛇蝎視して、權柄を以てそを抑遏せんとする者あり、余は餘りに彼等の近眼なるを憫笑せざる能はず。

五

余が今回の　詔書を拜讀し奉りて、一面に於いて恐懼措く能はざる者あると同時に、他面に於いて衷心の喜悦に堪へざる、は我が國民が、之によりて、國家、人道、個人の三者の關係を三思し、その施政の上に於いて、その教育の上に於いて、從來の弊を一掃し得る所の新思想、新主義を現じ來らんことを期待し得るの所にあるなり。（明治四十一年十二月十二日稿）

京都大學論

戸川秋骨

綠は濃かに流れは淸く、小禽の聲樂しき閑雅幽靜な處て勉强して居るものが、歎聲を洩らして曰ふ、僕の住居には電車の響も聞こえなく、往來の雜鬧もきこえない、都下の紅塵はこゝまでやつて來ない。まるで世間を離れた有樣である、それ故に勉强が出來ない。と斯くの如き不平を洩らしたならば、此れを聞た人は何と感ずるであらう。その言のあまり理屈に合はぬので、これを非難するよりも、むしろ此れを戯談として聞き流すであらうと察しられる。然るに此の歎聲を洩らしたものは、眞面目に都下紅塵の間に呻吟して居る同輩を羨んで、彼等は終始世の喧騷の中に居る、活世界に接觸して居る、それ故に學問が上達すると言つて居る。吾れ〳〵は斯くの如き言葉を聞て、これを本氣の沙汰とすべきであるか。然るに現在斯樣な歎聲が正氣な人而も往々識者を以て任じて居る人から洩されるのを聞くのである。思へば世の中は不思議である。

京都は學問をする土地ではないといふ歎聲を洩らすものがある。京都は活動世界に緣が遠いと言つて、大學所在地に適せないとするものがある。文官高等試驗に京都大學の教授がその委員として連に數が少いと言つてこぼすものがある。かくの如き言を爲すものは、みな東京の活動世界を眼中に置て言ふのであるが、此等の不平不滿はみな、閑淸幽靜な學問の好適地に居て、喧騷の下宿屋生活を羨むに等しくはないか。若しそれ大學は學問の蘊奥を究むる處であるとすれば、上記のその不平とする處は、むしろその好適なる所以ではないか。然るになほそれにも拘はらず、かくの如き不條理な不平不滿の出るのは、京都大學が否な吾が大學なるものが、未だ學問の蘊奥を究むる處とならないためではあるまいか。

學問は實際的でなければならぬ。學者は實際を忘れてはならぬと說くものがある。學問が實際の事物を研究し、學者が實際の事物をその研究の對象としなけれ

ばならぬと言ふのなれば、此の說は素より然るべき事である。針の突頭に天使が幾人立ち得るか、若しくは耶蘇の磔刑に處せられた時、その脇腹より流れ出たるものは何種の流動物であるかと言ふが如き、今から考へれば愚にも附かぬやうなる事を研究するのは、學問の目的でもなくまた學者の任務でもなからうと考へられる。所謂煩瑣學派なるものにはそんな傾向があつたのである。併し今日の學者には最早そんな考を以て居るものはない。純正哲學でももつと實際的な問題を研究して居るのである。それ故に實際的といふ事が研究の對象に就て言ふのであれば、極めて普通の事で少しも異議を挿むべきものではないのである。

併しながら實際的といふ事を以て、世の實利を主とする事、利用厚生の方便とすべきであるといふのであれば、それは些か即答を與へかねる。少くとも一考しなければならぬ事である。いかにも廣い意味に於ては學問は世を益するものである。また左もあるべき事で極めて自然なことである。然しながらそれは間接の結果である。劈頭からそれを眼中に置きそれを學問の目的とするに至つては、果して學問の威嚴を損する事はあるまいか、次では學者の本務を忘れしむる事はあるまいか、少しく疑念の起るのを禁じ得られないのである。文藝は世を益する爲めであるか、或は文藝そのものゝ爲めであるか、といふ事は繰り返して論じられる處である。余は文藝も間接には世の爲となるものであるが、その世のためとなるのは文藝のための文藝として成立してからの事と考へる。併しそれには異議もある事故それは別として、如何なる論者も文藝が奴隷開放のために用ゐらるゝべきもの、主義を發表するための機關であるとは考へないであらう。然るに學問の場合に於ては直接にそれが世のためにならなければならぬ、と言ふに至つては些か道理に合はぬやうに思はれる。余の考ふる處に依れば學問に於いても文藝の場合と等しく、學問そのものゝ爲めの學問であつて然るべきと思ふ。かくの如くにして始めて立派な學者が出來、かくの如くにして始めて學問の威嚴といふものが

出來るのであると信ずる。

然るに今の世は學問を獨立させる事を欲しない。時勢のやむを得ないためもあるが、學問は必らず利用厚生のためにするに極つて居る。否な未だそれほどまてにも考へられず、學問は正に立身出世のためである、さらに低い考から言へば、職業を求むる手段である、口すぎを拵らへる方便である。此れは滔々たる吾が社會一斑の風潮である。笈を負ふて大學に遊ぶ學生その人の考も無論立身出世にあらう。中には篤學忠實の士もあり、全然身を學藝に委ねやうと欲する立派な人もありは仕やうが、そんなのは極めて稀れであるのみならず、たまくそんな篤學の人があつても、周圍の事情がそれをゆるさない。たとへば自分がその心持ても、父兄はそんな考ては居ない。息子が大學を卒業したならば、自分等も立派な生活も出來やう、息子は知事になるてあらうか、會社の社長になるてあらうか、などゝ考へて居るのが多數の父兄である。子息を學問の途に就かしむるも始めから後の安樂生活を豫想しての事である。お前は今、月給何程をとつて居る、と息子に尋ねたる親は余の知れる限りても少なからずあつた。父兄が斯くの如き風てあると共に世の中も同樣てある。時代は要するに功名を爲したものに謳歌して居る。此れは何れの世にも普通の事ではあるが、忠實に學問に獻身して居るものゝ如きは顧みられない。成功者として他の羨望をうけて居るものは十中の九迄は金持ちてある。金錢上のなり上りものてある。

凡ての事情が斯くの如き風てある處へ、さらに言論社會の一部には學問を以て利用厚生の具となし、學問のために學問をするを排する者がある。かゝる意見は一見頗る道理らしく、また極めて穩當に思はれるので、自から一代の趨勢と共に一斑の首肯する處となり、その辟說てある事には多く思ひ到らないのてある。併し余はかゝる學問利用說を以て、一面神聖なる學問を機械視するものとし、また一方に人心を只利害の一方に集中させるものとして、極力排斥したいのである。何となれば立身を主とするもの、所謂成功を急くもの、そ

の多くは斯くの如き利用說と相連つて、その誤謬が認可されるからである。英吉利の大學が品性の陶冶を主とするといふ事は疾くに聞て居る處であるが、實際の樣子を見ても大學を出てから、吾が卒業生の如く高等官何等にならう、何會社の書記にならうなどゝいふ考はあまり無い樣に思はれる。無論競爭の世の中であれば、自からそんな考が人々の胸裏に起らぬ事はあるまい、否英吉利の大學卒業生も大にそんな事に苦慮するかも知れぬ、併し學校敎育の大方針がそんな處にはない、從つて學生の考も吾が大學卒業生のとは自から異る處がある。素より此れは種々の國情の相違から起るとてはあるが、かれの敎育の主眼が紳士をつくるといふに在るに反して、吾れのは世間に出て用をさせるといふにあるの一事は尤も明確な相違である。各種の專門學校が直接實用向きの人材を造くるためであるのは論を要しないが、大學とても常に或る種の實用に供する事を目的として居る。少くとも學生自からの希望も社會の期待して居る處も、共に卒業生の世間に出て働くといふに歸するやうである。大學の專門學校と異る處は、後者の普通なるに比して、前者が高等の用務に服するといふに過ぎぬ。

併しながら西洋の事は別として、今吾が社會の現狀を省るに、その尤も痛切に感ずるものは生活問題である。生活問題は何時如何なる處にも痛切に感じられるものであるが、特に吾が現社會にそれが著しいやうに思はれる。京都大學が不評判といふのも實は此の問題に直接の關係があるためである。今その不評判なる事の事情を考ふるに、その醫科大學に就て見れば中々氣焰が高く、東京大學に拮抗して居ると聞いた。理工科大學に至つてはまだ格別の事に耳にしない。只非難の中心になつて居るのは法科大學のみである。而してそれはまた何故かと言へば、卒業後の生活問題に關係があるためである。さらに艶を添えて言へば、立身出世の途に都合の好くない點があるためである。聞くが如くは京都大學から出た卒業生の、高等文官試驗に及第するものは、年一人か二人の割て、此れを東京の私立

大學に比するも遙かに劣るといふことてある。言ふまてもなく民間の會社ても、その卒業生を遇する事は東京のに及ばないといふ。即ち京都の法科大學にゆくものは、卒業後生活に困る、若くは立身出世が出來ないといふのてある。此れは現代の趨勢から見て、學生に取り急所てある、或は致命傷てあるかも知れぬ。

尚此外に法科大學諸教授の間に不和もあるといふ、いかにもそれも京大不評の一原因てあらうが、或はそれとても別種の生活問題若くはこの文官試驗問題の事情から起つた事てあるかも知れぬ。余はこの教授間の不調和に關し、その原因の何處にあるかを知らぬ、故にまたその問題に就て口を挿む事を敢てせぬが、大學不評判の原因に就ては、その根本が生活問題てある事を斷言するに躊躇しないのてある。

果して然らば余が初めに言つた如く、今日の吾が大學の重要問題は、英吉利のそれの如く品性陶冶てもなく、また大學の目的として標置して居る學問の蘊奥を究めるのてもない。少くとも法科大學の重要なる問題はさうてないのてある。大學は學問を研究する處てなくして、古い考のやうてあるがそれは學問の登龍門てある。前後の事情これは正しく確かな事實と見て差支あるまい。なほ聞く處に依れば京都法科大學の學風は特に專門的て、その教授は全班に亘らずして、一局部の研究に深く入るやうな傾をもつて居るといふ事てある。さうあつて見ると教授の方は學問研究的にやつて居るのてあるが、周圍の事情がそれをゆるさず、それがために大學を益々不評判ならしめたとも考へられる。即ち周圍の事情が學生をして清閑な處て落着いて學問に耽ける事を許さしめず、市井の雜鬧のうちに身を投する事を望ましめたのてある。さう考へて來ると、學問を以て切に實際世界の用具としやうと試みる論者識者の考が、いよ／＼世を益すること少なく、却つて甚だ輕薄な風を助長したことになる。重ねて云ふが、この一見穩當らしい學問利用說は學問の敵である、從つて世の進歩の敵てある。而して又遠く京都大學の一部をして不評判ならしむる原因てある。

學問を以て全然糊口の具となし、立身出世の手段とする事は一世の風であるが、文敎の責に任ずる當路の人は果して如何にこれを考へて居るであらうか。文部省の方針如何の如きは、門外漢の知る處てはいなが、たとへば中學制度の統一の如きはその方針の一である。然るにかくの如き方針がまた期せずして、青年の心に生活問題を剴切に感ぜしめ、遂に引いて依賴心を起さしむる緣となる。何となれば此の中學統一の方針は、即ち何人も文部省の認定した中學に入らずしては、世の中に立つ事が出來ぬ、立身出世は出來ぬ、との考を起させるからである。一とたび青年の頭にそんな考が起つては、學問に献身しやうなど丶いふ念慮は容易に起るものではない。又女子の敎育に就て見ると中學校は文部省令に遵據して行かなければならぬが、女學校に至つてはその必要はない。高等女學校ならば文部省令に依る必要もあらうが、女子には徵兵に關する特典の必要もないのである故、名稱に於ては高等を稱せずして、その實に於て高等女學校の事を敎ふれば良いのである、それ故女學校のみは文部省と獨立して、私學の本領を發揮し獨立獨歩して行けるであらう。若し眞正の意味に於ける私學を欲するならば、今日の處女學校を外にして、それは得られない事であらう、と余はかく考へた。然るに焉んぞ知らん、高等女學校を標榜して文部省令に遵據せぬ學校の卒業生には、敎員免狀を附與せぬ事になつて居るといふ。かくなると父兄は普通の女學校を嫌つて、その女子を省令に遵ふ高等女學校に入らしむる故、女子の、私學もまた殆んど成立しなくなつたといふ。父兄の頭は常に生活問題を以て左右されて居る。その息子に問ふに、受くる處の月給幾何を以てするものは、その娘の嫁して後の萬一の場合に處せしめるため、免狀を取らして置かんとするのである。此れ則ち男子が大學を以て立身出世の道とすると等しく、女子は高等女學校を以て、德風を養成する所となさず、生活の道を得る方便とする所以てある。則ち又文部省は期せずしてその省令を以て、斯くの如く世間が生活問題に熱中するを制止せず、益々こ

れを昂めて行く結果を生ぜしめて居るのである。

京都大學に縁のない事をしかく長々と説いたが、實は一代の氣風が京都大學をしてその不評判を贏ち得せしめたのである事を言はん欲したのである。要するに學ぶものも、父兄も、世間も、而して文教の主腦たる文部省も、相率ひて大學に於て眞面目に學問に、獻身する事を欲せず、また許さないのであるから、京都大學は學問に好適の地にありながら、その學風が學者的でありながら、却つて評判を悪くしたといふ、矛盾した結果を招いたと言はなければならぬのである。

余の以上述べた處は一言に歸着する。則ち今の時代が凡て學問を學問として考へず、處世の方便として考へるの故、京都大學少くともその法科大學が、不評判に陷つたのである、と言ふに過ぎぬ。併し若し此れを外にして、京大卒業生の學力が不足であるとか、素行が宜しくないとかいふのであれば、それはまた自から別問題で、またその矯正はむしろ容易なのである。併し醫科若くは理工科にそんな不評判がない處を以てすれば、法科の生徒に限つて良くないのであるとも考へられぬのである。それ故に余は飽くまでも卒業生若くは生徒の學力は、充分であるとして論じたのである。また萬一卒業生若くは生徒の學力が不充分であるならば、余の論はその點に於て實際には適しないが、果してさうであるとすれば、抽象的に現代の學風如何を説くものとして、余はさらにこれを以て今後の京都大學に對する注文としたいと欲するのである。

則ち余の注文とは、京大が今後滔々たる時勢に反抗しても、眞正の學者を出し、眞實の學問を修める處となつて貰ひ度いと願ふのである。學問を實地に用ゐる實用學者は何處にでも澤山にある。却つて無用學者は稀れである。學問のための學問をする人は極めて少ない。それ故今後京都大學は如何に志望者が少くとも、如何に不評判になつてもかまはぬ、全然東京大學其他と學風を異にして、眞實大學の實をあげて貰ひたい。實際若しさういふ特色がなければ、京都に法科大學などを分置する必要もないのである。他の分科は知らず、

法科文科の如きは、教場さへあれば宜いのであるから、官吏登用門としての大學ならば東京一個で事足りるのである、また私立大學でも澤山なのである。然るにそれが特に京都に置かれるのは、何かそれに特色がなければならぬ。當路の人は何と考へて居られるか知らぬが、余はこの學問一點張の處を以てその特色としたいと思ふ。而もまた此の一點を措て、他に特色とすべき事はないと考へる。無論此れに加へて、英吉利流の品性陶冶は充分なければならぬ、併し素より此れは京大に限らず、東大にも望むべき事であるが、劍橋大學在學以來、英吉利流の薫育に經驗ある、菊地男爵が現總長である以上、特にこれを希望すべく、またそれを實際に顯はし得ると豫期する事が至當であると信ずるのである。

　遠くの事を言へば、西洋の著名な大學は多くむしろ靜閑の地にある。ボストンのハーヴアート、ニユー、ヘヴンのエール、ボーチモアのジヨンス、ホプキンス。劍橋、牛津二大學の大學特殊の區劃にあるは勿論、獨逸の諸大家がまた多く小都會に散在して居るのを見ても、大學なるものが必らずしも大都會になければならぬ者ではない事が解るであらう。然るに獨り吾が日本のみが、東京でなくば大學が成立しないといふ理由はない。而して若しそれがいよ〳〵成立しないとすれば、必らずや大學があまりに實際に接觸するを必要するからである。近頃になつては大學を大阪に置くが至當であらうとの說さへ稱へ出された。甚しい說であるが、みな大學と活動社會と接近させやうとの考から起つて來たものである。此れは時勢と吾が日本の事情やみがたい處とから來た考でありはするが、また余をして言はしむれば、その趨勢を逐ふのが間違ゐて、それがまた現代の一大缺陷である。

　余は終りに當つて再び言ふ。實際を以て學問の對象とするのは良い。併し學問を要して實際の具となし、學者を實世間の奴婢とするのは、呪ふべき事である。余はこの意味に於て學者と學問とをなるべく實世界から分離したいと思ふ。そして京都のやうな大學を思ふ

存分に發達せしめたいと思ふ。京都大學の文科大學は今又やうやく、その出立の途に就いたが、此れも願くは時流を超脱した立派な文科大學として生長さしたいのてある。

余の意見は京都大學論としては、迂濶に過ぎるかも知れぬ。併しながら些か學問の尊重すべきを思ひ、これを京都大學に求めたのてある。

日米協約を評す

池邊吉太郎

今度の日米協約が日本の爲めに有益であるか無益であるか、或は又却て有害であるか。其判斷はモツット時が經つて、日米間の國際關係の變化を見た上てなければ分らない。而して日米間の國際關係の變化は、近き將來に於て必らず起るべきもの又起らざるべからざるものと私は見て居る。

私の聞いた處ては——而して確かな事實てあらうと信じて居る處ては——今度の日米協約は日本政府の提議したものである。米國艦隊が横濱を出發した、其翌日を以て提議したものてある——提議すべき訓令を高平に與へたのてある。而して其提議の内容は多分書物にあらはれたのと異つた所がない、あの外には何にも箇條がなかつたに違ないと思はれる。一體あの條項の中に規定してあることは從來度々日本と米國との間て兩方から宣言し合つた事て、不文として若くは何かの公文書て以て已に互に通じ合つて居る事柄である。太平洋に關して、支那に關して、今度の協約がなくても兩國てはあの通りにやることになつて居たのである。只今度の協約は從來不文若くは内輪になつて居たのを編纂し、發表し、公告した丈けで、いはゞ只外に見せつけるのに重きを置いたのである。

何故日米間の關係を外に見せつける必要があるかといふに、當局者の持て居る理由は二つあるやうである。一つは日本の同盟國たる英國が、日米の關係の嶮しきを見る度毎に非常に氣遣ふ。何とかならんものか

といふやうな顔をし、又口に出してもいふ。其結果、兎もすれば日英同盟を冷たくするやうな恐がある。て此英人を安心させる爲めにあゝいふ協約を作て公けに見せつける、此れが一つの理由。今一つの理由は、當局者は何所とはいはぬが、日米間に水を注さうとする一つの國がある。それが始終いろ／＼な所作をやり、離間、中傷なか／＼煩さい。それが厭だから之れを防ぐが爲めにあゝいふ風に公けにしたらよからうと考へたらしい。て、日本人が米國の艦隊を歡迎して米國も其れを非常に喜んで居る際に、こちらから提議して直ちに之を纏めて發表したのである。さう私は聞いて居る。而して又事實に違なからうと信じて居る。

處が、日米間にいくらか中違ひの危險を起す關係があるとすれば、それは太平洋問題でないに極まつて居る。内々には互に領地を覘ひ合つてるといふ妙な猜疑心が兩國の或一部にはないとも限らないが、そんなものはいふに足らん。政府と政府との間て太平洋の事て衝突した事は一度もありやしない。又支那問題てないことも分つてゐる。これも或一部分では、先き／＼に行けば支那に於て日米兩國の勢力が衝突するとの掛念を抱いて居るだらう。日本にもあらうし、支那にもあらう。米國にもあらう。けれどそれも少數の人の間にある丈け、國と國との間にはそんな心配は少しもありやしない。だから今度の協約に宣言してある太平洋問題も支那問題も日米兩國の中違ひの原因となるといふ事は從來もなかつたし、又將來にもありさうに思はれない。兩國の何れか大いに太平洋侵略の政策を樹てるか、若くは支那侵略の野心でも起さない限りは此二つの問題は兩國衝突の原因とならぬのである。

それで我同盟國から氣遣はれるのも、又或國から離間中傷をさるゝ破目を生ずる危險あるのも實は太平洋問題でも支那問題でもないのである。それは外にある。即ち移民問題である。移民問題こそ從來日米兩國の感情齟齬の本であつたが、今後も亦本となるだらうと思ふ。昨年正月の本誌に論じた通り結局はなくなる問題であるが。さしあたつては問題とならうと思ふ。今度

の條約改正の時、日本は第二條但書の規定を除かうとする。然し米國が果してウンといふだらうか。假令、米國がウンといつても批准權ある上院などで何と言ふやら……。又今の處では日本も自ら制限して居るので移民は澤山に行かない。然し絶對に行かないのではない。又行つた人間も大いに注意して兩國中違ひの事件を作らぬやうに勉めて居るが、何時どういふ事が起らぬとも限らない。政府間でも人間でも移民問題が本になつて言ひ爭ふことが出來ぬとは斷言し難い。

處で折角今度のやうな協約を拵へても、其根本に横はつて居る兩國間の邪魔物を取除かず、又手を着けやうとさへもせぬ。日本の當局者は多分こう思つてゐるだらう。日米の間には移民問題は詰度起る。今度の協約を作つても起ることは起る。然し作らなければ尚甚しく起る。作つて置けば起つても極めて小さくなるか、若くはいくらか小さくなると見て協約を作つたのであらう。

さア、そこだ、說の分れるのは。實際此協約が條約改正の時、移民問題に幾何の効力あるか。極めて小さくなるか、又一向にさし響かぬか。若し一向さし響かずして移民問題か問題として其儘出るならば同盟國の氣遣ふ處も、或一國の離間中傷の入る破目も依然としてある。さうすれば全く無益のものである。又眞に問題をなくするか、又は極めて小さくなるとすれば有益なものである。又有害となるかも知れぬといふのは、日本は近來協約を爲し散らかして居る。あつちにも、こつちにも協商をして居る。而して日本自ら自己の威力を束縛して居る傾がある。今日本の陸海軍の兵力の分量よりいへば、どこの國からも侵さるゝ氣遣はありやしない。其氣遣がないに拘らず領土保全の約束をする。今度の日米協約にもある。太平洋上の領土を侵し合はぬといふ。米國が我臺灣、九州、其他を侵すといふ氣遣は先づありやしない。然るに領土を侵し合はぬといふ。其事が或は有害にはなりはしないかと思ふ。何故といふに、或一國に之をやれば外の國からさういふ事を申込まるゝ氣遣がある。太平洋に利害關係を有

する國は米國の外にもある。西班牙に今はなくなつたが和蘭も持て居る。租借地であるが獨逸も持て居る。太平洋に關係あるものは日本から一々侵略せぬといふ證文を出すといふ事になれば困つた事だと思ふ。今日までには證文を出さなければならぬやうな事はなかつた。而し今後ないとも限らない。若しさうなれば今度の證文は有害になりはせないかと思ふ。全く今後の成行によることであるが、今度の協約は實は餘計な事でないかと私は思つてゐる。そんな協約などいふことをしなくても人民同志互に仲よく酒でも飲んで見せるのが外國に對する第一等の示威運動で、それで澤山であつたと思ふ。今度の協約は餘計な證文に過ぎないと思ふ。詰り碁でいへば打ち過ぎといふ形だ。碁の評でいへば此石は打たざるを勝れりとすといふ處だ。然し打過ぎは上手でなければやらぬものであるから、之をやつたのが或は小村の小村たる處かも知れぬ。林はやらなかつた、そして青木を呼び還した。

（完）

從來各欄を通じて頁數を追ひたりしが本號よりは各欄毎に頁を改むることゝなしぬ。されど印刷所の都合もあれば次號より又從來の通り復にするやも知れず。右豫めお斷しておく。（編者しるす）



現在に於ける海外一切の事象殊に我邦と緊密の關係ある歐米諸國等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

清國の將來

伯爵　大隈重信

支那が將來どうなるか。之れは何人と雖も明かに云ふことの出來ぬ問題である。然し世間一般を見渡すと、殆んど總て樂觀說と云てもよいやうである。各親王も、各大官も、皆協同一致して國政に當て居る。外國の干涉や內部の騷擾に對する警戒妨禦もぬかりなくやつて居る。立憲政體の採用といふ大光明も前途に輝いて居る。此分ならば大丈夫何等の變亂もなからう。先づ先づ安心して可なりである。と支那通といはるゝ人も、又然らざる人も一樣斯く唱へ、又思つて居る。

けれども吾輩は之に對して些か異論がある。

抑々國政といふものは一つの力でなければ治らぬものである。唯一つの力が中心となつて居らなければ駄目である。主權は一つである。二つ以上の權力で國を治めて行くことは到底出來ぬ。協同一致、名は美なるが如くにして實は持ち合ひである。持たれ合ひてある。持ち合ひ、持たれ合ひて長く國が治まつた例しは斷じてない。西太后といふものは一つの力であつた。唯一の主權であつた。其唯一の主權であつた西太后が死なれて、未だ其れに代るべき唯一の主權が出來ぬ。出來たものは各親王、各大官の協同一致 ——持ち合ひ、持たれ合ひの權力である。これは決して長持ちのせぬ權力關係であつて、早晚內輪の悶着が起り、一方が勝ち、一方が負け、負けた方が反抗して勝つた方が之を擲き付けて了つて、權力の中心が一つに定まらなくては駄目である。之れは自然の勢である。こゝまで行かなければ支那の主權が定まつたものとは見ることが出來ぬ。例へば我國の豐臣家の末路を見ても分る。豐臣秀吉といふものは一つの力であつた。唯一の中心力であつた。其秀吉が死ぬ。表面上秀賴が主權者である。けれども

其實は天下の諸侯が持ち合ひて之を維持しなければならぬ。諸侯の間にいろ〳〵のゴタ〳〵が起る。徳川家康が頭を擡げる。豊臣と徳川と相對して二つの權力となる。それは其儘には濟まぬ。相爭ふ。而して結局は徳川家康といふ一つの權力の下に統一される。かく徳川の權力が確立するまでは決して天下が定まつたものといへぬ。今日の支那も今度の幼帝が主權者である。醇親王は攝政である。肅親王も、慶親王も張之洞も袁世凱も皆持ち合ひ、持たれ合ひてやつて居る。吾輩は此中の何人が勝つか負けるか、それは知らぬ。が支那も日本と同じく皇祖皇宗を尊ぶ國であるから、皇族のある力に、大官のある力が加はつて一つの力となつて、其れが權力の中心となるに相違ない。昔ならば隨分革命が起つて、今の愛親覺羅氏の子孫が漢人の爲めに倒されて了ふやうな事もないと限らないが、今日は外國の干渉が怖いからさういふ事も出來ぬだらうし、又皇族の子孫などには得て愚鈍なものが出勝ちなものであるが、今の親王連は皆なか〳〵物が分り、又容貌もよく體格も丈夫で主權者として耻かしからぬ人々であるから、今の朝廷はまだ續くであらうと思ふ。只今日の如く各親王各大官の持ち合ひ、持たれ合ひの形勢は決して長く續かず、早晩分裂し闘爭し、其中の一つの力が確立し、玆に始めて權力の中心が出來ると思ふ。

此内輪喧嘩の時に外國の干渉を招ぐの恐なきや否やといふに、吾輩は必ずしも無しと斷言するを躊躇する。固より日露戰爭の如き大戰爭の開始するが如きことはなからうが、支那に向て鵜目鷹目をして居る列國が此勢に乘じて、何かやり出さうと目論見、其相互の權利が衝突して多少の爭闘を釀し、夫れが根になつて可なりの變動を起すやうな事が絶無とは斷言が出來ない。が此事は注意さへすれば防ぎ得られることであるから、先づ餘り大した事にはなるまいと見て間違はなからう。

只支那將來の大問題となるものは、世間でいつて居る様に、どうしても憲政の施設である。憲法を作ること、そんな形式上の事は何でもない事である。極めて容易な事である。が之れを實際に施行する、それが實に非常の大問題である。殊に中央の權を強くして地方自治行政を布くこと、之れが最大の難關である。一體支那といふ國はなか〳〵地方の權力の強大な國である。秦の始皇帝が郡縣の制を布いてより二千餘年、其間代々地方の勢力の強大なるに手古摺つてる國であ

る。唐の時代の節度使なども地方長官の如きものであるが、なか〳〵勢力があつた。後漢より五代にかけても然り、又三國史などの英雄も皆地方長官であつた。それよりずつと今日に至るまで始終地方長官の勢力は少しも衰へず、却て益々強くなつたやうな傾きがある。それを抑へて地方自治の成績を上げる、どうして一通りや二通りの難儀ではない。然しながら日本の御維新の時のやうに封建制を廢して郡縣制にしたといふ根本的改革を行つた例もあるから、これも恐らくやれない事がなからうと思ふ。只然しながら其やり方がまづくて、人民の反感を買ひ、國内の騒擾を起すやうな事があつては、夫れこそ由々しき一大事であつて、若しさうなつたら頗る寒心すべき結果を來さないとも限らない。然しながら支那は近來實に手痛い、苦い經驗を嘗めて來て居ることであるから、案外巧みに此間に處して靜かに平和の道に進み得るかも知れないと思ふ。支那の將來について思つてゐることをお話すれば、大體右のやうなものである。(完)

海外消息

摩洛問題──波斯の憲政問題──同帝の宣言と[illegible]──バルカン半島の其後──英國々防問題──日米協約──

十二月二日　巴理より　無念庵

●謹啓　世界先粹の流行児たる巴里ッ子も、漸く交際季節(シーズン)を待ち兼ねて、湖上風冷かなる處に、裳を靡ひし、金髪を梳らしつ、舞踏に、氷滑(スケーチング)りに熱狂する事と可相成、諸隣國より入り來る紳士淑女諸子又此處に集り來りて、相共に餘念なく嬉戯する様、其本國同士が何故に嶮々たる權利問題に齷齪立てして、六ヶ敷衝突を引起すかと思はるゝばかり、誠に日本人に見せて遣りたきやう感ぜられ候程に候。

▲由來外交上の折衝は此際斯の如き場所に於て、談笑の間に行はるゝものゝ由にて、既に獨の某々、墺の某伯、露の某記者などは、何時の間にか巴里に來りて、彼地此地に出没し居るやうに見受けられ候。さりながら本年のシーズンは英佛露同盟默約の成立後とて、現に進行しつゝある外交上の大問題とては、一も有之事なきが故か、例年に比しては頗る平穏無事に候。

▲摩洛問題も依然として舊の如く、單に新國王の武力が能く國内の爭亂を抑制しつゝありと云ふまでに候も、既に外交上の危機は過ぎ去りたる様に思はれ候。今日獨佛の關係は、カサブランカに於ける兩國官吏の極め些細なる衝突に依りて、問題となり居り候も、之とて唯兩國官憲が之

を遣留なりと認むると云ふに過ぎず、要するに佛國直接の外交問題は最近一ヶ月間には絶無と云ふも不可なかるべく候。

▲併しながら列國の形勢は猶依然として混沌たる有樣に候故何時如何なる邊に歐洲禍亂の地雷火に火が付かぬとも限らず、バルカン、波斯の邊は如何なる些事と雖も、我等日本人の看過すべからざる事、敢て淸帝の崩にも讓るまじく候。今玆に巴理の外交社會に於て、話題に上りて列國の形勢に付き申述べく候、最も從來の海外消息欄に依りて、讀者が既に承知致し居ると想像する部分は、此處に省きたる所存に候へば、讀者は豫め之を諒して讀まれ度く候。

●波斯の憲政廢止●●●●●●

英露協約に依りて僅に其國土を保全してある波斯は、其後依然として人心恟々、上下其堵に安ぜざるの有樣に候が、久しく問題となり居たりし憲法は頗る珍妙なる手段にて造作なく廢止せられて、豫て宮廷内の守舊派と謀じ合せ、首相は各階級の波斯人數百人に向て宮中謁見室に參集せんことを申込みたりしが、之を知れる志士等は應ぜず、集れる者僅に二百人、直に革命黨員等に對する刑罰を確定し次て憲政反對請願書の調印を、各員に求めたり、首相は形式的に波斯帝が再び憲法政治を布くの意あるを述べ、該請願書に調印なからんことを希望するや、守舊派の僧侶は突然國王の前に進み出て強て憲政廢止を請願し國王は熙懃なる儀禮を以て之を聽許し、終て熱心なる祈禱會に移りしが、之れ彼等が企てたる陰謀巧に功を奏せるものにして、固より一場の滑稽劇に過ぎざれば國内の志士は大に憤慨しつゝある由に候。

▲英露兩公使は之を見て、波斯內亂の前途を危み、國王に謁見し、國內の形勢より關係諸列國との關係を說き、徒に獨裁政治を夢みて國內不平の聲耳を傾くる事なくんば英露兩國の日頃の苦心も水泡に歸すべき譯なれば速に憲政實施の誓約を守らるべしと言辭を盡して勸告に及び候。

▲されど國內不平の徒は到底國王に向つては何事を迫るも無益の業なりと深く覺悟する處あるものの如く、ダブリッツ市に於て再び大軍を起さんとする模樣あり、波斯北部の形勢も從て益々騷擾を極め、露國は此地に一軍を派遣せんとし英國の意向を潜かに探りつゝある樣に候。露國は勿論英國が見て以て危急出兵の止むを得ざるものと認むるまでは、波斯國內に露兵を進ましめざるべけれど、露人が續々波斯を引揚げ來るを見ても同國內地の形勢が全く日に非なる有樣と相成り居り候事は確なるべく候。猶此處に十一月十一日發の露都電報を掲げて讀者の參考に資せんに、即ち曰く「露國は本日を以て波斯に關係する外交文書を發表すべし、其書は露國が一切波斯の內政に干涉若しくは土地を占領すべき意志なきを明言し、又外國人保護の爲め、多少の軍隊を派遣する事は、餘儀なき次第ならんも、英國が之を是認するまでは假令一兵たりとも波斯國境を越えさせまじと說き、又假りに出兵したりとて英露協約に違叛するが如き行爲は爲さゞるべきを辯明せる者なり云々」と。

▲以上述べたる憲政廢止請願書なる者は、守舊派の僧侶等が、憲法政治は其國教たる回々教の眞義に違叛せる者なるを以て、コーランを奉ずる以上は、教祖の意を奉體して獨裁政治を布かれたしと云ふに出でたるもの

なる由に候が、其筋は公使の壓迫は大に世を害し、國王派が復興の色ありと、新聞紙は一切に筆を揃ひて兩國の壓迫を必要とすと主張し居り候。

●獨帝の失言と後始末

獨帝失言の餘波は猶止まらず、宰相ビユロウ公は之が爲に攻撃の中心となりて頗る不評判なる由に候が、十一月六日より開會せる獨逸下院は先づ第一に獨帝失言に對する最も强烈なる一大質問を起すに至り候。即ち本問題は十一日の議場に於て朝野の大論戰となり、傍聽席は立錐の地なく問題が獨帝に對する攻撃を意味するだけは頗る異樣の感に打たれ候。自由黨の領袖バスセルマスン及ウヰルメル兩氏は忌憚なく獨逸皇帝が妄りに獨逸帝國の外交に干渉するを攻撃し、常に皇帝の談話が到る處に不愉快なる影響を及すは誠に苦々しき次第なりとて其事實を指摘し、又皇帝が前後を顧みず獨逸艦隊の目的が太平洋にありと言明したる爲め、日淸米の三國に不幸なる影響を及したりと痛論せり。

▲又急進黨社會黨員等引續き皇帝攻撃の火の手を高めて底止する處を知らず、彼等は帝國を危うする者は皇帝の放言なり。皇帝は自ら科學宗敎美術一切の先覺者を以て任じ、殊に上帝と特別の關係あるが如く自稱するは正氣の沙汰にあらず。國民は皇帝に對して再び一致せり、一致は憤怒の一致にして同情の一致にあらず。と皇帝を散々に痛罵し猶微細の點にまで鋭鋒を向けて毫髪も假借せざるものの如く誠に前代未聞の人身攻撃に候。

▲宰相は之に對する答辯として、皇帝は今後一層其言動を愼むの必要あり斯くの如くわが親任せる宰相以下を出拔いて物議を起すが如き有樣にては如何なる宰相も之に對して責任を受くる事を得ざるべしと語られたるが、此語は諸外國に於て極めて眞面目に受取られ、巴里に於ても大評判に候。

▲外相代理キデルレンウエヒテル氏は下院に於て各方面に於ける攻撃の矢面に立ち、之が答辯に忙殺されつゝあるも、彼が辯護的演說は常に議員等の嘲笑慢罵の間に葬り去られ、又如何ともする能はず、宰相は遂に皇帝に對し今後少しく謹愼ならん事を諫言に及び、若し聽かれずんば外交政策の統一、皇帝の尊嚴を害する等の點に於て自分等は到底其職責に堪ゆる能はざるべしと極言したりとの事に候が、聯邦議會も政府の苦衷を察し宰相の道理ある演說懇願的態度に同情し同公の意を納れて本件を無事落着せしむる事に一致したる樣に候。

▲されど社會黨及中央黨は今後如何なる事變出來するやも知れざれば、之を機とし、宰相をして責任を議會に負はしむる法律案を提出し皇帝の言動に對する責任を宰相に負はしめ、宰相を更迭する權力を議會に握らしめざるべからずとて運動しつゝありしが、新聞紙は一般に此の運動を是認し、今後內閣大臣が皇帝の行動を制馭し得べき保證を得る必要ありと主張しつゝある樣に候。

▲一方には強情我慢の皇帝を怒らしめず、一方議會を圓滿に操縱して、玆に滿足なる結果を付けたる獨宰相ビューロー公の手腕今更ながら感心の外なしと露の某外交通は申し居り候。

●バルカン半島の其後　勃牙利の獨立、墺國の二州合併及び其他關係隣國の諸問題を總て列國會議に付すべしとは露國側の主張にして列國も又之に同意せるが、墺國は未だに之に反對し居る樣子にて候二州合併にはセルヴイヤ、モンテネグロ等死力を盡して反對する模樣にて既に列國の勸告を顧みず益々不相應の戰鬪準備をなしつゝなれば、次第に依りては再びセルヴエヤの老幼武器を取つて立ち往年の悲劇を再演せずとも限らず、依然として事態は頗る不穩に候。

▲土耳古提出の列國會議々題として外電の報ずる處を見るに(一)勃牙利及ルーメニヤの現狀變更及貢金問題の解決(二)ボスニヤ及ヘルテゴヰナの現狀變更(三)セルヴヤ及モンテネグロに對する賠償(四)伯林條約二十三條の削除(五)同六十一條の削除(六)約定書の變更(七)モンテネグロの希望に基く第二十九條の變更等にして何れも隣國の何れかに衝突すべき者に候。

▲然るに墺國は本問題中少なくともボスニヤヘルテコヴイナ二州合併だけは土耳古と直接の談判に一任せられたき希望にて、之が爲に英國露國側より時に面白からぬ報道を耳にする譯に候。土耳古は飽くまでも英國の感情を害ふまじと心掛居り候爲め、最も英國の氣受善く、いざ列國會議と云ふ場合には最も有力なる味方を得べく候。英國首相アスキス氏は倫敦ギルドホールに於ける晩餐會席上、土耳古の溫和なる態度を賞讃し、土耳古に影響を及す勃牙利及墺太利兩國の行動は、土耳古及其他關係諸國の同意を得ざる限り、國際的効力なしとの英國最初の主張を確認せられたる由に候。

▲其後の露都電報に「土耳古勃牙利の談判着々進行せり唯賠償金額に就て雙方の意見一致せざるも、主要なる點は遠からず妥協成立の見込充分なるに就き駐土露英佛三國大使は、談判の終了を待たず、直に土勃兩國側より列國會議開催を主唱すべしと勸告せり」と有之候。露英佛三國の壓迫が墺國に加はらざる限り果して、列國會議が開かるべきや否や、頗る疑問に候。

▲猶聞く處に依れば、ボスニヤ、ヘルテゴヰナ二州併合は既に墺國議會を通過する模樣あり、又モンテネグロ、セルヴイヤ、土耳古の三國出兵を恐れて、二州に駐屯する第十五軍團に六千有餘名の增員を爲したる由に候。

●英國國防問題　ロバート將軍は上院に國防案を提出し、獨逸が英國に侵入する場合を假想して、詳細に其上陸地點等を調査し、英國は最強國が兵を英國に上陸せしめんとするに當り、之を防止するに足るべき強大なる陸軍力を速に備ふる必要ありと主張致し候。本案は特別秘密委員會に付託せられし後、遂に三十二に對する七十四票の大多數を以て可決確定せられ候。猶ロバーツ將軍の調査に依れば、北部獨逸の諸港には何時にても約二十萬の大兵を輸送するに足るべき船舶の準備せられ居

る由に候。

▲佛國の諸新聞紙は該國防案に賛同し、英國が獨り海軍力にのみ依らず、陸兵を改革發達せん事に着眼し、之を實行せんとするに至りたるは、英國の爲に賀すべき事なり云々と申し居られ候。

▲之に反して獨逸は最も之を悦ばず、ロバーツ將軍が、獨逸兵の英國侵入を假想して立案せる國防案を、上院が之を可決したるは、餘りに獨逸を愚弄せる處置なりとて、之れ憤り、北獨日報の如きは、非常に激昂せる論調を以て、獨逸は他國の爲す事に頓着なく、今後も鋭意軍備の擴張を計るべしと結論せられ候。殊に英國は獨逸北海侵入を假想して、北海に海軍大演習を擧行し、今又此の事あり、何處までも獨逸を敵と見て、其兵を備ふる傾きあるは、誠に止むを得ざる事なりと雖も、獨逸側より之を見れば隨分腹立たしき事なるべく候。

●日米協約　一千九百〇八年掉尾の大外交問題として世界の視聽を聳かしたる者は、日米協約の成立なるべく候。動もすれば日米開戰を唱道したる巴里の某新聞の如きは、拔いた刀の納め處なく、之れ外交上の變調なりと讒言を云ひ居り候。さりながら主なる外交通は之を以て兩國間の誤解を一掃すべき最も適當なる良策なりとし、日本が米と結びたるは、敢て日佛協約と異なる處なし、吾人は日佛協約を喜ぶが如くに、日米協約を歡迎する者なりと申し居候。

▲要するに同協約に對しては、一般に祝意を表し、勿論何人も反對の意見を發表する事なければ、巴理の外交界は之を見て別に際立ちたる騷ぎもなき樣に候。

▲然しながら太平洋に於ける艦隊云々の流言を發して、其國の臣民にすら愛想を盡かされたる獨逸皇帝が、此報を耳にしたる時の感想如何こそ、誠に聞かまほしき事に有之候。日米協約の成立は桑港移民問題騷動前後にあり、大西艦隊の東洋回航中に略ぼ成立したるものにして、獨帝が太平洋上に嘴を入れたる時など、兩國官憲は密かに片腹痛き事に思ひ居りたる由に候。予輩は屢々太平洋上に今にも戰爭開かれんとする報道を耳にする毎に、其萬一を氣遣ひて聊か心痛し居たる事も有之候が、今後斯かる事なきを信じて大に喜ぶ者に候、獨り予輩に限らず遠く異域の巷に放浪し居る者は皆同感なるべくと存じ候。

前號に豫告せる論說にて編輯に間に合はざりし爲め若くは頁數の都合等によりて本號に掲載する能はざるもの少からざりしは編者の深く遺憾とする所也。新たなる材料と共に必らず次號の誌上にあらはるべし。

說苑欄には黑頭巾氏の「帝都の新聞經營者」號を逐うて益〻氣焰加はるべく又和田垣博士の「至適存續論」と題する最も興味ある長論文あらはるべし。本號は材料豐富の爲め「海內」の欄を略せり讀者之を諒せよ

説話

時子

楚ノ冠　杉村廣太郎

一、電話

月も日も忘れたか、何でも一昨年の春の初の或夜一時過、僕が第三版の編輯を終つて、愈々之から宿直室に引籠らうとしかけた時突然ちりん／＼とけたゝましく電話の鈴が鳴り出した。折しも四邊に給仕も居らず、せうことなしに編輯長自身電話の口に立つて受話器を耳にあてると、之はしたり、あだめいた女の聲だ、『杉村さんがお出てならば、誠に恐れ入りますが、一寸電話口迄呼んで下さい』と言つて來た。『僕は杉村ですが』と答へると、『卿は杉村さんなの？ほんとうに卿が杉村さん？ほんとう？』と再三再四念を押す。ゴールドスミッスの著「ウエークフヰールドの和上」中にドクトル、プリムローズが或る見識らぬ人から、『卿があのドクトルでしたか』と問ひかけられて、何だか面目を施したやうな氣がしたと、書いてあつたが、之と反對に斯う繰り返し／＼僕の名を聞き直されては、何だか冷かされるやうな氣がして、氣になつて堪らぬ。兎角の押問答の末、漸く僕の杉村たるとが分れば、今度

は對手から『妾、分つて?』と來た。――其の言葉の調子から考へると、何しても藝妓らしい。

僕は一人の藝妓の名前も知らぬといふほどの「大道德家」でもないが、さりとて新橋柳橋日本橋葭町に何千とある藝妓の名前を一々片端から其の聲で言ひ當てるといふほどの「風流才子」でもない。『妾、分つて?』のお尋には僕少からず狼狽して、我にもあらずもぢ〱しながら、何も分らぬと答へると、今度は女の方で、すつと聲を落して『妾、時子ですがね』と初めて名乘を上げた。

其の時子なら僕にも分つてゐる。

二、時子

前年戰爭が始つて間もなく、僕は故郷の代議士兩三と、柳橋のさる所で會したことがある。時子と會つたのは此の時である。

其の席には外に四五人の藝妓も半玉もゐたが、時子の名だけが不思議に僕の頭にのこつた。時子は面長な色の白い眼の大きな女で、年の頃二十一二、何處となく利かぬ氣らしい氣象が眉宇の間に顯はれてゐる。少し鼻にかゝつた聲ではあるが、言葉使ひがきび〱して、聞いてゐても小氣味が宜い。之がうかとして時々名古屋辯を交へるので、其の度毎に皆に笑はれては、其の度毎に大きな目を見張つて怒つた。何でも此の夜一同で畫端書の回しがきをした折、僕が時子のフワウンテン、ペンを、繕つてやつたのが初まりで、フワウンテン、ペン論が大分其の席で喧しかつたやうに記えてゐる。

其の後處は變るが、三四度此の女に會つたことがある。回向院の一月場所でも會つたことがある。此の時は四五人の朋號と一所に後正面の棧敷に來て居たが、遙か右の方の西の溜の後にゐた僕を見つけて、輕く遠方から目禮したので、僕は不思議な女だと思つた。藝妓などいふものは、斯な席で成るべく目ら人の目を避けるものと、僕は心得てゐたのである。

其の內時子の噂もいろ〳〵と聞いた。舞踏が大の得意で、三味線も旨いし、歌も上手だといふ。暇があると、質素な木綿の衣物を着て、生花茶の湯の稽古にも出かける。英語の稽古迄してゐたが、近頃教師がなくて、止めてゐるとのこともある。「顏がよくて、藝があつて、誠に藝妓らしい藝妓だ」と、稱ふる者さへあつたことを耳にした。

所が、此の女が商賣に似合はず、品行方正であつて、未だ曾て一たびも男に關した忌はしい噂を立てられたことがないといふ話も聞いた。『彼の妓は堅いので賣れるのですよ』と、或る料理屋の主婦が僕に語つたこともある。僕も初は僞とばかり思つたが、既に人の話を聞くと、萬更根のないことでないらしい。愈々不思議な女と僕は思つた。

此の女に感心なことがまだ一つある。彼は自分の稼いだ中から學資を作つて、其の一人の弟を高等學校に通はせてゐる。行く〳〵は大學に入れて、弟だけはせめて人並の地位に立たせたいといふ望ださうな。但し、此の事が弟の友達に知れてもすれば、弟の面目を潰させて可愛想だといふので、固く其の名を秘して、未だ曾て人に語らぬといふ。

兎に角、時子が風の變つた女であることだけは慥だ。此の風の變つた女から今しも電話がかゝつたのである。

三、嫌疑

『卿に斯ういふヿを願いしては、誠にすまないと思ひますが』といふのを冒頭にして、時子の語るのを聞くと、

其の日から二日ほど前の〇〇新聞に時子のヿが出た。出たのは、時子に取つて極めて利益のある記事であるが、其の末に時子の抱主の主婦のヿが、手嚴しく攻撃されてゐる。此の新聞を見た時には、何の氣もなく、主婦の目に入れて氣を惡くさせまいと思ふばかりに、其のまゝ引裂いて棄てゝ了つた。所が、世には又餘計な世話を燒くものがあつて、態々其の記事を切り拔いて、時子が朋輩の所へ送つて來た者がある。平生時子が品行方正の名で賣れるのを氣にしてゐた朋輩は、得たり賢しと早速之を主婦に見せたので、主婦は赫と怒つて、時子でなければ知らぬヿを、斯う明らさまに書いたのは、時子が新聞屋に頼んで書いて貰つたに相違なしと、いきまいた。其の新聞を引裂いて棄てたのが、何よりの證據だといふヿに迄相成つた。時子に快からぬ朋輩は手を拍つて喜んで、尻から主婦を焚きつけるので、主婦の怒の火の手は益々高くなつた。――『ま何したら宜てせうねえ』と、時子は震へ聲になつて來た。電話機の彼方で泣いてゐるらしい。

(5)

會話が長いので、交換手からは度々「お話中ですか」の催促が來る。夜は段々深けて、燃え殘る暖爐の火は次第に冷たくなる。大組が何時しか濟んで、早や鑄造場へ下りたものと見えて、とん〳〵と紙型を叩く音が聞え始めた。

「辛い〳〵暇を拵へて、今頃電話をお掛けするんですから、能うく聞いて下さいな」と又始めた。僕も可愛想とは思ふが、さて、東京朝日新聞第三版編輯主任が、何として見やうもない。結局何うして呉れといふのかと聞くと、何でも角でも記事の出所が自分でないことを明に主婦に證據立てたいから、何にかして、その新聞の種が何處から出て、誰の手で書いたものか調べて呉れ、之は後生一生のお賴だといふ。而して最後に又聲を落して、『實は卿も疑られてゝよ』と附け加へた。僕はぎよつとした。

僕は新聞の三面記事なるものを見る毎に、一度何處かの新聞に、僕がさる女と怪しいとか、又は何處かで金を强請つたとかいふやうなことを誠しやかに書かれて見たいと、いつも思つてゐた。斯いふ記事が出た時、僕の友人の中に全く之を信ずる者が幾人あつて、全く信ぜぬ者が幾人あつて、或はそんなことが有るかも知れぬといふ位の疑をかける者が幾人あるかゞ分ると、餘程面白からうと思つたことが幾度もある。所が今現に『實は卿も疑られてゝよ』と言はれると、俄に顏の色が颯と變つて聲まで震へた。——嗚呼僕もまだ中々修行が足らぬ。

時子の難儀を救ふといふよりは、寧ろ此の淸淨潔白な(積りの)僕を疑つた主婦の鼻を拉いて呉れやうといふ考から、僕は兎に角賴の次第其儘には置かぬと引受けて、初めて電話を切つた。第三版が印刷に

かゝつて、輪轉機がぐわら〳〵と初めた。

四、新聞

念の爲に時子の言つた○○新聞の綴込を取り出して見ると、成程二日程前の『葭町だより』といふ項の中に、次のやうな記事が出てゐる。

××の時子(二十一)は男嫌ひの評判者なるが、深川の羽織師時代は男嫌ひといふ者あまり珍しくも非ざりしが、今日は不見轉專門の全盛時代なれば、偶々男嫌ひと名乘る者あれば、それは頗る珍らしく、野次馬的客連は我こそと、競ふて聘ぶやうになる理なるが、此時子も夫れに洩れず、非常に忙はしく、毎日△△のみにても四五回の座敷を勤むる由。此妓の感心なるは唯これのみに限らずして、實弟を某中學へ通はせ、月に廿圓の仕送りをなし居るといふが、此家の女將は箱屋上りなれば、凡べてに算盤强く、その廿圓は無駄物の如くに云ひなし、幾らかでも自分の懷中へ入れたき所存なりとは、不心得の骨頂なり。斯の如くなれば、割烹店待合或は女中への附け屆けは思ふ半分もせざれば、座敷へ出て居る者は肩身が狹く、夫れ故時子は自腹にて、凡べての附け屆けを充分になし居れば、三方四方の評判よく、益々流行るとは爾もあるべきことなり。

之を讀んだ時、僕は、何處の國でも善人は窘めらるゝものだと思つた。○○や××や△△を明に公にする時機も追々には來るだらうとは思ふが、今は此の儘にしておく。

五、細君

翌日宅へ歸つて昨夜の次第を妻に語ると、僕の細君なるものは非常に感心して、大に同情を時子に寄せた。僕の友人に何某といふ變り者があつて、學校を卒業すると其儘、何かの職に就いては餘りに平凡で面白くないといふので、先づ二三年鎌倉へ引籠つて、座禪でも組まうと考へついた。二三友人に諮つて見たが、誰も賛成しない。到頭最後に、其の嘗て師事した福澤先生の所へ行つて相談したところが、先生之に大賛成を表した上、諄々と今時の書生が學校の卒業を待ち兼ねて、度胸も定らぬ癖に、直ぐ社會へ飛び出さうとあせる不心得を説き、何でも人事の成敗は三五年の遲速を爭ふものでないから、是非座禪でもやつて、先づ腹を拵へたが宜からうと、反覆鄭寧に說かれたといふことがある。之を聞いた僕の友人は、平生斯なことに大反對な先生のこととて、頭からがみ〳〵と叱り付けられることと覺悟して出かけた所、其の結果が斯う意外であつたので、正に一代の面目を施して引き下つたさうな。僕の女房と福澤先生とを一つにするのは、不倫の甚しいものであるが、案外な同情を案外なものに寄せた所は、二者やゝ其の揆を一にしてゐると、僕は一寸嬉しかつた。

尤も僕の家内が同情を寄せるにも一應理由がないでもない。今から十餘年前、彼がまだ僕の宅へ來ない時のことだが、或年其の里の宅が軍隊に徴發されて、一時二十人許りの兵士を宿らせたことがある。彼此二三週間滯在の後一同は東京へ引き上げたが、間もなく東京のあらゆる新聞に不都合千萬な記事が出た。

記臆の宜い人はまだ記えてゐるかも知れぬが、子爵〇〇〇〇の脱營事件とて、一時喧しかつたものだ。此の子爵といふものは、其の後除族になつて、位記返上を命ぜられて、今では四谷邊の蕎麥屋の出前持と迄成り下つてゐるさうなが、之が台の家内の里に宿つた軍隊の中に居つた。所で、此の男は、入營前から不身持に身を持ち崩して、其處此處の女と怪しい關係を結んだとも數を知らぬ位であつたが、之が東京へ蹤つて程なく脱營して、夫から又程なく捕へられた。捕へられて後、憲兵屯所で訊問に應じて喋り散らした中には、僕の家内とも怪しい中であつたといふと、家内の兩親も相手が子爵といふのを見込んで、内々娘を唆したといふやうな、根も葉もないことがあつた。斯なことがぱッと東京中の新聞へ出たのだから、流石に平生は暢氣な家内も、悲しいやら口惜しいやらで毎日一室に立て籠つて泣き暮し泣き明かし、果は海の中へ身を投げて死なうかと迄思ひつめたこともあつたさうな。——此の時の事情は其頃「時事」にゐた「朝日」の土屋元作君、「毎日」にゐた横山源之助君、「讀賣」にゐた今の「實業之日本」社の增田義一君などが其の取消運動に盡力して呉れたので能く知つてゐる筈だ。前年物故した古河老川君が病餘の筆を呵して、中央公論の紙上で「新聞の三面記者」を罵つたのも、此の時の事で、之は收めて老川遺稿の中に在る、

斯ういふ目に遭つたとのあればこそ、妻は時子の事情を氣の毒がつて、是非何とかして助けてやれと僕に忠告したのである。

話頭は飛でもない横道に入つた。

六、密會

のろい話だが、僕は家内に激勵されて、其の日直ぐ葭町の或る料理屋へ出かけて、時子を呼びにやつた。僕に毛頭後めたい所はないが、場所が場所なら、相手も相手であるだけに、つまらぬ嫌疑を蒙つて痛くもない腹を探らるゝのは厭だ。夫が厭さに、日のてか〱と照る眞晝間を撰んで、鮨と茶ばかり飲んで、酒も飲まず物も食はなかつた。――僕等がひそ〱と話してゐる中、廊下を通りかゝつた此處の女中が、閉切つた小さな室の中に男女の聲がするのを怪んで、朋輩に耳打すると、僕と時子だといふを聞いて、『夫ては問題にならないわねえ』と言つて、二人て笑つたさうな。之は後で聞いた話だが、僕は之を聞いて、頗る意を強うした。自ら省みて疚しからずんば、中夜酒を酌み交はしながら話した所が何あらうか。僕は今更用心ならぬ用心を重ねた愚を恥ぢた。思へば僕もまだ〱修行が足らぬ。

時子が此の日の物語は山鳥の尾のしだり尾の夫は〱長々しいものであつた。今一々之を書き立てる暇もないし、あつた所て大方は忘れて了つた。唯其の中耳に止つた節々だけを摘んで見ると、先づ斯うだ。

時子は岐阜だか大垣だかの士族の娘であつたが、家の貧苦を助けんが爲とて、幼い時分に身を賣られた。東京へ賣られたのだか、初め名古屋へ賣られて更に東京へ賣り飛ばされたのだか、僕は今何方とも記憶せぬ。何れにしても格別の大事ぢやない。

間もなく半玉となつて顯はれたが、生來利かぬ氣の彼は、幼な心にも飽迄意地を立て通して、一生連れ添ふ見込のある男ならば知らぬこと、其の外にとつては、斷じて男は持つまいと心を決めた。自分ではさう心を定めたが、抱主は中々承知せぬ。威し賺しつ、樣々に說き立てる。此方は頑として應ぜぬ。之が爲に結局平和が破れて、外の抱主へ轉じたことも一二度あるさうな。

辛かつたのは之ばかりでない。自分はたとひ男を持たずとも、稼げる丈は稼いで見せるといふ積で、お稽古も勉强すれば、お座敷も勉强する、男嫌といふのが追々に賣物になつて、藝妓風情の一寸出入し惡い高貴の方々へも屢々招かれることになる。夫や此やで抱主の方は追々我を折つて、時子は到底普通の藝の妓やうに操を賣らせることの出來ぬものと諦らめて了つたが、さて今度は朋輩の方から苛めぬかれることとなつた。一つ家に居ながら丸て他人同樣、打解けて語り合ふこともないのは愚か、朋輩相集つてはあてこすりに樣々のことを言ふ。あてこすりの果は忌味となり、惡口となり、時子さんは餘所て宅の妓を不見轉許りと罵つたとか、時子は宜い衆の所へ出入するのを鼻に掛けて、人を人とも思はぬとか、夫は／＼散々の惡たいをつく。之が爲めにお座敷から歸つて、其のまゝ衣物も着かへず、夜一夜泣き明したことが幾度あるか知れぬといふ。――成程、十五六の幼い身の上て、遠く兩親とは離れて、杖柱と賴む抱主や朋輩から斯う苛められたのでは、泣き明したのも無理はないと、僕は思つた。

併し、世の中は妙なもので、遊冶郎許りの集まる花柳の巷にも、時子の憐むべき境遇に與個の同情を寄せる者が續々出て來て、時子は非常に賣れ出した。中にも時子保護會といふのを組織して、月々幾何

の金を出し合つて、飽迄時子の素志を貫徹させやうとした義俠心のある人々迄願はれた。而して其の所謂保護會なるもの丶會員はと聞いて見ると、會長を初め、孰も知名の人ばかり。僕はまんざら其の名を記えてゐぬでもないが、之を公にしては、折角の厚意を無にする恐があるから之も姑らく差控へて置く。

斯くて此の日の物語は長々しい身の上話から始つて、昨夜の電話で頼まれたことに語り及び、最後に、迚も此の調子では長く今の勤も出來まいから、新聞事件の明りを立てた後は一時も早く自前になりたいといふことで結んだ。尤も自前となるには、金も要れば、抱主との談判も中々骨が折れさうだから、愈々之もいけぬと定れば、寧そ田舍へ引込んで、舊藩主の御殿へ女中にでも置いて貰はうかと思つてゐるとのことであつた。

七、同意

其の夜丁度新佛敎徒同志會の例會が一つ橋の學士會で開かれたので、僕は其の席上で、昨夜以來の事情を落なく一同に物語りて、さて斯いふ時に、何な態度を取るのが最も我々に似つかはしい處置であるかを諮つた。其の時境野黃洋田中治六高島米峯融道玄の諸兄を初め、居合せた一同孰も熱心に僕の話を聽いて呉れて、孰も誠實に時子の境遇の憐むべきに同意したが、中にも加藤咄堂君は最も熱心に打ち込んで、「そら君、是非何とかしてやるが宜いな」と、例の皺枯聲で僕に勸めた。

八、探訪

此處迄の僕の行動は、天晴れ婦人敬愛の爲に名利を棄てた中世騎士の俤を存したが、之から先は頗るまづかつた。

時子から頼まれたとは、早速係の方に頼んで取り調べさせたが、何うしても分らぬ。元來何處の新聞社でも原稿の出所は一切秘密に附することになつてゐるから、之が朝日新聞社に出たものであつたら、一も二もなく初から斷るのであつた。唯今度の〇〇新聞は夫ほど堅くるしくはあるまいと考へて、探訪に手を盡して見たが、中々さう容易くは行かぬ。やつと二週間程かゝつて、初めて大凡そ材料の出所と執筆者の名とが分つたので、取り敢へず其の出先方へ報せておいた。

先方からは禮狀に添へて、出來るなら僕の報せた出所の今一つ先を探つて見て呉れぬかとの頼であつたが、其の頃僕は非常に忙しかつたので、つい〳〵其のまゝになつて仕舞つた。

九、和解

夫から二月か三月經て後、日本鐵道會社の創立記念祝賀會か何かで、歌舞伎座へ出掛けた所、丁度折ふし其の接待役に雇はれて來てゐた時子と、ぱつたり出逢つた。

大勢の前とて委しい話も聞かなかつたが、其の後色々手を盡して、材料の出處が何處かの女中であるのをつきとめたこと、其の女中は今もう其處に居ないこと、夫から執筆者といふ某新聞の記者にも逢つたことなどを語つて、最後に「お母さん（主婦のこと）の機嫌も直つて、今は無事に勤めて居る」とのことを

附け加へた。

是も全く郷の御蔭だとて、頻に禮を言つた後、菓子やら果物やら煙草やら辨當やら酒やらを盛に何處からか仕入れて來て、くす〳〵笑ひながら持つて來て呉れた。『君でも知つた藝妓があるのかい』とて、僕はさん〴〵同行の友人に冷された位である。

十、失蹤

歌舞伎座で逢つた以來、夫れ切り僕は時子と會はなかつた。

僕は其年の夏に朝鮮から滿洲の方へ出かけ、秋には長い間病氣をして、夫が治ると直ぐ京都邊へ遊びに行つたので、夫や此やで、時子の噂も久しく耳にしなかつたが、其の冬になつて、初めて時子が此の夏以來脫走して、何處へ行つたか行方が知れぬといふことを聞いた。

女中に聞いても、明瞭に尋ねても、誰れ一人慥に知つた者はなかつた。其の中樣々の風評があつて、抱主と喧嘩して田舍へ歸つたといふもある、東京の何處とかに隱れてゐるといふもある、亞米利加へ行つたさうなといふもあれば、濱町とかで餘り立派でない身扮をして、髮も亂れた儘、青い顏で步いてゐるを見たといふ者もあつた。

兎角する中、明治四十年は暮れて了つた。

十一、邂逅

明治四十一年の一月某の日の朝、ひよつくりと僕は新橋博品館の前で時子に邂逅した。僕の姿を見るなり寄つて來て、色々話があるから是非聞いて呉れといふ。見れば、ぢみな絲織か何かの衣物を着て、髮は庇髮にしてある。何しても女學生上りの奥様としか見えぬ。之ならば大丈夫といふので、僕はぶら〳〵と銀座を歩きながら、其の所謂色々な話なるものを聞いた。

脫走したこと、病氣したこと、困つたこと、哀しかつたこと、成程色々あつた。結局前の抱主と手を切つて、愈々近日自前で出る積りであること、名も元の通り時子のまゝでおくから、何か時々呼んで呉れといふとてあつた。

僕が藝妓と銀座通りをぶらついたといふのを聞いて、『君は危ないことをするにも程がある、人に見つかつたら何する』と忠告して呉れた友人があつた。僕は此の友人よりも慥に修行が進んでゐると思つた。

十二、自　前

其の頃から僕の身は急に忙しくなつた。ジエームス、タウンの萬國博覽會が開ける。筑波千歳が遣米艦隊として出發することになる。之には黑木大將も行かるゝといふ。一方には、伏見宮殿下が遣英大使として倫敦へ向はせられるといふ。山本西の兩大將が宮殿下を追うて、巴里へ向ふことゝなる。一月から二月へかけて、僕の受持の方面は目の回るほど忙しくなつた。而して遂に僕までが社の特派員として、倫敦へ出張することとなつて了つた。時子が果して自前で出たか何か、そんなことを尋ねるどころでなかつた。

僕は三月五日東京を發して、歐羅巴の國々を遍歴つた後、六月の中頃に敦賀へ歸つた。敦賀から大阪の本社に寄つて、其の次手に父上の墓詣にとて、故郷の和歌山へ歸つたが、思ひもかけず、此處で初めて、博品館の前以來消息を知らなかつた時子の消息が分つた。といふのは僕が時子と初めて會つた時、代議士連と同席した故郷の友人が、此の春上京して之に出逢つたといふのである。時子が今は立派な自前で出て、而も大變な流行兒となつてゐる由を此處で聞いた時は、僕も何だか重荷を下した様な心地がして、胸撫で下した。人間は妙な所に力瘤を入れるものだと、僕は我ながら可笑しかつた。

十三、再會

今年の正月、例の鼓町の料理屋で、僕は年始歸りに立ち寄つて、晝餐を喫めてゐると、丁度隣の座敷に來合せてゐた時子が、挨拶にとてやつて來た。久しぶりの面會である。

彼が自前になる前後の痛かつた悲しかつた事情を、事も細やかにしんみりと物語つた後、何と思つたか、突然「妾もう一生藝妓する積に定めてよ」と言ひ出した。

僕は大賛成を表した。一體世の中に藝妓ほど命の短いものはない。之が流行兒になるほど尙以て短かい。少し顔馴染になると早くも落籍されるか、廢業するか、轉籍して居なくなる。若し一年二年丸で此の類の席に出るとがなかつたら、今度行つて見た時もう半分は知らない顔になつてゐる。夫れ婦女子を玩弄物同様に玩んで、昨夜は百年の契を盟ひながら今朝既に弊履の如く棄てゝ顧みず、今日比翼連理

を口にして他が操を破りおきながら、明日會すればはや行路の人にも似たる、世の所謂嫖客の類ならば、朝々暮々相手を代へて巫山戯まはる所に面白い所があるのかも知れぬ。併しさういふ「男らしい」ヿの出來ぬ僕などに取つては、藝妓を罪のない無邪氣な話相手として殆ど友達と同じやうに心得てゐるので、之が束の間に入れ代り立ち代るのは甚だ興の覺めるものである。偶ま十年二十年と勤めた老妓もないではないが、此等は多く道樂三昧を仕盡して後、もう早や藝妓以外に一頭地を拔くことの出來ぬ輩ばかりである。斯な奴を相手にした所が面白いものでも何でもない。だから然るべき女の、藝妓商賣を一種の藝術と心得て、終生を之に投ずる者の出て來らんとは、僕が豫て希望する所であつた。此の意味を以て、僕は大賛成を表したのである。

賛成と同時に、僕は時子に向つて結婚を勸めた。男にもせよ女にもせよ、獨身などいふ不自然なヿで一生を送る者は、考が僻んで常識が缺けて來る。隨つて身の治りもつかず、心の中に始終希望といふものがない。朝に吳人を迎へ、夕に越人を送る底のヿは、無論女の最も恥づべきヿであるが、正當なものと正當に結婚せするなら誰れ苦情をいふものでない。夫も今日迄操を賣るヿに依つてのみ名をなした、あり來りの現代の醜業婦者流ならば、或は結婚に依つて人氣を落すといふヿもあらうが、此の點に於ては、堅い女と評判を取つた時子などに、毛頭其の方の心配はいるまい。愈々結婚するヿならば、望むらくは如何はしい藝人風情を夫にせずして、歴とした紳士に連れ添ひ、家內が一生文字通りの藝妓を勸むる由を合點させた上。此處に夫となり妻となつて、堂々たる中流の家庭を形つくれと僕は勸めた。

笑ふことゝ知れ、是は僕が年來の持論てある。此の持論に、僕は西洋の女優やら音樂家やらの例を引き加へて、滔々數百言、本氣になつて辯し立てた。すると初の程は笑ひながら半ば馬鹿にして聽いてゐた時子が、段々熱心に聞き入つて來て、到頭僕の長談議が終つた頃になつて、彼は潸然と泣き出した。

成程理由を聞けば泣くだけのとはある、

十四、意中

時子は此の日初めて、其の胸中の秘密を打ち明けた。僕は今此に其の打明けられた秘密を悉くさらけ出すほどの冷酷な心は持たぬが、僕は唯此の物語の結末をつくる爲に、手短く其の概略を述へる。

時子には、相思の中なる人があつた。時子がまだ半玉の頃互に思ひ思はれて、深く言ひ交したのてあつたが、相手は親がゝりの若い身空で藝妓風情にかゝづらつては、行末が案じられるといふ親類一同の意見で、留學といふ名の下に倫敦へ追ひやられた。相分れてより此に十有餘年、双方の身の爲にならぬといふので、双方ともに手紙の取り遣りも何もせぬ。斯ういふとにかけては、根が賢しい女のとて、時子は思ひ切りよく、一切手紙のやりとりはせぬが、併し時子の思は、十年一日の如く、忘れもせねば、衰へもしないのてある。

時子の思は夫だが、相手は何思つてゐるだらうかといふと、之が亦面白い。相手といふは、さる大家の方とばかりて、時子は其の名を言はなかつたが、之が時子と分れて倫敦へ行く前に、兩親とも相談の上て、

踏朝の上は必ず時子を妻にするとの約束で出かけた。兩親も承知である、兄弟も承知である上のことゝて、時子は屢々此の家へ出入するが、兩親も兄弟も物優しい方ばかりで、時子々々と宅の者の樣にして與れる。時子が失踪して落魄を極めた時などは、弟の學資が困るだらうとて、態々人傳に金を屆けさせたことさへある。時子の氣象を飲み込んでゐる兩親のことだから、夫と明らさまに言つては受取るまいとて、人から人を傳つて渡さうとしたが、夫と悟つて、時子は斷乎として斷つたといふ。大家のことて、時々此の家で大宴會の催さるゝ時などは、時子も藝妓として招かれることがある。世間體を憚つて、表向には藝妓で通つて行くが、陰では娘のやうな扱を受けるのださうな

時子は相手が身分のある人といふので、行末を慮つて飽迄も品行を愼み、只管其の名を傷づけざらんことを心がけてゐる。遠方にゐる相手の男に事を誤らせまいと思ふ許りに、我と我が心を制して、音信一つせずにゐる。何もかも男の身の爲に宜かれかしと、一心に其れ許り心掛けてゐるが、段々男の家に出入しては、其の兩親やら兄弟やらに優しくして貰つて見ると、此の家の家庭が段々分つて來て、何やら自分などが、此の中へ割り込んで行くのは身分知らずのやうに見えて、却つて我が思ふ男と其の男の家に不幸の種を蒔くのであるまいかといふやうなことに考へついた。『夫から色々考へましてね、つまり何しても妾の方から引くのが、一番先樣の爲になることだと思つて來たのですよ』と言つて、彼は涙を拭いた。

時子は斯いふ譯で寧そ一生藝妓で推し通さうと決定したのである。僕の結婚論は之が爲に頗る平凡なものになつて了つたが、お蔭で此の物語は大分小說めいて來た。

十五、先様

時子は其の名を言はなかつたが、僕の方では商賣だけにいくらも探り出す便宜がある。事の次手に夫となく探りを入れて見ると、果して直ぐ相手の男の何者たるかは分つた。成程、相手の迷惑を思つて時子が之を隱したのも無理はない。僕が此處に其の名を打明けたら、恐らく讀者の中で之を聞き知つて居らぬ人はない位の人だ。之を知つた僕は、時子が相手の身の爲を思つて、自ら身を退けやうとした心掛の藝妓らしからぬに驚いた。

併し其の所謂相手の名は、堅く僕の胸中に秘しておく。

十六、奇遇

夫から二月經つて、僕は又もや亞米利加から歐羅巴へ廻ることになつた。

其の旅行中、五月の某の日某の刻に倫敦の某の所で、僕は其の名をのみ聞いてゐた時子が意中の人に逢つた。逢ひは逢つたが、言葉を交はす間もなければ、名乘り合ふ折もなかつた。時子が消息を傳へて、共々に此の不幸なる可憐の少女の爲に涙を注ぐの機會は、無論なかつたのである。

十七、結末

日本に歸つて後人の噂を聞けば、時子は次第々々に人氣を加へて、其の流行るとは何人も驚く計り、何でも一週間前ばかり前からかけておかねば、迚もお座敷が出來ぬといふ位のすばしらい勢ださうだ。繁閑常なき僕等が職業とて、そんなに前々からの約束は無論出來ず、偶ま思ひ出して呼びにやつても、約束やら遠出やらで、曾て一たびも逢ふ折がない。何てそんなに流行るのかと聞けば、『そりやア顏にも發にも出りませうが、第一は堅いといふのでお客樣が安心してお呼びなさるからですよ。』とみな〳〵言ふ。僕は逢はなくとも、斯う聞くと嬉しかつた。

嗚呼暗黑と見えた花柳の巷にだに、其處に一道の光明は炳乎としてきらめいてゐる。

（明治四十一年十二月六日稿）

附記

事實は此處に掲げたよりも悲慘なものであるが、關係者の迷惑を慮つて、餘程手心を用ひてある。篇中の地名を盡く變へたのも畢竟は此の意に基づく。又此の事件には更に一層悲慘な後日譚といふやうなものがあるが、正月早々の悲劇も如何と思つて、之は他日に讓るととした。

（完）

人相談片

大町桂月

豐頰、曲眉、明眸、皓齒とは、古來支那にて、美人を形容する慣用語也。げに、美人の要點を捉へ得たるもの哉。

目口が揃ひたりとて、美人とは云ふべからず。心の美と相待つて、始めて美人也。豐頰は、心の美をあらはす一の標象也。美人は豐頰ならざるべからず。うれしき時は、何人も頰に微波を生ず。心に邪氣なくして常にうれしく思ひ居れば、頰は、自然に豐かになるべし。男も女も幼少の時は、必ずみな豐頰也。長じて邪氣が出來、慾氣が深くなり、野心萠し、功名心もゆるやうになれば、男は、頰多く殺ぐ。我國の古の繪を見るに、男も女も、みな豐頰也。お多福式を美としたりし也。其心必ず美也。頰殺げて、頰骨が張れば、醜となる。女なら、悍婦的也。學問の出來る女、藝能に長ずる女、獨立して事業をなす女などは、多く頰骨張る。美人の資格なく、且つ家婦として不適當也。古今才媛の中にて、和泉式部は、豐頰の美人なるべし。紫式部は、豐頰にはあらざるべし。さりとて、頰骨は張り居らざるべし。清少納言は少し頰骨が張り居りしなるべし。なほ常盤御前、淀君は、豐頰の美人也。政子は、頰骨が張らずとも、必ず高かるべし。明治の世、奧村女史は、頰骨が張りしなるべし。下田女史は、圓滿なる處あり、其器大也。豐頰なるべし。

男は、自我の發展が急なれば、頰骨張る、若しくは高し。乃木大將の如きは、頰骨高かるべし。昔なら、必ずや、武藝の達人として成功すべし。大山大將の顏は、明治の人物中、最も偉大なるもの也。其姓の如く其顏も大山也。乃木大將を妙義山とすれば、大山大將は赤城山也。日本人は一般に島國的にして、其顏も妙義的也。頰骨怒る。支那人は、大陸的なり。頰骨張らず、また高からず。支那には、古來、大人物多し。今とても、多し。日本人は國民として偉大也。個人としては、支那人に比して、器が小也。

物は、必ず二面を有す。天あれば地あり、上あれば下あり、陽あれば陰あり、晝あれば夜あるが如し。豊頬は、心の美をあらはせども、また、動物性をあらはす。人も幼少の頃は、食慾の外には、他の慾なく、精神上の發達動物の域をさること遠からざるが故に豊頬也。長じても、食慾、色慾、金慾の外に、何もなき人は、多く豊頬也。實業家、金のある議員連中に多し豊頬は物質上の人にして、殺頬は、精神上の人なりと云ひて可也。又氣のゆたかなる人は、自然に頬がゆたかになり、心ゆたかならざるものは、頬も豊かならず頬の豊瘠のみを見て、一概に人を判すべからず。今の文士で言へば、夏目嗽石、坪内逍遙の如きは、頬そげて、頬骨高し。乃木式也。必ず一藝に達するの相也。

豊頬を俗語に言ひくだけは、下ぶくれ也。明眸は、ぱッちりしたる眼也。黒目は、はつきりと黒く、白目ははつきりと白く、全體が圓味を帶びたる眼也。かゝる眼を有する人は、快闊にして、話相手には面白し。藝者などは、明眸がよし。されど、思慮分別は足らず。楊貴妃は明眸なるべく、今少し目が細長からば、馬嵬坡下の横死は無かるべし。淀君も明眸なるべく、今少し目が細長からば、大阪は落城せざるべし。動物を見ても、わかること也。魚や鳥は、目が規則正しく丸し進んで四足になれば、やゝ横に長し。人となれば、益長きもの也。幼少の時は、何人も圓くぱつちりしたるもの也。鳳眼は、聖賢的也。横に甚しく長き也。象の如き目付をせる人も、必ず賢也。西郷隆盛の銅像を見るに、其眼は、明眸的也。智慮の人には非ず。されど書を讀んで大義に通す。智惠以上の智惠あり。殊に其眼に威力あり。堂々たる大丈夫の相也。衆を恃むものは、或は西郷の如き人を愚と云ふべけれど、元來、智は、必ずしも大なるものに非ず。智以上の智といふことを解せざるべからず。圓にもあらず、長にもあらず一種三角形をなせる眼は、陰毒の相也。

曲眉とは、俗に所謂地藏眉也、蛾眉とも云ふ。樂しき家庭に兄弟むつまじく育ちたる人は眉とゝのひ、親子兄弟の緣うすき人は、眉亂る。眉うすく、眉と眉と

の間ひろき人は、膽力あり。古より濃髪の宰相なしと云へり。疎髯疎髮が大人物の相也。伊藤公これ也。井上侯の如きは、濃髪也。因業爺と云ふものは多くこれ也。

齒の白きは、胃の健をあらはし、一面に肺の弱をあらはす。とにかくに美也。齒は小を尚ふ。大なれば、智なし。短を尚ぶ、長ければ、怯懦也。數は多きほどよし。三十二枚に足らざる人は、普通以上の智なきものと自覺すべし。出齒なれば、氣つよし、もしくは、むき出しにて遠慮せぬ性分也。近時出齒式の語流行す猪の牙の如きも、一種の出齒也。源義經は出齒なりと云へり。梶原景時の冷かしゝが如く猪將軍也、戰場に立たせれば、好將軍なれど、人心を得るの名將にはなれざるべし。

帝都の新聞經營者（一）

黑頭巾

其一

●『夕刊は一錢』『夕刊は一錢』『報導機敏の報知は一錢』面白、可笑しき書生節の立賣の聲は十字街頭に滿つ。

●報知新聞の夕刊は、薄暮の雲と共に、帝都を占領す。是れ報知の成功なり。

●報知と萬朝とは、帝都に於て、發行部數の最も多き新聞なりと聞けり。

●吾輩の知る所を以てすれば、中等社會の人士の、朝、のポッケットを占有するものは、萬朝にして、夕には報知なり。

●一日の中にして、新聞の榮枯盛衰は、飛鳥川の淵と變はる。

●新聞は朝から晩まで讀者の手を離れずとも、其は新聞の成功に非ず。

◉長時間に渉りて新聞を讀む者は閑人也。太き線の遠視眼鏡を掛けて、新聞を炬燵の上に載せて、熟讀玩味する者は、最も長く一新聞を手にするものなれども、此如人を相手にして新聞を作る譯には、ゆかざるべし。

●新聞は祇王、祇女と異なり、一朝、棄捐せられて更に恨無きもの也。

◉新聞は秋の團扇と一般、投げ棄てらるゝは其の天職なり。唯だ背て、一たび人の手に觸るれば則ち能事畢れる也。

◉新聞は　美女の夜會に臨むが如し。成可く多數の視線を吸收せんことを要す。

◉待ッテ、待ッテ、待ち兼ねられて、鳥渡見て、鳥渡棄てられ、毎日此の如くにして、年を渉りて、其の命の益新なるに至らば、新聞として成功に近し。

●何角の事は暫らく措き、此點に於て、萬朝と報知とは、成功せる帝都の二新聞也。

其二

◉電車の中にても讀み易きは四頁の新聞に限るべし。滿員の時、片手は革に握まりながら、片手以て開きて讀むべきは萬朝報也。

●啻に此の點のみならず、萬朝報は、重寶の新聞たるを失はず。

●若し寢轉んで讀むとすれば、六頁の新聞は不適當也。彼の附錄なるもの薄きが爲めに光線を透せばなり。

◉六頁は、寸鐵の味無し。而して廣大豐富の觀を具へんには、則ち紙面足らず。

◉吾輩を以て見れば、六頁は帶と襷との中間に彷徨するものならずんばあらず。

◉現に多く賣れる新聞は、四頁にあらざれば、則ち八頁もの也。六頁の新聞にして大當りを占むるものはあらず。

●而して時事の十二頁に至つては、材料、總身にまわり兼ぬるの觀無くんばあらず。

◉時事にあるだけの、大概の事は、小サキ萬朝にもあり。通般の意味よりすれば、時事は必ずしも大新聞に

あらず。
●忙しき世の中には、手取早きが善かるべし。簡明といふは、現代の讀者が新聞に要求するの聲也。

其三

●新聞は商品なれば、人情に投合するの外に、一箇の機軸無ければ、賣行かざるもの也。
●特徴あるの新聞は、兎も角も賣れるもの也。保守の旗印を取替へたる「日本」が更に振はざるを見よ。
●「日本」の如きは、モト〳〵三面で賣り込んだる新聞にあらず。其の本領は頑固なる社說にあり。
●「日本」は伊藤欽亮の經營に依て、有福にはなりたるならん。然ども陸。三宅諸人の去ると共に、「日本」も亦た新聞史より去りたる也。
●發展は可也、變更は不可也。新聞は、其の本領に於て、永遠的商標無かる可らず。
●其の本領を沒却して漫に發展を望むは、家鴨が雁飛を企つるが如し。其の將來や、「水鳥の陸にさまよふ」の悲境に沈淪せずんばあらざる可き也。
●其の時に至つて、露の干ぬ間を照らす日かげの無情を喞つてとあらんとも、其は甚だ遲し。一たび萎める朝顔は、ハラ〳〵の雨に蘇生せんこと難かる可き也。
●吾輩は此見地よりして、新聞經營者が、命に掛けて其の本領を擁護せんことを望む。
●本領を擁護せずんば讀者の同情は得られず。本領を擁護するは、自ら老舖となる所以也。
●現今、帝都の新聞紙中、「籤引」を標傍せざる新聞は、既に老舖の域にある新聞也。
●「籤引」に依て、紙數の暴增を贏ち得るは、經營者自ら其の帳簿を欺くものにして、畢竟するに、讀者よりも、寧ろ株主に對する經營ならずんばあらず。
●然りと雖も、資本主にして、一概に、資金の回收、金利の加減に熱中するに於ては、經營者亦自ら籤引の窮策に出でざるを得ざるの苦衷もあらん。
●元來、籤引は賞めた話に非ず。經營者の度胸の大ならざることを示すに過ぎず。

●「籤引」て賣るといふことになれば、編輯は第二に落ちざるを得ず。

●「籤引」は多數の記者の發達を阻害す。「籤引」は好材料を編輯局に吸收せず。「籤引」で賣ることになれば、記者働くの必要無ければ也。

●極端に之を言へば、「籤引」て持ち切る上は、才幹ある記者を一人も要することと無し。

●二三の文筆ある老人と、給仕とにて、通信の材料を編纂するも新聞は、其の賣高を減ぜざるべし。

●既に「籤引」に心を傾くるの經營者にして、尙ほ記者の增聘に腐心することあらば、自家矛盾といふの外あらず。

其 四

●其人を見ずと雖も、新聞を讀めば、則ち其の經營者を想像するに餘あり。

●吾輩が新聞經營者を月旦するは、專ら這般の見地よりして來る。

●吾輩は、實に未だ新聞經營者の多くを知らず。一たびも之を見たることとすら無き者多し。

●近ごろ吾輩、夜の電車に於て、偶々朝比奈知泉を見る。

●衰へたる哉碌堂。一枝の筆を驅りて政海を攪亂したる面影今安んか在る。

●全盛時の光は、彼の面上に留まらず。彼の風采は、香の失せたる美酒ならずんばあらず。

●然りと雖も其の體度、其の洋服の好み。縁の狹くして柔かなる小さき米利堅帽、其の鬚ムシヤ〳〵の顏に、眉深く掛りて、何となく昔時の精悍兒を偲ばしむ。

●吾輩は、彼に對する十五分の間に、東京日日新聞の全盛時を、其の面上に書き出して、はか無き回憶に耽りたり。

●先般、加藤高明の駐英大使となるや、彼が東京日々を如何に處理すべきは、世人の注意する所たり。

●而して讓受申込者非常に多かりしが、碌堂は加藤在外中の管理者たらんことを申込めり。

●加藤は朝比奈に應ずるの意あらず。而して中間に周

旋する者、「書加歐」の報告を爲す。

●碌堂は、自ら東京日々の社長になり濟ましたる氣になり、都下新聞亦た往々、朝比奈の日報社に入るを豫報するものありき。

●當年の横着者にして、此の如く眼の光らざるに至れるを聞き、吾輩は寧ろ朝比奈知泉の衰を悲まずんばあらざる也。

其五

●吾輩は、朝比奈を吊するに依て、又た併せて東京日々の衰を悲しむ。

●東京日々を窮地に陷れたる者は、現持主、加藤高明ならずんばあらず。

●加藤の聰明にして、尚ほ新聞を以て商品とするの眼無く、之を以て、一種の論文代用、或は宣言書代用視したるは、近年の難境に自ら陷れる所以也。

●新聞は敎科書にあらず、宣言書にもあらず、商品也。東京日々は商品として見るときは、人に好かるべき要素を缺如す。

●東京日々を以て日本の「タイムス」たらしめんとするは、加藤の理想なりと聞く。

●然れども彼は、萬金を擲ちて、理想の新聞を作るほどの勇氣を有せず。月々積もる損失に、胸を痛めて、理想以外に、俗受の、材料を掲載せしむるに至る。

●これを以て、或は講談或は小説を載すと雖も、愛嬌は、其部分に局限せられて、全面は陰欝の氣を帯ぶ。

●吾輩嘗て謂ふ、「東京日々」の愛嬌は、老女の化粧せるにも似たり。

●老女の愛嬌は、單に其の粉紅の部分にのみあり。秋波一閃すれば、却て萬人に嫌やがらる。

●少婦の美といふは、其の顔面にのみ存するにあらず、之を後ろより見るも、楚々として、何處となく愛嬌は磅礴す。

●蓋し花の顔に、青春の血を盛るが故に、生々の氣自ら匂ひ溢るゝものにあらずや。

●加藤の新聞眼を以て、持主たる間は、如何に才幹ある主筆を招くとも、新聞は依然として老女の愁容を脱

するの期無からん。
●千頭清臣が加藤の不在中を預るは、寧ろ「東京日々」の爲に慶すべき也。
●加藤は、多數の讓受申込者を悉く謝絶したるが、吾曹は思ふに、此の申込者の中には、唯に新聞事業に心あるもの丶外、或勢力を代表する者も亦一二これ有りしを疑はず。
●而して加藤は留主預人の人選には、少からず苦心したるの結果、遂に岩崎に因縁淺からざる千頭を拉し來れる也。
●千頭は、元と岩崎の佳壻に擬せられたる者、故あり謝して加藤を薦めたる好漢也。
●憶ふに、千頭は寛宏にして、英雄崇拜の氣あり。其の部下をして手腕を奮はしむるの妙に至つては、蓋し加藤以上なるべし。
●而して加藤は、かくまで苦辛しても尚ほ「東京日々」を手離すに忍びざるの心情に至つては、注意すべき一現象たらずんばあらず。

其六

●加藤に對照して、キビ〱として小氣味善かるべく想像さるゝは黑岩周六也。
●吾曹は、未だ嘗て黑岩と語りたることあらず。然れども其の文を讀み、其人を想像するのみ也。
●吾曹嘗て、文祿會の出品を觀んとして、三越樓上に至る。
●文士數人、卓を環りて座す。傍人竊かに指していふ、彼のメリヤスのシャツの如き細き洋服の痩男は野口米二郎也。彼の著流しの、親方然たるは黑岩周六也。
●而して此二人者未だ禮意を交換せず。著流しは微笑して、メリヤスに言ふ「野口サン、暫らくです」
●メリヤスは、縮れたる頭髮を、小指に撫で上げて答ふ「何誰ですか」「黑岩です」「ツイお見それ申しまして」
●如何に若いとはいへ、何たる不覺ぞや。彼は嘗て、黑岩と同席したることある筈也、而して彼程の剛の者を見忘るゝこと沙汰の限也。

●聞く、此時、黒岩は其の最員力士荒岩の化粧廻しの注文の爲に來れるなりと。
●黒岩が現今の東方に黨することも亦甚だしといふべし。而して荒岩に向つて尤も同情を傾注す。
●黒岩が荒岩に同情するは、其趣味を告白する所以、而して亦彼が萬朝を經營するの態度を告白する所以也。

桂侯論

現代人物評論（十二）

若し本名を出せば諸種の事情よりして思ふ存分、桂侯を論じ難き地位にある人あり。冷眼子、局外人、靜觀居主人等皆令名嘖々たる現代第一流の政治家又は論客なるも右の如き理由よりして本社は嚴に匿名の秘密を守り、充分正直に侯に對する評論を聞かことを求めたり。讀者之を諒せよ。（編者しるす）

△桂侯論

冷眼子

大體からいへば、桂といふ人は八面玲瓏な、氣の利いた人である。殊に今日の世の中に仕事をするには最も適當な性格を持て居る人である。時勢の寵兒である今日の彼の地位はいはゞ成上り者の如きもので、政治界に於ける成金黨である。正當の秩序を踏んで得たるよりも寧ろ投機的に贏ち得たるものである。露西亞との戰爭によつて其地位を固めたのも一種の僥倖といふべく、又いろ〳〵の手段を施して伊藤をダシ拔いてやつたといふやうな經歷もある。然し彼が鈴久などのやうに逆戻りをするか、又は本物になるかといへば、今日の處どうやら本物になりさうに見える。彼一個人の爲めには喜ぶべきことであるが、國家の爲めには慶すべきを見ない。彼の遣り口は總て投機的分子に富んで何だか危險なやうな氣がする。一步を誤れば、國家を難境に陷れて、而かも自分は餘り責任を感じないと云ふ風の所があるやうに疑はれる。彼は若し當世で成功しても後代の模範となるといふやうな點がない。彼は爲さゞる所なしといふ男である。後代の手本となる人はどうしても爲さゞる所あるの人でなければならぬ。

彼は只勝ちさへすればよいのである。如何なる事でもやる。時あつては政黨の買收もやる、破壞もやる。何でもやる。爲さゞる所なしといふのが彼の秘訣である智惠の分量からいつたら桂よりも伊藤公の方が多いだらう。然し伊藤公は爲さゞる所ある人である。だからどこか曇つて居る處があつて桂の如く八面玲瓏とは行かぬ。若し議員を買收すれば勝つといふ段取になる。桂は請度買收をやる、伊藤公はやらぬ。若し支那風に人間を君子と小人の二組に分けたら伊藤公は君子組の方で、桂は如何に成功しても小人組の方である。臨機應變は彼の專賣で、其他には何等の主義も主張もない只其時〳〵に合ふ丈けの仕事をして居る。然しながら今日の如く、主義もなく、節操もなく、只勝ちさへすればよい、成功さへすればよいといふ日本の狀態に於ては桂は最も適任者である。伊藤よりも山縣よりも遙かに適任者である。桂はさういふ男であるから、之を相手にして戰はんとするものには實に相手にしにくい。角力取りなら角力の手で行ける。柔道取りなら柔道の法で行ける。劍術遣ひなら劍術で相手にしたらよい。處が桂になると角力の土俵で柔道をやつたり、甚しきは劍術で不意打を喰はしたりする。只世間が今少し進歩して、これ丈けは立憲國でやれる、其以外はやれないといふ風に目が見えて來て、恰度角力の土俵では角力の手しか用ひられぬ、柔道や劍術の手は許されぬ、若し之を用ひても見物人が之を許さぬといふやうになれば桂も今日の如き藝當は打てないのであるが、何せ今日の見物人は政治上にはそんな事はお構ひなし、手段も選ばず、やり方も問はず、只勝ちさへすれば喝采するといふ風であるから、桂流が最も成功することになり、桂が最も時代の寵兒となるといふ事になるのである。桂が成金黨より本物になりさうなのも全く時代がさういふ風に出來て居るからである。小さな例ではあるが彼は前内閣を組織した時に大いに競馬を獎勵して司法省などを口止めして、馬券を賣弘めた。然るに世間が漸々之を批難するやうになれば知らん顏をして之を禁止し、而して世間が其禁止を賞讃するのを得意

さうにして居る。若し良心のあるものであれば自已が前に奨勵したものを禁止せざるべからざるに至つた事を忸怩とせざるべからざる筈であるのを彼は却て得意として居る風がある。桂の遣り口は總て此の通りであつて、只其時の喝采を得れば夫れて滿足して居る。要するに彼はステーツマンにあらずしてポリチシアンてある。政治家にあらずして政治屋てある。歐米に於ける政治屋の最も惡るい所を悉皆學んて免許皆傳の域に至つたものてある。

（完）

△桂侯を論ず

三宅雪嶺

桂侯は今の所謂成功者の殆んど凡ての資格を具へて居る、世に成功者の名あるは尠くなく、中に尋常に超越したのもあるが、侯の如くすぐれたのは無い、侯は普通に併すことを難しとする二つのものを兼ね備へて居る、即ち主我的なると共に沒我的てある、寧ろ屈我的である、總じて强固なる意志を持つて事を貫かうとするものは大に力を發揮するけれど、敵を作つて想にぬ困難に陷ることが多い、が又た人の意を迎へて如才なく立廻るものは大鼓持として輕蔑される、此二つは兎角離れ易いものである、成功者といはれるものは何程か之を併せて居るやうだが、大に之を併せて居るのは甚だ稀である、伊藤公は八方美人の評があつても、人をして敵意を起さしむるを免れぬ、今は充分な地位を得たので餘り人の機嫌を取るを要せぬから、時として故らに我儘を示し、毀譽褒貶に頓着せぬといふ風を示すが、何時もどれだけか我を示して人に不快を感ぜしめる跡がある、天下英雄在眼中と語つたところが何時もうせぬ、豪傑風だ淡白だとして恕せられることもあるけれど、人は皆な之を恕するものでない、公を取り捲くものは、阿諛便佞に專なるか、左もなくば之を冷やかさうとする傾がある、從つて局に當ると絶えず或る部分から激烈なる攻撃を受けんとする、山縣公は謹み深くて容易に人を怒らしはせぬが、人に用心させ

る方で何となく面白からぬ感じを與へる、事に當つて目立つて失敗することはないにしても、動もすれば反對の爲に苦められる事がある、降つて原敬氏の如きに至つては、往くとして可ならざるなしの有様でありながら、その居る處には常に何程かの敵を招く、忌々しく感せさせる、桂侯は比較的後進の身で破格の昇進をし、已れの名の下に種々大なる事業を成し遂げたが、その割に敵を受ける事が甚だ少い、敵を受けないではないが、その受くるは或る不意の出來事の有る場合であつて、自分で意識する以上、之を和ぐるに何の難きを覺えぬ、能く人を立て人に從ふやうて、而かもその間に已れの思ふ如くするに於て頗る巧である、明治の初めから今日まで殆終それて通し、己を偉く感ぜしめずに而かも偉くなるの術に於て獨歩と稱して可なりである、人の併せ難き二つの資格を兼ぬるといふ事は、天稟といへば天稟である、桂といへは人は偉いと思はぬ、與みし易いと思ふがその今日まで成し來つた所のものを見ると、他の人の到底爲し難きところのものを成して居る、その跡から推せば、どうも偉しとせねばならぬ、若し偉いと見られ居つたならばそれだけ偉くは爲り得なかつたであらう、さういふ事は世間にあるものである、各方面に絶えず何等かの騷ぎのあるのは大抵關係者が自ら偉く見られんとするところに起る、即ち互に自ら偉くならんとして衝突するのである、桂侯も時として自らを偉いやうにするが、妙に之に愛嬌を附ける、人をして忌々しく感ぜしむることが少ない、自ら偉しといふ感じはありながら、人をして偉いとは感ぜしめず、而かもその爲に損を招かずして却つて益を得、實際偉くなつて仕舞ふのである、實に桂侯は何處までも普通のものとして現れて居る、先妻の死んだ時に泣いて已まなかつた、子煩惱である、召使にも優しい、その普通なる所が凡てに現れて居る、家のものは只善き人とのみ思つて居るらしい、他へ出ても亦左樣に思はれて居るらしい、剛く表に現はれて居て、それて何事にも己の得んとするところを得る、軍人としても、政治家としても、株屋の關係者としても、得ん

とする所を得て居る、非難さるべき事をなして非難の爲に損する恐れがある時には直に之を止める、强いて非を通しはせぬ、非を通して利益を得るよりは別に利益を得る道を知つて居る、曾て株屋と關係あつたが、今はどうか分からぬ、有つても前ほど露骨てあるまい實に容易に顚ばぬのてあつて、顚んでも只は起きぬ、又顚びながら人に笑はれることをせぬ、笑はれても之を取返すことが出來る、そして人からは左程巧だと思はれず、自然に然るが如く見える、その邊の兼ね合ひに頗る妙を得て居るやうてある、成功者といへば、侯の如き人物に於て最も能く見得べきもので、之に近いほど成功し易く、之に遠いほど成功し難い、若し人を見て、何故成功せぬかを察するに、侯より異なることの大なる故てあるを知るであらう、侯は實に成功の秘訣を得て居る、其點に於て成功者中の成功者てある、然らば侯は眞の成功者かといふと左樣はいへぬ、所謂成功者なるものの第一といふだけてある、割合に苦勞せず失敗せずして好き位置を占めること侯の如きは多く例がないが、畢竟所謂成功者なるもので終りはせぬか、侯が偉く見られずして偉くなりをる所は稱すべきてあつても、事實に於て偉くない樣になつて居りはせぬか、主我的と沒我的といふよりも主我的と屈我的とを兼ねたる完全なるものてあるけれど、それを兼ね併せて全く中性になる事がありはせぬか、自ら抱負あり、之を實際に施すの術を知りつゝ、漫りに之を現さず、主として先づ人力を利用するから、巧みは則ち巧みだが、眞に何程の力あるかは知れぬ、日英同盟は何人がしたか、日露戰役は何人が決行したか、若し侯の力が與りあるとせば、それは幸に勢に乘つたところに在りはせぬか、何でも只勢に乘つて居るやうてある、戰後切りに積極的政策といふを取りながら、再び內閣を組織するに當て、前の政策を一變し、消極的となした、若し侯にして眞に力あるならば、戰後の事は略ぼ分り居るべき筈、然るに矢鱈に人氣を立てゝ株屋なんかを騷がせた西園寺內閣をして難局に當らしめたなど巧てあるにしても、何分勢に乘つて東に行き西に行くとい

ふ位にしか見えぬ、己れ自らを處するに妙を得て居るけれど、國家を如何するかに就いて眞に眞心を有して居るか如何は疑はしい、眞心はあろうが、どうも充分でなさゝうである、從つて所謂成功者なるものの第一であるが、歴史上に如何に現はれるかは疑問である能く主我的と沒我的とを併せたものには、前に故西鄕侯がある、輪廓に於て桂侯より大て、政務を處することは桂侯に及ばぬ、兎に角明治年間稀に見るの人物である、陸軍にも功があれば、海軍にも功がある、內務にも功がある、農商務にも功がある、文部にさへ功があるといはれて居る、若し總理大臣たるの意志があつたならば早く爲り得たのである、その爲らなんだのは實に自らを處するの巧な所から出て居る、智慮もあり膽力もあり、大事に當るに申分なく、又實に大事に當つたのであるが、歴史上西鄕從道の何なるかは、或は眞價の現れずして了ふかも計られぬ、生きて居る中飛ぶ鳥を落すの勢があつて、死んで後に分らなくなる、元より普通の歴史に傳はるが如きは、大人の意とするところでないにしても、所謂成功者として如何のものであらうか、ナポレオンは主我的であつた、ビスマルクも主我的であつた、その爲に八方に敵を受けた、沒我的の分子に富まなかつた、少くも屈我的でなかつた所は、缺點であると共に、その何事をか成し遂げた所は新に國家社會に寄與したかの樣に見られ、歴史上の大人物として立てられて居るのである、固より人は盡く斯く有らざるべからずといふ事は無い、十人十色で宜い、が桂侯の所謂成功者として殆んど完全なる所は或は桂侯無しといふことに立至りはせぬか、侯にして左樣なことは關する所でないといふならばそれも亦宜い、けれども今日を以て見れば、さしもの成功者も歴史に於てXたるべきであると謂はねばならぬ。(談話筆記)

△桂侯

柏軒生

人には多方面あり、少くも善惡兩方面あり、嚴格に其の全部を評隲せんと欲せば、棺を蓋ふの後を俟たざる可らず、棺を蓋ふ後と雖も、其の評必らずしも定まらず、況んや倶に活ける人にして尚ほ春秋に富めるをや

但し其の善、若くば惡の方面を限定して評論せば、其の人活けるも多く失當ならざらん乎、余は斯く思惟して玆に桂侯を評し、殊に侯の美點のみを擧げんと欲す

侯は攻城野戰に於て、敵の本營を屠り陣を覆へして噍類なからしむる如き、鏖戰を好まず、戰はずして他を屈するか、假令戰ふも其の急所を捉へて之を降す底の將略を用ゆ、譬へば信長家康たらずして、豐氏秀吉たらんことを期するが如し、是れ侯が時として伊藤公と雖も一蹴するの勇氣を蓄へて而して鋒鋩を顯はさず、辛辣なる手段を執らずして、悠容進退する所以なるべし、隨つて動もすれば陰險なりといふが如き誤解を招くことある所以なるべし

侯は一般に山縣公の政治的家督相續人と目せらるゝも、其の資性は寧ろ多く伊藤公に酷似せり、其の動もすれば理を好みて、施設多くは理義を正すに努むること其の一也、列國の大勢に通じて頗ぶる外交上の手腕あること其の二也、常に高處より着眼して區々内政のみに偏せず、世界に於ける日本の地位と天分とを自覺して、毎事之を忘失せざらんと欲すること其の三也、甚だ酷似する餘り、其の容貌に一點雲煙縹緲の處あると共に、酒を好み妓を愛する惡癖までも相似るに至ては、聊か奇とせざることを得ず、但し公の健康絶倫にして而して讀書に淫すると、侯が財政の技能を有して常に自ら得色あるとは、一に有りて一に無き所、僅かに之を異なりとするのみ

山縣公は如何なる場合にも公爵たる品位を維持せざる可らずとして苟くも之を失はざるに努むるが故に謹

殿近く可らずと雖も、伊藤公は心甚だ尊大にして而して磊落自から喜び、興到れば入齒を洗ふて琅々として都々逸を唄ふ、桂侯また往々無頓着の風度を好み、酔へば則ち大趺坐を組みて頭を掉り口を歪めて長唄（或は清元か將た常磐津か）を唄ふ、侯は其の名分地位に於て山縣公の相續人たるも、資質性能に於ては却つて藹然たる伊藤公の相續人なりといふを當れりとす

伊藤公は能く陸奥伯をして其の天縱の奇材を盡さしめたりき、桂侯は能く小村伯をして自由に其の奔放なる手腕を揮はしめ、信頼して曾て危ぶむ色なし、其の交質に水魚の如くして共に酷似の双美たり

桂侯は殊に調和の材能に富めり、或る點よりいへば、統御の特材を有すとも稱すべき乎、其の前に在て山本伯の如き剛岸の奇材と、清浦子の如き機鋒穎脫なる老傑とをして相戻らしめず、今やまた大浦男、後藤男等をして一致事に當らしむ、然かも議論若くば感情の衝突を以て相去るもの全く無く、終始一串能く統一を保てるは、此の點に於て特異と稱せられたる山縣内閣よりも、より以上なるは、全く侯の力量ならずんばあらず、總理大臣として侯の殊に傑出せる一人たることは此の事實に於て、公の敵人と雖も否認せざるべし

侯の幕下には、閣僚たるべき材料多し、思ふに西園寺侯と雖も、否伊藤公と雖も、此の點に於ては頗ぶる侯に讓らざるを得ざるべし、是れ所謂山縣系の特色たるも、然かも侯永く之を失はざるや否や、伊藤公の勢力は汎けれども薄し、彼の絶代の奇才たる伊東己代治子も、今や殆んど公のために爲す所あらざるに似たり、他は乃ち知るべきのみ、侯の理に偏して而して名分を好む、其れ或は竟に伊藤公たらざるや否や、侯今や、實業社會の勢力の偉大なるを視て、之を綜攬せんと欲するが如し、然かも竟に汎くして薄きに至らざるや否や、是れ疑問也、而して其の利害未だ俄かに斷言す可らざるのみ

頃者電車のため密かに賃率引上の認可を侯に内請するものあり、侯曰く「電車會社は明白に僞らざる事實を世間公衆の前に告知し、而して現重役其の責を引き

て一併に辭職すべし、賃率引上を許すや否やは、然る後始めて問題たるべきのみ、世或は余を以て余の親昵者を會社に入れんとすといふも、余には毛頭も斯る意思なし、且つ牢記せよ、鄕等にして若し運動なるものを試み、而して一錢たりとも賄賂的に行使すること一ひ余の耳孕に觸れば、如何なる事情ありとも引上げを許容さるゝことと無からん、余は特に之を斷言し置く」と、侯が常に理義に拘はること斯の如し、侯を以て猛斷闊決、理を顧みずと做すが如きは、恐らくは未だ能く侯を知らざる者ならん、侯は軍人なるが故に、機敏にして果敢なる處あるも、多くの點に於て、實に伊藤公に酷似す、其の理義に偏する最も然り、余は侯に於て敢て斯く觀察す、侯の確評（少くも確評に近きもの）に至つては、今は其の時にあらず、侯は現に活ける人にして、其の公生涯は前途尙ほ頗ぶる遼遠なれば也

△桂の人物を論ず

局外人

桂の人物論は論題としてはなか〳〵面白い方である。但し人物論なるものは概して、昔の人物中、稍々其人の性格に近きもの、若くは他の國の人物中、其位置關係の最も其人のそれに類したるものを引出して、之れと比較して批評するのが一番の捷徑(ちかみち)で、而して多くの人も皆さういふ方法を用ひて居るやうである。否な多くの人は其論題の人物について知る所極めて少きも、それと同地位同性格と思はるゝ昔の人、若くは他國の人を引き來て己れの思想を作るの傾さへある。之れ亦甚だ惡しからず、所謂比較硏究の一法といつてよからう。

今桂について若し昔の人若くは他國の人を引合に出して之を比較せんとするならば、到底歐羅巴のステーツマンを持て來る譯には行かぬ。彼の人物についてヒントを得たいと思ふならば一番手近いのは支那の政治

家である。支那の政治家を知らずして桂を評することは極めて六つかしい。然るに近頃の批評家は歐羅巴の政治家を研究することは多くあつても、支那の政治家を研究するものは少く、隨て桂に對する人物論も正鵠を得て居るものが甚だ稀である。若し歐羅巴に於て其類例を求めんとすれば之をステーツマンに求むること六つかしく、又同時に立憲國に求むること六つかしく、獨逸の宮中に奉仕するミリタリー、コーチーアなどの中に之を求めざるべからずと思ふ。自分は桂を世人が買ふよりも高く買ひ、又世人の見るよりも低く見、短長共に世人よりもよく見て居る積りであるが、總勘定の結果、宋の歴史の蔡京、童貫時代あたりに生れた人と比較すれば最もよく分るだらうと思ふ。

日清戰爭當時桂は名古屋の師團長であつたが、其戰爭の仕方を見れば、彼は決して男將若くは猛將といはるべきものではなかつたが、然し確かに思慮ある將軍て、空しく兵隊を損ずるやうな事をしなかつた。多くの將軍は只敵を攻め、地を略することを主としたが、桂は兵站に氣を附け、被服に氣を附け、又同時に新聞記者によく氣を附け、加ふるに又滿洲には如何なる利益事業あるかに氣を附けた。何れのキャンプに於ても利を漁るものは少くなかつたが、桂の幕中には最も有力なる利權開拓者があつて、少からざる利權を桂よりも與へた。夫れ故に自分は當時より桂は他日將軍としてよりも寧ろ政治に關係する人として名を成す機會があるだらうと思つて居た。果して其通りで彼は今や總理大臣として盛名ある人となつた。然し三つ兒の魂百までもといふ諺や、よくいへば栴檀は二葉より香しといふ言葉がある如く、戰爭に於ける彼のやり方は、矢張同じく政治に於ける彼のやり方である。昔、宋末、明季に於ては宦官なるものは單に宮中の奉仕者たるに止らずして純然たる政治家若くは軍人となつた。漢時代には嘗て白粉をつけ、玉の飾をつけた人は宋末明季に至ては長劍を帯び、美髯を生やした軍人となつて現はれて來た。即ち將軍として名あるものよりも兵權を持た宦官の方が功を奏することが少からざるに至つた。

所謂童貫百萬の大兵を率ゐて遼を攻めた時は其武功赫々たるものであつて、若し彼をして金と戰て敗るゝことゝなからしめば、此の時に於て彼の戰功が岳飛と孰れなるかを論定し得るものがなかつたであらう。昔の君主は俳優侏儒を愛し、淫樂を愛したるが故に宦官は俳優侏儒となつて現はれ、宋末明季の君主は國勢淩夷して祖國恢復の念燃ゆるが如きものありしが故に宦官は國勢恢復の要件たる兵隊を指揮する將軍となつて現はれたのである。現はるゝ所二にして一見甚だ異なるが如きも等しく是れ君主の旨を希ふ者が只形を異にして出てたるものたるに過ぎずして、眼中只己れの榮達あるのみ、毫も國家民人の利福なきに至ては全く同一である。吾輩は桂を以て直ちにこれ童貫也とは斷言しない。然しながら少くとも彼の身體を材料として新たらしき鑄型に入れば童貫を作り得ると思ふ。先づ彼の出身を見よ。彼が獨逸に於て最も注意して學んだ所は、歩兵、散兵、縱陣、圓陣などの外、宮中に於ける侍從武官の勢力である。獨逸に於ては宮中の侍從武官の勢力といふものは支那の宦官と同一であつて、君主大を好むの心に投じて己れの榮達を計るに過ぎぬ輩である。其中て最も傑出したのが北清軍指令官であつたワルデルシー將軍である。ワルデルシー等が宮中に於て如何なることをしたかを語るは殆んど獨逸近世史を論ずるに等しいから茲には略するが、只ビスマルクが蓋世の勢名を以て而して一朝忽然として顚覆したるは畢竟此の徒輩が數年の間隱謀密計を廻らしたる結果なりといへば即ち足れりてある。桂は確かに此等の點に注意し、此邊の呼吸を呑み込んだといふ事であつたが、惡くいへば宦官の勢力を學んだもの、よくいへば武人の政權を學んで來たものである。而して彼が歸て獨逸流の軍隊組織を鼓吹し、川上操六等と相輔けて獨逸流の軍隊組織を實施したことは、彼の功勞として沒すべからざる事である。が然しながら其れと同時に軍人が政治上の事に干渉するの端緒を開きたるものも亦彼たることも又蔽ふべからざる事實である。彼は我國に於ては陸軍大將なるものは天下に一人あつて二人あるべ

からずと思はれたトラヂションを破つて有栖川大將の外に當時中將たりし山縣の功勞を褒め立てゝ之を大將に祭り込み、而して自分は山縣の後釜に据つて自ら中將となつた。今日に於てこそ陸軍大將は殆んど箒で掃くやうに多いが、當時は富士の絶頂の如く一つしかあるべからざるものと思はれた。斯くの如くして彼は有栖川宮と接近し、山縣を籠蓋し、川上と結托し、而して又伊藤に仕ひ、八方に網を掛けて居つた。只當時世人は此網の何物たるかを知らずして居たが、やがて日清戰爭が濟んで、松方内閣となつた時に彼は入閣せんとしたが高島の阻む所となつて志を得ず、さりとて政府は彼に一席を與へねばならぬといふので、彼を臺灣總督に祭り込まうとした、處が此時彼は全力を盡して伊藤に接近して早くも其伊藤に結びつく用意をした。而して臺灣總督を辭して受けず、强ひられても行かず、嚴密にいへば、殆んど官規に觸るゝことをも構はず、とう〳〵應ぜずして其私憤を洩らした。然し彼の豫想したが如く松方内閣は忽ち倒れて伊藤内閣が出來た時に彼は陸軍大臣となつて入閣した。此れ彼が政治上の地歩をつくる第一步であつた。伊藤内閣が倒れて大隈内閣の出來るや彼は依然として止まつて陸軍大臣たり、而して前内閣の遺物たることは即ち彼の勢力を助け、又政黨が口を挾むを得ざる陸軍大臣たることも又彼の勢力を助けた。陸海軍大臣は現役軍人の外なることを得ないといふ制度の立つたのも此時である。而して此大隈内閣の異分子として内より此内閣を壞はすことを計つた一人である。即ち尾崎の共和事件の如きは今日の内務大臣平田東助が閣外にあり、桂は閣内にあつて相共に巧まれたる陰謀の一である。桂が之を直接に知つたといふ事はいへぬが確かに平田派の方から出た狂言の一なることは事實である。見渡す所藩閥の人材凋落して殘る處少ない、山縣老い、川上死し、長州出身にして用ふべきは桂なりといふことは一般に氣付いたのであるが、然し最も早く之を知つたのは平東である。此時平東は桂を擁して總理大臣となし、自ら其幕僚となつたのである。桂と平田との關係は此時から始まつ

た。之れ以後の事は已に世人の知る處てある。

斯くの如く彼の政治の着眼點が獨逸のミリタリーコーチーアてある。彼の覗ふ所の勢力は人民にあらずして宮中にあり、交る所は人民にあらずして官僚にある。故に彼は其自ら欲すると欲せざるとに拘らず、勢ひ、政治家たる能はずしてコーチーアたり官僚たり、蔡京、童貫たり、ワルデルヂーたらざるを得ざる因縁となつた。

彼が總理大臣たりし時、伊藤が政友會の首領となり。彼の政策と政友會の政策と相容れざりしことがあつた。此時彼は陛下に乞ふに伊藤をして政友會の首領を辭して樞密院に入つて議長たらしめんことを以てした。伊藤が之に應ぜざるや桂は陛下に奏上して曰く、伊藤は一世の元勳にして其勢望は小臣のよく及ぶ所にあらず、凡そ政府全體の勢望を以てするも彼に敵せず、彼は此勢望を以て民間不逞の徒を集めて政黨の首領となり、而して政府の政策を防害す、陛下若し彼に命ずるに樞密院議長たらしむるにあらずんば臣は骸骨を乞ふの外なし。然れども恐らくは彼は陛下の命に從はざるべし。彼は平和の足利尊氏なれば也と、凡そ皇上の命といへば唯々服膺するの伊藤も平和の足利尊氏には敵することと能はず、つひに兜を脱いて政友會を去つたのてある。此事を聞いて或人は潔しとするかも知れん、伊藤嫌ひの人より見れば確かに痛快の事に相違なしと思ふ。然しながら宋末明季の宦官等が其目的を逞うするに當ては血を見て平然として居た歷史を知るものより見れば此等の陰謀は政治家の風ありといふ能はずして宦官の手段と評するに躊躇せんのてある。

彼は又金錢の政治上にける勢力を最も能く解したる一人てある。伊藤の政友會を率ゐた時之れを破壞するに金錢が最もよき武器たるを知て屢々之を用ひたる一人てある。今日大同倶樂部と稱するものゝ多くは政友會の落武者てある。當時一人每に三四千の金を彼より得、合せて一個の電話を貰ひ受け、半ば探偵たり半ば議員たることを得たものてある。當時の政治社會に於ては之を名づけて電話組といつたさうてある。又彼は當時警視總監大浦と共に政友會の壯士頭二名を官邸に

招ぎ、温言厚語を盡して之を懷柔し、元老の跋扈を論じ、政界の腐敗を論じ、若しよく政友會を打破せば深く相酬ゆる處あるべきを約したといふ事である。一國の總理大臣が鷄鳴狗盜の徒によつて政治を爲し、或は壯士頭に向て斯の如き約束を試むるといふが如きは、如何に彼の友人と雖も彼を回護するの言葉がないであらう。要するに宦官の慣用手段たるを免れんのである。

又滿洲軍出發の時、彼は滿洲軍出征の結果として、萬事の決、一に山縣に歸するであらうといふ事を憂ひ、日露戰爭の時小松宮に閫外專決の權を與へたと同じ筆鋒を以て大山兒玉に閫外專決の權を與へ、參謀本部をして空權を擁せしめ、事實に於て山縣を葬らんとした事がある。然れども事洩れて行はれざりしが、政友會員の如きは此等の事實を見て痛快と評したものもあつたが、是れ亦正々堂々として政治家の風ありといふことが出來ぬ。其結果の善か或は惡かは別問題として、其手段は確かに宦官私曲の風あるを免れない。

又卅七八年戰後ポーツマウス條約の結果として彼が國民の反感を買ひ、辭職せねばならぬやうになつた時に、彼は西園寺を推薦して自分の後任とした。世人或は之を見て彼が政友會の威力に服したものと思ふものがあるも、其實彼は天の一角に於て西園寺の光芒甚だ盛なるを見て、終に之を推薦したのである。矢張り宦官旨を希ふの趣ありしこと明白である。

右の來歷を見れば、彼を宦官なりと論定するは甚だ酷であるが、さりとて立派なる政治家とすることは到底出來ず、矢張り宦々若くはミリタリー、コーチアの立場より見なければならぬ人物と思ふ。

然しながら彼の人となりをいへば極めて物に練達にして用心深く、友人若くは幕下の世話をするといふ段になれば親切といふ能はざるも少くもあらゆる手段を盡す丈けの心あり、而して能く物に忍ぶ。又極めて常識が發達し、軍人ながら物の一端を見ずしてよく全局に目配りがつく。兎に角元老に揉まれ、議會に揉まれて來たが爲めに所謂上を揉み下を揉むの術に達して居る。故に彼の最も人に勝るよき點を上ぐれば、曰く練

達にあり、曰く忍耐にあり、曰く常識にあり。英人、サー、ロバート、ピールを評して大政治家は大なる力量を以て平凡の說を行ふもの也といつたが、桂は若し國民をよく了解することが出來たならば、此常識、此練達、此忍耐を以て大政治家たるに適する資格を持て居るが、彼の生來の行路によつて作られたインステンクト、イジオクラシーの爲めに如何に勤むるも宦官政治家たるを脫する能はざるは甚はだ惜むべきことである。

若し夫れ人品の高下に至ては甚だ高しといふを得ず彼自ら大臣にして大將を兼ぬるといふことを頗る得意として不用意の間に其得意の情を洩らすは、彼の友人と雖も往々心中失笑するを禁ずる能はざる處である。此等は甚だ稚氣ありといふべきである。又一體の人物がバルガーにして政治と財利と美人の外解する處なく、又其近來の政治も小人を集めて利權を與へ而して己れに使ふるの徒を培養するの外、大經綸、大政策なく、其人となり甚だ貴ふからずとはいひながら、而し之に接すれば諄々としてよく語り、又人をして其說を盡さしめ、伊藤、西園寺の容易に人をして其言葉を盡さしめざるが如きに比せば些か人をして心を安んぜしむる點がある又新聞記者を使ても、多く人は使ひ放しにするのに、彼は出來る丈終まで之を用ひることなどは些か俗人の心を取るに足るのである。彼は又政治上に時として思ひ切つた事をする事がある。此等は或人が見て痛快とすることがあるが、要するに盲者蛇に怖ぢざるやり方であつて、斯くの如きは偶々事を破るといふことを近來悟つたやうである。而し近來彼が多少の人氣あるは此思ひ切つたことをする爲めであるから、平和の間に水到て渠成る底の西園寺流のやり方をすれば却て失敗するかも知れん。

今や彼の黨派は政府に充ち、民間に充ち、實業家に充ち、政黨の間にも充ちて來て、恐らくは天下最も得意なるの一人であらう。而し彼の勢力を得た原因は一言にして盡す、曰く私恩を沽るにあり。之を要するに彼は或意味に於て確かに近來の病弊たる物質主義の或

一面を代表する一の代表的性格を持て居る。彼の勢力ある所以は即ち現代の或一面の代表者たるが爲めてある。

(完)

△桂侯論

島田三郎

折角の御求めだから桂侯の評を試みませう、桂侯は弘化四年の生れ、當年六十三歲かと思ふ、て維新の時には二十一と思ひますが、長州の士分、而かも上士の息子かと思ひます、といふ譯は、私の記憶によると幼名を壽熊といつたので、今の名の太郎は君公から賜はつたものてある、此名を賜はるといふ事は如何に優才てあつたとしても、下士位の身分のものには無いことだといふ推測からてす、兎に角君公から名を賜はつた程てすからその頃からして變つた青年てあつたと思はれる、武官出身て今日を致すには極めて便利なる生立てある、武官中にも二種類ある、故野津大將や今の乃木大將の如きは純粹なる武人てあつて、事務經營の方には心を寄せぬ、從つて經歷中にもその方面の事は無いのてある、桂侯は出身が純粹の武官てはあるけれども、壯年よりして事務經理に携はるの經歷を兼ねて居る、之が今日長派を中心とする一派の首領となつて、政治家の經歷に踏み入るところの好き基礎となつたのてある、侯の生ひ立つ頃は恰も幕府が征長の軍を起した時て、長藩は極めて多難てあり、青年皆銃砲を持つたる時てある、侯もその一人て出て、一面の防禦に從ひ、小倉攻擊の時にも、亦小隊長として加はつたと覺えて居る、引續いて維新戰爭は侯の朋友が勉めた、即ち故の山田顯義伯の如きは侯の先輩てある、侯は此等の先輩と共に維新の軍にも働き、九條公の下に東北の征軍參謀部に居りしと思ふ、比較的幼少の時代から斯の如き經歷を經たから、その軍人的能力を現はすには好き境遇てあつたのだ、併しその早熟の性行に甘んにて、更に海外の智識を求むるの機會を掴む事がなかつたならば、後來の出身に彼の如き昇進は六かしかつたてあ

らうが海外留學は侯の維新後に於ける進退の一轉機であつた、侯の爲に幸となつたのは、それ等の軍事に成効して賞典祿を受くる程の厚遇に滿足せず、自費で軍事修業の洋行を企てたことである、侯は重に獨逸に居つて、六年の後に歸朝したと思ふ。當時武人で兼て海外の形勢を見たといへば、此一廉でも大に歡迎せられ登庸せらるべき事情であつた、果然侯は陸軍に出仕し、一躍左官となつた、だが之だけの經路で進級しても、武人として大將に至るだけで、今日の如き位置に達するは六かしいてあつたろうけれど、當時伊藤公が長官となり、各省の新智識を文武官僚の中より選み取り、法制局を組織した時に、侯は陸軍省の一局を預り、兼ねて大政官書記官となりて、法制局に勤めた、此間に自然に文官の經歴を有する事となり、此處に今日の位置を得る基礎が始まつたと思ふ、その後多く文武の兼官を以て進級し、陸軍省内のきけものとなつたのである。兎角する中に又獨逸公使館附の陸軍士官として海外に趣き、愈よその羽翼を長ずるの機會を作つた、歸朝の後陸軍次官となり、その後師團長として地方にも退いたが、此頃陸軍々人中出色者が三人あつた、その中の一人と呼ばれ、一人が進めば必ず他の二人も進級するといふ例であつた、三人とは侯の外故の川上操六子、故の兒玉源太郎伯であるが、侯と伯とは長州出身で子のみが薩摩の出身である、此三人中孰れが最も頭角を現はすかは世人の眼を屬する所となつたのだが、川上子は第一に蚤世せられて、その經歴は純然たる武官で終り、兒玉伯はその次に世を去られて文官の經歴をも兼ね、その功蹟も多かつたに拘らず、未だ大を爲すに至らずして終つた、伯にして尚ほ健在であつたならば、今日顯職を取るに至つたのであろうに、之よりして見れば侯は全く年齢の上に於て獨り勝利を得たと稱すべきである、侯が自己の力によつて頭角を露はすべき資格を有するが、更にその先蹤で、武人の經歴と文官の性行とを以て一般の政界に力を有し、就中陸軍に最も勢威ある山縣公の推輓も、亦偉大なる助といはねばならぬ、且つ又機會は常に侯の好運を開くに就いて

裕かであつた、議會開會後、内閣頻に交迭する間、諸省の長次官は毎度その人を改造したけれども、只陸海軍のみは何時も治外法權として、前の長次官を後の内閣に引繼ぐ習慣であつた、此間に侯は次官として常に陸軍の權を占め、更に又長官として續いて勢力を有して居つた、且つ侯が乃木式武人ではなくて、政治的野心を有して居たところから、長く陸軍の長次官として議會に應接したところから、自然にその中に政黨に對する秘訣にも熟達し、臺灣の總督となり、武人を以て純然たる政務の局に當つたなど、皆今日の地位を占むる練習となつたのである、此の如くして次第に羽翼を張りつゝある間に、山縣公を首領とする長州中心の一團は、山縣公に代るべき人を必要とする時代とて、茲に明治三十四年伊藤内閣に代る總理を求むるに當り、彼を推してその首相としたのである、更に侯の内閣の爲に好運となつたのは、日露の大戰がその在職中に起り、從來内閣と議會との間に蟠る隔意を撤去し、所謂擧國一致の對外的活動を要するに至つたことである、軍人の經歴を有し、兼ねて文治の修練を經、又議會操縱の秘訣にも通じたる侯が、此國民的活動の時に首相となり居つたのは、侯に取つて勢力の基礎を固むるに最も便利であつた、然しながら戰爭已むと共に、戰爭中に余り國民の熱度を煽ぎ立てた反動として國民を失望させ、遂に日比谷の燒打騷動となり内閣の更迭となたつが、侯の政治的野心は却つて此間に燃え、此匆忙裏に捲土重來の地を作らうと決心したのである、斯くて自己の經綸を遺物として西園寺侯に内閣を引渡した手際は、是れ敵に對する軍略を政黨に對する政略に使用したのであつて、これが爲に政友會は、まんまと鐵道國有説議決の機關となり、增税案通過の手先となり、種々の不人望なる、さりながら今の内閣には便宜なる仕事を爲し遂げて、豫定通りに再び侯に政權を返却するの一幕を演じたのである、此侯の手際は巧に過ぎ、西園寺侯の遣方は拙に過ぎ、共に無双の技倆を發揮したと思はれる、

然しながら、爾に出づるものは爾に返るとは古人も

旣に言つたる通て、流石の侯も、自己の献立てた鐵道國有案か自己の困難を增すとゝなり、目下その料理に閉口して居られるが、之は國家の爲には不幸て國民に取つては迷惑てあるけれども、冷靜なる歷史家は目して自然の應報となすてあらう、國民は猶ほ前內閣の外交の失敗、戰後經營の失敗を記臆して居る、表面の責任者は西園寺內閣に相違ないが、その設計の責任者はといふと前桂內閣てあるのだから、少くとも同一の責任が兩者に存せねばならぬ、西園寺內閣の不人望は財政手腕が經濟界に迷惑を及ぼした爲に來たのてあるが、桂內閣の再興にも、殆んどそれと同一程度の不人望を伴はねばならぬ事は、冷靜なる觀察者の何人も見るところてある、然るに事實は之に反して西園寺內閣の不人望の反動から、同一責任者たる桂內閣の再來を歡迎するに至つたのは、政治界の事は感情がその一部否大部を占むるの適例とするに足りる、併し桂侯の率ふる長州中心の團體にして、桂侯以外に、略ぼ同一の經歷及び資格を有する首領ありと假定すれば、恐らく桂侯の首相を見ずして他の首相を見たのであらう。居に兒玉伯が健在てあつたならば、その臺灣に博し得た聲望と、滿洲に於ける軍事の成効に得た人望とて、兒玉內閣なるものが組織されたかも知れぬ、兒玉伯逝いて桂侯に代るべきものを、此派に見出すことの出來ないのが、抑も桂侯の內閣の起るべき最大の原因となつたのである、

が桂侯の他に異なつて一旦失つた人望を回復するに至つた一原因はその選ぶところの閣僚、及びその要部に配列した官僚に、前桂內閣の失敗者を取らないで、新人物を擧げたる點にある、西園寺內閣を顚覆するに與つて力ありと、世人も自身も信じたる人の中で、內閣に入るだらうと想はれた人物が二人ある、一人は松平正直君で、一人は關淸英氏である、特に關氏は前桂內閣に殉死したる人である、日比谷燒打騷動の結果、急に警視總監が空位となつた時に、關氏は長野縣知事たりしが中央に招かれ、將に覆らんとする內閣の下に總監となつたが、幾干もなくして此新總監は內閣と共

に退いてしまつた。前閣員で勢力を各府縣の警察部に植え付け、その他武徳會の世話をし民間にも手を伸べて、その勢力範圍を八方に擴めた大浦男は、胸中暗に内相を豫期したらしく、大同派の人々も此人を此處に戴いて連絡を取るべく擬し居たるにも拘らず、内閣員の發表を見ると意外である、大浦男は政治的威力を振ふの余地少き農相の位置に就き、平田男が内相の椅子に凭つたのである、侯の此配劑は、圭角少くして毎時愼重の態度を取る平田男に内政の樞機を預け、招禍の手端を開かぬ用心をしたものと見える、之はいふ迄もなく前内閣黨の政友會を激せぬ爲なので、徐々に政友會を現内閣化する準備とも見える、桂侯の胸中には、大浦男の如く大同派を直參黨として政友會を反對黨の側に驅らんよりは、諸派の上に超然として凡てを引付けんずる計畫であると見える、之が爲に直參黨たる大同派は失望するとも、此方は反對する氣遣ひのない團體であつて、僅に他の利益方法を以てしても忠勤を我に盡さしむることは容易と見たるらしく、寺内子を引止め子の手を通して陸軍の繰延を行ひ、臺灣以來引續き懐ろ金の利用を理解し、之を南滿の方面に應用し、間接に政黨員新聞記者を引付けるに慣れた後藤男を舉げ、議員操縱の役に當てんとしたる等、皆首相の方劑と見える、前内閣の不人望を招いだ第一原因であり、又最大原因でもあるのは、公債及び有價證劵の下落で、平生從順極まる實業界迄が、窮苦の余り之に對して反對の聲を揚げたのである、之を何とかせねばならぬと見て取つた首相は、銀行家その他の經濟家に公債を募集せぬといふ宣言をなし、景氣の回復に勉めさせた、此宣言は事實は聲程でないけれども、所謂景氣直しの効が見えるから、實業家連も強くその事實を追究せず、景氣さへ直れば宜いとの心から、亦之を盛に稱揚して相槌を打つた、此響は思の外に効を奏し、内閣の人望回復の一大原因となつた、由來桂侯の系統は、輿論とか民意とかいふものを重んぜぬ歴史を有つて居るれけども、時と共に推し移る怜悧なる首領は、人望を博する爲に民意を容るるの形迹を示さうとして居る、爲

劣禁止の例も之てある、勤儉力行の諭旨も之てある、後藤男の許に計畫された電話度數制度の、新聞社會商業會議所等の反對の聲て立消えんとするのも之てある、凡ての遣口が政友會内閣に比べれば極めて巧てある、若し心術を解剖したなら、西園寺侯と桂侯とは、品格に於て西侯の優れりとすべき評もあらうが、その外部に現はれたる迹からすると、桂侯は慥に西侯の上てある、要するに桂侯は西園寺侯の雅懷なく、風流なく、讀書趣味なく、亦財利にも淡泊てはない、桂侯自身が如何したとは言はぬ、が侯の秘密事務に科る人て、最も侯に親近なる者が投機界に出入する風聞がある、公債を募らずとの政略は公債及び有價證券の價額を上げる結果を豫想することが出來る、秘密に與る人が投機界に機先を制するの便も之から生ずる、若し風說の如くてあれば、此事は桂侯に對する實際の關係如何を知り得ぬけれども、形式上の關係に於ては侯を煩はすものと言はねばならぬ、世論此點に於て疑を入るゝは余儀ないことてある、政友會の連中も此種類のものは極めて多いが、此點て疑を西園寺侯に挾むものは世に殆んど無しといつて可なりてある、兩侯性格の差異は此處に見ることが出來る、然しながら用意の周到なる前に述べたるが如く、政治的利益の爲には閣員の配置にも、關氏を擧げず、大浦男を内相とせず、大同派を直轄とせぬといふ、此樣なる遣口は西園寺侯の遠く及ばぬ事てある、究竟するところ桂侯は常識の大に發達した人てある上に、その趣味が他の事物に散漫に分れる事が無いのてある、即ち他にその性情を慰むる嗜好もなければ、その發達せる常識が一に政治上の掛引にのみ遺憾なく用ひられるので、以上の仕事も爲し得るのてある。昔孔子は品性に於ては管仲に與せぬながらも、その政治的能力を賞賛するを惜まなかつた、公平なる論者は同じ方式を以て桂侯を評するを得ると思ふ。

（談話筆記）

△桂侯と予との接觸點

文學博士　建部遯吾

政客ならぬ我輩が當世第一の政治的人物たる桂侯を彼此れ言ふのは甚だ不似合の事であるが、然しながら從來桂と吾輩とのライフが多少相觸れた點があり、將來に於ても亦相觸るゝことがなしとも限らぬから、其相觸れた點丈けについてお話して、お求めに應じて置く。

只今相觸れた點と申したが、これは實際幾何學上の點であつて何等空間的廣袤を有せず、又時間的延長を持たぬのである。吾輩を下界の人間とすれば、桂は是れ雲際に出沒するの龍の如きものであつて、桂と吾輩のライヴズの相觸れたといふのは、或折柄に其神采奕々たる片鱗をチラリと拜んだといふのに過ぎぬのである。

桂と吾輩との或意味に於ける關係は、是れまで三回あつたのである。

第一回は世人も値打不相應に評判を高くした所の明治三十八年末より九年始めにかけての大學事件てある。序にいつておくが、昨年十一月頃であつたか、都下發行の「二六新聞」が其當時の事に關して吾輩と姉崎とのことを書いて居たやうである、其記事によると吾輩が免職させらるゝ危險があるので、姉崎が義俠心とやらを振り起して鎌倉まで吾輩を救ひに來たといふ事だ。然し其同じ「二六新聞」こそ三十八九年の當時自ら進んで、――吾輩からいへば有難迷惑の義俠てあつたが――吾輩の「出處錄」の全文を公けにした所のものである。此事たるや區々姉崎と吾輩との關係のみにあらずして、事、實にお尋ねの桂にも關することてあるから一寸述べるが、世人が當時「二六新聞」始め都下の重立ちたる諸新聞によつて知るが如く、當初所謂大學事件なるものが初まつて、先つ山川總長の辭職となる、戶水、寺尾以下吾輩に至るまて連袂辭表を提出するに至れるや、引續いて大學教授殆んど總體の當局に對する抗議となり、文部大臣久保田は直ちに辭職し

時の總理大臣桂は菊池男爵を介して殊に濱尾先生を喚び起して大學の鎭撫且つ善後策を講ぜしめた。是に於て濱尾先生は辭表提出連を代る〲說いて辭表撤回を勸めたのである。濱尾先生の起つたのは十二月十五日であるが、それより先き十二月十一日の夜吾輩の鎌倉の宿に志田が來、十二日に更らに姉崎が來て、有耶無耶の間に辭表を撤回せしめんとするの運動を試みた。其時姉崎のいつた文句は面白い。「桂も氣の毒だから、桂を憐んで君は辭表を撤回せよ」といつた。之れは吾輩のみならず、志田も立合つて聞いて居たのであるが餘程面白い文句だ。昨年の「二六」によると姉崎が吾輩を憐んだ事になり、此時の言葉によれば吾輩が桂を憐れむといふ事になる。姉崎は宗教學者としてグナヂゴッチスを呼はるに熟練して居るものと見えて、よく憐みを乞ふといふ語を振り廻す男と見える。然しながら吾輩は斷然之を撥ね付けた。抑々桂は堂々たる總理大臣である、至尊の寄托を咸荷して日露開戰の責任を負ひ、國政の輔弼に當る處の國家棟梁の材、社稷の臣たるべき桂が、一介の讀書生たる吾輩に向て憐れみを乞ふが如きことは斷じてあるべからず又あり得可からざる事であると吾輩は論じたのである。勿論姉崎と雖も(吾輩は多年同窓の友として彼を知るが故に)斯の如き陋劣なる考を持て居る人でない、故にこれは一時の失言に相違ないのである。吾輩は一介の讀書生に過ぎぬが、己れの爲したる行爲の論理的結果について桂に憐れみを乞ふことを愧ぢる。況んや桂が己れのなしたる行爲の必然の結果に向て吾輩に憐れみを乞ふが如きは斷じてなすまい。當時大學總長たりし山川先生は、大學の爲めに悲みつゝも吾輩の意見を諒とし、吾輩の意氣を壯とするの意を明言された。それは十三日の事である。又山田、松波なども此事については非常に斡旋した連中である。此等の詳しいことは當時の新聞紙並びに吾輩の「出處錄」に明かであるから千歲の後までも炳乎たることであるから、吾輩は昨年の「二六」の記事を事々しく正誤するの何等の必要を見ないのである。話を本道に戻すが、山川先生の態度や、濱尾先生

の幹旋やによつて所謂大學の不逞の徒も段々鎭撫についたが、吾輩は一個として別に見る所あり、辭表撤回については頑として動かなかつたので、濱尾先生の心配も一通りでなかつたらしい。扨此時に吾輩は桂といふ人物のなか／＼しつかりした所のあることを發見した。即ち桂は明治三十九年一月七日を以て吾輩の事を其儘にして内閣を明け渡したのである。即ち桂は斷じて吾輩に向て憐みを乞はず、又吾輩をして憐みを乞はしめず、各々其主張を貫き、其責任を負うて、論理の命ずるがまゝに任せた。是れ實に吾輩が桂の人物を多とする所以てある。凡そ匹夫も其志を褫ふべからずとして匹夫の志を尊重するものは、自身に於ても亦必ずや大節に臨んで奪ふべからざるの志がある人物てある。突梯滑稽脂の如く韋の如く、自己の意志を尊重せず、御都合次第、内股膏藥的の運動や幹旋をなすに甘んずるものは、又他人の志を尊重することを知らぬ侫者てある。桂は正さに世界歷史の一大轉回期となるべき日露戰爭當時に總理大臣として補弼の重責に當れる國家棟梁の臣である。吾輩は政界に何等の緣なき一介の讀書生てある、然るにも拘らず桂が吾輩の志を尊重して其志を貫徹せしめたのは、曠世の襟度あるものにあらざれば出來ぬことてある。桂が吾輩を處分せずして内閣を明渡したのは、吾輩をして勝たしめ、又同時に桂をしても大勝利を得せしめたものである。天下學識の徒なきを憂へず、大節の士なきを憂ふ。桂は我日本に於て大節の士を殺さゞるべく平生心懸けて居る男てあるらしい。此事は吾輩の「出處錄」。戸水博士の「回顧錄」等之を千歲に傳ふべし。是桂と吾輩とのライヴズの相觸れたる第一點である。

第二點は今年の四月廿六日にあつた事てあるが、それは東洋協會の調查部を白鳥や吾輩が作つて、此事に關する桂との會見てある。此れは本、亞細亞學會といふものを白鳥博士が首唱し、我輩は主として相談を受け、學者の常態たる群雄割據の爲に隨分難產てあつたが、山川先生の卓越なる切り盛り等のお蔭もあつて、兎も角も成立したのである。所で平田男爵が媒妁で東洋

協會に突入して、其調査部として相寄り相助けて其目的を達せんとするに至つたのである。吾輩は該調査部の委員の一人として此四月桂に逢つた。其時に桂が吾輩に對する態度は實に恭謙士に下るの風があつた。且つ曰ふ、東洋協會調査部の成立は實に自分の多年の宿志であつて、今日以後に於ける國家經營はどうしても一方に於て學術の力に俟たざるへからず、殊に東洋協會の目的たる東洋の福利を增進するには、世人も十二分の智識を開發して居らぬ此方面の事であるから、學者の力に俟つこと殊に大なるのである。これは自分の十年以來の半面の事業にして、どうか學者の助力を乞ひたいと思つて居たが、今日一堂に會して手を握るといふことを得たのは十年の宿志初めて成つたのである。と卓上演說に於ても又吾輩一人に向ても熱心に繰返し〱言つたのである。かくの如きは政治家として普通の事のやうであるが、然しながら動もすればサーベル一本で天下を料理する積の男と誤解されて居る桂の口より之を聞くは、彼が實に前途のある政治家たることを人をして思はしめるのである。

桂の門下若くは同人には如何なる人物があるか、政客ならぬ、政治界の消息通ならぬ吾輩は知らぬ。が當時の幹事長（今の副會頭）たる小松原氏や、又東洋協會と亞細亞學會の媒妁者にしていつも調査部長たる平田男の兩人には爾來屢々出逢ふが、此等の人々は如何にも本氣に眞面目に宗廟社稷を思ふ處の人士である。殊に小松原氏の如きは其半生の經歷よりいふもなかなか波瀾があるやうであるが、其れ丈け規模の廓大なる所あり、桂の爲めに同人其人を得たるを喜ぶべきである。世人は又平田男を目して桂の參謀長といふ。中央公論でも諸家の平田論が出た時に大抵さういふ論評が下された。これは嘘であるまい。然し參謀長といへば何だか變幻奇譎極りなき人のやうに思はれるが、平田男が何よりも宗廟社稷の爲めに鞠躬盡瘁するの外に存念のない極めて生眞面目なる人物であるのは實に奇妙である。桂自身の人物はよく知らぬが、平田男の如き人が其同人として、殊に參謀長として居る所を見れば、

變る所を見て、其人品を知れてあつて、大抵當人の人品も推定し得られるだらうと思ふ。

桂と吾輩との相觸れた第三點は戊申聖詔に於てゞある。戊申聖詔の喚發については在野の政治家若くは批評家にいろ〳〵の解釋もあるが、明治三十四、五、六年頃吾輩が露西亞に旅行した頃から吾輩は開戰論及戊申聖詔の御趣旨に等しき考を有して居つた。日露戰爭の開始せんとする前、開戰論者の論據とする處いろ〳〵あつた。國權的開戰論、國際法的開戰論、經濟的開戰論、人口的開戰論、何れも我口の國利國權を中心において論じたのである。我輩は勿論此等を以て開戰の理由とすることに異議ない。只吾輩一人が主張した本據が二つある。即ち歴史的開戰論、文明的開戰論と名つくべきものであつた。歴史的開戰論といふは我建國以來の原因結果の長き脉絡上明治の大御世に於て露國と開戰せざるを得ずといふ論である。文明的開戰論といふは日露開戰は獨り日本の國利國權を進捗し、日本の進歩發達を助長するに必要なるのみならず、實に露國をも救濟し、進んでは世界十六億の人民を一歩文明に近かしむる所以の大業である故に、我皇上陛下の御稜威を以て是非之を開始し賜はざるべからざることを論じたのである。其一端は、例へば露國の立憲政體とならざるべからざる事、――此事は明治三十四年七月露國に遊び「露國雜感」と題して知友に寄せ、後「西遊漫筆」「外世時言」等の中に收めたのであるが、露國が健全なる發達を遂ぐるには立憲政體を採用せなくてはならぬ。而して露國が立憲政體を採用するには必ずや外科的手術を外國より受けねばならぬ。其施術者は差當りて我日本であると論じたのである。日露開戰は實に此施術である、果せる哉吾輩の豫言した通り――上醫は國を醫すといふが社會學は國を料理する學問である。社會學の初學者たる吾輩は即ち國手の代診であるに拘らず――日露開戰の後僅かに半歳、已にオデッサの叛亂、學生の騷擾、兵營の動搖等あり、つひに立憲政體を採用すべく餘儀なくされたのである、斯様の次第で日露戰爭は實に皇謨八紘に布く所以の大業であつ

て、獨り我日本帝國の權利となつたのみならず、實に露國の國家國民も亦我至尊陛下の御稜威御恩澤に潤ひつゝあるものである。さてポーツマウスの條約に於て平和を克復せる以上、獨り日本臣民に向てのみならず、露國を筆頭とせる世界列國に向つて、正々堂々たる大詔勅を下し賜はつて、我國の功績及び其國是を公知せしめたかつたのである。然るに後繼内閣はかゝる大義に通ぜず、俳優に酒を飲ませ、文學の士と詩酒徴逐するに忙しく、かゝる事は之を等閑に附して居た。然し曆の上に於ては多少遲れたるの感はあるが、開戰の責任者なりし桂内閣が再び起ちて、之れが大團圓たる戊申聖詔の發布を見たるは、又甚だ其人を得たるの氣味あつて面白い。戊申詔書は此意味に於て日露戰役の論理的結末である、日露戰爭は戊申聖詔の前提である。されば日露宣戰詔勅の副署者たりし桂が戊申聖詔の副署者たるは其人を得たるものである。而して初めより歷史的文明的開戰論を主唱したる吾輩が此聖詔に對して必ずや一種の態度を取らざるを得ない、是れ我輩が今日田夫野人の間にも聖旨を以て戊申聖詔衍義を認めたる所以である。而して是れ亦桂と吾輩との接觸點の一である。

斯くいひ來れば讀者諸君我は怪みて、なぜ其前にある第一點を數へぬか、七博士の一人は汝でないかといはるゝであらう。吾輩は謹んで否といふ。吾輩は七博士の一人として開戰論を唱へたのではない。吾輩の唱へて居た意見が偶々七博士と歸する所一なるの故を以て爾後同じ行動をとらんとしたのである。吾輩が當初七博士と共に車を聯ねて桂を訪問したものでない事は事實である。然し桂内閣ならば吾輩の說にも耳を傾けぬものであるまいと思つて閣員にも自己の意見を述べた事はある。吾輩は總て此等の點について我輩の眼力の且吾せざりしことを喜ぶ。只ポーツマウス條約については、最後まで殘りし六人は批准拒否の義を立てたが、吾輩は當時批准拒否の議を一個の事業と確信して居り、又今でも確信して居る、將來此確信をつゞけて居るであらう、かゝる事に對しては言論其物が一個の

事實たることを知らざる政治家は共に外交の事を談ずるに足らざるものである、之を解せざるの國民は外交的國民の資格なきものである。近頃米國艦隊歡迎があつたが、歡迎は即ち一個の言論ではないか、然し其言論が一大成功を齎らしたてはないか。此點は思慮ある國民の深く考ふべきこととてある。

桂が立憲政治家となり得るかといふのかね。唐の柳宗元論じて曰く、封建は勢也、波斯ても支那ても土耳其ても露西亞ても今は皆憲政に進みつゝあるてはないか、學術と政治との握手をさへ求めつゝある桂が何の野暮があるものかね、よし野暮があつたにしろ、憲政は勢也さ。唯桂内閣には與個に宗廟社稷の臣を含み居るから、先年非藩閥同盟を作りて藩閥政府に肉薄した民黨の策士連には、此處一寸敵なく時機なきに苦しむ體たらくかも知れんて。――しかしこんな事は圖書館の内からは分らんよ。

終りに略符解を附しておく、桂とは大勳位侯爵桂太郎閣下の略、姉崎とは東京帝國大學文科大學教授文學博士姉崎正治君、松波とは東京帝國法科大學教授法學博士松波仁一郎君、志田とは東京帝國大學教授法學博士志田鉀太郎君、山田とは東京帝國大學法科大學教授法學博士山田三郎君の略である。(完)

▲政治家軍人

静観居主人

桂のやうな政治家を世間ては軍人政治家といつて居る。例へば山縣でも又故黒田清隆でもさういふ風にいはれたやうだ。けれども私は桂のやうな人は政治家軍人といひたいと思ふ。元來が軍人て、それから政治家になつたのてはなくして、元來政治家て、只それが軍職を兼ねたといふまでの事だ。一體御維新の時日本の内亂で所々方々て戰爭があつたが、其頃の上に立て居た政治家は皆一度は戰爭に從事したものである。今日、年を老つて古い顏をして政治に關係をして居る人は大抵は戰爭はして居る。軍職の肩書は持たぬ人達も戰爭

人は出て居る。只新らしく陸軍なり、海軍なりが出來た時に軍職に就かなかつたといふ丈けである。處て山縣とか桂とかいふ人は其時軍職に就いた。けれども別に士官學校とか兵學校とかに入つて修業をしたといふ譯てはない。只槍とか劍術とかを稽古して居た位てある。詰る處元來が政治家なのだ。獨逸か佛蘭西かに行て一寸兵隊のことを調べて、歸て戰爭をやつて、而してエライ軍人になつたのだ。けれども元は政治家て、政治家が本職て、軍人が變職だやうだ。桂さんなども其一人て、戰爭をするよりも政治の方が上手なやうだ。殊に私は桂さんが軍人としてどの位エライかを知らぬ位に政治の方はエライやうてある。外交の事にもなか／＼眼が利いて、外務大臣はやつたことがないが、外交に通じてゐるし、又今度やつた所を見ると財政の事にも明らかてある。算盤に委しい。又財政に明るい綿密な人を知て之を用ひ、自分ても又數字をひねつて落ちなくやる。軍人にしては珍らしいと人がいふがそれは大間違ひ、元來がさういふ風の人かも知れぬと思ふ。

それからあの人は今の處ては超然主義の政府をこしらへて居る。超然主義の内閣ては伊藤公が第一に失敗し、又山縣公もよく行かなかつた。然し桂さんのは存外よく行く。此前にもよくやつたが今度も旨く行きさうてある。處が世の人は之を見てあの人は超然主義てやつて行くのは餘程エライといつて居る。然し何ぞ知らん。あの人のは超然は超然ても黨派的超然てある。何時ても黨派を抑へて居る。超然政黨といふか、或は超然黨といふか矢張りあの人仲間がある。官僚や屬官の中に其仲間あるのみならず。所謂政黨の中にもチャンと仲間がある。只政黨といふものに固着せぬ丈けてあるぞ。今ても大同派は桂の黨派だと皆いうて居る。あの位のものは元から持て居る。此前に地租繼續問題が起つた。あの位の不人望な問題てあつたに拘らず、最後まて同意して居つた議員が二三十人はあつた。大同派位の人數はあつた、そんな堅い手足を議會に持て居り、又何時も大きな政黨を抑へてゐる。向ふに廻して大いにイヂメタこともあるが、昔の自由黨即ち今の政友會

の大きくなつたのは桂の力が與つて居るかも知れぬ。其意味からいつても今度などは政友會は桂と他人てない。今度或は向ふへ廻はすことがあるかもしれぬけれども成るべく一所にやらうといふ注意を怠らない。よくは知らぬが西園寺内閣に引繼ぐや直ちに豫算案が出來た。此豫算案などもチヤンと西園寺に内相談して、西園寺の同意を得て居る。それ故に此豫算案に政友會が反對するなどいふ事は絶對になからう。さういふ風に桂は何時でも大きなものを抑へて居る。桂も結局政黨をこしらへることを思うてる居だらうと私は見てゐる。抑へることは抑へても政黨がないと不自由で仕樣がない。だから政黨を作るといふことは始終腹の中にあるだらうと思ふ。只、今の處では上を見ても下を見ても左右を見ても政黨を作るのが面白くない。一視同仁などといふて居る。然し機會があつたら多分政黨を作るだらうと思ふ。どうかした場合には政友會總裁などにならぬとも限らんと思ふ。政友會の方でも或は西園寺を總裁にするよりか桂を總裁にすることを好むものが澤山あるかも知れんて、つまる處、彼は軍人政治家にあらずして政治家軍人てある。そして今の處は超然黨でやつて居るが、終には政黨政治をやるだらうと思ふ。(完)

△桂侯論

田川大吉郎

一言にしていへば桂さんは平凡無疵の人てあると思ふ。例へば軍人として若くは軍政當局者としては或は寺内君の方が上だかも知れんと思ふ。又帷幄の謀臣としては亡くなつた兒玉君の方が上だらうと思ふ。それぢや政治家として伊藤公に並ぶ丈けの才識手腕があるかといへば之れも亦遙かに及ばんと思ふ。一個の特色を捉へて之を他の其道の人に比べたら桂さんには非常に超越したといふ點は少からうと思ふ。けれども桂さんは同時に軍事行政もやれば。又政治もやれる。又外交家ともなり得る素質がある。此如何なるものでもやれるといふ點て、平凡無疵なる彼れも非常に超凡卓抜、

なる人と認めらるゝに至つたゞらうと思ふ。

桂さんに對する私の觀察の大體は右のやうなものてすから、私は桂さんの政治家としての缺點は理義に根ざして前進邁往する見識と決斷の缺けたる所にあると思ふ。例へば英國の立憲政治家風の所は今日までには全く見えぬ。彼をして今日あるに至らしめたのは要するに理義に基ゐせざる東洋流の情實や折合の政治をやつて來た爲めてある。往て桂さんと話して居れば格別英雄とか先輩とかに接したといふやうな考が起らず、何となく春風の裏に坐して居るやうて、親しく、柔しく、愛憎よく遇して和氣客に迫るの思がある。人をして圓滿なる愛情の中に蕩けしむる。彼が各方面に同情者を持て居るのは此先天的に人を惹きつける美德から來た事と思ふ。

私が桂さんと初めて知つたのは明治廿三年頃てあつた。其頃桂さんは陸軍次官をして居られたが。私の友人某氏が帝國大學の古典科か何かを卒業して支那商業史といふのを其卒業論文に書いた。其友人は卒業前から自力てやつて居つたが卒業後は益す困つて、其支那商業史を出版しやうと思つたが、なにせ大部なものてあるから何處の本屋ても其相談に乘らない。て私も見るに見兼ねて、桂さんに出入りする女の家庭敎師に依賴して桂さんに買て貰ふやうに賴つて貰つた。處が桂さんはこれは己れの方には關係がないとて當時の農商務次官の齋藤修一郎氏に持て行くやうに世話をして呉れた。處が齋藤さんの方ては金がないといふので出來ずとう／＼桂さんが七百圓かを出して——參謀本部の方から金が出たのかそれは知らぬ——買ひ取つて呉れた。其上其著者を愛して荒尾精に紹介して上海の日淸貿易研究所に世話をして呉れた。此一事ても桂さんの人に超えたる親切に感服した。殊更ら親切を盡すといふにあらずして自然の德分てこういふ風にやつて呉れるやうに見える。さういふ友人との關係に於て私は桂さんの恩義に感じて居る。

其後明治卅二年頃に其女の家庭敎師が獨立して商買を營むといふ事になつたが資本が乏しく、品物も僅か

しかないので非常に困つた。本人が桂さんにそれをいふのを厭だといふので自分は内々に語つた。處が其れを聞捨にせずして、其女が山縣公の方にも關係があつたので、桂さん自ら山縣公に話をして數百金を送つて貰つた。其金は本人は借りた積りであつたが返すことも出來ず遂に有難く貰ひ受けたも同様になつた。彼の如き榮達を極めた人なるに拘らず、よく末々までも注意を拂つて艱難に同情を表して親切を盡す所は、桂さんと政治的の親みなき私も、私人的關係に於て德のある人と思つてゐる。澤山の政客が其門に集り、堅く結びついて居るのも之を推して其理由のあることを知るに足ると思ふ。

但し私はあの人の手が政界に於て極めて純潔であるや否やは疑はしいと思ふ。どうも出入する商人のやうなものは大變多い。又其關係もなか／＼執拗いやうである。政治家としては紳商とか實業家とか相場師の如きものに對して今少し謹嚴なるべきものではあるまいかと思ふ。西園寺さんはそんなものは餘り近けなかつた。兩侯の長短はこゝにあるが、いくらか戒心さるゝことを桂さんに願ひたい。

前年桂次郎君が桂さんの意を享けて相場世界に投機を試むるといふ記事が出た時に。桂さんは自分との關係は全くない。弟と自分とは截然區別があるといふ事を細かに辯明せられた。私は桂さんの言葉を信じてゐる。けれども從來の立場に對して疑を全く取り去ることが出來ぬ。私はこういふ事を政治家としての桂侯の名譽の爲めに甚だ惜むのである。然し見渡した所伊藤公も山縣公も已に老いた。井上侯も先達の危篤から免れたことはお目出度いが今後實際界の活動はあの人から望まれぬ。松方侯は已に世間から忘れられんとして居る。大隈伯は雄心依然未だ銷磨せざるも然し自ら實際政治を料理するの位置に立つことは望み難い。かく見來れば將來の政治界の大立物は桂侯が第一で、山本伯之に次ぎ、而して西園寺侯は兩者の間に立つて居る。此顏觸の中で桂侯の前途が一番に望みがある。侯は明治年間に於ける第一の幸運政治家であらうと思ふ。此

點に於て私は桂侯は伊藤公よりも幸運の人と思ふ。社會は何となく侯の前途を祝福して居るやうに見える。從來山縣公は陸軍により、伊藤公は文吏の首領として井上侯は財界を左右する權力の中心となつて居たが、此三人が歿したならば、陸軍、文吏、財界の三機の勢力は恐らく翕然として桂侯に歸しはせぬかと思ふ。桂侯の從來の遣り口を見ると、自分てさうしやうと計畫を立てゝ、踠いて行つたやうな跡がない。自分は相關せざるが如く、將來を揣摩せざるが如くにしてゐても、物事が自然に廻轉して來て桂侯を迎ふるやうになつて見える。財界、陸軍、行政、此三つの事を桂さん一人てやらうとは思つてはゐられないだらう。然し時運の旋轉は自然に彼を持上げるらしい。故に彼ほどの幸運兒は政界に比類なしと思ふ。

桂さんがよくいふ話であるが、彼が明治初年獨逸に學んだ時分に其友人同僚は何れも外交とか政治とかいふ方面に志して自分が軍人の修業をして居るのを規模小なりしとして笑つた。そんな軍人なんて小さな事をコツ／＼やらんても政治的に遣つたらいゝだらうといつたが、自分は笑て軍人となつた。其頃は別に何等の野心もなかつたが何時の間にか我知らず大臣となり大將となつた。さうして初めに志の大きかつた、政治的生涯をとつた人は却て其目的を達せなかつたといつて頗る得意の色がある。彼の此無邪氣なる自慢話はよく彼の一生涯を說明したもので、大將、大臣は或は彼の初めから期した處でなかつたかも知れない。

私は彼とは政治上の目的方向を異にして居るものである。私は彼を政治上の俗論黨と思つて居る。而して現下我國の政策としては滿洲及び朝鮮に隨分熱心し過ぎる政治家と思つて居る。私は日本が此上滿洲及び朝鮮の事に深入りするのを日本百年の利益でないと信じて居る。私は滿洲及び朝鮮に對する熱心をもつと和らげて太平洋の將來について充分注意して欲しい、此太平洋方面に力を盡し金をかけなければならぬ必要に迫られてると思つてゐる。滿洲朝鮮政策と太平洋政策とは自然に政治上の二大潮流であると信じて居る。桂侯

が滿洲及び朝鮮の事に熱心なるは政治上に於ける傳來の思想及び現時の俗論に對して最も氣受けのよい立場に立て居るであると考へて居る。彼は我國百年の政策上有益なるや否やを考へず、世論俗論に歡迎を受けると思つて之れをやつて居るのではないかと疑ふ。私は太平洋方面に熱心なる政治家に行て事をしたいと思つてゐる。十年來桂侯の門に趨れば大いに便宜を得たかも知れないと思ふに拘らず、十年愚を守て太平洋方面に意を専らにして居る。

今日の内閣の實力に對しては彼是いはぬ。けれども桂侯は無論其中心であつて、而して其股肱となつてゐるものは小村外相であらうと思ふ。此小村伯とは桂侯の言葉によれば日清戰役の時初めて相親しんだものらしい。侯は小村伯が其時安東縣の民政長官として骨を折つたことを非常に賞讃する。爾來共に内閣に立て日露戰爭の局面に當つたのであるが、自分は今日の内閣の爲振りを見ると何となく二十七八年戰役の當時、桂が名古屋師團長として、小村が安東縣民政長官としてやつたやうな氣合度胸で今日の仕事をやつて居るやうな氣がしてならぬ。だから何となく内閣の位置が低い。自分はモット雄大なる抱負主張を持て居る政治家を欲しい。今日は實に日本の興廢浮沈に關する大切なる時期である。此局面に對しては桂さんの平凡圓滿なる性格遣り口よりも、モット卓越したる氣品性格の人を廟堂の上に欲しいと思ふ。かういふことを多年親しみを得たる桂さんに對していふのは失禮であるが、日本今日の狀態について自分は中心より此苦言を訴へざるを得ないのである。(完)

國學院大學・東京高等師範學校講師

三矢重松先生著

高等日本文法

クロース製全一册定價金壹圓六拾錢小包貳拾錢

國語は國家の重器なり。正しき國語の教育を受けざる現代の成國民が之を云爲せんとするは、妄にあらずんば盲なり。まづ退いて國語の實質を知れ。簡便主義「分ればよい主義」の流行するは、國民性の墮落するなり。著者多年此に見る所あり、半生の研究を終へて本書を公にせらる。本書は理論を談ぜず、舊說を取捨し、新見によりて國語の法則を統合し、整然として國語の眞を發揮せり。而して詞辭の意義用法、文章の構造種類を詳にし、解釋的文法といふことを眼中に置かれたるは本書の特徴にして、最實用に適する所、文語口語を併說せるは比較研究上の緊要事にして、傍幾多の趣味を添へ、現代歌文の誤謬の如き丁寧に之を指摘せられたり。かくて、諸成音、格、性相、敬語、助動詞、助辭、補足語、敍述句、省略、記錄、對語、等の諸項に於て、特に著者の意見を見るべし。語學者、教育者、文士、歌人、記者等苟も國語に關係ある人は須らく一本を座右に備へざる可からず。

發行所　東京市神田錦町一丁目（長電本局二四三八／振替口座四九一一）　明治書院

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

自園製茶定價表

▲濃茶 十匁ニ付

綾の白	六拾錢
一の白	五拾錢
子日の友	四拾錢
以久昔	參拾錢

▲薄茶 十匁ニ付

大園	拾八錢
上儀	拾五錢
別別儀	拾參錢
廣葉	拾錢

▲玉露 二百目ニ付

綾洞	拾圓
雲脚	七圓五拾錢
龍鳳	五圓
碧雲	參圓五拾錢
双鶴	貳圓五拾錢
眠鶴	貳圓貳拾錢
梅の尾	貳圓
綾の玉	壹圓八拾錢
岡の露	壹圓六拾錢
衣笠	壹圓五拾錢
室の花	壹圓四拾錢
雲の錦	壹圓貳拾錢
玉露	壹圓

▲折物 二百目ニ付

白鷹	壹圓八拾錢
友白髪	壹圓五拾錢
白雲	壹圓貳拾錢
白折	壹圓
明石	八拾錢
舞鶴	七拾錢
鴈か音	六拾錢
若杉	五拾錢

▲眞粉 二百目ニ付

上玉眞	壹圓貳拾錢
玉眞	壹圓
上玉粉	六拾錢
玉露粉	參拾錢
喜撰粉	貳拾四錢
煎粉	拾八錢

▲煎茶 二百目ニ付

三丘	壹圓五拾錢
無双	壹圓貳拾錢
双ケ岡	壹圓
岡の花	九拾錢
正喜撰	八拾錢
喜撰	七拾錢
朝日	六拾錢
常盤	五拾錢

登錄商標

杉本三丘園茶舖

本店 京都市綾小路西洞院東 電話八八五番

支店 大阪市高麗橋四丁目 電話東四四二五番

出張店 名古屋玉屋町四丁目

出張店 東京日本橋區田所町

→（定價表御入用の方は御申越次第送呈す）←

新古書籍取次

地方販賣廣告

●弊店儀今回地方讀書家諸君の御便利を計り新古書籍雜誌類を多少に係らず迅速に勉强取次仕候

●取次書籍は政治・法律・經濟・商業・文學・各學校講義錄合本・各雜誌其他の書籍等を取揃へ新本は總て定價通りにて郵送料は弊店負擔と致し候

●古本は價格の不同有之候間一應御照會の上御注文下され度御照會の節は往復はがき又は返信郵劵封入にて奉願上候

●御注文の節は著名・書名・定價・發行所等の御記入を願上候御送金の節は振替貯金にて規定の登記料二錢増にて口座番號壹七壹七壹番東條書店宛にて御拂込下され度奉願上候

東京市神田區南神保町十五番地

東條書店

振替口座番號 壹七壹七壹番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す

市内は御一報次第直に御一覧に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候



內地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處昨年合名會社トモエヤ解散後は同店を辭し右の場所に合名會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候敬具

●市内は電話又は御一報次第早速店員御用伺に參堂可仕候

●地方の御注文は迅速御發送申上候

アヲキ商店

京橋區南傳馬町一丁目東側

電話本局一三八二番

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

恭賀新年

卸賣専門
價格低廉
發送迅速

中央公論特約販賣所

書籍雜誌
東海堂

東京市京橋區尾張町二丁目
振替貯金口座 八六七番
●電信略號荷印〇力電話新橋二、〇一五

圖書出版
賣捌擴張
取扱親切

謹賀新年

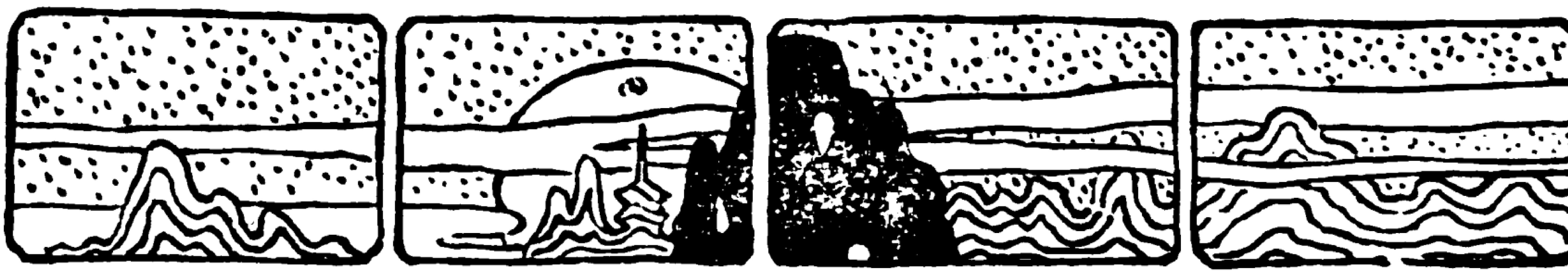
書籍雜誌
◎卸賣 ◎小賣
書籍雜誌は廉價にて迅速叮嚀に取扱申候
御注文之書籍雜誌は迅速親切に取扱申候
各位之御便宜を計り文房具丼に繪はがき印刷等廉價御取次仕り候

東京日本橋區呉服町十八
書籍雜誌特約店
北隆館
電話本局 三〇七六
振替貯金口座 七五〇

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

新年號小説

耽溺　小栗風葉
一夜　島崎藤村
埋立地　眞山青果
藁　田山花袋
强者　正宗白鳥
四十女　德田秋聲



耽溺

小栗風葉

一

「私最う、階下へ行つてよ。」

女が耳の端で恁う呼いたのを夢現に聞いて、それから何時間ばかり經つたらう。其間山田は眠るでも無く覺めるでも無く、全て熱でも患つて居るやうに半醒半睡の間を昏々として居た。其中にピッショリ寐汗を掻いて、何とも言へぬ氣味の惡い心持で漸と目を覺した。昨夜の深酒で頭は重い、喉は燒くやうな渇を覺える。彼は枕元にあつた水注の生溫い水を其まゝ口移しに呷つて、而してホッと息を吐いて又仰向になつた。身内の汗は冷く乾いて行く。

日脚も高く、外は好い天氣らしい。雨戸の隙間を洩れ入る日の光が、幾筋か縞のやうに夜具の上を流れた。彼は目映しさに又目を塞いて了ふ。狹い四疊半の部屋は、昨夜から閉籠められたまゝ空氣が重く濁つて、ムッと息苦しいほどだ。て、彼も新しい外氣に觸れたら、然

ぞ心持も淸々するだらうと思ひながら、さて一思ひに起き出る氣力が無い。彼は實に息をするのも切ないほど困憊して居る。寢返りをするのも大儀だ。唯恁うして仰向きに凝と安臥をしたまゝ何時までも體を動かさずに濟むなら、此儘死んで行つても可いやうな氣がする。胸がムカ／＼して、胃にシク／＼微痛を感ずる。空腹の所爲だ。昨日彼は朝飯を遲く食つたまゝ、午飯も夕飯も食はず、日暮方から叟の二階で飲み出して、夜の一時過ぎまで飲み續けた。其間酒ばかりで、腹に溜る物と云つては殆ど口に入れない。體の困憊も疲勞も半ば其爲めである。

叟の庭一つ隔てた垣根の向うは、大工の作事場である。多勢が鑿て穴を穿る金槌の音が、カン／＼カン／＼と不揃ひに鳴り響く。其の騷々しい音が耳へは響いても、其れを腦裡に感ずる力も無いほど山田の頭は疲れて居た。が、目を瞑つて凝と聞いて居ると、殆ど絕間の無い其の不揃ひな多勢の音が、互に勤勉を競合つて居るやうだ。騷々しいが、然し激しい生活の努力が躍つて居るやうに聞える。彼は急に自分を耻ぢた。此の明るい眞晝間、恁うした薄暗い所に爲だら無く寢て居る自分が急に淺しくなつた。

「あゝ、今日は木村屋が來て居る！」彼は氣が付いて愕然とした。

木村屋と云ふのは房州の宿屋の亭主である。一昨々年の冬、山田は彌張恁うした惑溺の生活を續けた結果――尤も其頃は同じ惑溺でも、今よりは、對手も場所も幾らか上品であつた。が、此節の彼は最う然ういふ所では興味も刺戟も與へられなくなつた。好んで恁ういふ昏濁の境を泳ぎ廻つて居る――て、一昨々年の其冬は、丁度妻も病氣療養に子共を連れて郷里へ歸つて居たし、其所へ主が那樣風であつた

から、男暮らしの家庭は仍更荒んだ。山田も家が面白く無いし、窮屈にも飽くし、結句年の明けるのを待つて飄然旅へ出た。其旅先で引懸つたのが房州の木村屋である。

　彼が旅へ出た最初の決心は、留守中家庭の整理を友人に頼んで置いて、自分も今までとは全く新しい生活に入る意りであつた。所が、其旅行先の房州が又有名な放縦の土地であるし、それに物價は安いし、彼は其所でも亦耽湎の限りを盡した。而して二月ばかりの滯在に、木村屋だけでも三百圓近くの借金を殘して歸つた。一體木村屋の主人と云ふのは、客商賣に似合はぬ肌合の面白い變つた男で、恐しく山田を買冠つて居た。三百圓近くの貸しに、書附一本取るでは無し、折々催促の端書を寄來すぐらゐで、三年近くの今日まで其儘に濟して居た。それが今度は嚴しい督促狀を付けて、何時何日に行くから全額を是非渡してくれと言つて來て居る。と云ふのが、此前故々房州から訪ねて來た時、山田が居留守を使つて會はなかつた、其立腹もあるし、且つは不景氣續きで手許も實際逼迫して居るからだ。

「今日は、設ひ俺が留守だからつて、默つて歸りつこは無い。那男の事だから、俺が歸るまでは三日でも四日でも泊込んでるに違無い。遠慮は無し、酒は食ふ、然ぞ家内獨りで困つてるだらう。」と然う思ふと、山田は急に自分の妻に對して濟まない心持がする。

　けれど、それでも未だ一思ひに起きて歸る決心は出來ないのだ。シク／＼と胃痛のする腹部を抑へて、打伏しになつて、枕に顏を埋めて居る。彼は三百圓は愚か、百圓の調達も今は難しい。と云つて、受取るものを受取らねば何時までも木村屋は動くまい。高調子の房州辯で我鳴り立てるのが聞えるやうだ。

それを考へると、仍更彼は家へ歸る氣になれない……

「未だお睡つてゝ？」襖の外から女の聲がした。

襖が開いて、隣室の明い光線がサッと寢間一杯に流込んだ。枕元に油染みたセルロイドの挿櫛が落ちて居る。女は密と其れを拾つて頭へ挿した。

「貴方、最うお午ですよ。隨分睡坊ねえ、曩裏の旦那が、お目覺めになつたら是をつて遣いて被行つてよ。」と封書を差出す。

山田はハッとしたやうに顏を擧げて、寢床の中から慌て、其れを受取つた。而してガチ〱手を顫はせながら開いて見て、漸と安心してグッタリ又枕に突伏す。

「あら又——最うお起きなさいよ。」

「今起きる、最う些つと……」

「おや、お手水の水を取つて置きますから。」と女は階下へ降りて行つた。

後て、山田は最う一度今の手紙を讀んで見る。手紙は始終山田の家へ出入する古川と云ふ男が遣いて行つたので、昨夜も其男の案内で爰へ來たのだ。來る時は無論泊る氣など無かつた。女を對手に淺りと一杯飮んで歸る意りであつたが、一旦飮出したら醉潰れるまで飮まねば止まないのが山田の酒癖で——此の癖は強ち酒のみに限らぬ。彼は何事にも感興を半ばて切揚げる事の出來ない質だ。感興の覺切つて了ふまで、興味の最底まで貪り飽かねば止まない質だ。何うかすると、有りもせぬ感興をすら努めて震

起す、而して其感興を强ひて把持して行く——昨夜も彌張りそれて、到頭彼は醉潰れて了つた。
始めての客を素直に泊めたのは、隣同士見知越しの古川の顏があつたからだ。
て、手紙の文句は、昨夜の御依賴に任せて、今朝白井樣の所へお願ひに上つた。憖つか拵事を申上げるよりはと存じて、事實在りのまゝにお話したら、每もながら尊臺の感興横溢せる御行動を感嘆されて、而して快く承諾して下された。由つて、別封お目覺めを待つてお手渡し申すが本意であるが、御承知の通り、今日明日も圖られぬ愚妻の其出產用意に追はれて居るから失禮する。實は昨夜も那れから徹夜して、引續き今夕方までに例の〇〇社の爲事を是非爲揚げねば相成らぬからと云ふ意味て、別に十圓紙幣が一枚原稿用紙に包んであつた。
「白井は每も工面が好い。俺も來年は最う三十五だ！可い加減に緊まらねば可かん。」と山田は思つた。
すると、彼は家の事が氣になり出した。今日は月の五日、先月の諸拂の固まつた大きい口は皆今日に延してあるのだ。酒屋、米屋、家賃と胸算用をして居る所へ、女は又上つて來た。手に箒と拂塵を持つて居る。
「未だあ？床放れのお悪い事ねえ。」
山田は思切つて起きた。困憊した體は、着物を着更へて帶を結ぶ、其丈でも息切れのするほどの努力だ。踏む度びにミチ〳〵云ふ傾斜の急な階子段を降りるのに、足がフラ〳〵して微に眼眩を覺える。些つと見ると堅氣の番頭と云つた風の家の亭主が、彼の姿を見ると、急いて長火鉢の傍から立つて來た。

何うも行屆きませんてとか何とか追從を言ひながら、手水の汲んである縁側へ案内する。
「これ、誰か——おシャボンをお上げ申しな。それから、お手拭の新しいのを。」と呶鳴つた。
暖い小春日の當つた椽先で顔を洗つて居ると、霜解のした庭の向う、古い建仁寺垣の隙間から、隣の作事場てカン〱穴を穿る大工達の姿が那方這方透かされる。それに、奥行の淺い家て、往來からも見通されさうだ。山田も心が尤めて、手水も匆々にして二階へ歸つた。
二階は奇麗に掃除が出來た。南窓と東口の障子一杯にカツと日が目映しく射して、狹い四疊半の部屋は逆上るほど暖い。が、山田も有繫に人目を恥ぢて障子を開けずに措く。何の事は無い、行燈の中に坐つて居るやうだ。裏は例の騷々しい作事場の音、前は羅宇屋の汽笛や、下駄の齒入の皷や、車や人や、頻りなしの狹い往來を隔てゝ、向側は小學校の裏門になつて居る。優しい唱歌の聲も聞える、體操の號令も聞える。彼は自分の子共を思出さずには居られなかつた。それは今年六歳になる男の子て、毎も彼が外泊して歸ると、行成飛着いて來て、
「阿父さん、何所へ行つてたの。僕阿母さんと二人て寂しかつたよ。」と、然う言ふ。
起きるまては如何にも大儀だつたが、起きて見ると幾らか氣分も輕くなつた。然し腹には頼りが無い、口を利く張も無い。水て洗つた後は顔が熱つて、殘つた酒の氣がポーッと發した。「目がチラクラする、頭も昏朦とした。
「ちよ！何うなるものか。」と云ふ氣になつて、山田は妻子も家庭も、借金も職業も一切忘れて了はうと

努めた。

「何も有りませんが、御飯を上りますの？」女は茶を淹れて來て聞く。

「さあ……飯も飯だが、それよりも、一本先に熱くして持つて來てくれ。」

腹は恐しく空いて居る。けれど、酒氣の殘つた此の胸惡い所へ、飯など到底も通るものでは無い。彌張迎酒で、一時醉を發しさせるより外に治りやうは無いのだ。彼は友人から取寄せた例の紙幣を女に渡して、其儘左も右も帳場へ預けさせた。

偶と紙幣の包んであつた其紙を見ると、「白井」と刷込んだ手版の原稿用紙だ。白井は山田と同窓で、山田よりは二歳下である。○○座の座附作者をして、月々二百圓の手當を取る上に、絶えず新聞へ長い物を載せて居る。勉強家で、交際家で、常識の勝れた立派な紳士だ。山田のやうにヅボラで、不謹愼で、且つ貧乏では無い。

「尤も白井は、子共も無いし、夫婦二人暮しだからな。俺のやうに何うも、厄介者が多くては耐つたものぢや無い。」と口に出して言つて、山田は餉臺の上へ凝と考込んだ。

彼の一家は都合十人暮しだ。自分等夫婦に子共、下女に書生、それから自分の弟二人に、妹に從弟、それから腹違ひの妻の弟。以上の中には學資を給してやらねばならぬのもある、小使だけ補助してやるのもある。何しろ血氣盛りの若者ばかりで、食はせるだけでも容易では無い。山田の細腕一本では月々追着きかねる。其所へ持つて來て、彼自身は家を外に飲み歩くし、職業の性質上收入は不定だし、結

婚してから最う八年にもなる彼の妻も、今だに自分が主婦のやうな心持がしない。殊に自分と同年輩の小姑やら何やら多勢ウヂャ／＼して居るのであるから、全で合宿所のやうだ。家政も家庭もあつたものでは無い。唯始末の好い事には、妻は武家氣質の彌喧しい家庭に育つて、子共の時から深く儒教の薫陶を受けた事である。女にしては意志が鞏固て、物質欲にも割合に冷淡だ。貧乏も然ほど苦にしない。女學講義録か何かの安原稿をセツセと書いては、自分と子共の欲しい物や要る物を密と買つて樂しんで居る。夫や家庭に對する不平でもあれば、小説めいた物や美文めいた物に綴つて見て、其れを雜誌に載せて胸を晴して居る。て、口數も少なく、總てが那樣風な引込思案の女だが、それて居て自尊心は非常に强い。夫の惑溺に對して一向冷淡なのも、寧ろ無智無節操な卑しい女などに見代へられるほど、自分は無價値の女で無いと云ふ自尊心があるからだ。方便なもので、彼は夫の耽溺性を了解して居る意りである。

「あゝ、俺は這麽ヤクザな人間だし、不思議なコントラストぢや無いか。だが、何時まで那女も今のやうぢや可哀さうだ、何とか生活を一變せねば可かん。それには、第一に那の多勢の家族を淘汰する、而して最つと簡易な生活を營む――然うだ、生活を縮少して、俺も緩くり本でも讀むやうな暇が拵へたいものだ。這麽空虛な頭で、毎も／＼行らんものばかり書いて居て、何時まで生命があるものか。今に飽かれる、いや、旣に飽かれつゝあるのが俺には分つて居る。結局妻子を連れて、田舍新聞へでも都落を爲なけりや成らんやうになる。奮發するのは今だ！今の中だ。迷々して居ると後進が恐しい。其の後進

と云ふ事に氣が付くと、山田は急に難しい顏をして腕を組んだ。

それから、明日にも生活を一變しようと思ふ。少なく書いて多く讀む、多く讀むには、先づ生活を縮少して暇を拵へる、それには何よりも家族を減らさねば成らぬと考へる。其癖自分が恁うして耽溺して居る空しい時間と、不生產な浪費とを思はなかつた。

家族を減らす！―果して其れが明日にも實行出來る事だらうかと又考へた。多勢引受けて養つて居る、それには又一人〳〵に引受けねばならぬ相應の理由があつて養つて居るのだ。親に對する義務、親戚に對する義理、而して出來るものなら自分の弟妹にも、一通りの敎育と資格とを與へてやりたいと云ふ骨肉の情、其等を一切振棄てゝ、明日から自分一人の爲めに活きる――何うも其所までの決心と勇氣とは覺束無い。彼は案外氣の弱い、而して袈裟氣の去れない男なのだ。人に有難がられたり、恩に着られたりするのが内心好なのだ。

「まあ然し、善事の爲めの犧牲だと思へば腹も立たん。何有に、今のまゝだつて、俺が最う少し規則的に勉强して書けば、讀書の暇ぐらゐ裕に有る。何よりも自分の此の惑溺を些と愼しむのが肝心だ。」と考へ直した。

が、然うした殊勝な考を起しながら、其所へ例の女が酒を持つて來る。最う彼は目前の興を充實させたい其れのみに躁る。

男が困憊した顏をして默つて居るので、女も充らなさゝうに默つて居る。何ても元氣を付けねばと思

つて、山田は杯を取つて勢好く突出した。女が酌すると、杯がカチ〳〵顫へて鳴る。一時性ではあるが、彌張アルコール中毒だと自分でも思つた。盈々と注いだのを口元まで持つて行くと、熱燗の匂が鋭く鼻を衝いて、口を付けぬ中に最う胸がムカ〳〵する。目を瞑つて一息に干すと、ゲーと咽まで吐して來る。那樣思をしながらも、それでも銚子を一本空けた。

女は其間何にも言はずに酌ばかりして居る。何か談懸けると和こりするが、唯其丈で、外に旨味も面白味も無い女だ。成程色は白い、肉付も好い、センシュアルで、一口に言へは男好のするタイプだが、と云つて、何所に人を引着けると云ふほどの特色があるでも無い。這麼女が何うして氣に入つたのだらうと山田は自分で訝つた。が、究り何を言はれても、何を爲れても、唯和や〳〵笑つて居て、些とも厭やな顏をしない。對手を彈ませない代りに、何時までも同じ調子で、決して反感を起させないのが好いのだらう。三十越した中年者の、然かも色々な女に接し扱いた山田のやうな男は、恁ういふ馬鹿見たやうな女の方が好自由になつて、弄ぶのに氣が置けないのを喜ぶものだ。玩弄に人格は無い、生中利口振つたり、小意地を張つたり、人らしい取扱ひを要求されると厭氣が差す。

「然う〳〵、モーパッサンか誰かの小説にあつた、文明人が野蠻人の女を弄ぶ、究り那の心持だ。」と偶と思つた。

「お前の名は何と云ふのだ？」と聞く。昨夜から未だ女の名を知らなかつたのだ。

「お喜代。」

「お喜代――然う。何時から這麼所に居る？」
「先月末――蠣殻町から來ましたの」
「蠣殻町でも商賣をして居た？」
「えゝ。那地ぢや芳枝つて――聞いて御覽なさい、蠣殻町へ來る客は皆名を知つてるわ。」
彼等には彼等相應のプラウドがあるものだと、山田は可笑かつた。
「那地に居た時は面白かつたけれども、這地は充らないわ。場末ではあるし、それに帳場でも土地の様子が分らないものだから、餘り未だ商賣も爲せないし、這麼風して全でお爨どんですもの。ほら此手の荒れた事御覽なさい。」
　山田は其手を取つて、而して自分でも氣耻しいやうな事を言つたり、傍へ引付けて勘の好い玩弄にしたりして居る。女は腹も立たなければ、煩いとも思はぬらしい。相變らず和や／＼笑つて居る。が、有繋に心尤めゐても無いので、山田は醉はう／＼と努める。彼とても心から面白くて恁うして居るのでは無い。馬鹿／＼しいとも思ふ、耻づ可きとも思ふ。然う思ふのは醒めて居るからだ。醉へば興も湧くし、這麼女を對手でも面白くなる。それにチク／＼念頭を襲ふ所の色々な苦惱も紛れる。究り醉も興も覺め果てた此の厭な心持で引揚げるのが殘念のやうな氣がする。最う一度體の惱みも心の煩ひも忘れて、興の高潮に乘りたいのだ。其所で藥を飲むやうな思をしてまでも、日本酒やらビールやら、日暮方までには可也空けた。酒の廻ると共に、體の倦怠も困憊も段々忘れて行く。

燈の點く頃には山田も好い加減に醉つて、晝の中とは人の違つたやうに元氣が出た。額の廣い頰の張切れさうな顏が、テラ〱と眞赤に澤付いて、聲も高調子に彈む。何か言つては、其の圓々した體中を搖すり揚げて高笑ひするのが、裏隣の古川の家まで手に取るやうに聞えるのである。

裏の古川は、妻の出產に間に合ふやうにセッセと安爲事を爲て居る。遊好きの彼が、然うして大人しく家に居ると云ふのは能く〱忙しいからであるが、山田は最う醉つて了つて那樣貪着は無い。夜になつて客も立込む、女も始終自分の傍に引付けて置く譯には行かない所から、古川を呼びにやつて、

「最うお歸りなさるさうですから、些つと裏の旦那に被來つて下さい、少しお話爲たい事がお有りなさるんですつて。」と使に言はせた。

「本當にお歸りですか。」と古川は笑ひながら山田の座敷へ入つて來た。「嘘でせう？」

「いや、家の事も氣になるからね、今日あたり木村屋が來てる筈だ。」と山田は機て言つた。忘れて居るやうでも彌張忘られないのだ。偶と口から滑り出た自分の其辭て、彼は悉皆滅入込んで了つた。それでも故々呼寄せた古川には、杯を獻して酌をする。

「女は何うしました？」と古川が聞く。

「階下に客があつて――今呼ばう。」

「僕は用は有りませんが、貴方がお寂しいでせう。」と笑つたが、「○○社の爲事ですね、今日夕方までに行るのが未だ出來ないんです。是から二三時間稼て、今夜も徹夜です。」

「少し手傳はう――仕事を爰へ持つて來給へ。」

「何うして！到底も馬鹿〳〵しくて貴方なんかに出來るもんですか。それよりも、まあ飮んで被居い。」

古川は手を叩いて女を呼んだ。それから一時間ばかりも付合つて、山田の悉皆酔つたのを見て密と歸つて行つた。

何か階下で呶鳴る聲に驚いて、山田は偶と目を覺した。氣が付いて見ると、自分は搔卷を端被つて、何時の間にか假睡をしたのであつた。狹い部屋の中は鍋物の煮朽つた嗅が胸惡く籠つて居る。心を細めた仄暗いランプの影に、酒や醤汁で汚れた餉臺が侘しげに据ゑられてある。火鉢の火は白い灰になつた。酔も幾らか醒め氣味で、山田は又空腹を感じて來た。今日も亦一粒も口にしなかつたのだ。何か咽に通り好い饂飩のやうな物でも命じようと思つて、女を呼ばうとすると、ミチ〳〵と階子段を踏んで、誰やら隣の座敷へ上つて來た。

「お氣毒樣、最う火を落しましたから、何にも出來ませんてすつて。」と言ふ女の聲がした。

隣にも客の居るのを山田は始めて知つた。

彼が睡を覺まされた階下の呶鳴聲は又起つたが、其れも彌張客らしい。酔つて居ると見えて、言ふ事は分らぬが調子が激しい。宥めて居るのは亭主の聲だ。

山田は自分の端被つて居た搔卷を、密と押入へ圓め込んで置いて、それから輕く手を叩いた。隣で直ぐ返事がして、隔の紙門を細目に開けてスッと女が入つて來た。來ると先づ和として、

「お目覺め？」と低い聲で言ふ。

隣座敷を頤で杓つて目で聞くと、女は頷いて、些つと眉を蹙めて見せた。

「あら、お火が消えつ了つてね？持つて來ませう。」

「次手に、饂飩でも取つて貰へまいか。腹が空いて耐らん。」

「だつて、最う遲いんですもの。」

「何時だ？」

「最う直き十二時よ。」

「那樣になるのか！」と山田は稍意外だつた。

すると、女は耳の端へ口を持つて來て、

「あのね、何にも最う出來ないつて隣の客に斷つたんですからね、隣が歸つてから、何か吃る物を持つて來るわ。」と囁く。

女は火鉢の火を取りに立つた。二間限の二階は階子口が一つて、階下へ行くには隣座敷を通らねばならぬのだ。

「おい〳〵、喜ちやん。」通り懸りを隣の客は呼留めて、「何にも出來なけりや、ちや、酒はかしも最つと飲ましてくれ。」

「はあ。」と生返事をして女は降りて行つた。

すると、最う一人の八重と云ふ女が隣座敷へ上つて來て、

「あの、お酒も最う皆になりましたから、是から取りにやつても、遲くて最う酒屋て起きてくれませんから、何うぞ又明晩被行つて下さいませつて。」

「馬鹿にしてやがら！人が拂はねえと思ふのか――直ぐ書附を持つて來い。」と隣の客は到頭慍つた。女が喫驚して降りて行つた後て、「何だ、私窩子屋めが！」と獨りて息巻いて居た。

拂を濟して其客の歸つた後て、山田の女は火を持つて上つて來た。而して饂飩と云つても蕎麥屋は最う閉めたし、家には何にも無い。御飯も朝焚いたお冷だからと言ふので、海苔と生卵子を肴に酒を持つて來た。

「貴方、最うお寐つてお呟んなさいよ、遲いんてすから。」と女は言ふ。

山田は實は腹を拵へたら歸らうかとも思つて居たのだ。所が、最う十二時と聞いてウンザリした。爰から家までは可也の道程てある。俥も無しに今から歸られるものては無い。けれど、十圓紙幣一枚預けた丈て、昨夜から今日へ飲續けた上に、今夜も亦泊めてくれと言ふのは餘りに厚かましい。爰の家ても好い顔は爲まいし、一方には又家の事も氣に懸らねては無い。て、厭ても今夜は歸らねば成るまいかと思つて居た所へ、女が酒を持つて來て寐ろと言ふ、彼には渡りに船てあつた。それと云ふのが、毎も尻の長いのが彼の癖てあるから、今夜も何うせお歸りはあるまいと古川が言遣いて歸つたからて、女を始め帳場ても其意りて居たのだ。

階下ではドヤ〳〵客の歸る氣勢がする。

「又何うぞお近い中に——是にお懲り無く。」とお上が送り出すと、

「糞でも食へ！ 誰が來るものか。」と暴らかに格子戸を開閉して、霜に凍てた町を、下駄の音が横町へ出つて行つた。

「恐しい險脹だな。何ういふ連中？」と山田は女に聞く。

「書生さん達よ。」

「曩吹鳴つてた？」

「然うよ。何でも二人を泊めろつて肯かないの、泊めなければ朝まで飲明すのだつて——漸とそれでも歸つてたわ。」

「俺もそれぢや飲明さうかな。」

「飲明さなくつても、泊めたから可いぢやありませんか。」と笑ひながら、女は餉臺を片付ける。

曩の假睡て幾らか醒めたとは云ふもの丶、山田は可也未だ醉つて居る。醉つて見る所爲か、晝の中とはグツと女も見直した。小鼻の附根に面胞の痕の薄黑くなつた地顏で、襟垢の附いた双子の筒袖を着て二階の掃除に來た時には、何だか下女でも對手にして居るやうで興が覺めた。が、夕方風呂へ行つて身仕舞も爲、些つとした絹物に着更へた姿を、醉つてランプの影に見ると、場所相應に嬌しく彼の目に映じたのであつた。

二

翌朝も山田は十二時近くまで寐て居た。體の困憊は昨日に増して甚しい。設ひ深酒をしても、腹さへ拵へて置けば然うまで困憊するものでは無い。飲むと何にも食べないのが彼の悪い癖で、其爲め體も毀すのだ。それは自分でも知つて居る。けれど、物を食つて飲む酒は旨く無い、何うかすると酔へない事がある。少々體に惡くても、彼は旨く飲んで深く酔ひたい爲めに故ら虚腹で居るのだ。それに、最う一つ彼の惡い癖は、飲出すと限の無い事である。酒量は大して强い方では無いが、其代り腹さへ空いて居れば朝でも何時でも可い。而して一日でも一晩でも飲み續けて、酔潰れるまでは興も盡さずに飲む。自分で厭になつて切揚ると云ふ事は決して無い。那樣風だから、酒の後で物を食ふと云ふ事も滅多に爲ない。昨夜は途中で假睡をした爲めに、酔が醒めたやうな醒めないやうな妙な具合で、何時に無く何か食はうとした。然し、時間の遲かつた爲めに其れも出來ず、彌張又酒で通した。

て、今朝は少しでも腹に詰めて置かうと思つて、山田は努めて寢床を放れると、直ぐ飯を命じた。而して飯の來るのを待つ間も、起きて坐つて居られぬほど困憊した。部屋の隅に重ねた綿八丈の坐布團に其の綿のやうな體を橫へて、深い喘ぐやうな息をして居た。恁うして居る間も、始終彼の念頭を掠めるのは木村屋の事だ。昨日から家へ泊込んで居るに違無い。早く始末を付けねば心は焦々するのだが、焦々するだけで、何とか考へようとすると、頭の中はガスでも詰つたやうに唯仄とするばかりだ。

女は膳を運んで來た。半分白瀧で埋つた寄鍋に、後は卵子に燒海苔と云ふ決り切つたものだ。山田は海苔と漬物で漸と一膳だけ詰込んだが、全で口熱でも患つて居るやうに味も何にも無い。糠を食ふやうだ。目を瞑つて其れを鵜呑みにする苦しみは、實際膩汗が流れた。一膳飯は何とやらだから、最う半分でもと女は薦めたが、義理にも茶椀を出す氣になれなかつた。後は茶ばかりガブ〳〵飮んだ。

「今日は最うお酒は吃らないでせう。」と女は言つた。

「何故。」

「何故ても――今日は最うお舍しなさいよ。お家でも心配なさるわ。」

「家で？何有爲るものか。出たら毎ても俺は長いんだから。」口では事も無げに言つたが、山田は厭な顔をした。

女が膳を退いて階下へ降りた後で、彼はドタリと又横になつた。外は曇つて風が強い。閉付けの惡い戸障子はガタ〳〵鳴つて、二三本の貧しい庭木がザワ〳〵騷いだ。今日は隣の作事場も密りして居る。昨日の暖かさに引更へて、狹い閉籠めた部屋の中に火鉢を抱へて居てもゾク〳〵する。彼は裾から兩足へ座布團を載せて、横になつたまゝ懷手をして、ガタ〳〵貧乏揺りをしながら仄やり考へた。

勘定も大分食み出したに違無い。帳場でも懸念がつて居ようし、女も最う對手をし飽きたらう。丁度退擧げ時だ。厭な顏をされない中に歸らう、と思うには思つても、さて思切つて起つ氣になれない。飯は詰込んでも、體の困憊が直ぐ其れて治る譯には行かない。消化するまでは胸に溜つて、却て氣が重い。

それに木村屋の泊込んで居る事や、五日の諸拂の事なぞ考へて、然を家内一人で困つて居るだらうと思ふと、如何にも歸り愁い。

「昨日なら未だ可かつたが、二晩も空けて、此眞晝間仄やり歸られた義理ぢや無いて。二十でも三十でも可い、何所かで工面して持つて歸る法は無いか知ら。」と那樣事を考へて見た。

其中に、階下へは客が來た。

「やあ、お上さん、喜ちやん、昨夜は失敬！無理を言つて濟まなかつた。今日は僕一人でお詫びに來たよ。」と言ふ聲は、昨夜慍つて歸つた二人連の其一人らしい。

亭主もお上も昨夜の事は忘れたやうにチヤホヤする。何か謂はれてキヤツキヤと逃廻る山田の女の聲もする。二階の事は忘れたやうに、階下ばかり賑かだ。

「ちよ！歸らう。」山田は奮然として起つた。

帽子と外套とを手早く身に着けて、階子段をミチ／＼降懸ると、

「おや、お歸りで御座いますか。」とお上が起つて來る。

山田は頷いて、勘定附は裏の古川まで届けてくれと言遺いて、下駄を庭へ廻させた。

「喜ちやん、お歸りですよ。」とお上が呼ぶ。

今まで客と燥けて居た女は、慌て〻下座敷の紙門を開けて出て來た。

「あら、最うお歸り。又被來いな。」餘情も含蓄も無い、宛と子共の挨拶のやうだ。

山田は凍解のツル〳〵滑べる赤土の庭を衝と通つて、建仁寺の袖垣を廻つて、隣と共同の井戸端へ出た。産月の大きな腹を抱へた古川の細君が、下水の傍でゲー〳〵嘔吐いて居た。山田が聲を懸けると、直ぐ其所の障子を開けて古川が顔を出した。

借金取に會はない爲めに、門口と表の一間とは晝も雨戸を閉めた。而して四疊半の一間に、古川の爲事も細君の爲事も一緒に擴げられた。障子際に据えた大机の前に、古川は寢臭い掻巻に裹まりながら、寢不足の冴えない顔をして坐つた。昨夜山田の對手をして歸つてから、些つと二三時間の意りで横になつたのが、到頭今朝の四時頃まで寢過して了つた。それから午頃まで懸つて漸と爲事を爲揚げて、○○社へ持つて行つて、つい曩歸つたばかりださうだ。其爲事と云ふのは、「醫療大全」と云ふ田舎向の出版で、古川の行つて居るのは其部の傳染病篇である。彼に固より醫學上の智識なぞ些つとも無い。唯坊間に流布した通俗的の醫療書から好い加減に拔萃して、其れを言文一致體に書直すだけだ。隨つて原稿料と云つても殆ど筆耕賃同様であるから、一日に二十枚なり三十枚なり、紙數で成さねば立行かぬのだ。

「這麼事ばかりして居て、何時自分の眞面目な修養が出來るんだらう。今に又子共が生まれる――自家の立脚地も出來ない中に繋累ばかり殖えて、此儘行つたら生涯古川は○○社の筆耕書きで終らねば成るまい。二三年前まで、餘り彼奴が婦人に對して陋劣な行爲が多かつたから、我々も勸めて細君を持したものだが、今になつて見ると、家庭は慥に彼奴の發展を萎縮さした形がある……いや、古川ばかりぢや無い、家庭と云ふものゝ爲めには、俺なんぞも何のくらゐ累ひされてるか知れない。」と山田は沁々思ひ

た。

「今日は風が吹いて寒いから、何うせ一口吃つて被居るだらうと思つて居たが、能くそれても退擧げられましたね。素面ぢやありませんか。」と古川は笑ひながら言つた。

「然う／＼は、帳場て好い顔をして居まいと思つたから。」

「何有、其點は大丈夫てすよ。貴方の事は亭主に談して置きましたし、それに僕が直ぐ隣に居るんてすから安心して居ます。まあ然し、退擧げなすつても可い頃てすね。今日は僕の所で一杯元氣を付けて、而して夕方お宅まで御一緒にお送りしませう。」

「然し、君の爲事の邪魔爲やしないかね。」

「可いんてす。僕も未だ午飯前だから、是から一杯飲んで、グッと明朝まで寐る意りなんてすから。」

「僕が隣で那して居たら、寐ても君は睡られないだらうね。」と言つて、山田が和やりとすると、

「全くです。氣が揉めて勉强も手に付きません。」と古川も笑つた。

「笑事ては無い、古川は實際迷惑したらう。」と山田は思つた。

全く寒い日だ。ゴーと風が鳴つて、往來の砂埃がバラ／＼戸障子に吹き當てる。酒ても飲んで元氣を付けなければ、到底も外へ出る氣になれない。然し、腹の大きい細君が切なさうに動いて居るのを見ると、山田も氣毒て、酒も何んだか味が無いやうだ。それに、午食べた一杯の飯が其まゝ未だ胸に溜つて居て、體は相變らず太儀だ。古川に貰つて重曹を一摑みも頬張つて見たが、毎もならば直ぐ胸の透くの

が、今日は一向利かない。垣一重隔てた隣では、幾の客だらう、大きな聲で邊管はず騷いで居る。山田の女の開放しな笑聲が殊に能く耳立つて聞える。

「何だか鬱いでるぢや有りませんか。隣が氣に懸りますか、それともお宅の方——何らです？」

「兩方。」と山田は努めて笑つて見せる。

「兩方ぢや困りましたね。少しはまめ醉つて元氣をお付けなさい。」と古川は酌をする。

「何うも體が苦しくつて、有繫の僕も、今日は飲む氣になれない。」

「ぢや、湯にでも行つて見たら何うです。湯に入つて溫まつて飲んだら、屹度好い具合に酒が發しますよ。」

其所で、二人は連立つて近所の湯屋へ出掛けた。未だ四時になるか成らないのだが、曇つては居るし、短い冬の日は最う暮懸つた。芥々した裏町の八百屋や古道具屋は、埃塗れになつた店先の代物に拂塵を懸けて取込んで居る。魚屋の店はからからに乾上つた。ポツと薄明の射した蕎麥屋の暖簾がバタバタ風に飜つて居る。鯉口の懐手をした小僧が鼻唄を唄ひながら、勢好く山田等二人を駈抜け行つたが、丁度風向になつた横町の砂埃を眞面に食つて、四角でクルクルと廻つた。二人も顔を俯けて小走りに急いだ。

丁度夕飯前で、風呂は可也込合つて居た。山田は洗ふのが億劫で、湯槽の中に伸々と漬つて居たが、揚ると胸がムカムカし出した。て、一足先に湯屋を出て、新開地の薄暗い普請場の蔭で絕か吐いた。吐

いたのは泥醉で、酒ばかりだ。重曹で下らなかつたのも其筈である。吐いた後は胸もスーと輕くなつて、氣分も晴りした。遲れて出て來た古川を待合せて、二人は湯揚りの溫肌を好い心持で風に吹かれながら、濡手拭を下げてブラ／＼歸つた。町には悉皆最う明が點いた。

「氣分は何うです。歸つて一杯吃りますか。それとも、直ぐ是れからお宅までお送りしませうか。」

「さあ……歸りたいやうな歸りたくないやうな、妙な心持だ。」山田は暗い空を見上げて言つた。「最まではは體が苦しいので何にも感じなかつたが、僕は今妙な心持だ。耽溺から覺めた悔恨──そればかりでも無い。感興の漸く去らうとする其の怨み──まあ然う云つたやうな色々なデリケートな感情が一緒になつて、妙に慿う、淡い一種の哀愁を感ずる。」

「それは究り、家へ歸り惜いからだ。歸らねば氣に懸るし、歸るには歸り惜い──此鹽梅ぢや今夜も怪しいわい。」と古川は心に思つた。

㊉ すると、案の如く、途中まで來ると山田は言出した。今夜歸るにしても一杯元氣を付けて歸りたい。古川の家で飲むのも可いが、細君が身重であるので氣毒でならぬ。同じ飲むなら最う一度隣へ引返したい。それには、前の勘定も殘つて居るから、快く飲ませるか飲ませぬか、古川に向うの意向を探つてくれと言ふのだ。古川は大方那様事だらうと思つて居た。と言はないばかりの薄笑をしながら、山田を家に待たせて置いて、裏から庭傳ひに隣へ行つた。後に殘つた山田は、可笑しいほと眞面目な顔をして、古川の細君に産婦の衞生など注意した。

間も無く、古川は歸つて來た。隣では勘定の事など氣に懸けては居ない。唯餘りお長くなつては、お家や奥樣の事を何うかと心配するのだが、それさへ差支無くば、と淸い返事ださうだ。

「恁うして一旦信用されたと見ると、其信用の有る限り這方から乘ずるのか僕の毎もの遣口だ。爰だつて今に見給へ、愛相盡しをするから――長い事は無い、其迄の間さ。」と庭傳ひに隣へ出ながら、山田は恁う古川に囁いた。

二人は直ぐ二階の例の四疊半へ通された。古川も今夜は爲事は休みだ、何うせ明朝までは寐るより外に用の無い體だから、付合つて大いに飲みませうと言ふ。大いに飲まうと言つた所で、肴は酢章魚に蛤鍋ぐらゐより出來ないのだ。山田も胸氣持は治つたし、湯へ入つて氣分は淸々したし、肴は左に右く酒が旨い。頻りに杯が彈んだ。それに妙な癖で、女と對向ひだと存外彼は眞面目て、滅多に笑談も言はない。と云ふのが、可い年しながら若い行らぬ女を對手に、馬鹿〱しい笑談口を叩いたり、惡燥けを爲たりするのは自分で氣恥しいのだ。今夜は酒の廻りの好い所へ、古川と云ふ遊好の相棒はあるし、彼も何時に無く燥いだ。

「何うも、召上るやうな物が何にも御座いませんで。」とお上が挨拶に來ると、古川が、

「何有にお上さん、喜ちやんさへあれば、山田さんは何にも要らんのさ。」

「何うだらう、お上さん、」山田は女の膝からムツクリ頭を擧げて、「僕は惚れたんだらうか、此女に。お上さんの見た所ぢや何うだね。」

「さあ……如何て御座いますかね。何うだらう？喜ちやん。」

「まさあか。」と女は氣の利かない返事をして、些いと舌を出して、而して山田に目で笑つて見せた。

「おや、彌張御自身の胸にお聞き遊ばすんて御座いますね。だが、喜ちやん、這方の被仰る事を本當にしては可けませんよ。口では那麼事を被仰つても、彌張奥樣ほどお可愛いものはお有りなさらないんだから。」

「そりや、坊ちやんまでお有りなさるんだもの、ねえお上さん。」

「何有に、子供や嬶なんか、何時だつて放り出して了ふさ。」と言ふと、山田は偶と子供の事が胸に浮んだ。

此頃中から子供は頻りに上野の動物園へ行きたがつて居た。毎も弟や書生と行くのだが、今度は阿父さんに連れて行つて貰ふのだと喜んで居た。往きには電車て、歸りには山手線の汽車て、何所の西洋料理を食べて、何う云ふ繪草紙を買つてと毎日言暮した。所が、三圓か五圓の其小使錢が無かつたり、金の有る時には忙しかつたり、用があつたりして延々になつて居た。此一週間ばかりと云ふもの、朝ムックリ起きると屹度上野行を言出す。而して今日も駄目だとなると、然も委顇したやうに泣面をして黙込む、其の怜しい顏が山田は目に見えるやうだ。

「這麼所で浪費する金と時間があつたら、何故子供を一日喜ばしてやらない？あゝ、親効無い親だ！」と痛切に然う思つて、彼は冷たくなつた酒を自棄に仰いだ。

「古川君、君も到頭今度は、人の親になるんだねえ！」お上の降りて行つた後で山田は沁りと言つた。
「えゝ。てすが、當前の餓鬼ぢや平凡てすから、何うか恁う、目の三つある小僧でも産まれてくれりや可いと思つてるんてす。然うすりや早速淺草の奥山てすね――あれ〳〵御覽うじませ、親の因果が子に報ひ……」と古川は見世物の口上言ひの眞似をして、「ねえ、旨いだらう君ちやん。お前も見にお來でネ、御馴染効に木戸錢は取らないから。」
「古川、君は醉つてるね。」と山田は險しい顏をして、「君は何うも不眞面目で可かん！考へて見給へ、君の今の境遇で子共なんか出來て何うするんだ、え。眞面目に考ふべき場合だよ。」
古川は不意を食つてキヨトンとして居る。彼も成程醉つては居るが、山田は其以上に醉つて居る。顏も蒼醒めて、調子が激しい。女は氣を利かして座を外した。
「君、自分が活きようと思つたら、家庭なんかに囚はれて居ちや駄目だよ。可哀さうでも自己の爲めには、妻子なんか犧牲にする覺悟で無くちや――君も今の中だ、何とか考へて、繋累なんか振棄てゝ了ひ給へ。放浪生活でも何でも可い、最う一度獨りになるんだ、獨りになつて飽くまで自己を發展するんだ。」
「出拔けて面食ひましたな――いえね、僕も時々那樣やうな考も起して見るんてすよ。けれど、色々又傍の事情も、……」
「いや、それが可かんのだ。可哀さうだの不憫だのと、傍の事情を汲んでた日には彌張駄目だ。弱者は到底強者の犧牲ぢや無いか。夫婦だとか親子だとか云つても、究る所はお互の自我を食合つてるのに

過ぎんのさ。だから、浮かり可い氣になつてると、彼等弱者の爲めに却て還方が犧牲にされて了ふのは、考へものだよ。自我を全うして、飽くまで己れを活さうと思つたら、忍んでも强者の態度を取るんだね。僕も決心した。見す〳〵自我を屈して、周圍の犧牲になつて、それを美事とか善事とか思つて自惚れてたのは、未だ〳〵コンペンションに囚はれて居たのだ。家庭なんてものは弱者の巣さ。我々は弱者ぢや無い、巣なんか無用だ。一思に解散して了つて、今度は僕も、獨りになる！乾度なる！」

醉つて激しては居るが、何所までも眞面目で山田は言つて居る。古川も銜い釣込まれて、

「獨りになると被仰ると、奧さんや坊ちやん達も？」

「無論さ。妻子を其まゝにして措いて、他の家族ばかり減らさうと思つてたから、色々義理など考へて躊躇もしたんだ、親疎も差も無しに、全くの自分獨りになる意りなら、何有に、昻々然として遲疑する所は無いさ。」と酒臭い息を吐いて言つた。山田の其目は据つて、眸は底深く輝いた。

彼は其れで一切解決が付いたやうな氣がして、最う家庭も何も悉皆忘れて飮んだ。それから、前途の希望と云ふ事や、フレンドシップと云ふ事や、恐しく熱のある調子で十一時過ぎまで辯じた。

「ねえ古川君、君も人には誤解されてる、継子だよ。然し、僕だけは君を解してる意りだ。親と云つては潜上か知らんが、親身の兄ぐらゐには君を解してる意りだからね。君も最う餘計な知己は要らんぢや無いか、お互に腕り手を取合つて行らうぢや無いか。」と山田は聲を噂ませながら、固く手を握緊めて、到頭泣上戸の古川を泣かせて了つた。

山田は決して心にも無い芝居をして居るのでは無い。醉ふと毎も慿うした調子で、其時は眞心から感じて言つて居るのだ。けれど、一寐入りして醉が醒めると、ケロリと忘れて了ふ。

旋て、女が揚つて來て見ると、古川はシク〳〵泣きながら飾臺に向つて獨り何やらクド〳〵と並べて居る。と、飾臺の遠方の蔭では、山田が窮屈さうに肱枕をして、グー〳〵鼾を搔いて居た。

二十

其れは朝の未だ八時前であつた。

是非お目に懸らねば成らない用事とかで、俥で被來つて、階下で待つて被居る方があると言つて、山田の睡がるのを女は無理に起した。而して女の取次いだ名刺を寐惚眼で見ると、見る〳〵當惑の色が其の腫ぼつたい睡不足の顏に現れた。名刺の其れは〇〇雜誌の編輯記者だ。先月一杯に纏める筈の原稿が一枚も出來ず、今月五日――一昨日までには切めて半分だけでも渡す約束であつた。彼は悉皆其れを忘れて居たのだ。何うして爰が分かつたか、左に右く突留めて來た以上は會はぬ譯にも行かない。山田は寢床だけ揚げさせて、直ぐ二階へ通させた。自分は階下へ顏を洗ひに行つて、何か水菓子でも取つて來るように帳場へ賴んだ。

「何うも搜しましたよ。昨日から貴方のお來でさうな所は大抵步きました。」山田の顏を見ると、記者は先づ然う言つた。

俥で朝寒に曝らされた彼の顏は赤い。袴の膝を正して火鉢の前に四角に坐つた。

―困つてるわい。」と然う思ひながら、山田は努めて笑顔を作つて、「能く爰が分りましたね。」

「なかなか分らんて困りましたよ。昨日から貴方の家へも是で三度行つたですが、書生さんも奥さんも更ぱり心當りが無いと被仰るしな、實際困つたですよ。すると、不思議ですな、今朝貴方の弟さんの友人で、貴方の所へ語學を教へに來る人が丁度來て居て、其人が一昨々日の夕方、何所やらで貴方が最う一人脊の高い人と、一緒に歩いてるのを見たつて言ふてせう。脊の高い人と云ふと誰だらうと云つて、弟さんや皆で色々考へたですよ。〇〇君か、△△君か、いや、××さんだらうと云ふ說が多かつたですが、僕は古川君ぢや無いか知らと、何故だか其時偶と然う思つたですな。所が、其れが中つたから妙ですな。今古川君の所で聞いて來たですよ。」自分の報告すべき事は一通り報告せねば成らぬと云つたやうな調子で、次手に、「大塚とか云ひましたね、貴方の所で能く西洋料理なんか拵へる、那人が今來て居ましたよ、古川君の所に。」

「大塚が？」山田は思はず眉を顰めて、「僕の爰に居る事を知つてますか。」

「何うですか。知つたつて構はんでせう。時に、困りましたな、未だ一枚も出來ちや居ないでせう。」

「濟みません、明日から屹度懸りますよ。」

「爰は最う何のくらゐになつて居ます。」

「勘定ですか。」

「是と云つて食ふ物は無いし、席料は附かねし、それに十圓だけても入れてあるから、大した事はある

まいと山田は言ふ。記者は實は、原稿の半分だけの稿料を、五日の日に社長から預かつて爰に持つて居る。山田が今日爰を退擧げて、明日から乾度起稿する事を誓ふなら、持つて居る半額だけを遣いて行かう。其代り少々無理でも、十日の締切までには、是非全部脱稿して貰はねばならぬと言ふのだ。

「無論行ります。君が其丈遣いてつて下さると、爰も奇麗に退擧げられるし、明日から――いや、今日歸つて直ぐ懸ります、趣向は最う纏つてるんだから。」

「本當ですか。何うも險難だからなあ。勘定が濟んだから、又二三日と云ふやうな事は無いてすか。」と記者は和や〳〵笑つて居る。

「馬鹿な。僕だつて何が面白くつて、這麼所に何時までグッ付いて居るものですか。實際最う飽き〳〵した。」

「然うか知らん。叟取次に出た那女でせう。些つと好い女てすな。」と言ふと、記者はツカ〳〵と立つて行つて、階子段の上口から階下を覗いた。

「今お目に懸けます。」と山田は手を叩いた。

女は叟命じた水菓子を持つて上つて來た。新客の手前、顏も薄り白粉をして、髪を梳付けて、着物も働着の筒袖ては無い。記者は名を聞いても、

「然う、お喜代さんか。僕は何所かて貴方を見たやうだな。」

「蛎殻町て買つた事があるんでせう。」

「まさあか！」―と太さな聲をして、女は山田を打つ眞似をした。
「貴方、蠣殼町にも居たんですか。」
「嘘ですよ。」と言ひながら、女は逃げるやうに階下へ降りて行つた。
「掘出しものですな、全く！」と記者は其後を見送りながら眞顏になつて言つた。「御存じでせうか、大學生の間に一時有名だつた、本郷の○○軒のお安、僕の照ちやん、皆同じ那のタイプですな。可いですか、山田さん、本當に貴方今日歸れますか。」
「太丈夫！」と山田は堅く答へた。
其所で、記者は二十圓だけ山田に渡して、而して今日は是非退學げて、締切まで私は全部間に合せてくれるやうに、くれ〳〵も頼んで歸つた。
歸つた後で、山田は其二十圓を眺めて凡やり考へた。是丈でも持つて歸れば家へは歸り可い。然し、今日になつて見ると、默つて茲の家も出憎い。切めて半分だけは置いて、半分だけ持つて歸らうか、と那樣單な事も考へて見た。が、何よりも最少し寝たい。睡不足て目は澁いし、頭も痛い。金の始末は一睡入した上の事にして、女に掻卷と枕を出させて、又横になつた。而して暫らくヱゴ〳〵して居たが、何と思つたか、急に頭を擡げて劇しく手を鳴らした。何事かと思つて女が慌て丶上つて來ると、彼は嚢から握つて居たクチャ〳〵の温かい五圓紙幣を四枚、其所へ放り出した。
「其中で、お前の欲しいだけ取つて、後は帳場へ下げてくれ。」と言ふと、スッポリ頭から掻卷を冠つて

了つた。

山田は努めて睡らうとしたが何うしても睡られない。今日は又一昨日にも増して好い天氣だ。日は障子一杯にカッと照して、冠つた掻卷の隙間から顏へ射込む。隣の作事場では金槌の音は爲ない代りに、手斧や鉋の潔い音が入亂れて、彌喧しくは無いが人の氣をゾワ〳〵させる。前の小學校は日曜で密りとして、裏門の日當りに子守共が集つた。お手玉を取つたり繩飛をしたり、子共を泣かせたり朋輩喧嘩をしたり、體操や唱歌の聲と違つて、其最騷々しさは無い。ガラ〳〵と驅けて來てバタッと止る牛乳配達の車や、黄豆屋の風鈴や、振賣の呼聲や、頻りなしに耳へ入つて、何の事は無い、彼は睡い所を搖られるやうな心持で幻ら〳〵として居た。トロリとすると直ぐ夢を見る。夢と云つても半ば幻覺に近い。何か知らぬが木村屋と勵しく言爭つたり、妻や子共が怨しさうに自分を眺めたり、弟や妹に泣かれたり、然うかと思ふと、酒客讒妄のやうな、何だか爲體の分らぬ毛物が自分を襲ふやうな恐怖を感じたりする。全で幻責めに責められて居るのも同じだ。彼は耐らなくなつて終に飛起きた。些とも睡られなかつたやうに思ふが、帳場の時計を數へて見ると、十一時を打つた。

彼は便所に降りた。昨日あたりから酒で腸を毀して、便秘をする。階子段を降りて緣側へ廻ると、其所の日當りに山田の女と、今一人の八重と云ふ毒でも有りさうな蒼閑れた女とが、睡さうな顏を並べて、仄やり日南北向をして居た。山田の足音がすると、喜代と云ふ方が目映しさうに細目を開けて、

「便所？」と言つて、生欠をした。

山田は小半時近く默つて、凝と出た。女共は其のまゝ默つて矢張並んで居た。
「何うした、何を二人が凡やりして居る？」
「詰らないわねえ！喜ちゃん。」と片方が泣出しさうな顔をして、「死んで了ひたいわ。」
すると、山田の女が默つて溜息をした。
「然うだ！人格なんか無いも同様な彼等にも、意識せざる内部生命の苦悶がある。それが、漠然たる一種の哀愁となつて彼等の胸を襲ふのだ。」山田は直覺的に然う感じた。
而して、彼等の冥想を妨げまいと思つて、何にも言はずに二階へ歸つた。
「二人共、六十か七十の端金で縛られてゐるのだが、可哀さうなものさなあ！何うかしてやれないものか知ら。」と眞面目に那樣事を考へて見たが、直ぐ又、「何だ馬鹿な！彼等は先天的に墮落の素質を持つてるのだ。救ふよりは買つてやる方が功德だ。」と思返して、獨り苦笑をした。
間も無く女は、新しく火を加いで火鉢を持つて來た。火鉢を抱いて、其まゝ踞るやうに片肱伸して、頭をペッタリ疊へ付けて、
「あゝあ、厭だ〳〵。八重ちゃんぢや無いが死んで了いたいわ。」
「何うしたのだ？」
「何うも爲やしないけれど——貴方も最う飽きたでせう。」
「些とも飽かない。居れと言や未だ十日でも居る。」と山田は笑ひながら言ふ。

「這麼所に？私は又飽き〳〵した。蠣殼町に居た時は忙しかつたから、未だしも張合が有つたけれど……あゝ〳〵、這麼所に這麼事して居て、私は何うなるんだらう。」と言つて、女は又生欠をした。

生の倦怠！生の廓寥！次いて來るものは生の壞敗だ。彼等自身も今言つたやうな事を衝動的に感じては見るのだが、痛切に意識はして居ないのだ。少し面白い客でも來れば、直ぐ最う何も彼も忘れてゲラ〳〵と笑ひ得られる。淺しいと言へば淺しいが、山田は生眞面目な自分の妻以外に、恁ういふ淺しい女も無くては自分は送られないやうな氣がした。さあ、お前達が那樣風で居ると、俺まで氣を腐らして了ふ。今日は體の具合が好いから愉快に飮まう、飮んで今日は歸るのだ。お別れに、お前や八重ちやんにも何か御馳走爲よう、左に右く酒だ、酒を早く。」と元氣好く命じた。勘定を入れたので腹が大きい。

女が其通り階下へ言ひに降りて行くと、直きに帳場の亭主が上つて來た。夏の勘定の禮を言つて、而して今日は天氣も好いから、一つ氣を變へて外へお出掛けなさいと勸めた。生憎嗅が出て家では何にも出來ぬし、それに、毎日坐つた限てお體の爲めにも宜しくあるまい。運動旁た、此先の〇〇大師の豆腐料理でも召上りに被行つたらと言ふので、

「喜ちやんも退屈がつて居ますから、那女にもお供させます。然うなさいまし、其方が趣味か御座いますよ。」

「趣味か？成程。」と山田は微笑した。

其微笑を早合點に吞込んで、

「ちやア、失禮ですが是を。」と亭主は五圓紙幣を一枚出した。

山田は有繋に忸怩とした。亭主に小使錢を借りて、恁ういふ女を引張つて、白晝耻面を曝らして歩く。常に己れを持する事の露骨な、本能的の彼も是丈は些つと考へた。彼は結婚以來自分の妻とすら一緒に並歩いた事は無いのだ。成程、彼の萬事の遣口は露骨で無貪着のやうに見えるが、其實彼は案外心細かく見え坊なのだ。然し、彼を動かすものは好奇心である。好奇心の爲めには殆ど理智の判斷を省みない。随つて彼の行動は本能的と思はるゝばかり盲目的なのだ。

て、一度びは忸怩とし、一度びは躊躇もした。が、靜かな小春日の冬野を、若い女と二人で歩いて見るのも惡くは無い。殊に恁ういう種類の女であるだけに一層彼の好奇心を唆つた。と云ふのは、最から女の心は動搖して居る。何だか自分の本心の聲を聞かうとして、凝と耳を澄して居ると云つた風が見える。這麼時に男と二人靜寂な野を行つたら、甚麼事を感じて、甚麼事を言出すだらう。何か其所に期待されるものが有るやうに自惚れて、彼は終に出掛ける事に決めた。

女は絲織の襟の掛つた着物に、縮緬の消炭色の羽織を着た。空氣草履に縞のパラソルを翳して、家は別々に出た。而して二町ばかり先の町外れの四辻で待合せた。風の無い、春のやうな好い天氣である。空氣は透通つて、天は海のやうに澄んだ。田は悉皆苅られて、畔から畔へ掛稻が干し渡してある。何處まで行つても人子一人通らぬ。山田は立止まつて、遲れた女を待合せて、笑談のやうに手を取つた。女の手は荒れて固い。

「喜ちやん、甚麼心持だね、那麽穴のやうな所から恁ういふ廣々した田圃へ出て。」
「充らないわ。だつて、田圃ばかりで何にも見るものが無いんですもの。お大師樣は未だ遠くつて？」
「うん、最う直ぎだ。」それ限山田は默つて了つた。
軒並に枝柹や㧞飴を賣つて居る田舍町へ出た。子守が女の姿を見て、藝者が通る藝者が通ると囃した。
「大變な藝者だわ。」と女は有繫に赤い顏をして呟いた。
町を出放れると○○大師の山門だ。山田は直ぐ名物の豆腐料理へ入ると、料理を待つ間に女は大師へ參詣して來る。御鬮を引いて來た。吉とある。待人來る、願事叶ふとあつた。
「待人つて、誰だい？」と山田が聞くと、
「習志野よ。」と女は笑つたが、直ぐ、「噓！待人なんか有るものですか。有れば貴方よ。」
「觸かさなくつても可い。」と言つた山田の顏は、幾らか不快さうだつた。
豆腐料理は餘り旨くなかつた。山田は酒ばかり飮んだ。日が暮れると家が忙しいからと、女に促されて其所を出たのは、最う四時過ぎてあつた。女は俥で歸りたいと言ふ。
「俥おや話が出來ないおや無いか。」
「だつて、歩きつけないから憊れたんですもの。それに、歩いて歸つちや家が遲くなるわ。」
山田は不承々々に俥を傭つてやつて、女を先に歸した。彼は馬鹿しくて成らぬ。欺かれたやうな心持がする。

「あゝ、這麼事なら子共を連れて、上野へても行けば可かつた。」と又子共の事を思出した。

夕日は野の向うに落ちて、西の天が薔薇色に染つた。長く引いた自分の影を踏んで、山田は獨り寂しさうに田圃路を歸つた。夕風がスーッと地を匍つて、日和續きの乾いたボク／＼道に輕い砂埃を上げる。木立や人里のある隣は霧靄が立つて、最う暮の色が迫つた。光の消えた天は冷たく澄んで、星が一つ見える。と、山田は何とも言へぬ遣瀬無い心持になつて、突然涙含んだ。

何等か期待して飽かず求める肉の享樂！求め求めて、其期待は終に滿足されない。いや、滿足されないのでは無い。肆まゝなる享樂の底に絕えず鉛のやうな重い哀愁が澱んで居て、其れが滿足の度と共に段々心の表へ浮上つて來るのだ。羞耻と悔恨、其れに加ふるに體の苦痛、山田は檢束のない自分の情の崩壞と墮落とを沁々淺しく思つた。

が、彌張未だ淺しい其耽溺から身を脫する氣にはならない。途中から無理に俥で歸つた女の冷たい態度が忌々しい。歸つて文句の一つも言つてやらねば胸が治まらぬやうで、氣が苛々する。て、最う三四町と云ふ所まで來てから、彼は通懸りの虛俥に乘つた。歸つて見ると、女の俥は廻道をして未だ歸らない。彼は態見ろと思つた。年効も無く其れて溜飲を下げた。

客が立込んで、二階も階下も座敷が塞つて居る。お上は留守だし、亭主は八重と云ふ其女と二人てマゴ／＼して居た。十分ばかりも遲れて山田の女も歸つたが、着物を着更へる暇も無く、追立てられるやうに直ぐ座敷へ出た。山田は帳場の長火鉢の前て座敷の空くのを待つた。帳場と臺所の間の閾の上に兩

膝抱へて、柱に凭れた若い書生がある。未だ漸と肩揚が脱れたばかりの少年で、紺絣の筒袖羽織を着た。亭主は陰に對手にもしないが、女共は坊ちやん／＼と呼んで、銅壺へ水を注せの、火鉢へ炭を加げのと氣入らずに使つて居る。山田も始めは爰の家の縁者の者かと思つたが、然うでは無かつた。

「貴方退屈てせう。最う直き二階が空いてよ。」銚子の代りを取りに來て、山田の女は言つた。「何なら爰で一口吃つて被居つたら如何？」

有合せの下物て、山田は小ぴ／＼飲んだ。口は悉皆荒れて了つて、酒の味も分らぬ。

「おい、喜ちやん、僕にビールをくれ。」柱に凭れてジロ／＼這方ばかり見て居た少年は、出拔けに怒う言つた。

「坊ちやんが飲んで？　お舍しなさいよ。」と女は對手に爲ない。

「可いぢやないか。僕何だか醉つて見たいんだから。」

「生意氣言つて？　それよりか坊ちやん、些いと、其處の一ち下の抽出から海苔を出して、一枚焙つて頂戴。」

「人ばかり使つてらあ、這方の言ふ事は肯かないで。」と然う言ひながらも、少年は山田の食ふ海苔を素鹽に燒いた。

山田は笑止てもあり、一面に、又心得意の所もあつた。其中に女は座敷へ行つて了ふし、話相手は無いし、少年も充らなくなつたと見えて、大きな伸をしながら起上つた。而して玄關の土間で穿物を穿い

て居る所へ、亭主は臺所から急いで追驅けて出た。

「些つと——先達ての那勘定ね、此間もお話した通り喜ちやんの何になつてるんだからね、お連にも然う言つて、早くね。それで無いと喜ちやんが可哀さうだから、ね、可いかね。」

「あゝ、知つてるよ。明日あたり彼奴も爲替が屆く筈なんだから。」と言つて、少年はコソ〳〵と歸つて行つた。

「那いふ若い人には困りますよ。」と亭主は帳場へ歸つて山田に言つた。

話を聞くと、近所の下宿屋に居る中學生で、毎日のやうに遊びに來る。三度に一度は飲めもせぬ酒を飲んで、有りもせぬ金を使ふ。御贔負は有難いが、其爲めに若い勉強中の身を過らすやうな事があつては濟まないから、喜ちやんにも故と餘所〳〵しくさせて居るのだと亭主は言ふ。

其話をして居る所へ、八重と云ふ女が二階から降りて來て、奥の三人連の客が旦那に些つと顔を貸してくれと言つて來た。

「何うも風體の好くない連中だと思つたが、何か彌張文句を付けに來やがつたんだな。」と苦い顔をして亭主は二階へ行つた。

一頻りゴタ〳〵した後で、其三人連も退擧げた。而して山田は二階の毎もの座敷へ通された。今までは周圍がソワ〳〵して紛れて居たが、恁うして獨り落着いて見ると、再び又心が暗くなつた。豆腐料理て飲んだ酒は、歸りの夕風で妙に内攻して了つた。頭の心がヅキ〳〵する。彼は爰へ沈沒してから今日

て三日間の事が、全で遠い昔の事のやうに思はれる。つい夕方歸つたばかりの大師行さへ半ば夢のやうだ。階下の座敷には勘ちやんとか云つて、殆ど毎晩のやうに山田の女を張りに來る若い男が、今日も連を連れて遊びに來て居る。女の聲も交つて、面白さうに笑ひ騒ぐのが手に取るやうに聞える。

「羽色の美しい若鳥は、彌張花の美しい若木で無ければ宿らぬ。俺は最う實になつたのだ。」と然う思つて、山田は淡い嫉妬のやうなものを覺えた。

那樣事を感じながら、彼は虚の餉臺に凭れたまゝウト〳〵と睡りに落ちた。而して偶と氣が付いて我に歸ると、何と云ふ事は無しに、急に立つても居ても居られないほど家の事が氣になり出した。直ぐ俥を命じて歸らうと思つて時間を聞くと、最う十二時過ぎとの事に、折角の決心も其まゝ亦鈍つて了ふ。彼は何處までも立際の悪い男なのだ。帳場でも有繁に顔を顰めずには居られなかつたのである。

四

「山田さん、實に貴方には困りましたなあー」と昨日の○○雜誌の記者が悍立つて來た。

山田は毎もより稍早目に目を覺して、それから最う一時間の餘も寢床の中で仄やり目を開いて居た、其の枕元へ飛込んで來たのであつた。彼は改つて言譯をする元氣も無い。對手の言ふ事だけ聞いて、唯和やか〳〵と力の無い苦笑をして居た。記者は無論昨日の中に歸つて居るものと思つて、今朝山田の家へ行つたのださうだ。家でも山田の居所が分らぬので困つて居る。昨日から書生さん達が手分けをして捜して居るとの事だから、知りつゝ默つて居るのも濟まないと思つて、それと無く爰を談して來たとの事

てゐつた。

「誰か客が泊つてるやうな樣子はありませんでしたか。」と山田に懸念さうに聞いた。

「房州の宿屋の主人とかゞ……」

「未だ居ましたか。」

「貴方に會はなけりや、幾日でも歸らないんだとか、書生さんが言つてましたよ。」

然う聞くと、山田は猶更歸るのが厭だ。爰から直ぐ、何處へか旅へでも飛出したいやうな氣がする。記者には今日は必ず歸つて、二枚でも三枚でも書出すやうに固く約束して歸したが、彼は何うしても直ぐ歸る氣になれない。と云つて、爰に居る氣も無論無い。今日は弗々飽きた。何處か友人の所へでも廻つて日を暮らして歸らう。切めて木村屋を歸す旅費だけでも出來たら、其れも工面して歸りたいと思つた。

「今日は最うお歸んなさいよ、ね。直ぐ御飯を上げませう。」記者の歸つた後で女は言つた。

「今日は歸る。だが、飯は到底も入らない、酒を一本だけ飲ましてくれ。」

「駄目よ、御酒を呑むのなら。家の方が何と被仰つても飲ましてくれるなつて、階下で喧しく言置いて被行つたから、今日は呑らずにお歸りなさいよ。」

「歸るから、一本だけ帳場へ言つてくれ、素面で歸れるものか。」と山田の調子は激しかつた。

「呑ると貴方は、一本ぢや濟まないんだもの。」と訴しながら、女は降りて行つた。

と思ふと、直ぐ又引返して來て、

「今房州の木村屋と云ふ方が被來いました。」と取次いだ。

山田はハッと思つた。女の案内も待たず、木村は最う二階へ上つて來た。

「先生、何うも了へねえぢやありませんか。」と行成高調子で呶鳴つた。

背は低いが、圓々と小肥りに肥つた男で、草相撲の一つも取りさうな格服をして居る。何か文句を並べたさうにして居るのを、まあ〳〵と山田は宥めて、而して女を呼んで酒を出させた。木村屋も爰では有繋に貸金の事は言はなかつた。

「最う歸つちや何うです。大分はあ、お長いぢや有りませんか。」房州者丸出しの、最粗雜な口の利方をして、「先生も暢氣だねえ。家ぢや奧さんが獨りで困つてお居でだよ、坊ちやんが一昨日からはあ、熱が出て、昨夜なんかマンジリとも爲さんねえやうだがね。」

「風邪でも引かせたんだらう。」と事も無げに口には言つたが、山田の顏は氣懸りらしかつた。

「何有にね、氣管何とか云つて、子共に流るんださうでね。醫者もはあ、大事に爲なけりや可けねえつも——何しろ奧さん獨りで心配して居なさつたよ。」

「子共なんか、死んでくれりや有難い。」と心にも無い事を言つて、「それよりも、何うだね木村屋、此女を見てやつてくれ。這麽所には惜しいものだらう。」と傍で酌する女の頰を指で突いて見せた。

「先生は、女でありや皆好いんだからね。」と木村屋は苦笑をして、「這麽所に先生、貴方のやうに三日も四日もデレ〳〵してるよりや、氣に入つたら借金を突いてやつて、スパッとはあ、自儘にしてやるが可

いんだがね。ねえ喜ちやん、お前だつて其方が嬉しいだらう。」
「まさあか。」と言つて、女は和やく笑つて居る。
「先生、這麼所で言出すのも何だけれど、」と女の立つた後で、木村屋は澁い顔をして言出した。「俺ア最うはあ、三日も恁うして先生の處に厄介になつてるんだし、家の方の事も心配になるだからね、今日は是非先生に工面して貰つて歸りてえと思ふんだが、何うだらう先生。」
「さあ‥‥何とか一つ工夫して見るんだが‥‥」と山田は腕を組んだ。
「一體それて、何のくらゐ拵へて貰へますね。」
「幾らあつたら君は可い？」
「そりや貴方、皆買へりや言ふ事は無えんだけれど、先生だつてはあ、餘分な金が有る譯でも無えんだから、切めて玆て半金もね。」
「半金と言ふと——略とまあ百五十圓？」
「最う四年越しになるんだからね、金利を積つても可也だあね。」と言つて、木村屋は大きな目を据ゑて凝と見詰めた。
「何とか一つ奔走して見よう。だが、金の事だから、今日に今日乾度出來ると受合ふ譯にも行かない。まあ何うせ延次手だから、最う一日二日家へ泊つて居て貰ふんだ。」
「了へねえなあ。」と言ひながら、德利の酒を飲空きの煎茶々碗へ注いて、ガブリと一口遣つた。

それから木村屋は、此三日間山田の家に泊込んで居た間の苦痛を訴へた。自分は恁ういふガラッ八であるから、平氣な面をして飮んだり食つたりして居るものゝ、心の中では何のくらゐ奧さんに氣毒か分らぬ。遊びに來て厄介になるのなら可い、が、金を取りに寢込んで居ると思はれるのが愁い。先生は三日も四日も外へ出たまゝ歸らぬ、坊ちやんは病氣、其處へ又自分と云ふ鬼に寢込まれて、奧さん獨りの心配と苦勞とが思遣られる。一昨夜であつた。坊ちやんの容體が素人目の自分にも不安心に思はれたから、醫者に診て貰ふやうに勸めると、奧さんも夜が明け次第連れて行かうと言はれた。すると、其夜の四時頃、偶と自分が臺所に起きて目を覺ますと、奧さんはセッセと何か書きものをして居るらしい。夜陰の深と寢鎭つた家の中に、墨を磨る音、紙を撥ねる氣勢が爾かに聞取られる。何の爲めの何ういふ書きものか其れは知らぬが、自分は何が無しに涙が零れた。

「先生、那麼女なんかに溺れてちや奧さんの罰が中りますよ。早く歸つて上げる事だね。」と木村屋は大きな目を潤ませて附加へた。

山田も思はず頭を垂れた。

「お家から書生さんが被來いましたが……」と女が懸念さうな顔をして又取次いで來た。

「書生が！子共の容體でも？」と山田は咄嗟に思つた。「階下の座敷が空いてるだらう、直ぐ通してくれ。」

階下へ降りて見ると、年の行かない生眞面目な書生は、臆病さうな目をして見慣れぬ邊をキヨロ〳〵見廻して居る。開放つた縁側の日當たには、メリンスの長襦袢を擴げて干した。

[illegible]の用たね、[illegible]へ？」と山田は故ら不興氣に見せた。

「えゝ……奥樣があの、」

「迎ひに寄來したのか。」

「いえ、お迎ひに參つたのぢや有りません。唯お目に懸れたら、伺つて來いと被仰いまして。」

妻からの言傳は、第一が子供の病氣、其れは氣管支毛細炎とか言つて、危險症であるとの事。第二に木村屋の事、諸拂の事。それから△△新聞の原稿が後最う二回で切れると云つて、一昨日から三度電報が來た。○○雜誌と××週報とから是又原稿の催促。次に何、次に何と書生は並べた。而して外の事は左に右く、原稿の催促は何う取圖らつて可いか、それ〳〵お指圖をして戴くやうに奥樣から命ぜられて來たとの事であつた。

「先生、坊ちやんも何てすが……未だお歸りには成られませんてせうか。私がお供しますが。」と書生は顏色を見い〳〵言つた。

「可し〳〵、夕方までには歸るから——木村屋も一緒に連れて歸るから、何か酒の肴の用意をして置くやうに、家內に然う言ひな。」と故ら氣強い事を言つて、山田は書生を歸した。

で、彼が座敷を出て二階へ行かうとすると、帳場のお上が、

「お迎ひて御座いますか。」と言ふ傍から、八重と云ふのが笑ひながら、

「餘りお長いものだから、奥樣が御心配なすつたんてせう。」

「何有に、亭主には用は無いが、米櫃が虚になつたんださうだ。」と山田は聲だけて笑つた。

二階では木村屋が女を對手に無駄口を叩いて居たが、山田の顔を見ると、

「お迎ひですね。」と是も然う言つた。

「さあ、少し飲んだら何うだ、木村屋は飲めるんだから。」山田は苦い顔をして冷たくなつた盃を干した。

「それよりか、爰をはあ、左に右く退擧げやうぢや有りませんかね。」

「這麼所から眞晝間出られるものか、まあ夕方まで飲むさ。」

「先生の長尻と來ちや、本當に了へねえよ。」

それでも木村屋は夕方まで默つて付合つた。山田は最う如何な事にも日本酒は飲めない。ビールも抜かせて見たが、其れもコップ一杯空けるのが漸とであつた。頭の中は妻子や家の事で引搔廻されるやうだ。其中に冬の日は暮懸つて、ランプも來た。

「さあ、退擧げませうね。」と木村屋が促す。

「退擧げよう！」と山田も思切つて起つた。

「おや、本當に最うお歸りですか。」と女も送りに立つて、「又被來いな。」

「來るとも、愛相盡しをされるまでは來る！」と言ひながら、山田はジッと女の手を握緊めた。心の中では、何と言つて家へ歸らうか其れを考へて居た。

勘定附は、矢張裏の古川まで屆けて貰ふやうに言遺いた。外へ出ると、彼はホッと息を吐いた。何だ

が解放されたやうな心持がした。

五

二人は俥で歸つた。風の無い水蒸氣の多い晩で、星が常よりは遠く見える。賑かな町を出放れて、背後に續く木村屋の俥の轍が獨り山田に耳立つた。彼は外套の襟を立てゝ、其の眞黒な大空に煌き零れた星影を車上に凝と見詰めた。自と懷しいやうな尊いやうな、ついぞ覺えぬ敬虔な念が胸に迫つて涙含まれるやうだ。而して心配事の重なつた、家の閾の高い事を忘れて居る中に歸つた。車賃は二臺共木村屋に拂はせた。

弟や書生の出迎へたのを故と見向きもせずに、山田は直ぐ妻の居間へ行つた。妻は子供に添寢をして居たが、夫の姿を見ると、

「おや、お歸りなさいまし。」と慌てゝ起直つて、而して急に胸が迫つたやうに涙含んだ。

「子共は甚麼だ？」と山田は先づ聞く。

「今日は大分快いやうで御座います。昨日なぞは醫者も手重な事を申しますし、私も獨りで本當に心配しました……」と言ふ聲は潤んで「昨日實はお醫者へ連れる前に、私、講義錄を少し書いてお金を取りに廻道をしましたものですから、朝早く俥で冷たい風に當てたのが、彌張可けなかつたんで御座いませうよ。」

「能く此中て書けたねえ！」

「だつて、書かねば――貴方はお留守だし‥‥」

「濟まなかつた‥‥其れを言ふ事は舍さう。」と手を掉つて、山田は外套のまゝ子共の枕元へ寄つた。

病苦に疲れて子共はツト〳〵睡つて居る。時々夢中で囈囈をする。咽にハンケチを卷かせて、枕元の火鉢に鍋を懸けて湯を沸らせた。山田の氣勢にフッと目を開いて、其の黑い眸で凝と父の顏を見詰めたが、

「阿父さん、僕苦しいの。這麼に苦しいんだもの、阿父さんは何故早く歸つてくれなかつたの。」と言つた。

「うむ、最う何處へも行かないから、お前も早く治るんだ。治つたら阿父さんと上野へ行かうな。」と言ふと、山田は昨日の大師行を思出して、耐らなく心咎めた。

で、行成其の熱のある小い額に自分の唇を遣つた。

書生に言付けて歸した、其言付け通り酒の支度もしてあつたが、山田も有繋に濟まなくて飮む氣に成れなかつた。木村屋も輕く一本だけ飮んで、直ぐ飯を食つて、弟達を誘つて寄席へ行つた。

山田は湯へ入つてサツパリした所へ、暖い寐衣と着更へて、困憊した體を炬燵に休めながら妻に語つた。無論耽溺の辯解である。外泊の言譯である。妻は毎も耳にし倦きた決り文句で、唯笑つて聞いて居たが、尾ひに恁ういふ事を言つた。

「貴方が何も、然ういふ女の爲めに愛を二つになさらうとは思ひませんから、それは安心して信じて居

ますけれど……昨晩も大塚さんが來て、色々な事を喋つて行きますし、それで無くても子共の病氣でヤキモキして居る所ですから、私も衝い厭な心持がしまして……それに、今度は少しお長過ぎましたもの。」

「大塚が何を喋つた？」

「昨日の朝古川さんの所へ行つたら、隣の二階で、貴方が色の蒼い女と寐恍けた顔をして覗いて被居つたのを見たつて——それから、對手もあらうに那いふ女を何うだとか恁うだとか、然も私が貴方に侮辱されてるやうに言ふんですもの。」

「畜生！失敬な奴だ。」山田は故ら勃然とした。「那樣顔なんかして俺が覗いてるものか。古川に俺の居る事を聞いて、可い加減な拵事を言つてお前を焚付けようとしたのだ。大塚の野郎め、好い年をして獨者だから、人の夫妻間を妬んで水を差さうとするのだ。二度と最う寄せ付けんやうに、絶交狀を附けてやる！」

「ですが、餘りそれでは穩でありませんから、——貴方さへ是から、然ういふ所を見せないやうに注意して下されば可いんですから。」

「然うさ、大塚を憾るより、自分を耻ぢたが可い。」と彼は心では忸怩としたが、口では、「怪しからん奴だ、何ても絶交して了ふ！」と嵩に懸つて言つた。

而して直ぐ絶交狀を書いて、書生に郵便で出させた。それから二十分を經たぬ中に、彼は炬燵に凭れたまゝ疲切つた顔をして、鼾を掻いて居た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

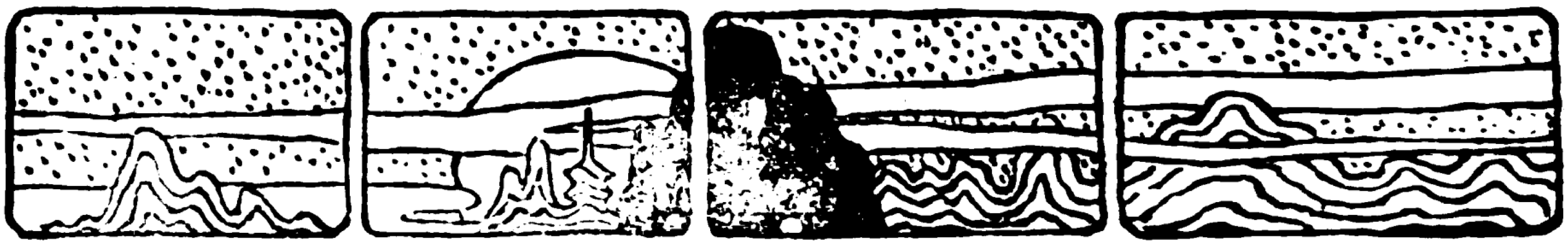
山田は引續き家に歸らぬ事にして、原稿も諸拂も一切斷らせて置いて、自分は翌日と翌々日と二日懸つて、漸々百圓だけ調達して木村屋に渡した。木村屋はお禮心に山田を然る料理屋へ案內した。彼は醉つて其晩も亦前の女の所へ轉込んだ。後の彌々困る事は分つて居ながら、色々な煩い責任を考へると衝い家に歸るのが厭になるのだ。而して三日目の午過ぎ蒼い顏をして仄やり家へ歸つた。子供は未だ咽へハンケチを卷いてゴホ〳〵虛咳をして居る。○○雜誌の原稿は無論出來なかつた。彼の財政は益す紊亂するばかりてある。

（完）

留守居

小栗籌子

風葉氏の「耽溺」を讀める人は必ずや次號の誌上にあらはるゝ籌子女史の「留守居」を讀まざるべからず。



一夜

島崎藤村

會社員正太の家では、主人も、細君も、母親も出て居ない。唯老婆一人茫然と留守をして居る。そこへ三吉叔父が石段を上つて、格子戸を開けて入つて來た。この三吉は一寸町を一廻りして來るにも敷島の三四本は燻すといふ煙草好な男である。

「お仙さんは未だ歸りませんか。」

斯う叔父は老婆に尋ねながら下座敷を眺め廻したが、姪のお仙が歸らないばかりでなく、壁に寄せて座蒲團の上に寢かして置いた吾兒の姿も見えなかつた。

「坊主は！」

「坊ちやまですか。めんめを御覺してしたもんですから、御隱居樣がおんぶなさいまして、表の方へ見にゐらッしやいました。」

夏の夜のことて、河の方から來る涼しい空氣が座敷の内へ通つて居る。叔父は水淺黄色のカアテンの下つた玻璃障子の處へ行つた。そこから石段の下を通る人や、町家の灯や、水に近い夜の空などを眺めて、其夕方のことを思つて見た。子供は姉が買つて置いたといふ犬の玩具にも飽きて、むづかるので、甥の細君とお仙とが町を見せに連れて行つた後、二階の椽に近く煙草盆を持出して、そこて姉弟が互ひに話を始め様とすると、急に甥が階下から上つて來た。『母親さん、お仙さんが居なくなつたさうです。』と甥は座りもせずに言つた。其時の甥の聲、洋燈の光に映つた顏……やがてそれから一時間ばかり經つ。

急に叔父は老婆の方へ引返した。

『もう一度、私は行つて見て來ます。』

老婆は考深く、『御孃樣も、もうそれでも、御歸りに成りさうなものてすね。』

『何處てすか、そのお仙さんの見えなくなつたといふ處は。』

『なんでも、奥樣が御一緒に買物を遊ばしまして――ホラ電車通りに小間物を賣る家が御座いませう――彼處なんて御座いますよ。奥樣は、御孃樣が御側に居らッしやることゝ計り思召して、坊ちやまに何か御見せ申してゐらしつたさうてすが、鳥渡振向いて御覽なさいましたら、最早御孃樣は御見えに成らなかつたさうてす。えゝ、それはもうホンの鳥渡の間に……』

この老婆の言葉て、小間物屋の店頭といふことを確かめて、早く行つて見つけて來やう、斯う思ひながら三吉は出て行つた。

二度目に三吉が町を一廻りして來て、電車通りの向側にも、手前にも、暗い横町にも、何處にも姪の姿を見なかつた時は、何となく不安を増して來た。柳並木の陰には腰掛を置いて凉んで居る人もあつたが誰もそんな娘を見かけないと言つた。叔父はしばらく路次の角に立つて、姪を待受けて居た。何時まで經つても見えさうもない。一旦甥の家へ引返すことにして、例の石段の下までやつて來ると、正太の母親は玻璃障子のところに立つて居る。

「姉さん、お仙さんは――」と叔父は往來から聲を掛けた。

「未だ歸らない。」と母親は娘の身の上を案じ顔に答へた。

其時まで三吉はのんきに構へて、どうせそれは歸つて來るものだ位に巻煙草を燻して居たが、あまりにお仙の歸りが遲いので、漸く本氣に成つた。そして、あの無邪氣と言つても無邪氣な、二十二歳でも人形のやうに育てられた、殆んど何等の抵抗力も無い、可憐な娘が、大都會の眞中で、しかも夜、方角も解らずに彷徨つて居ることを感じた。其年齡に成るまで、母親は一日たりとも娘の保護を怠らなかつたのである。

「三吉。」と母親は叔父を家の内へ入れてから言つた。「お前は今夜是方で泊つて呉れるだらうね。」

「えゝ、兎に角行つて坊主を置いて來ます――それから復たやつて來ませう。」

「あゝ左樣してお呉れ。弱い子供だから、母親さんが心配するといけない。ワン〳〵も持たせてやりたいが、可いわ、私がまた訪ねる時にお土産に持つて行く。」

斯ういふ話の後、三吉は眠さうな兒を姉の手から抱取つた。

「坊ちやまの御下駄はいかゞいたしませう。」と老婆は言葉を添えた。

「下駄は置いて行くサ。」と母親が言ふ。

「ナニ、構ひませんから、新聞に包んで、私の懷中へ振込んで下さい。」

斯う叔父は答へて、子供を肩につかまらせ乍ら出た。子供は眠氣に頭を垂れて、左右の手もだらりと下げて居た。「まあ、御可愛さうに、おねむて居らッしやる。」と老婆が言つた。三吉は口に卷煙草を咬へることを忘れなかッた。

聽て叔父が自分の家へ子供を運んで、復た電車で引返して來た頃は、半鐘が烈しく鳴り響いて居た。電車の窓から見ると、火は丁度甥が住む町の方角に當る。近づけば近づく程、正太の家あたりが今まさに燒けて居るかのやうに見える。お仙が居なくなつたといふさへあるに、おまけに、火事とは。三吉はもう仰天して了つた。電車から降りて、早速駈付けて見ると、路次、往來は人で埋まつて居る。

火は正太の家から半町程しか離れて居なかつた。

「これはまあ何といふ事だ。」

といふ母親の言葉を聞捨てゝ、叔父は二階へ駈上つた。續いて母親も上つて來た。雨戸を開けて見ると、燃え上る河岸の土藏の火は姉弟の眼に凄じく映つた。尤も、心配した程ではなく、どうやら一軒て濟むらしい。見て居るうちにすこし下火に成る。

「もう大丈夫。」

と正太も階下から上つて來て、言つた。暫時の間、三人は無言の儘、一緒に火を眺めて立つて居た。

三人が階下へ下りて、お仙の身の上を案じた頃は、まだ往來は混雜して居た。石段を上つて來て、火事見舞を言ひに寄るものもあつた。正太は心の震動を制へかねるといふ風で、三吉の顏を眺めて、

「叔父さん、濟みませんが下谷の警察まで行つて下さいませんか。」

「さあ、左樣しませうかね。」と叔父も首を傾けた。

「淺草の警察へは、今、屆けて來ました。」

「お仙も、」と母親は引取つて、「彼樣いふ神樣か佛樣のやうなやつだから、存外無事で出て來るかも知れないよ。」

「お仙さんは、こゝの番地を覺えて居ますまいね。」と叔父が聞いて見る。

「どうも覺えて居まいて。」と母親は嘆息して言つた。

「なか〳〵車に乘るといふ智慧は出さうもない――おまけに、一文も持つて居ない。」と正太も附添した。

叔父は思ひ付いたやうに老婆の方を見て、「老婆さん、貴方はあの路次のところへ行つて、角に番をして居て下さい。おやあ、私は下谷まで行つて來ますからね。」

斯樣な風に手筈を定めて、三吉は電車の無くならない中にと、下谷の警察を指して急いで行つた。

往來の人通りも次第にすくなくなる頃、叔父は電車で歸つて來たが、もう何となく四邊がシーンとして居た。暗い路次の角まで行くと、そこに老婆が見張をして居る。正太の細君も悄然立つて居る。
「未だ歸りませんか。」と三吉は二人に近づいて言つた。
「叔父さん、どうしたら可う御座んせうね。」
斯う細君は愁はしげに答へた。其時淺草の警察へも見せたと言つて、お仙が着て居る浴衣と同じ切を出して、細君はそれを叔父に見せた。三吉は手に取つて見た。
「まあ、家へ行つて相談しやうぢやありませんか。」
斯ういふ三吉の後に隨いて、二人の女は默つて歩いて行つた。
正太の家には、お仙を除くの外、捜しに出たものが皆な一緒に成つた。斯うして集つて見ると、あの娘の居なくなつたといふ感じが一層深い。三吉は卷煙草が盡きたので、老婆に使を頼んで、敷島を二つほど注文したが、最早何處の煙草屋も戸を閉めて了つた。老婆は空しく歸つて來た。
「何時でせう。」と三吉が言出した。
「十一時過ぎました。」
と正太は懷中時計を出して見て答へた。
彼は呻吟するやうに部屋の內を歩いた。軈て玻璃障子の閉めてあるところへ行つて、暗い空を窺ひな

夜は更けて來た。正太は皆なの居る方へ引返して、今更のやうに考へ込んだ。時々彼は[illegible]、可恐しげな眼付をし乍ら、最愛の妻の顏を睨みつけた。

『あぶない／＼と平素から思つて居たが、是程とは思はなかつた。』正太は斯樣な風に妹のことを言つて見た。

『一體、私が子供などを連れてやつて來たのが惡かつた。』と叔父は言つた。

母親は引取つて、『そんなことを言へば、私がお仙を連れて出て來たのが惡いやうなものだ。いや、誰が惡いんでもない。みんな彼の娘が持つて生れて來たんです。奈何なことが有らうとも、私はもう絶念(あきら)めて居ますよ。それよりは働けるものがよく働いて、夫婦して立派なものに成つて呉れるのが、何よりですよ。』

『私はね、』と正太は叔父の方を見て、『事業(しごと)と成ると奈何(どんな)にでも働けますが——まあ、使へば使ふだけ、ます／＼頭腦(あたま)が冴えて來る方(はう)ですが、斯ういふ人情のことには實際閉口だ。』

『正太もまた、斯樣なことに凹んで了ふやうなことぢやいけない。』と母親は健氣にも吾兒を勵ますやうに言ふ。

『ナニ、これしきのことにヘコンでたまるもんですか。私の頭腦(あたま)の内には、今、會社の運命がある、——おまけに、明日は三十日といふ難關を控えて居る。』

斯う言つて、正太は鋭い眼付をした。

『さアさ。』と母親は浴衣の襟を掻合せながら、家中を見廻して、『出來たことは仕方が有りません。兎に角、一時頃まで皆なに休んで貰つて、三吉と正太には氣の毒だが、それからもう一度捜しに行つて貰ひませう。三吉、すこし寢たが可い。老婆もそこで横にお成りや――それにかぎる。』

寢ろと言はれても、寢られる譯のものではなかつた。左樣いふ母親が、第一眠らなかつた。すこし横に成つて見た人も、いつの間にか、起きて、皆なの談話に加はつた。十二時頃、一同は夜食した。

柱時計が一時を打つ頃から、三吉、正太の二人は更に仕度をして出掛けることに成つた。

『叔父さん、風邪を引くといけませんよ――シャツでも上げませう。』と言つて、正太は細君の方を見て、

『股引も出して上げな。』

『ぢやあ、拜借するとしやう。』と叔父が言つた。

『叔父さんは煙草が無いんでしたね。斯樣なんでも持つていらッしやいませんか。』

と言つて、細君は女持の煙草入を貸して呉れた。叔父はそれを袂に入れて、股引に尻端折、正太もきりゝとした服裝をして、夏帽子を冠つて出掛けた。

『正さん、君はこの裏通を捜して呉れ給へ。僕は電車通を捜しますから。そして、雷門の前あたりで二人落合ふことにしませう。』斯う叔父は發議した。

『えゝ、では左樣いふことにしませう。』と正太も同意して、『雷門の交番の前あたりで――どつちか先に行つたものが彼邊で待つことに。』

この約束で二人は別れた。

雷門へは叔父の方が先に着いた。最早往來の人も絕えて、さすがの東京も全く眠つた。

軈て公園の暗黒の光景が二人の眼前に展けた。觀音堂の周圍は言ふに及ばず、そこゝの樹蔭、軒下には、一夜を震へ明すやうな無宿者の群がうぢや〳〵集つて、放肆に手足を投出して居た。これが夏の夜でなかつたら、互ひに抱合つて、僅かに身體を溫めやうとするものも有るだらう、斯う正太は薄氣味の惡い人達の前を通り乍ら言つた。驚くべきことには、こゝへ來て睡眠を貪つて居る老婦もあつた。斯うして二人は公園の內を探つて歩いて、最後に活動寫眞の繪看板の下に立つたが、何處にもお仙の姿を見なかつた。

『公園にも居ない。』

到頭正太は絕念めたやうに言出した。

據なく二人は交番へ行つて、巡査にお仙のことを委しく話して、年齡は二十二に成るが十八九にしか見えないといふことまで言ひ置いて、それから復たもう一度廣小路の通りへ出た。

柳並木の下には、蹲踞んで一服やるに好さそうな處があつた。二人はガツカリしながら煙草入を取出した。

『河の方を探る必要は有るまいか。』と叔父が言つた。

「さ、私もそれを思ふんですが——」と正太も沈んで、『しかし……其樣な容子はすこしも見えません

したもの。」

暫時、二人は無言の儘、ボカリ〳〵と煙草を燻して居た。

「今頃、横町などに迷つて居るやうなことも有るまいナア。」

「えゝ、えゝ、自然と暗い方から明るい大通りへ出て來ませうからね。」

この正太の説明に叔父は感心したといふ風で、夏帽子を冠り直して、起上つた。

「正さん、では斯ういふことにしませう。君は斯の通りを上野の方へ行つて見て呉れたまへ。僕はもう一度淺草橋の方を捜します。こゝで吾儕は別れませう。」

と言はれて、正太も叔父の前に立つた。二人は慘とした感に打たれて、互ひに帽子を脱いて左右へ別れた。

「こりやあ、ウカ〳〵しちやあ居られない。」

別れる時、二人は斯う思つた。

叔父が廣小路前の道路を淺草橋の方へ辿つて、交番の前に足を留めたのは、間もなくであつた。意外にも、叔父はその交番の巡査から、お仙が警察の手に救はれたことを聞いた。多分細君が迎へに行つて、最早今頃は歸宅して居るだらう、と聞いた時は地を踏んで喜んだ。

「成程――あゝ左様ですか。フン。」

叔父は狂人じみた聲を出して、何遍も同じことを繰返して、その巡査に禮を述べた。

「早く正さんにも知らせたいなあ。」

斯う思ひやり乍ら、甥の家を指して飛ぶやうに急いで行つた。

「姉さん、お仙さんが歸つて來たさうですね――よかつた、よかつた。」

先づ叔父はそれを庭で言つて、それから皆なの居るところへ上つた。もしお仙が子供なら、堅く抱〆て、自分の喜悦を表したい、と叔父は思ふ位であつた。

「お仙、叔父さんに御禮を言はないか。」

と母親に言はれて、お仙はすこし顏を紅めながら手を突いた。この無邪氣な娘には、奈何思ふことを言ひ表して可いか、解らなかつたのである。

「叔父さん、もうすこしで危ないところ。』と細君は妹の後に居て言つた。『なんでも、惡い者に附かれたらしいんですが、好い鹽梅に刑事に見つかつたんださうです。そして、今迄警察の方に留めて置かれたんですツて。」

斯樣な話をして居るところへ、正太もある交番で聞いたと言つて、妹の無事を喜びながら入つて來た。

「隨分心配をさせられたぜ。もう／＼奈何なことがあつても、獨りでなんぞ屋外へ出されない。』正太はホツと溜息を吐いた。『お仙がもし歸らなかつたら、それこそ家のやつを擲殺して呉れやうかと思つた。』

昂奮のあまり、正太は、我を忘れて此樣な激語を吐く。細君はまた細君で、涙を拭いて、

「ええ、そこどこぢやない。お仙さんが歸らなければ、私はもう死ぬ積りでしたよ。』

これほど兄夫婦を心配させた出來事も、實際、お仙は傍で思ふやうには考へなかつた。その無邪氣さは一層彼女を可憐しにて見せる。

一同はお仙を取圍いて、いろ〳〵なことを尋ねて見た。お仙は混雜した記臆を辿るといふ風で、手を振つたり、身體を動つたりして、

『なんても、その男の人が私の處を聞きましたから、私は知らん顏をして居た。しまひには、あんまり煩いから、長岡だつて左樣言いつてやりました。』

『長岡はよかつた。』と叔父が笑ふ。

『先方の人も變に思つたてせうねえ。』と細君は妹の顏を眺めて、『お仙さんは、自分ぢやそれほど可畏いとも思つて居なかつたやうですね。』

『知らないから。』と正太も微笑みながら言つた。

お仙はされ〳〵に思出すといふ顏付て、『ハンケチの包を取られては大變だと思ひましたから――あの中には姉さんに買つて戴いた白粉も入つてますから――私は斯うしッかりと持つてましたよ。男の人がそれを袂へ入れろ〳〵と言ふものですから、私は入れました。さうすると、斯の袂を捕へて、どうしても放さないぢやありませんか。』

『アヽ、白粉を取られるとばかり思つたナ。』

斯う正太が言つた。

「えゝ、」とお仙は思出したやうに微笑を浮べて、「それから方々暗い處を歩いて、しまひに木のある、明るい處へ出ました。草臥れたらうから休めッて、男の人が言ひましたから、私も腰を掛けて休みました。」

「へえ、腰掛が有りましたか。して見ると矢張公園の内へ入つたんだ。」と叔父は言つて見た。

お仙は言葉を續けて、「煙草を服まないかッて、その人が呉れましたが、私は一服しか貰つて服まなかつた。夫婦に成れなんて言ひました――えゝえゝそんな馬鹿なことを。」

「しかし、刑事巡査が丁度通り合せて宜う御座んしたよ。」と細君は警察で聞いて來たことを言出した。「もしさうで無かつたら、どんな目に逢つたかも知れません。」

お仙は、兄や、姉や、叔父などの話し合ふ言葉に耳を傾けて、時々解つたと思ふことが有る度に、無邪氣に笑ひ轉げた。その年齢に成るまで彼女は男といふものをも知らずに居る。暗黒な人生に對しても、彼女の心には少女らしい恐怖しかない。この可憐な娘は自分を陷没れやうとするケダモノをすら疑はなかつた。

「よかつた、よかつた。皆な二階へ行つて休むことにしませう。正太も明日事業のある人だから、すこし休むが可い――さアさ、皆な行つて寝ませう。」

斯う母親が先に立つて言つた。

「皆様の御床はもう延べて御座いますよ。」と老婆も言葉を添へた。

軈て一同は二階へ上つて寝る仕度をした。三吉は、甥の側ですこし横に成れと勸められたが、どうし

ても眠られなかた。彼は一旦入つた臥床から復た這出して、蚊帳の外で煙草を燻し始めた。

お仙も眠れないと見えて起きて來た。細君も起きて來た。三人は二階の椽のところへ煙草盆を持出した。しまひには、母親も我慢が仕切れなくなつたと見えて、白い寢衣のまゝ蚊帳の内から出て來た。

「正さんはよく寢ましたね。」と叔父は蚊帳を覗いて見る。

「これ、そうッとして置くが可い。明日は大分多忙しい人ださうだから――」と母親は聲を低くして言つた。

其時、細君は起つて行つて、水に近い雨戸を開けかけた。

「叔父さん、一枚開けませう。もう夜が明けるかも知れません。」（終）



埋立地

眞山青果

一

目が惡るく、耳が惡るく、そして近頃は足まで不自由になつた。右の腓が一面に濕して、歩くに引擦りたい程水氣を持つた。眞向に坐れないのが最う半月の上になる。亞鉛華を塗抹つたり、槖吾を貼付けたり、樣々の手療治もして見たが、容易に乾きさうな驗が見えぬ。繃帶を通して着物の裾がきたなく濡れた。何しろ歩るくが商賣同樣だから始末に可けない。

その目も、耳の鳴るのも、この足も何れ同じ理由から出て身體中に祟るのには相違ない。娘どもは父の病が出るたびに、嘲笑ふやうな苦い面付をして見せた。又初まつたと云ふ顏である。勝氣者の女房お林なぞは、「若い時が若い時だもの。」と口穢く罵つた。

然し當人は到つて氣に掛けない。誰某の足も惡るい。誰某も惡るいさうだと、錢湯からて

も傳染る皮膚病らしく遇ふ人ごとに吹聽して、外から出た疾か何んぞのやうに聞かせて居た。而して、毎晩十時過ぎて、下し湯の時を見計つては二三丁先きの硫黄泉へ通つた。ゆつくり湯に漬つて歸つて來ると、暗い椽側に足を投げ出して、一次は乾いた胼の死皮を丹精に剝ぎ初める。白い膏藥を塗つて厚く繃帶するのだ。この頃は繃帶の間へ竹皮のへぎまで挾んだ。穢れ繃帶を洗ふのは、顏色の黄色い、鼻の低い妹娘お吉の仕事と決つて居た。

好く客のある家で、多くは郷里から出た學生どもが、氣の置けぬ家として茶話に集まつた。姉娘のおさくは客を憚つて何時も顏を顰める。

「穢ないからね、お父さん、暗い方へ行つてなさいよ。一體何故お醫者に診て貰はないんだらう。何時までしても癒りやしない。」と、傍には隨分聞き辛らい事をツケ〳〵と云ふ。

「今の醫者どもに何が癒つて。あの温泉が一等です。一晩休すむと現に惡るいのが見えるからな。」と平氣で手療治をやつて居る。

「あの剛情だもの。」娘どもは打遣つて置く外はなかつた。

唯、出來ることなら、四五日も凝づと家に息んで居て見たいとは始終然う云つてゐる。歩けば熱を持つ、惡いに決つて居る。然し、折角こゝまで漕付けて、今一息と云ふ仕事を、むざ〳〵手離すのが殘念でならない。雨敬も說伏せたし、澁澤も陰ならば力を貸すと云つて居る。今は主務省の認可を待つばかりである。その大事な瀨戸際だもの、身體の不自由ぐらゐに手を退いては居られない。

「まア／＼お前達は默つて見てゐるさ。何うてお前達は他の儲けて來た金を費つて居れば、それて文句は無いんだらう。」と今にも五萬と十萬と纏つた金が轉つて來さうな話ばかりてある。

「ヘン、貴方の五萬圓も久しいもんだ。何んの五萬圓どころか、五百圓ても好いから此所にあつたら、他にかれこれ云はれてまて、おさくの學校も半途に爲せたり、小學校の敎員などに出しはしませんよ。聞いてりや限が無い。」と肥つた、血の多い頰に嘲笑つて居る。

「斯う云ふ馬鹿てす。貴樣達に何が判るもんか。まア／＼、長くて後半月の辛棒だから。」と量の利きさうな銀煙管を指先にクル／＼させて居る。斯うなつても扮装は壞さない人て、出の着物だけはチャンと取つて置く。毎晩歸つて來ると、仕末よく自分て本疊みにして、羽織には霧も吹き、熨もかつて置く。これには娘ども丶默つては居ない。

「だけどね、お父さん、誰だつて貴方を信じて居る人はありませんよ。深川の伯父さんてさへ、あのけむにも困つたものだと、呆れて居ますよ。」

「けむだ？？俺がかい。」と笑つて居る。咽低く、呆れたやうな笑ひ方てある。

慶吉は去年の春から或る埋立の事業に着手つて居る。××灣のある磯濱に、大根小根の二つの暗礁を支障に防波堤を造つて、その圍内の四百幾十町歩を耕作地にしやうと云ふ目的なのだ。技師を入れて大方の設計も出來た。潮足、土壤、排水の邪魔も無い。慶吉はその設計圖と、郡會の認許證とを內懷に抱いて、毎日東京市を奔走して居るのてある。

二

今朝も一紛着して慶吉は家を出た。朝の電車に晩くなると、女房や娘どもを幾らせついても起きない。女房のお林は今日も頭が痛いと寢て居る。噛付くやうにして辛つと妹娘のお吉を起して、冷飯を掻込んで朝霜の深い六時頃に家を出た。ブツ〳〵云ひながらも、兎に角、用をするのはこの娘である。姉娘は終日の勤仕事に身體が草臥れて居るとて、朝は太抵誰より晩くまで寢て居るのだ。

「見ろ、何奴も何奴も。今に覺えて居るが好いと然う云へ。」と朴齒の日和下駄の泥を拭落しながら慶吉はその小さな目を鋭くして妹娘を睨んだ。

「だつて昨夜はおそかつたんですもの。誰だつて睡むいわ。」と寢衣に細紐姿のお吉は十一月下旬の朝の寒むさに唇の色も變つて居る。

「誰に頼まれて夜深しするんだ。油駄目な、麥喰馬のやうな書生どもを集めて何が面白い。俺が斯うして足を引擦りながら歩くのは何んのためだと思ふ。」とプン〳〵憤つて出て行つた。

露地の日蔭を、枕を精に跛曳き〳〵出て行く後姿がいかにも寒むさうに年寄染みて見える。肩が落ちて背が丸るくなつた。慶吉は今年五十一、女房のお林は十四下の三十七である。

姉のおさくは起きてから先づ手水に暇取る。髪を奇麗に取上げて、飯を濟まし、着物を着換えて學校へ出て行くまでタツプリ二時間はかゝる。直ぐ九時になる。

「さア、お母さん。味噌汁を何度溫め直せば好いんですよ。」と姉の出た後で奥の六疊に行つて起すと、母は二度寢の夢を深々と、枕にガックリ仰向いて鼾を掻いて寢て居る。傍には起拔けの父の夜具がその儘になつて居た。

本當に頭が痛いと母は寢返りして起きなかつた。この頃は妙に我勢がないやうだ。何をするにも臆劫がる。小鼻が少し殺けた。眉毛が薄すくなつて、額際が際立つて澤を持つた。

お吉は朝晴の明るい光線に、骨組の好い、肉置きの厚い、顎も口も大きい母の寢顏をシゲ〲と見て、「乾度然うなのぢやないのかしら。」と思つた。好うく見た。そして何がなしさげすむやうな、物でも投付けてやりたいやうな氣がして母を睨めた。母は少し口を開いて、肥つた腕を投げ出して寢て居た。

「私一人下女に生れたんぢやない。」と態と皿小鉢をガタピシさせて、足音も荒らく、お吉は朝の片付にかゝつた。そしてそこらの掃除が濟むと、日當りの近い玄關脇の窓際へ小机を持出して、新聞紙に習字の稽古にかゝる。お手本は千蔭の揖滴帖である。宇野さんと云ふ大學生に貰つたのだ。

姉のおさくは高等女學校を卒業して、その上の學校へも二三年行つたが、お吉は小學校限りで家の手傳して、田舍に居る頃は貸金の集め方なぞまでして居た。

日和に逆せて、唇の皮を剝いて居る所へ、母のお林はしぶつけぬ顏して起きて來た。ボンヤリ火鉢の前に坐つて、額を抑え乍ら何か考へて居た。お吉は故と知らぬ顏をして居た。

「あゝあ、明後日は晦日だ。」と獨言のやうに云つて、煙草を喫して居た。

「お母さん、貴方何處か惡るいんですか。」とお吉は障子の此方から然う云つて、些と肩を窄めた。

「何だか氣分がハッキリ爲ない。時候が惡るい所以だらうかね。」

「そんなら好いけど、大切にしないと可けませんよ。」

「あゝ、それもこれも皆お父さんの爲めだ。東京でこんな苦勞をする位なら、寧そ國へでも引込んで了ひたいと、近頃は染々然う思ふね。」と張合の無い聲であつた。

「だつて、お父さんは後半月だつて、あゝして奔走して居るんだもの。考へて見ると氣の毒になるわ。」

「お前あれを本當にして待つて居る氣なの。馬鹿〳〵しい、好い氣なもんだ。」とさも〳〵馬鹿〳〵しさうに笑つた。

正午近い、明るい日射は、椽側を閾近くまで射付いた。二坪ばかりの乾き切つた小庭の隅には、山茶花の薄紅の花がポッカリ咲いた。お林は寢起の肌を鳥肌にして、ウッカリと眺めた。障子の下棧に蠅の唸り聲が、裏住居の晝を靜かに〳〵と聞かせた。

お吉は小机に突伏して、頰を眞赤に眠つて了つた。

三

今日は何時もより晩く、六時頃、慶吉は片裾を撮上げながら、ガッカリ草臥れて戻つて來た。腹も減つた。上り段へ腰掛けて、暫くは息を入れて居る。

賑かさうな茶の間の話聲がバッタリ止んで、「何うしたの、お父さん。」とお吉は障子を開けて見たが、それには返事も無つた。土間に脱ぎ散した下駄どもを見て、不機嫌さうな顔をした。

「何うしたの、そんな所へ腰掛けて。」

「お林、政吉は來なかッたか。」と病足を引摺りながら上へ上つた。

「疾まで來て居たやうだから、どッかその邊へ出たんでせうよ。」と女房は素氣ない返事であつた。膝の上に夕刊の報知新聞を讀んで居る。

「用事があつたんだがな。」と口小言のやうに、羽織を脱いで、「誰方も御免なさい。」と客の前に足を投出した。

「お湯へ被行つたんでせう。井戸端の垣根が仆れさうだつて、獨りで手入してお出でだから。」と姉娘のおさくは、故とらしく改つた言葉振りであつた。

慶吉は些と眉皺を寄せて娘を見た。何んとも云はなかつた。

林檎やバナヽ、餅菓子がそこに出て居る。吊洋燈を圍んで、火鉢を三つまで持出して、國出身の書生どもが今夜も三四人寄つて居た。醫科大學の宇野と、工科の田島とは近頃毎晩のやうに來る。特に宇野は無類の寄席好きで、好くお林とおさくとを誘出した。お吉は何時も留守居である。書生どもはお林を小母さん〳〵と呼んだ。

慶吉は誰よりも宇野を嫌つた。面も見たく無いと云つて居た。

「何うてす、小父さん、事業の方は。」顏に似合はず愛想者の田島は坐り直して先づ聲を掛けた。宇野は外方を向いて、鹽煎餅をポリ〳〵嚙つて居た。

「へえ、なアに。」と故と何氣なく、遜つて云つて見たが、妙に後から追立てられるやうな氣がして、「まア何うやら斯うやらものになりさうてす。今ぢや此方より金主の方が乘氣になつてね、今日も十五銀行の井上と會つて來ました。」と、ツイ添加えずには居られないのだ。

「着々進行だ。ぢや、吉ちやん、愈々以つて鎌倉河岸が近くなつたぜ。」

「貸馬車を半日借りて東京中乘廻すんだつて、厭な事つた。」と菓子を頰張りながら、おさくは口を開いて笑つた。釣込まれてお林も笑つた。

慶吉は今日會つた實業家の、拔目ない、大腹な、そして鋭く人を見る態度なぞを細かに話して、獨りて感服して居た。話の相手は田島一人てあるが、慶吉は私かに皆の顏を讀む事を怠らなかつた。平常錄ひな餅菓子にもポツ〳〵手を出した。

「そこは先方だつて商賣だ。手を貸すつても算盤の上てさ。頭から呑まうとするんだから恐ろしい、五厘だツて隙は見せられませんや。腹の減つてるのを勘付かれちや大變だ。何所迄も野太く出てね、先方を壓して出なきア駄目てす。皆その懸引てすからな。」

「然うてせうな、ハア、ハア。」と聞上手の田島は何んても感心さへすれば好いと云ふ態度てあつた。

「あら、お父さん。それは宇野さんの御馳走てすよ。默つて喰べてるのね。」菓子に行く父の手を見

て、おさくは傍から注意した。

「然うか、何時も御馳走様です。」と口をモグ〳〵させて居た。

「いや。」宇野は些いと頭を下げた限り、お吉とおさくを相手に、何か小聲で笑ひ話して居た。

「お吉、御飯だ。何を忘れて居るんだ。」と慶吉は急に思出して云つた。

「未だなんですか、晩いんだもの。」

「晩いたッて歸るに決つて居る人だ。用意して置かないッて事あるか。然う云ふ馬鹿だ。手前達さへ腹が充滿ければ親の事なぞ忘れて居るんだ。」と聲を變へて娘を叱り付けた。

「靜かに云つても聞えますよ。」お吉は膨れッ面してプイと暗い臺所へ立つた。

政治が外から歸つて來た。二十三四の鼻の丸るい、額の壁つた、正直さうな若者である。仕事場から直ぐ來たと云つて、毛糸の厚ぼッたいジャケツの上に、角定と襟に抜いた袢纏を着て居た。皆が席を讓つても政治は閾外の薄暗い三疊に、細い股引を窮屈さうに坐つて居た。湯の歸りに緣日をひやかして、蓄音機の同じ雲右衞門を三度も聞いて來たと笑つて居た。

この若者は先妻が生んだ慶吉の伜で、母が離別後は遠緣にあたる木場の材木屋角定に引取られた。先妻は慶吉の放蕩を怨み死に、間も無くそこに死んだ。慶吉が秋田縣に流れてお林を妻としたのは、その二三年後であつた。

政治はその角定の仕事場に働いて、職人では先づ可也の顔になつた。些いとした入札などは手鍛で分

を張つて見た。上總から女房を貰つて、男の兒もある。一昨年、慶吉が秋田の身上を仕舞つて出京するまでは、文通も碌々しなかつたが、今では昔を忘れてちよく〱出入して居る。

今日の晝頃、久し振りに慶吉が尋ねて來て、急な用事があると云ふから、仕事を友達に差繰つて早速來て見たのであつた。

「御用ッて何んの用です。急ぎの事なんてせうか。」政治は遠慮して、未だ慶吉を父と呼んだ事が無つた。

「まア好いよ、ゆつくりしてお出て。後に相談しやうよ。」と慶吉は不興さうな口振であつた。

「もう八時過ぎてます。深川までぢや歸りが遠いもんですから。」

「泊つて行くさ。些と込入つた話があるんだから。」

「へえ、難有うがすが。」と煮え切らずに居る。

「自働電話をかけるさ、店まで。店から言傳して貰ふと好い。」

「嬶が、その本當な身體ぢやないんですからね。」と政治は煙草の吸口で頭を掻いてエヘラ笑つて居る。

「歸らう。」宇野も急に帽子を取つて立上つた。田島も外の一人も立つた。おさくやお林が留めて見たが、外に廻る家があるからと出掛けた。

慶吉は俯向いて何か考へて居た。

「宇野さん、些いと〱。」

門口まで出て行つた宇野を呼止めながら、おさくは手當り任せの下駄を穿掛けて、急にその後を追掛けた。そして、暫らくそこに立話して居る。

「おい、おい。」と慶吉はその小さな目を鋭くして、お林の顏を見た。

「何んです。」とお林は素氣も無い。

「何んだ。早く呼べ、馬鹿。」

「貴方がお呼びなさいな。私の連れ子ぢやありませんよ。」と故と當附がましく云つて、暗い六疊の方へ引込んだ。

「あれだもの。」と慶吉は厭々しさうに舌打ちした。

お吉が膳立して、そこへ搬んで來ても、慶吉は表の方ばかり氣にして居る樣子であつた。お櫃を投出すやうに置いて、お吉も六疊へ引込んだ。お林は娘と何かドグ〳〵云へながら押入から蒲團を引摺出して居た。

「乾度よ、ね、乾度よ。」と何か念を押して居る、娘の媚える聲が表に聞えた。

「何うです、御飯前なら丁度好い。何所かそこらで天麩羅でも喰べながら、ゆつくりお話てのを伺ひませう。ね、その方が好いぢやありませんか。」と政治は執成するやうに言出した。

「それも何んだが、私は近頃禁酒同然にして居るんだから。」

「まア好うがる。タント飲まなければ好いんだ、出掛けませうよ。」と切りに促し立てる。

「度々氣の毒だなア。」と興の無い顏して慶吉は羽織を引被けて家を出た。

四

十一時過ぎ、慶吉と政治は醉拂つて歸つて來た。特に政治はグテ〳〵になつて、「お土産、お土産。」と天麩羅のへぎ折を振翳しながら、門口から呶鳴つて入つて來た。

お林も外から今歸つたばかりである。今時分に米屋に頼んで辛つと遂けて貰つた五升米を米櫃に移して、安心して一吹して居た所であつた。

「まア御馳走樣。」と愛想好く云ひながら、繃帶の片足を投出して、座敷の眞中にグタリと項低れて居る良人の慶吉を横目で見て居た。

晩いから歸ると云ふ政治を無理に引上げさして、慶吉は、「今の事ア大丈夫だな、屹度俺は當にして待つて居るからな。」と頭をフラ〳〵しながら念を押した。

「くどい、くどいだ。」と役者の聲色らしい事を云つて、「ちやんと飮込んで居ます。この政治が引受けたとなると、先づ大抵の事は大丈夫としたもんだ、はゝはゝゝ。」と宙泳ぐやうな手付して、獨りで恐悦がつて居た。

「大谷に云つても、三輪に云つても、友人だもの何うともしてくれるんだが、そこを頼みたくない。男の意地だからな。それに、それんばかりの端金に行塞つたと見られるのも業腹だしなア。」

「大丈夫ですよ。明日の晩までにや乾度持つて來る。なアに、高々二十や三十は友達中から時借りしたつて出來まさア、斯う見えても餘り輕蔑つて貰ひたく無いもんだ。」

「然うか、それで安心した。安心祝に一盃飮まう、お林、酒の買つた奴は無かつたけかな。」

「有りませんでしたよ。」と無愛想に良人の顏を見て居る。

「有ります〳〵。」と腹掛のどんぶりをヂャラ〳〵と云はせて、五十錢銀貨を二枚そこに投出した。

「おい、吉ちやん〳〵。」と奥から呼立てゝ「おい吉ちやん、濟まねえがこれでビールを二三本買つて來て下さい。餘りは貴方へ駄賃に上げやう。」

「駄賃なんか頂かせませんよ。」とお林はおさまらぬ目付であつた。

醉拂ひの親子は又しても睦しさうに金の話であつた。埋立事業を正式に出願するばかりに順序付いたので、その印紙代として何分かの金策を政治に賴んだ事は話の模樣で判つた。その意も好く判つた。政治は願書さへ出せば、明日にも今日にも直ぐ許可の下るものゝやうに思込んで、その金策を容易に引受けたのである。

四本のビイルを重たさうに風呂敷包みにして、妹娘のお吉はお釣錢の幾錢かと共に、寒むさうに顫えて歸つて來た。

「おい吉ちやん、お酌を願ひます。お酌ぐらゐしたツて好いぢやないか、貴方と俺は兄弟なんだ。ねえ、お母さん、然うでせう。」と大口を開いて笑ひながらお林の方に話を向けた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「然うですともね。」とは云つたもの丶、お林は心面白くなかつた。叱付けられるやうな氣がして、云はれぬ恥を感じた。

厭々お酌して居るお吉を捉ひて、政治は色々の事を云つた。

「ねえ吉ちやん。貴方はハイカラの女學生さんさ、私は無教育な職人だ。職人だツて魂は同じ事ッた。ねえ、兄弟は何所までも兄弟なんだ。斯う見えたツて私共は潔白なもんさ、袢纏こそ着て居るが、天子様の前より外は胡坐を搔いて通れるんだ。」と終には話が愚痴ッぽくなつて來る。そして、破目を外して幾らでも飲む。膝から疊から一面にビールに濡れた。

「おや俥を然う云つて貰はう。」と大束な事を云つて政治が歸つたのは一時過ぎてある。それまで、そこに着所寢して居た慶吉は、フラ〳〵入口まで送出したが、何度も〳〵煩さいほど明日の金の念を押した。

五

翌朝、それでも慶吉は六時前に起きた。今日は某會社の社長と面會する約束になつて居ると云ふ事であつた。

「貴方。」とお林は寢床の中から、出仕度して居る良人を呼んだ。昨夜温泉を休んで氣味が惡るいと、慶吉は朝寒むに顫えながら痩せた脛の繃帶を取換えて居た。

「明日は晦日ですよ。」

「知つて居る、それが何うしたんだ。」と言葉が荒らい。

「米屋も三つ溜つて居るから持つて來ないし、酒屋も、薪屋も。何時までおさくを喰物にして居る氣です、男の癖にして。」とワケ〳〵耻しめた。

「政治が持つて來る。お拂ひにお遣ひなすつたら好いでせう。ヘン、何んだ。」と妻を睨付けて立つて帯を締めてる。

「あんな金、私は御免蒙りませう。」

「何んだと。」

「泥棒したやうな金だ。」と鼻の先きで笑ふ。

慶吉はグツと來て、何か云はふとしたが、思返して默つて出て行く。「あゝあ。」と聞えよがしの溜息して、お林は又ドタリと寢返りを打つた。

夕方、政治は約束の金を三十圓持つて來た。今日は双子づくめの長い着物を着て、昨夜の不始末を詫びる手土産なぞ下げて居た。キチンと固く坐つて、常の律氣らしい職人であつた。暫く待つたが慶吉が歸らぬので、金はお林に預けて置きたいと言ふ。

「それに、こんな氣貧い事は云ひたかないんですが、實はお店に斷つて、ホンの時借りに借りて來たん

ですから、どうか期限は間違はないやうに然う云つて下さい。來月の十日ツて話でしたけど、そこは十五日でも二十日でも好いんですから。」と云そびれながら頼むやうに云ふ。

「私にや何が何だか些つとも判らないから、何うか當人に渡して下さいな。然うでないと、後で又私が叱られるやうでも困りますから。」とお林は初ッから何も知らない風に構えて居る。

「いゝえ、金は大丈夫なんです。昨夜私に打明けたお話があつたんですから。」

「おや拜借する金なんですか。然うですか、何が何んだかサッパリ判らないけど、では金だけは慥かにお預りしました。で、お話のところは直接貴方から當人に話して見て下さい。」と云ふ。そして、切りと何んの爲めに貰ふ金なんだらうと、繰返し〳〵怪しがつて居た。

政治は金をお林に預けて、暗らくならない中に歸つた。

殆んど引違ひぐらゐに、慶吉はフロックコートを着た、四十恰好の男を連れて歸つて來た。いやに尊大らしく構へて、一言云ふにも考へてからものを云ふと云つた風の、恐ろしく髯の黒い濃い男であつた。某會社の社員で、今度自分の事業に協力する人であるとお林に紹介せた。その男は內隱の派手な名刺入から大きな名刺を出した。

「穢ないところで何うも。」と慶吉は遜りながらその男を奥の六疊へ通して、火鉢のお茶のと手を鳴らした。

陰てブツ／＼云ひながらも、返辭だけは愛想よくお林は娘どもを指圖した。二人の話は何萬圓の何千圓のと云ふ、最う二年この方飽々するほど聞かされた、例の埋立事業の話てあつた。

間を見て、慶吉は病足を引きながら茶の間へ出て來て、小聲に、「おい鰻を燒かせて、そして麥酒を然う云つてくれ。」とお林の耳に囁いた。

お林は返事もしないで、嶮しい目に良人を見上げた。

「早くだ、歸ると惡るいから。今度の事業には實に大切な人なんだから、あの人次第て親玉が動かせるんだ。早くしてくれよ。」と頼むやうな言葉てある。「あ、それから政治は持つて來たかい。」

「はい。」と突慳貪に火鉢の抽斗から曩受取つた三十圓を出した。

「ぢや、これだけがお前の身上の方だ。」と中から五圓札を五枚取つてお林の膝の上に置いて、早く早くと客の方を焦立てる。

お林は容易に動きさうもない。落着拂つて長煙管の煙草を喫して居た。

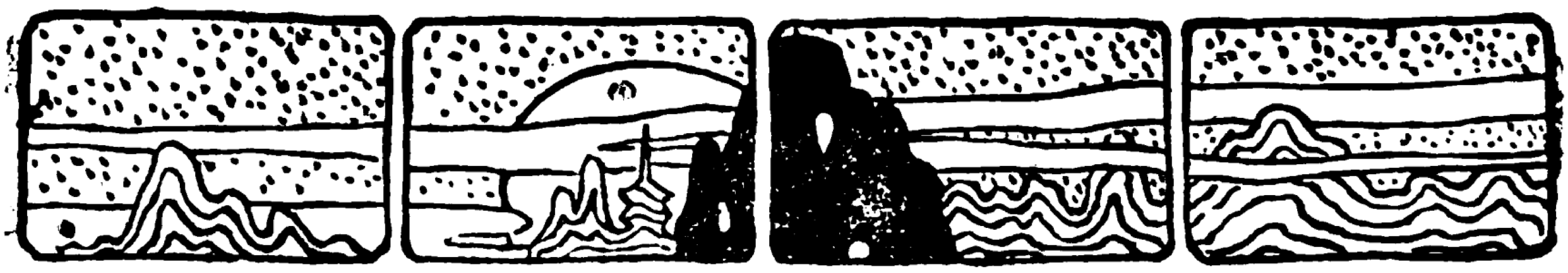
「不足は明日にも明後日にも乾度つくる。早くしてくれ、頼むよ、頼んだよ。」と口早に云つて座敷へ出た。

「何うても好い。」とお林は投げ付けるやうに金を疊に置いて、娘どもに夫々の用意を云付けた。

客は晩くまで落付いて飲んて居た。是非にと云ふのでお林も愛想にその席へ出ると、客は飽迄引受ける。乾度成功するやうに働いて見せると保證した。

「奧樣、その時は大變ですぜ。待つて被仰い。」とデロ〳〵お林を見ながら大業に笑上げた。
然し、お林はニコリともしなかつた。

（完）



藁

田山花袋

田舍の街道に添つた藁葺の或百姓家の脊戸から女が手桶を下げて顔を出した。年の頃二十二三、髮を銀杏返にして、いつもに似合はず小綺麗にして居る。襟に當てた白い手拭がもうくれかけた夕暮の晴れた空氣にくつきりと見える。

此女は此家の娘で、働き者で名が通つて居る。此夏まで一里ばかり向ふの指物師の一人者の噂になつて居たが、其男がぐずで、懶惰で、添つて居ても行末見込がないので、一年ほどして自分から追出てて來た。家に歸つてからは土用の暑い草取もする、秣草刈もする、稻刈もする、鎌を腰に夕日に立つたり、山のやうに積んだ刈草の車を押したり、時雨に濡れて刈稻を運んだり、村の人々はその甲斐々々しい姿を到る處で見て、『新家のあまつ子はえらい挊きものになつたなア』と誰も皆な言つた。

ところが野分の立ち始めた頃、村から林を越して、蘆やら蒲やらのガサ〳〵と鳴る淺茅沼に添つて、隣村の權といふ三十前後の男と睦しさうに戯れて並んで歩いて居たといふ噂が誰からともなく傳つて、段々それが村に知れ渡つた。

今から十日ほど前、女が裸足で、赤い腰卷を捲つて、手拭を被つて、せつせと畑の大根を拔いて居ると、おい〳〵と呼ぶものがある。振返つて見ると、葉の青い根の白い大根の算を亂して散ばつて居る畑の向ふに、其所から某町に通ずる廣い平坦な街道が通じて居て、其處に、女の曳いて來て置いた車の傍に、前の夫の指物師が見すぼらしい姿をして、立つて、手招をして居る。話は聞かずとも解つて居る。戻つて呉れ！　何んな挊きてもするし、何んな詫てもするから今一度戻つて呉れとは此前にも度々聞かされて、耳にたこが入つてる位である。

意氣地のないのが厭な氣がしたが、まさかに默つて知らぬ顔をして、放つて置く譯にも行かぬので、女は拔き懸けた大根を其儘にして、其處に行くと、

「おめい、婿養子をするつてな」

言つたことは常に似ず強かつたが、調子は例のくずて、にや〳〵笑つた。

「養子をしやうが何うしやうが好いぢやねえかね」

「それは好いがな……」と機嫌でも取らうとするやうな笑顔を見せて、「おめい、後生だから、今一度思ひ返して呉れめいかな。本當に何んなことでもする！　今まではおれが惡かつた。今度からは本當

に丁箇を入かへて、帯の一本位は買つてやるやうにするから……後生だから思ひ返して呉れめいかな」

や〻寒の夕暮に袷を着て震へて居る。

「だつてお前と一緒ては、一生梲が上がらねえもの」

「そこを頼むんだ」と踏着けられた男の意氣地などは全く捨て〻了つて、ひよこひよこと頭を下げて、

「お前だッて、一度は巳の嗅になつて呉れだてねえか。満更厭ッていふんでもねえだんべいから、一つ丁簡して、今一度考へ直して呉れや」

「駄目だよ、今更」

「丁簡して呉れや」

「駄目だッてばね。お前さんも執拗いねえ」

「何うしても丁簡出來ねえかなア」

「お前さんだッて、男だし、女旱はしめいし、私のやうなものをそんなに言はねえても、他にいくらだッて好いのがあるべいに……」女は大負けに負けて笑つて見せる。と、可愛い笑靨が頰に出る。此の笑靨を男は昨夜も一人て寒い煎餅蒲團の中て思ひ出して、『他人の嗅……他の男と一緒になりやがる……』と常に似ぬ血を燃やしたのてある。

かうして話して居る間を自轉車が鈴をチリリンと鳴して二度通つた。初めのは町の商家の若旦那らしく、後には使に出た小僧て、背に白い小さい風呂敷包を負つて居た。

小僧は二人を振返つて見て行つた。

『今一度考へ直して呉れや』

執拗く同じ言葉を繰返して、いつまでも際限がないので、女は默つて歩を移して、畑の大根を拔きに懸る。男も默つて立つて居る。夕日は今丁度森の上に落ちやうとして、最後の黄い光線を太く收穫後の野に放つた。稻木に懸けられた刈稻の上から黄く色附いた野末の銀杏の大きな木にぱッと照つた。國境の山々が晴れた夕空に美しく染つて、襞毎に濃淡の複雜した色を呈して居る。高い山の上には既に雪が光つた。

拔いただけの土大根を繩てたばねて、それを車の上に運んで了ふまで、男は其處を離れなかつた。最後に『今一度考へて見て呉れや』と言つて、トボ〳〵と歩き出した。街道の向ふに樫と櫟の村があるが、髮の毛の長く延びた見すぼらしいさびしい其姿は、一歩一歩冷飯草履を引摺つて、たそがれの影の中に消えて行く。

流石に女は其後を見送つた。

女は手桶を流しに置いて、竿を手繰ると、桔槹がギイと鳴る。井戸端の傍には黄い白い豆菊が簇がつて咲いて居るが、それがまだたそがれの暗くなり懸けた中に鮮かに見える。前の石屋の大和障子にはもう洋燈の光が射した。

街道には荷車の通る音が一臺二臺三臺まで聞える。村の半鐘臺には、今少し前まで、其の上半部に夕日

が斜に照つて居たが、それもいつの間にか消えて了つて、今は稍々暗色を帯びた餘照の中に黒く高く立つて居るのが見えるばかり、星ももうキラ〳〵と光を放ち始めた。

女の立つて居る後は、家の勝手元で、窓はぱツと明るく、低い庇の下に繩で編んだ干大根が白く一面に吊つてあつて、其傍に新藁が山を成して積まれてある。家の中は常に似ず賑やかで、人の聲がガヤ〳〵して、をり〳〵笑ふ聲も交る。膳碗を取扱ふやうな音もすれば、釜の吹き溢れるやうな氣勢もする。その筈である、今夜は隣村の權が娘の婿に來たのである。

もう婿は奧で父親と酒を飲んで居る。

女は釣瓶からザア〳〵と水を手桶に移したが、何うした加減か、ふと前の男のことが思ひ出された。其顏——憔悴した蒼い鬚の生えた顏！それは此間路傍で呼ばれて振返つた時の顏である。別に何とも思つて居はしない。氣の毒だとも思つて居ない。まして可哀相だなどとは夢にも……。いや、女の心では其の意氣地のない、ぐづ〳〵して居るのが今でも厭だ。——氣が附くと、前の街道を歩いて居る男があつた。何だか其姿が似てるやうにも、似てぬやうにも。

手桶を吊つて勝手元から入る。母親は汚い高流しの處に立つて、茶碗を頻りにざぶ〳〵と洗つて居る。

街道には人通りがない。風が思ひ出したやうに落葉を捲いて吹いたが、黄い埃の颺つたのはもう見えなかつた。大地は段々暗くなつて、空の明るい餘照の中に、縱横に枝を張つた柿の木の實が鈴生に黒く目に立つ。石屋の大和障子を少し離れて、晝はカンカンと職人が石の缺片を往來に飛ばす仕事場があるが、花

崗石やら人造石やら自然石やらが或は立ち或は倒れて置かれてある奥に、終日亭主がせつせと刻んだ花崗石の大きい石塔が微かに白く見えて居る。仕事場の隣りは年寄夫婦の住む小さい古家、暖い日には南向の椽に座蒲團を持出して、夫婦睦しく日向ぼつこなどして居るが、日が暮れさへすると、燈火を點けるのは徒費だと言つて、雨戸を閉めてさつさと寢て了ふので、入口の荒壁の崩れがそれと目に立つて見えるばかり、しんとして物音もせぬ。桑の畑、大根の畑、珊瑚樹の葉の大きい疎らな生垣から枯梢の高く揚つた井戸端の向ふに行くと、刈稻と藁との無造作に積まれた廣場があつて、大きな唐箕が明日もその仕事を續けるべく置かれてある。其農家でももう雨戸は閉めてあつた。其隣は淨土宗の念佛のかたまりて、夕飯が濟みさへすると、カンカンカンカンと鉦の音が始まつて、唸るやうな低い念佛が夜更まで續く。

馬車が一臺、停車場のある某町から客を三人乘せてカラ〳〵と通つて行く。微かになつた夕暮の餘照と、カンテラの光とを受けて、御者の顏は闇の中にまだ朧ろげに出て居た。もう喇叭を吹くでもなく、馬に鞭を加へるでもないので、疲れ切つた馬は驅けるといふよりも寧ろ歩くといふ調子で、覺束なく車臺を引摺つて行く。車輪の街道の小石に軋る音は、馬車の黑い影が見えぬ闇の中に沒して了つた後までも、ガタカタと靜かな田舍道に聞える……。

白い手拭を頰かぶりにして、草履を引摺るやうにして歩いて行く若者は、淸い聲で此處等に流行る唄をうたつた。

カンカンカンカンカン、

(己があれほど頼んだのに……あれほど頭を下げて頼んだのに、一言も挨拶せずに、發子をしやアがつた。男を蹈付けるのもいゝ加減にしろ……)

カンカンカンカン、

(口惜しい女だ、薄情な女だ。それは己も惡るかつたに違ひねえ。賭博を打つて負けて歸つて來たこともある。よて寢をして困らせたこともあゝ。けれど女だッて、隨分己の世話になりやがつた。第一あのお袋が憎い。あのお袋が水を差しやがつたんだ。己が小遣を遣つたり、反物を買つたりして遣つたことがあるのに……)

カンカンカンカンカン

(己がこんな身になつたのも、皆なあの女とあのお袋のお蔭だ。折角持つた世帶も滅茶々々にして了つた。親方に借りた金ばかりもちつとやそつとのことではない。二十兩、三十兩……親方の怒るのも無理やねえ。貴樣が意氣地が無いからだと今日も言はれたが、本當に己は意氣地がねえんだ。何故てめいはそんな薄情な女を忘れて了はねえ、男らしくもねえ、一人で追出た女などの尻を追廻して、いつまてぐづ〳〵してるんだ。そんな了簡だから仕事が出來ねえんだと言つた。違ひねえ、己は意氣地がねえ)

カンカンカン、――ダブダブダアダア、

(捨てられたんが口惜しけりや、出掛けて行つて仇を打つて遣れい！女の髮の毛位ふつ切つて遣る覺

悟がねえ位なら、そんなけち臭いことはおくびにも出すない。馬鹿野郎の意氣地なし！と親方は皆なの居る前で言つた。——己だッて口惜しい）

カンカン——ダブダブダアダア、

（あの女め——笑つてけつかる。あの笑つたのは確かに女だ。お袋もゲタケタ笑つてけつかる。今夜は彼奴と……）

意氣地が無いと親方から皆の前で罵られたのよりも、あれほど頭を下げて頼んだのを踏付けて婿養子をしたといふのよりも、其女が他の男と寢るといふことが堪へ難く口惜しく腹立たしい。それを思ふと血が全身に湧き返つた。路傍の百姓家からはカンカンと鉦を叩く音とダブダブダア——と念佛を唸る音とが間斷なしに耳に入つて來る。

女の家では笑聲が面白さうにする。家鴨の啼くやうなのがお袋で、キヤツキヤツと騷ぐのが女だ。婿の濁聲で頻りに何か戯れ懸る氣勢もする。勝手元には誰も居ぬらしく、棚の上に置いた洋燈の風に瞬くのが、明るい紙窓を隔てゝ見える。

男は今日の午後、女が今夜養子を取るといふ話を聞いた。ぐずで、のろまで、滅多なことには驚かぬ神經遲鈍なかれも、其時ばかりは電氣仕懸の人形のやうに、手も足も體も髮の毛も屹と立つた。知らして呉れた友達の前をも忘れてわれとわが頭腦ヶ柱に打附けやうとした。身内を黑い凄い血が流れ、颶風のやうな風が頭腦を拔けて通つた。可愛いと憎いと口惜しとが一緒になつて、じつとして居られなか

つた。かれはあるだけの錢で酒を買つて、泥鴫のやうに醉つて寢た。

醉が覺めて見ると、日が暮れ懸つて居る。以前の强い烈しい思は消えて、其代りに忙しい忙しい心の狀態になつて居る。何うしやうにももう仕方がないといふやうな絕望に續いて、綿衣一枚も錢一錢も持たぬ身を顧みる。

口惜しい腹立しい、何うかしてあの女を騙して引出して了簡を聞いて見たい――といふよりも、矢張ある力に引摺られて、一里の路を殆ど夢中で遣つて來た。一度は危く田の中にのめり込まうとした……。

奥の六疊の間、そこが納戸だ。男はよく家の間取を知つて居る。農家の習ひ、汚い薄い何年にも洗濯したことない敷蒲團や搔卷や四布蒲團、夏は淺黃の褪めた蚊帳が釣られてあつた。彼處で……。

思はず拳を握ると、血が湧立つた。

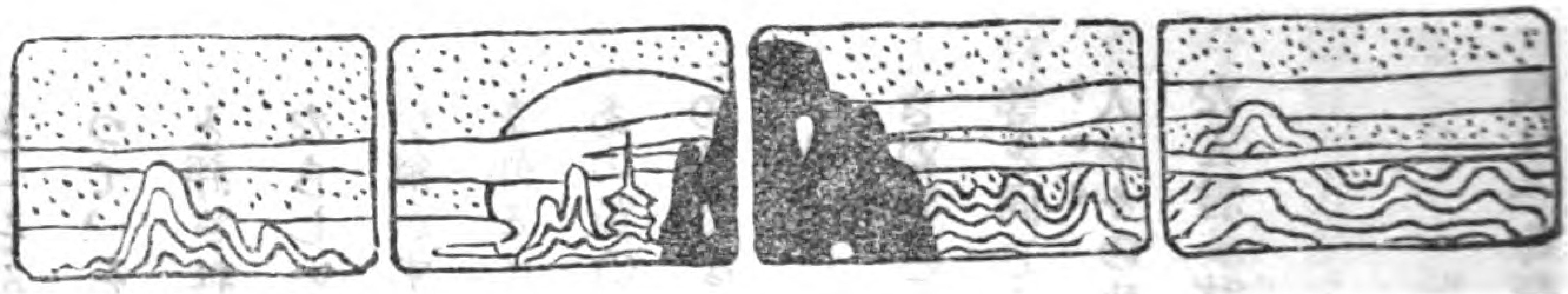
何氣なし傍を見る。

藁――新藁。

カンカンカン、ダアダアタアと鉦の音と念佛の音。

かくしに手が入つたと思ふと、マッチが何時か引出されて居た。はッと火が點く。『構ふものか』と思つた時には、もう藁に火が移つた。かれは一二歩たぢ〳〵と後に退つて、燃え上がるのをじつと見詰めて居る。夜風が一陣吹いて通る。火は田舍道の夕闇を照して、態と焚火でもして居るかのやうに一尺ばかりの高さに靜かに赤く燃え上つた。

鉦の音と念佛の聲とは依然として聞えて居る。勝手元の明るい窓の洋燈も同じく隙間の風に瞬いて居る。火が急に風を得て、高く熾んに燃え上ると、井戸端、桔槹、黄白の豆菊、菜畑、柿の木、塵溜、前の廣い田舍道、これ等が總て晝のやうに明るくなる。續いて戸の開く音、ガヤガヤと騷ぐ音 人々の走る音。



強者

正宗白鳥

予の友人のA君は死んだ。確か予より三歳年下てあつたから、行年三十。「男はこれからだ」と、下らぬ奴でも、何か爲出かすつもりて、褌を締めてかゝる年輩てあるのに、A君ほどの者があれ切りて死んてしまつたのは、如何にも殘り惜しい氣がする。この男は交際の範圍が狹くて、殊に親友らしい者は一人もなかつたやうだ。その證據にはよく我々の仲間て催ほされる追悼會が、未だA君のために企てられるといふ噂もない。人がよくて世話好きて、追悼會でもあると、眞先きに幹事になつて周旋する大伴君すら、今度ばかりはA君の死をも知らぬ顏に、超然としてゐる。して見ると、人好きのして交友の多い大伴君ですら、最近にあまりA君と往來しなかつたのてあらう、懇意になりもせず、ならうともしなかつたと思はれる。先頃道て會つた時、「大作君、Aもとう／＼死んだそうだよ」と云ふ

と、「そんな噂だね、あの男も妙な人間だつたが、矢張死んぢまつたのか」と、大きな口で罪もなく笑つて、それなり別れてしまつた。實際妙な男であつたに相違ない。「變な奴」「厭な方」「惜むべき人間」と評されたのが當つてたかも知れない。併し少くも予一人には、A君も多少胸襟を開いて語つてゐたらしい。手紙の往復も比較的多かつた。從つて予はあの男の一生を「妙な男」の一語で葬るに忍びない氣がする。と云つて、A君を英雄視し、天才視することも出來ぬ。予の如き魯鈍な者がA君の眞價を知るには、彼れはあまり早く死んだのである。今夜深けて燈下その手紙や日記を整頓してゐると、あの鼻の高い頤の尖つた眉の濃い印象の鮮かな顔が目に浮んで、不覺に哀惜の情に堪へず、せめてその遺書なりとも世に發表して、予が心遣りとしやうと思ふ。

A君の姓名を記せば、讀者の中には嘗て聞いたことのある男だと思ふ人もあらうが、予はわざと明さぬことゝした。何の何兵衞でも「妙な男」でも、符牒は何とでもあれ、只こんな男が明治の聖代に我等と同じく、空氣を吸ひ米を食つて生きてゐたことは事實だ。一度この世に生まれて終に死に行く一人々々の生涯は乞食であつても水呑百姓であつても、予はそれを無意味とは思はれぬ。嘗て生きてゐたA君が跡に殘した斷片の手紙や日記をも、或讀者は必しも無用の贅物とはしないであらう。(B生)

手紙の一

僕は一昨夜例の蓬萊町の下宿へ歸つた。故郷に滯在日數僅かに一週間。久振りの歸省であるのに、あ

まりに飽氣なかつた。今月の末になれば、君は用事が片付くから、是非僕の家へ來て、好きな小鳥狩でももしたいと望んでゐたが、僕はそれをも待ち兼ねて、豫定以上に早く歸つた。僕の住家には田舍よりも都會の方がふさはしい。稻の匂ひよりも汗の臭ひの方が、まだしも僕には懷かしいのであらう。田舍は今ぞ秋の最中、君なら嘸見捨てがたくて、永へにこの里に住みたいと思ふであらうが、僕には一日踏止まらば一日の苦を增すのみである。僕の弟は「どうせ急用もないんだから、も少し逗留して、一緒に鶉狩でもしやうぢやないか」と、切に引留めたが、僕はもう銃獵の興味がない。少年時代には小鳥打が何よりも面白く、弟に獵犬を牽かせて、霜を踏んで森の中畠の畦へ出掛けたものだが、今ではそんなインノセントな殺生では氣が勸まぬ。手應へがしない。秩父の山奧へ分け入つて熊狩りをするか、いや、それよりも都の中で人狩りをした方が、今の僕には遙かに面白い。U塾にゐた頃、袖浦や若山が女狩りだと云つて、毎晩大通りを練り歩いてゐたが、人樣々の羽袖を飾つて、巣を出ては地べたを匍つてる姿形は、百舌よりも鴫よりも雉子や山鳥よりも面白いではないか。小鳥の中にも鶉と云ふ奴、中々に敏捷くて、巧みに足跡を晦まして、手練れの獵犬も容易に嗅ぎ出されぬが、人間にも宮川のやうな薄野呂もあれば、鶉のやうな者もある。懷手して傍から見てゐても、君が秋の野に鳥の音を聞いてゐるにも優つた興味がある。

そして僕は故郷に厭いて、歸省の目的たる讀書もしないで、多少の紙幣を貰つただけで家を出た。田舍でも家庭に居ると、色々の五月蠅い事情が湧いて、僕の身をもその中へ卷き込まうとする。都で超然として人狩りをしてゐるとは譯が違ふ。しかし一歩閾を踏出して、顧みると、もう僕の家も自然の中へ

沒却されてしまう。門口に立つて見送つてゐる白髮交りの母も、只風景畫の點景人物たるに過ぎぬ。停車場まで一里の間、四面廣漠たる田野で、秋の色が恣まゝに織り出されてゐる。鎌を待つばかりに稻も粟も穗を首垂れ、まだ底力のある日光を受けて、黃ろい色が更に冴え〲しい。大根畠を隔てゝ紅色の柿の葉が際立つて空に浮んでゐる。君――埃の絕えぬテーブルの上で、玻璃越しに街上の柳が葉末から黃ばむのを見て、あゝ秋が來たと、心を動かしてゐる君――が、この光景に身を浸したならば、何と感ずるであらう。僕には無緣の溝の水も案山子も、君には何をか話すであらう。やがて秩父颪でも吹いて來たなら、この穩かな野面も擾亂れて、切株や朽葉の淺間しい姿となるであらう。今の内に二三日を割いて、僕の鄕里の近傍を旅行して見玉へ。何なら僕が君を僕の弟に紹介して、小鳥打ちの案內でもさせやう。弟は僕よりも客を優待するの道を知つてゐるし、君一人で僕の家へ行つた方が却て君のために居心地がいゝかも知れん。汽車は上野から二時間弱、K停車場で下りればよいのだ。

一昨日の午後、僕は其處から三等車に乘つたが、乘客は極めて疎であつた。髮の白く短かく顏色の赤々と艶のよい商人風の老人の側にゆつくり座を占めると、汽車は動き出して、窓から首を突出して、饅頭を買つてゐた巡査は、紙袋を太い掌に載せて、よろめきながら、僕の前の座に復した。頰髯の硬く鼻の平たく口の尖つた大男で、これで目に魯鈍らしい柔味でもなかつたら、獰惡な面相となるであらう。彼れは饅頭一つを農夫に與へて、それから首を捻ぢ向けて隣りの子供に他の一つを押つけ、笑顏をして、さも愛を求めるやうに唇を鳴らした。だが子供は彼れの顏を見ると、急に泣き出した。饅頭をも腰掛の

上に落した。

「恐い顔だからお厭やてせう、さあ此方へ向いてるからお食んなさい」

と、巡査は額に筋を浮べて、強いて笑つてゐた。子供を抱いてゐる母は、さも申譯のないやうに、品をつくつて幾度も巡査に禮を云ひながら「坊は厭へな子だねえ」と、頭を撫て〳〵してゐる。巡査は殘りの饅頭を頬張り、目を細くして、前の老人と引つゞきの話をして

「ぢや、あの家も、もう下り坂だね、大變の田地持だつたが」

「左樣さ、何んでも私の少い時分にや、△△村からKの街道へ出るにあ、△△屋の田地ばかり傳つて行きあいゝと云つてたと薄々覺えてゐますがな、今度久々て歸つて聞くと、彼家は丸つきり駄目ださうです、」

「さうかねえ、屋敷はまだ廣いがねえ」と、巡査は兩手を膝に置いて、蛙のやうな形をして、話の間々には、例の唇て子供に愛嬌を賣つてゐる。老人まて子供の前に手を伸ばして、顔に似合はず、變な眞似をして見せてゐる。予は一人腕組みして、只左右の樣を見たり聞いたりしてゐたが、不意に老人の話が、僕の耳に鋭く響いた。

「あの家の衰微したのも、元は矢張獸の祟りてさあ、確か今の主人の祖父さんてしたらう、子狐を鐵砲て打殺したのてね、その親狐が愁歎して、毎晩々々あの屋敷の四圍を廻はつてゐたさうです、さあその噂が立つと、祖父さんも恐ろしくて、氣病みを起してね、長い事患つた揚句の果にとう〳〵死んでしまつたんですよ、それから大騒ぎて狐の供養もしてやれば、厄拂ひの祈禱もしたのだが、怨みはまだ退散

せんと見えますわい、どうも代々あの家の者の死に方が怪しい。今の主人の兄も、うんと一網て身代を拵へるつもりて、材木商をやり出したんてすがね、何でも甲州邊の山奥へ行つた時に、足を踏はづして轉げたなり、往生したんださうてすよ、それに今の神さんも狐付き見たやうな癇の強い女てね、村の憎まれもんだと云つてゐます。「もう〳〵村の者にだつて、馬鹿にされて威光も何もありやしない。あの屋敷にや、日の光ものろくて、干し物も外ほど早く乾かんと云ひますぜ、さう云へば成程、あの前を通つて見ると、どうも影が溥いやうて、小氣味が惡いやうてしたよ」と、老人は得意らしく笑つて、「それだから私は生物の祟りは虚僞ぢやない、貴下の仰有るやうに一槪に迷信だとは云はれないと思ふてさあ」

「いや、さうかも知れん、私が降參するかね」と、巡査も快活に笑つた。

老人の話は確かに僕の家の事なのだ。顏に見覺えはないが、二人ともこの近くの者てあらう。て、まだ何か話すかと聞耳立ててゐると、話は何時か外へ移つて、或國の皇族の歡迎會が日比谷て開かれた事、或元帥の葬式の盛んてあつた事などが噂されるので、僕はもう二人に心を留めず、窓外の暮れ行く空を眺めながら、知らず〳〵僕の家の過去と今日とを考へてゐた。

そして三つ四つの停車場を越した頃、氣がついて見ると、かの子供は餡のついた手て、僕の耳朶をつゝいて、獨りて喜んてゐる。首を傾けて避けると、又指先て追驅けて來る。巡査は裏毛の掌を出して、此方へお出て、抱こして上げよう」と云つても、子供は振向きもせず、ます〳〵僕の側へ寄つて來る。僕の顏にも何處か懷かしい所があるのであらうか。（十月二十五日、Aより）

手紙の二

君は簡單な端書を寄越したきり、訪ねて來ない。相變らず忙しいのだらうね。僕は國から持參の金子のあれば、當分職を求めなくても生きてゐられるし、差當つても用事もなし、久振りて君の家庭を訪問しようと思はないでもないが、成べく近寄らぬ方が相互の爲だと思ひ返して、これも當分見合はす事とした。離れてゐればこそ、君も僕に對して多少の好意を抱き、僕も君を以て唯一の隔てなき友としてゐられるのだ。だから敢て君の御來車をも渇望しない。手紙てはとても言ひ盡せない事情でも起つたら、その時君を訪ねよう、來て貰はう、しかしそんな複雜な大事件が、今の僕の身に湧き上るべき筈はない。

僕は昨今佛蘭西語の研究を復興してゐる。何もせずにボカンとして暮らせないから、謂はゞ暇潰しに企てたのであるが、將來それを飯の種にでもしようと云ふ下心もある。僕はあまり評判の高くない宗教學校を卒業したゞけだから、學士位の實力はありながら、未だに思はしい職業にありつけぬ。あの後も赤木や大澤のやうに宗教に噛りついてゐたらば、一生喰ひはづしはなかつたであらうが、僕の如き墮落信者の成れ果ては、融通の利かぬ贅物だ。リーダーの校正を又例の本屋から賴みに來たが、僕は校正係以上の人物だと云つて斷つてやつた。校正までやつて、日本國家の爲めに盡くす義務はないからね。そんな事までしなければ、日本國が僕一人を生かして置けぬとなら、僕は復讐する。父母だつて、僕を社會に適しない人間に生みつけたのなら、安全に僕を養つて呉れる義務がある。しかし僕の家は衰えたりと雖も、まだ僕の下宿料を拂ふぐらゐの餘剩はあると思ふ。生活の不安がなく、他人のお世話にならない

てもよければ、僕は强者だ。耶蘇基督の前に立つても、僕は强者であつて憐憫を要求するの乞丐兒ではない。

昨夜宮川が來て、あの煮え切らぬ口調で、グヅリ〳〵僕の强者論を攻擊して、

「君が幾ら威張つて見たつて、人間の智惠や力が何になるものか、神の無限の威力を仰いて見玉へ」

と、昔頻りに聞かされた宣敎師のお經の文句を並べさうなので、僕は小五月蠅くて、

「だつて、その神樣も僕が神を嘲けるの行爲を止めることが出來まい、何なら此處で君と腕力で勝負しようか、君は神樣と云ふ味方を持つてるし、僕は後立のない自分一人だ、議論よりやその方が早く勝敗が決せられる」と、腕を捲つてかゝると、宮川は眉を顰めて、

「亂暴だねえ」と、最早意見がましい事を云はなくなつた。

宮川はます〳〵順良なる「牧羊者」らしくなつて來たね、あれては羊共の人望もいゝだらう。肉付もよくなり、顏に刺がなくなつた。言葉のアクセントも西洋臭く、物は質素でも洋服の着こなしが巧みだ。元々赤木や大澤とは異つて、利害を打算して宗敎界に居るのではなく、痴鈍な代り眞面目なんだから、僕のためにも多少案じてゐるらしい。そして「神學校の英語科に敎師の椅子が空いてるんだが」と、竊かに僕の心を誘つてゐたが、僕が靡く氣色を見せぬので、現はに勸めようともしなかつた。

「だが、人間は生きてる以上、何か勤めなくちやならんと思ふよ、讀書も無論結構だが、少し社會に出て働らき給へ、君のことだから神樣に對する義務はあるまいが、少くも社會に對して責任はあるだらう、

僕等は身體が二つ欲しい位仕事があるのに、君が働き盛りに安閑と暮らしてるのは不經濟だ、」

「いや、僕も何か適當な仕事を初めたいんだがね、君の神樣がちつとも與へて呉れん、」と云つて「一昨年一年間やつてたやうな飜譯業はもう御免だからね、まあ時節の到來するまで、君達のやうな世間の人の活動を傍觀したり、自分の好きな書物を讀んだり、物事を考へて見たりしてるんさ、」

と、僕も眞面目で答へると、彼れはつく〴〵僕の顏を眺めてゐたが、暫くして、

「惡い意味で云ふんぢやないが、かうして君の顏を見てると、不思議にカシアスを思ひ出すよ」と云ふ。

僕は苦笑した。そしてこの男にしては、珍らしく奇拔な評を下したものだと思つて、

「そんなに貧相な厭な面をしてるかい」と云つて、嘗て或演劇雜誌で見た或俳優のカシアスの面相を思ひ出して、我れと我が顏が淺ましく感ぜられた。

「いや、そんな譯ぢやないがね、ついカシアスを連想したのだ。讀書を好んで洞察力があつて、遊戲が嫌ひ音樂が嫌ひで、そして he smiles in such a sort of as if he mocked himself and scorned his spirit that could be moved to smile at any thing. と評したシーザーの言葉が、多少君にも當つてる氣がする」

「よく覺へてるね、それで such men are dangerous だと云ふんか、成程瘦せてる事は僕もカシアスに劣らんが、その外は非常に違ふぢやないか、第一僕は饒舌家だし、讃美歌以外の音樂は寧ろ好きな方だかの、」

「でも、僕にはどうもさう思はれる」と、彼れは馬鹿律義にさう信じてしまつた。

それから來る土曜の晩に、特に僕を招いて、細君手製の西洋料理を御馳走したいと云つて、僕の承諾を得て歸つた。

彼れの歸つた後、僕は行李の底からシエークスピーアの「シーザー」を搜し出して讀んだ。君は忘れたか知らぬが、嘗て雪の降る日に、例の演說の所を、二人で朗讀したことあつたね、あの時は僕も稍々肥えてたゞらう。そして耶蘇基督の信者であつた。(十一月二日、Aより)

手紙の三

折角訪ねて吳れたのに、生憎の不在で殘念至極。實は腹こなしに、不忍の池を一周して、歸りに森川町の珈琲店に寄つたゞけであつた。君に會つたら、隨分話の種の數々あつたものをと思つてゐるが、併し口よりも筆の方が却て明瞭に事實を告げるに便利かも知れん。

僕は五日の晩に、約を履んで宮川の新宅を訪問したがね、此頃の僕には珍らしく深い刺激が與へられたよ、君は會社の歸りに時々立寄るさうだから、よく知つてるだらうが、一言で云へば、宮川の家庭は平面的だね、覗かにや分らんやうな奧底がない、家も市ケ谷のよりも明るい。狹いながらも小瀟洒して、二階の居間には小形の風琴を据ゑ、床に黃白の菊を生けた花瓶あり、楣間にはマドンナの像が掲げられてゐる。妻君と染々話をしたのは今度が初めてだが、似たもの夫婦で、邪氣のない、厭味のない、世擦れのせぬ女だ。君の妻君のやうに僕の黑子の數まで目に留めて、後で噂の種にするのとは、丸で性質が違ふ

宮川に男の通有性が缺けてゐるのなら、妻君にも女の通有性が缺けてゐるらしい。

空氣ランプの華やかな光の下に、御馳走が並べられたが、無論酒はない。下戸の僕でも多少物足らぬ氣がしたが、宮川はよく食つて、そして夫婦で色んな話をして僕を待遇した。君の噂も出たが、この家庭では君の評判が馬鹿にいゝ。純白な虫も殺さぬ人と思はれてゐるよ。それから妻君は毎週一度近所の貧民の小兒を集めて、道を説いてゐると云つて、その成績を語り、宮川もそれに相槌打つて、自から世を潤ほしつゝある神の恵みを稱へたが、こんな話は君も飽くほど宮川から聞かされてゐるだらうし、僕にも興味がない。御馳走の薬味にはならん。

所がね、この座に一人の女が加はつたのだ。宮川が招いだのか、偶然來合はせたのか、臆面もなく、妻君の側に座つた。夫婦の穩かな暢(のん)びりした顏に比べると、如何にも生々(いき〳〵)してゐて、閉ぢた口元にも人を動かす力が溢れてゐる。

「君は知つてるだらう、愛ちやんを」と、宮川が紹介したので、僕は目を据ゑてよく〳〵見ると、その女は學校時代に宮川の家で二三度見たことのある彼れの從妹(いとこ)か何かだ。あの時はまだほんの子供で、確か基督降誕祭(クリスマス)の暗誦を稽古してゐたと思ふ。今では宮川の教會の風琴彈きで、傳道にも身を入れてゐるとか云つて、

「僕の教會は小さくつても、身内の者が揃つて自分の者のやうにして働いてゐるんだから、實に愉快だよ、これで傳道と云ふものも、男ばかりぢや、痒い所へ手が屆かんことがあつてね、どうしても女の扱

の必用があるんだ。愛ちやんも四五人は悔い改めさせて、立派な會員にしたのだが、兎に角愉快な仕事だよ」と、宮川はさも得意らしい。

「さうだらうね、僕も今日は久振りで教會の空氣を吸つてる氣がする、これから又仲間に入らうか」と、戯謔半分に云ふと、

「さうし玉へ／＼、僕は細君にも度々君の事を話してるんだよ、學校にゐた時分、レントの時節が來ると、君だけは極端に身を謹んで、二日ぐらゐは斷食して祈禱してたぢやないか、それ程だつたから、何時かも復活祭に教壇に立つて感想を述べてるのを見ると、サブライムに感ぜられたがね」

と、話はます／＼宗教臭くなる。

「さうさ、あの時は西洋料理を腹一杯に食ふ野心はなかつた、しかしあの時斷食をしたから、今胃の腑が讐打をしてらあ」

と、僕が笑ふと、皆んなも笑つて、一先づ宗教談が結着を告げた。それと共に食事も終つて、紅茶が愛の手で運ばれた、手には指環が光つてゐる。着物も細君のとは比べ物にならん。着物については知識の皆無な僕にも、その色合や縞柄が少しケバ／＼し過ぎると思はれた。教會の人らしくない。

僕はミルクを一匙落して貰ひながら、擦れ／＼に近づいた顔を仰いで、

「貴女は僕を覺えてゐますか」と云ふと、

「よく覺えてますとも、今お目に掛ると、直ぐに思ひ出したのですが、私貴下から頂く筈の者が御座いま

すわ、もう餘程以前のことですから、貴下はお忘れなすつたでせう、」

「何んてす、何を約束したんでせう、僕もあの頃は正直だつたから、滅多に違約する氣遣ひはないんだが」

と、眞面目に考へたが、お愛は擽ぐるやうな目つきて笑つて、

「どうせ今申し上げたつて、頂ける君ぢや御座いませんから」

「でも何だか氣になる、今でも約束を履行するから、云つて御覽なさい」

「いゝえ、もう止しませう」と、決然した口調で云つて、「でもね、お心に掛るなら、かうなさいましな、私今年のクリスマスには、日曜學校の貧民の子供の家へ送物をしやうと思ひますから、貴下も寄附して下さいましな、それでお約束は帳消しに致しませう」

「僕と貧乏人の子と別に關係はないんだがね……しかし貴下に言係りをつけられたんだから、仕方がない、少し位出しませう」

「どうも有難う御座います」と、お愛は慇懃らしい態度で禮を云つた。

「この人は寄附の勸誘の名人だよ」と、宮川は微笑々々してゐる。

「私何をしたつて、愛ちやんに負けるんだから口惜しいわ、でも來月のクリスマスまでにはまだ間があるから、私これから一生懸命にお祈りしては働いて、今度だけでも愛ちやん以上の事をしますよ」と、細君がさも意氣込んだやうに云つた。

「どうぞ御遠慮なく。……だけど姉さんは身體がお弱いんだから、あまり色々の事をしない方がよう御座んすよ、何時かのやうに夜深かしをして、慈善袋を拵へたりなんかすると、乾度又風邪を引きますよ」

「私を弱い者扱ひして、愛ちやん一人で働かうと思つて」と、細君は薄い唇に皺をつくつて笑つた。宮川は薄い髯を捻りながら、ドロンとした目尻を垂れてニヤリ〳〵。

B君、君はかゝる座に於ける僕を想像して、嘸困つただらう、佛頂面をしてゐただらうと思ふだらうが、必しもさうではなかつた。多少の感興を持つて、腰を据えて煙草を吸うて、三人の話を聽いてゐたのだ。やがて細君と愛ちやんとは食卓を片付け、階下へ下りて、飯を食つてたやうであつたが、その間に僕は寫眞帖などを見ながら、宮川に愛ちやんの事を聞いた。

彼女年齡二十一。この夏女學校を卒業したが、まだ縁談はないのださうだ。

「僕が後見人見たいなもので、責任があるんだがね、當人にまだそんな氣がないから、當分放任とくんさ、自分では二三年教會のために働くと云つてるから、それもいゝだらうと思ふ。」と、宮川は云つたが僕は寫眞を見比べて、宮川の説明以外に、お愛なるものを想像してゐた。一體僕ほど自分の寫眞を撮らぬものもなく、他人の寫眞を持つてゐないものもないが、又我々の仲間で、宮川ほど寫眞に富める者も少い。愛ちやんの寫眞は殊に多く、僕は所々それに出遇ふのを喜んでゐた。教會の婦人會員のではその中へ加へるのが惜しい位異彩を放つてゐる。そして二三人の友達と撮つたのや、或は一人で寫したのを見ると、現物よりも、一層この女が現はれてゐる氣がする。快活で周圍を憚らぬ色が見える。腕を現

はに出して、頬を支え、眼に媚を含んだのや、白衣を着てゐるのは、丸で役者のやうだ。

こんな女が、宮川の教會のやうな狹い醜い籠の中を飛廻つてゐるのは不思議てはないか。そして處女美に渇してる僕が、小鳥を見つけた獵犬のやうに、鼻を鳴らしてゐたのも不思議はなからう。愛女の頬は搗立ての餅の如くフワ〱して、艶がよい。唇も紅く、手の甲にも丸々と肉がついてゐる。裸體畫のモデルに適した方てはなく、聖母マリアの系統に屬する方てもないが、それが又憐れなる僕の享美性に叶つてゐるのてある。君の知れる如く、僕は秋の野邊、雲の立住ひに憧憬れぬと同じやうに、繪畫に於ても、展覽會の優等品よりも、繪双紙屋の店頭にぶら下つてる今樣の浮世繪を喜ぶ者てある。

宮川は僕が氣をつけても見ない寫眞をも取上げて、細かに說明して、「君は社交を斥ける傾きがあるからいかん、遊ぶつもりて僕等の仲間へ入つて來玉へ。柔しい美くしい愛情の中に漬つてると、自然に君の感情も軟げられるよ。て、僕もワイフと相談して、時々打解けた談話會のやうな者を催して、文學の話もすれば、音樂の話もすると云ふやうな自由な集まりをしたいと思ふてる。學生だの妻君だのと、色々な異つた趣味を持つた人が寄つて、自由な話をするのは面白くもあるし、有益だよ」、と云ふ。

先輩が青年に對した調子だ。そして細君とお愛と三人てランプを圍んて、恭しく祈禱をして與れた。

「久振て舊友と晩餐を共にし、淸く樂しくその靜かな夕を過ごすを得ましたことを感謝致します、又神の惠みが永へに舊友の上にもあらんことを、切に祈り奉ります」

と祈る。B君、僕はこの三人によつて救ひの道に入らんとしてゐる。この明るい小さな家庭は、舊友を迷

ぺる道より救ひ出さんとしてゐるのだ。宮川の目には涙さへ浮んでゐたよ。幸福なる家庭よ、彼等は僕を見送つた後で、「今日は神と人とに對して一つの善事をなした」と、互ひに感謝して喜んでゐるだらう。

その夜は空が曇つてゐた。僕は二階の明るい障子を振返り〳〵、薄暗い坂を下り、荒々しい聲の洩れ來る貧民町をブラ〳〵歩いて、電車通りへ出た。しかしそのまゝ家へは歸れなかつた。僕は强者たらんとして、自分の獨立を崩さぬやうに、濫費を愼んでゐるのだが、それが自から守れないことがある。その夜も暮て君と一緒に行つた赤坂のSハウスへ寄つた。例の鐵漿をつけた女中が、問ひもせぬのに、獨りで君の噂をしてゐた。

今日はこれで筆を留める、が、この章未完て、まだ殘つてゐる事件がある、（十一月十日、Aより）

手紙の四

今朝は隣の屋根に濃い霜を見た。秋も最早末期に近づきつゝある。僕は君の紹介狀を持つて來た△△館の依賴に應じ、百科全書の宗教の一部を書いてゐるが、その傍佛文の研究を續けて、もう大分進歩した。モリエールの「ドンヂヤン」も、辭書を力に四五日て讀み終へた。自分でも語學の才はあると信ぜずにはゐられぬ。て今日も机に脊をもたせ、足を投げ出し、周圍の靜かなのに、聲を出して動詞の變化を暗誦してゐたが、ふと、向ひの家の女中が、紙幣を持つたまゝ輕く會釋したのが目についた。長く窓越しに隣合つてゐて、朝夕顏を見てゐるためか、あの女道で會つても挨拶する。挨拶されて悅しがる程の顏ではないが僕は獨りて不思議に感じてゐる。

が、それは扨置き君の望みに從ひ、先日の續きを書いて見る。

あの晩Sハウスで飲んだが、例の通り猪口に五杯も重ねる間に、胸の苦しい位醉つた。醉ふと口を利くのも面倒になる。三味線の音や女の浮いた話は、小五月蠅くて聞くに堪へぬやうになる。床柱に凭れて目を細くし、アハヽ〳〵と、雛妓でも相手にして陶然たる、君の眞似は僕に出來ぬのだ。

「ちつとお發しなさいよ、お腹の洗濯になりますよ」と、年増の女中が取持顔に云ふ。

藝者Nは僕から目を外らせて、女中とこそ〳〵仲間内の噂をしてゐたが、それでも思ひ出したやうに向き直つて、銚子か三味線かを手にしたがる。しかし音樂と酒とは、その夜の僕には用はなかつた。僕は只手を膝に置き、口を噤み目を据えて、女の櫛目の通つた豐らした鬢面から、疊を掃つてゐる衣服の裾まで見てゐた。繪双紙よりも見榮えはするが、あの女は最早前のやうな刺激を僕に與へて呉れぬ。それも、向うて僕を毛虫のやうに厭がるのなら、厭がられる僕を見るのも面白いが、さうでもない、結句氣樂でいゝ位に思つてやがるやうだ。

でも、二時間もこの家にゐた。此家には君も知つてる通り、階子段の側に、穴倉のやうな狹い陰氣な室がある。先日來の雨で壁にも斑點が出來て黴臭く、一方口ではあり、何だか息が詰るやうな室であるが、僕はこの室に寢るのが好きなのだ。地獄の底にでもゐるやうで、二階を上下する足音、笑ひさゞめく聲が、幽かに淒味を帶びて聞える。そして籠ランプの薄暗い陰に、疲れた身を横へて、ウト〳〵してゐると、次第に底へ〳〵と沈んで行く。自分の身體が腐つて、蛆でも湧いて骨の髓まで喰ひ込まれるや

うに感ずる。そして自分で自分の臓腑の惡臭を嗅いで快く思ふ。その臭ひがこの部屋に漲つて、溢れ出て、市街を蔽ひ山野を蔽ひ、世界を包んで、人も獸も鳥も窒息し、百合も薔薇もその香氣を失つて、色も褪せてしまう。

でも翌朝早く起きた。冷たい風が鼻を挾つて、腸に染む心地がする。外へ出ると寒さうな斑ら雲がドロリと空を流れて、今にも時雨れそうな氣合ひ。電車に乘つて袖擦き合せ、首を埋めて、向ひに山高を被つた貧相な洋服男が、傍の客と、頻りにその朝の新橋の賑ひを語つてゐるのを添乳に聞き、歡迎やら見送りやら、馬車や俥の入亂れ、勳章の燦めいて、萬歲の聲が潮の如く、華やかな國旗の下に渦卷く樣を想像しながら、ウト／＼した。

「金鵄勳章がどつさり殖えましたな、日本も威勢がよく見えて、あの大きな外國の軍人と向ひ合つてゝも、此方が呑んでかゝつてるやうですよ、」と、萎びた聲で話してる洋服男の顏付がふと、僕の父を思ひ出させた。聲音もそれかと疑はれる。僕は途中で父に似た人母に似た人に出くはすと、一種異樣な嫌惡の感を起こす。疲れた日眠不足の日には殊にそれが酷い。

父よりもまだしも君の方が慕はしい。故郷へ僕の動靜を報ずるよりも、君へ宛てて無用の書を認める方が、遙かに僕の筆も進む、心も進む。

で、かの宮川の一件だがね。翌日反對に向うから手紙を寄越して、僕の訪問を感謝し、一夕を愉快に過ごしたことを喜んで來た。平常なら、小なる聖人よと嘲けるのだが、今度はさうでなかつた。

君は僕の手紙に對して、「汝も戀せしか、予は衷心よりそれを欣ぶ、汝の戀の幸福なれ、事情によつては、予も一臂の勞を辭せず」と、冷かすやうな事を云つたが、僕はその所謂戀に於ても强者たらんことを欲する。しかし今わが心が果して戀で動いてゐるのだらうか。西洋の小説や詩を讀むと、戀には柔しい涙が伴うてゐるが、僕はその柔しい涙を知らぬ。田舍から都の學校へ移つた頃は淋しい涙。基督の敎會にゐた頃は苦しい涙。涙の味はそれしか知らぬ。昨日床屋へ行つて、自分の顏を見たが、僕の目にも僕の頰にも柔しい涙で洗らはれた跡はない。

だが、兎に角僕の心はお愛に向つてゐる。世の人に向つて散ばつてた心が、彼女の上に集まるやうになつた。そして二三日後に宮川を訪ふた。彼れは敎會の會議で、會堂へ行つてゐたから、妻君と二時間ばかり話して來た。妻君は僕の襦袢の襟の破れたのを見て、洗張りして掛變えてやると云つて、强いて脱がせて、代りに宮川のを貸して吳れた。

四五日して又行つた。敎會の靑年が二三人來合はせてゐたが、何れも袴を着けて、小薩張した形をしてゐる。顏付も若々しくて、苦澁の色はない。宮川の紹介によつて、僕と知らるゝや、その座の一人が、「貴下が△△先生ですか」と仰ぎ見て、「二三年に先生が△△新報へお出しになつた『如何にして基督敎を棄てしや』と云ふ論文を拜見して、非常に益を得ました、實際今の敎會にはお說の通りの缺點があります」と、鈴のやうな目を張つて、議論でもしさうなので、僕は苦笑して、「何私は別に今の敎會に不滿だから、宗敎を止めたのぢやありません、」

と、避けたが、その青年は

「しかし私は先生と御同様の意見を持つて惱んでゐるんです、今も宮川先生に窺つてゐるんです」と、熱心が顏に溢れる。

「さうですか」と、僕は冷淡に答へた。

「ですから何時かお宅へ窺つて、色々お尋ねしやうと思つてゐました。」

と、彼れは無邪氣な態度で、僕の住所までも問うて、帳面につけ留めた。僕にも一人の崇拜者が出來たのだよ。だが肝心のお愛には會へなかつた。君の所謂戀もさう味く運びさうでない。

僕はその座をば早く見限つて、階下へ下り、妻君から襦袢を受取つて着替へながら、

「奥さん、近日お暇なら、私の下宿へ來ませんか、下宿屋のお馳走も偶にや味いですよ」と云ふと、

「さうですね、私も一度お伺ひしたいと思つてますわ、」

と明日にでも訪ねて來さうな樣子を見せた。僕の方では口拍子で云つたのだが、この女も矢張方々へ出歩いて見たいんだらう。亭主の同窓の友人がどんな下宿にくすんでるか、來て見たいんだらう。

「どうかお出て下さい、お愛さんも一緒に連れて入來やい、僕はあゝ云つた人が好きだ、あんな婦人と交際して見たい氣がする」と、僕は單刀直入に云つた。腹で惡念を抱いてゝも、正面から卒直に云ふと、却て他人に嫌はれぬものだ。「あの人は無邪氣だ」「サッパリしてる」と、女共にも可愛がられる。R君。僕は交際嫌ひの男であるが、これ位の處世法を知つてゐるよ。

「愛ちゃんは活溌だから、何處へでも飛んで行きますよ」と、妻君は云つた。

その後一日二日、僕は妻君の訪問を心待ちにしてゐた。だが待ち人來らず。そして宮川の手紙と、かの青年とが前後して來た。手紙には、

「妻君は教會や家庭の雜務に忙しくて、當分君を訪ね兼ねるさうだ。しかし妻君は君の境遇にも同情して、君をして幸福な生涯を送らせたいと云つてゐる。僕も君が僕の家庭に接近して、この豐かな惠の花に浴するの期あるを喜んでゐる」とあつた。

僕は氣が焦立つた。宮川などに甘く見られるのが不快で、「何だつて自分はこんなに頓間な眞似をしたんだらう」と、自分で羞ぢた。そして辭書を枕に仰向けになり、自分が二度も三度も引つづいて宮川の宅へ行つたことを考へて、マジ／＼してゐると、かの青年が下女に連れられて、入つて來た。不承々々に起きて、火鉢の前へ座つて、無言で座蒲團を突出したが、彼れは疊の上に窮窟に膝を窄めて座つて、ジロ／＼部屋の中を見廻した。

「宗教上の意見は私は別に持つてませんがね」と、僕は一言で彼れの談話を堰き留めて、「それよりや貴下方の教會生活のお話でも窺ひたいもんだ」と云ふと、

「今の教會に僞善の分子が多くつて、あれぢや駄目だと思ひます」

と、彼れは稍々心を落付けたらしく、ジリ／＼前へ寄つて、ハツキリした言葉で、祈禱會や說教や聖書の講義について、不平を並べて、「宮川先生は純潔な方だから、よく御存じないですが、我々は二三人

であの教會の革新を企てゝるんです」と、感激したやうな口調で氣焔を吐く。

「そりや面白い、大にやり玉へ、宮川もあまりポンヤリしてるから、少しや意地めてやるのもいゝさ」

「いや、あの方は親切だから我々も敬意を拂つてるんです」

「君もあゝ云つた風な人を尊敬するんですか」と、僕も微笑して、少し砕けた調子で、「君宮川の親類だとかいふ女がゐるでせう、お愛とか云ふ女ね、あれが非常に教會で活動してるさうぢやありませんか」

「はあ……」と、彼れは少しドギマギして、顔を赤らめ「婦人會の方ですから、よく知りませんけれど」と、曖昧な口振。

「あの女は美人ぢやありませんか、君なんかさう思ひませんか」

「はあ……」

「あの女について、何か噂は聞きませんか」と、僕は強いて問ひ詰めた。彼れは暫らく無言の後、

「別に何々聞きません」と云つて、間もなく木に竹を接いだ様に、「お邪魔致しました」と、歸つて了つた。

僕は元の仰向けになつて、「あの男も二度と訪ねては來ないだらう」と思つて、それからあんな青年や宮川一族によつて成立つた教會の光景を想像して暮らした。髪の毛の濃い頬の豊かなお愛がその間に浮ぶ。

筆が疲勞れて、もう書けぬから、今日はこれ迄。君は豫期した如く、事が運ばんのを焦躁く思ふだらう。僕もさう思つてゐる。（十一月十一日、Aより）

手紙の五

先日君に引出されてSハウスで一夕を送つてから、頭痛岑々として、不穩の狀態で數日を經た。君の醉態、君の自然論、君の人情論、君の僕を評した言葉、何れも僕の頭腦に殘つてゐる。

察するに、君は所謂僕の戀について、多少宮川にもほのめかしたに違ひない。人と人との關係を臆測し誇張して、觸れ歩くのは　人生の寂寞を忘れ單調無聊を慰める好材料で、社交の大部分はそれだ。今朝も宿の下女が二人廊下に立つて、さも面白さうに、五番の部屋の客と或女學生との噂をしてゐたが、君もその下女の如く、新しき僕の噂を諸方へ引張り廻してゐるであらう。

今日又更に新しき材料を君に供給する。

僕はあの後、お愛に會つたよ。自分で强いて機會を作つたのだ。

この前の日曜の午前。古洋服を久振りに着て、厭なのを我慢して、宮川の教會へ行つた。もう牧師が壇を下つて、會員の席も動搖してゐた。かの青年も立上りざまに僕を見て、極り惡さうに挨拶した。カッと赤くなつたストーブの側に、白髯の房々と垂れた老人が、眼鏡を外して、聖書と共に風呂敷に包んでゐたが、その老人の椅子に片手を掛け、斜に後姿を見せて、何か話してゐる女が、直ぐに僕の目についた。で、その方を見てゐると、

「ヤア、君來てゐたのか」と、宮川牧師が横合から聲を掛けて、不思議さうに僕を見た。

「これから、一緒に君の家（うち）へ行かうと思つて寄つたのだ」と、卒氣なく云つて、お愛に近づき、「貴女（あなた）にお話したいこともあるから、一緒に宮川君の家（うち）へ行きませんか」

「はあ」と、お愛は溫かさうな顏で、驚いたやうに云つた。僕はその女の顏と樣子とて、その時の自分を讀むことが出來る。

「何を戸迷ひして、こんな變な男が此處へ來たんだらう」と、周圍の信者の目が云つてゐる。

しかし宮川は歡んで迎へて、用事の繰合せまでして、僕等と一緒に家へ歸つた。この家での雜談はくだくだしく書く必要はない。僕が別段お愛の歡心を買うやうな口を利かなかつたことは、君も信じて呉れるだらう。それで、宮川が一寸座を外した間に、僕は煙草を吸ひながら、

「お愛さん、僕は貴女一人にお頼みしたいこともあるんですが、何時か僕の宿へ來て呉れませんか、細君は忙がしさうだから、當分來られんでせうしね」と、普通の聲で、何氣なく云つた。

「えゝ、どうせ寄附金も頂くんですから、近日お窺ひしますわ」

「貴女が端書を一本下されば、何時でも家にゐます」

と、住所と道順とを細かに知らせた。僅かこればかりの運びをつける爲に、長い時日を費したと思ふと、僕も自分の智慧のなさ加減勇氣のなさ加減が分る。そして宮川は座に復ると、「君も此頃は大分容貌が穩かになつた、矢張僕の家へ來るのがいゝんだよ」と、大得意であつた。

昨夜愛女史から、蚯蚓流の通知が來て、「明朝おたづね致すべく候」とある。明朝とは今朝のことだ。僕は朝早くから待つてゐる。そしてその間を利用してこの書を認めた。(十二月一日、Aより)

B曰はく、その後暫らくAから書信がなかつた。「どうなつた、あの事件は」と、手紙で問うても返事がない。一時あんなに根氣よく手紙を寄越したのが不思議であつたが、もう飽いたのだらうと、それきり問ひもせず、予自身も年末で多忙であれば、殆んどAの名をも思ひ出す折がなかつた。所が、大晦日の夕方、或急ぎの用事で、風を切つてセカ／＼歩いてゐる途中で、彼れが懐手でブラ／＼やつて來るのに出くわした。例の容貌と態度で澄ましてゐる。予が呼留めると、詮方なげに側へ來て、

「君も今日は忙しからう」と云ふ。

「一體あの事件はどうなつた」と問ふと、

「うん、宮川の女か」と、少し眉を顰めて「あれは何でもない、あれつきりさ」と、冷淡に云つて行過ぎやうとした。

予も別に深く問ひもしなかつた。

やがて歳が明けて、五六日立つた頃、予は通り掛りにAの宿に立寄つたが、彼れは二三日前に下宿を引拂つて國へ歸つてゐた。何故歸つたのか、宿の者に聞いても分らぬ。そして彼れの最後の手紙に接したのは、この春の初めであつたが、それも只病氣で悩んでゐると云つて、苦痛を訴へた簡單なものに過ぎなかつた。その後間もなく彼れは死んだのである。予はこの秋彼れの墓參りを兼ねて、その鄉里に遊び、彼れの弟より彼れの日記を形見として貰つた。日記は飛び／＼で、書き方も極めて蕪雜であるが、予に長手紙を送つてゐた頃からのは、稍々緻密だ。今その中前章の續きとも見るべき所を抄

錄する。

十二月一日。お愛が來た。此迄よく訪ねて來たお政などのやうに、隅つこに身を窄めて、俯目てゐるのとは違ふ。予が却て返事に迷ふほど、追かけ〳〵チキパキした聲で話をする。予は火鉢にドッサリ炭をついて、絶えず煙草と濃い茶を飮み〳〵、彼女の話を聞いてゐた。クリスマスの計畫、宮川の家庭の有様、音樂の趣味など。

しかしそんな話はいくら巧みても、予に多くの刺激を與へぬ。この女の紅の唇から出ればこそ、まだしも我慢出來たのだが、それでも三十分位で、予の耳は倦んだ。で、音樂談の腰を折つて、

「僕は貴女方のやる高尙な音樂は嫌ひなんです、もつと下品な者が好きです」

「何故てせう」

「別に六ヶ敷理窟はない、只さう思うんです、誰れだつて本當はさうぢやないか知らん、音樂ばかりぢやない、何だつて上品な者は世間體の上置きて、眞に味い所は下品な者ぢやないてせうか、」

「さうてせうか、不思議てすわねえ」と、お愛は予の顏を見守つたが、もう前ほど活潑な口を利かなくなつた。この女も今初めて予の顏に厭ふべき何物かを發見したのだらう。

「貴女は宮川君なんかにばかり敎育されてるから、さう思ひ込むんてすよ」と、予は強いて柔しく、「同

じ趣味でも、あゝ教會で窮窟にしてるよりや、家で日向ぼつこして、小說でも讀んで居る方が、遙かに趣味が多いでせう、僕は貴女の寫眞を見た時に、貴女はオルガン彈きには姿が似合はんと思つたんです」

「どうせ私なんか似合ひはしませんわ」と云つたが、又和やかに、「先日御承諾下すつた、あの寄附は今日頂けますでせうか」

「幾らですか」

「幾らつて、私の方から申上げられりやしませんわ、貴下の思召して」と、こんな事には手馴れてゐる樣子が見えた。

予は紙入を剝き出しに前へ出して、その中から二圓を手渡しゝた。お愛は改まつたお辭儀をして、

「もう外に私に御用は御座いませんの」

「えゝ、別に」と云ひ濁した。そして折角話があると云つて呼寄せたのだから、何か適切な話を持出さうと思つてゐると、お愛は兩手で茶碗を抱いて、飲みさしの茶をグッと飲み干して、

「この土曜の晩には又兄の家へ被入やいましな」と、素早く暇を告げた。

予はポカンとして殘る一日を送つた。そして腑甲斐なき自分をまざ〳〵と見る如く感じた。あれ程の勢力を費して、漸く接するを得たのに、一言の打解けた言葉も云はず、愛を惹く手立ても盡くさず、見す〳〵取逃がしたのを悔いた。予は純粹の處女と柔しい話をしたこともなく、詩のやうな空想を抱いて女に對したこともないが、今日はこんな素氣ない會見をしやうとは思はなかつたのだ。しかし予自身に

はあれ以上の口の働き目の働きは出來ぬのであらう。予の顏と予の心と、何れも戀すべく愛すべく相應はしき者ではないのだ。予は祖母の藻掻き死と、母が心亂れては刃物三昧した有樣を最初の記憶に刻まれて以來、一日も樂しい夢のやうな日を送つたことはない。

と、かう思ひ續けて、頭が疲勞すると、毒々しい不穩の念が湧き上る。で寒い風を犯して當もなく戶外を散步したが、古道具屋の刃物が鋭く頭に響いて來る。空には凄く星が光つてゐる。電信柱や家々の壁や軒が、觸つたら痛さうに見える。

Bに手紙を送るのも何となく厭だ。これまで何故愉快さうにあんな手紙を認めたのであらう。取戾して火中へ投じたい。

五日。宮川から招待狀が來た。返事も出さない。

七日。昨夜は雪がチラ〱して戶外へ出られなかつた。早くから寢床へ入つたが、寢つきが惡い。目蕩みかけると、何物かが來て頭の角を突付いて、起こさうとする。起きなくてもよい、眠ればよい、昏睡すればよいと、爭つて見るが、稍々もすればパッチリ目が開く。自分は何だか物忘れをしてゐる。爲すべき事を爲さずにゐると感ぜられる。

予の部屋は眞暗で、障子に薄明りもさゝず、鼠の音と時計の音とが、予の耳を嘲るやうに響く。予は蒲團を乘出して、机の上の時計を取つて、手荒く振つて隅つこへ投げ出した。バッタリ音が止まる。鼠もチュッと鳴いて隱家へ潜んだ。すると何處の部屋からか、崩れるやうな笑い聲が流れ込む。賑やかな樂しさ

うな話聲が押寄せて來る。自分には呵責の苦しみだ。て、「あれをどうかしなくちやならん、取鎮めなくちやならん、あの笑ひ聲を地球の底の穴に埋めて、惡魔に封印をつけさせたい」と、夢現に思ひ〳〵した。

夜が明けて見ると、薄雪に温かい朝日が煌めいて、日光を避けたての部屋も明るい。隣りの下女の顔も晴やかに見える。そしてこんな鮮やかな色が世界を包むと、予自身は畏縮てしまう。光は雪を融かし、人の顔の曇りを拭ひ、予の身體の中へも滲み入つて、用捨なく骨をも肉をも攻めさいなむ。空には雲の影もない。

予は遲い朝餐を食べて、戸外へ出て只歩いた。「いゝお天氣になりました」とか、「よく晴れて淸々いたします」とか、通りすがりの人が話してゐる。ストーブの煙が淡く絲遊のやうに舞ひ上り、紅のカーテンの奥から風琴の音が洩れ出る家が目につく。幼い聲の唱歌が聞える。軒を並べた商店の店頭の品物は、赤や紫やそれ〳〵に冴えた色をしてゐる。世界中が微笑ついてゐる。微笑ついた柔風が、予の頰面を舐めて行く。

予は氣壓されさうだ。そして目が縮んで、自然に首垂れ勝になる頭を持上げては、迫つて來る光に反抗して歩いた。自分はなすべくして未だなさゞる事があると思ふ。體内に蟠まりがある。

やがて古布子の重味て、肩も疲れ足も怠くなつた頃、予は敎會の前に立つてゐた。何と云ふ定つた考もなく、その狹い入口、さま〴〵の下駄て塞がつた土間へ割込まうとすると、最早閉會の讃美歌が唄はれ、氣早の連中は土間へ下りかけてゐた。て、予はさながら推出されるやうに、戸口の隅に立つて、彼

等の歸るのを目送してゐながら、宮川の勢力の大なるを思ふた。杖に縋つた婆あさん、制帽を被つた青年幾組もの男女が、この朝宮川の前に座を正し、耳を傾けたのだ。

だが、予自身にも事業がある。征服すべき魔力を備へてゐる。予は强者ではないかと、自分の心がさゝやく。

歸り行く人も跡絶えた。予は一歩も堂内へ足踏みせずして引返へしかけた。すると、陽氣な笑ひ聲が後から耳元を襲うて、予を掠めて石段を下りた一組があつた。宮川の細君とお愛と、予の崇拜者たらんとした青年とである。ほか／＼と溫かいので、外套も着ずショールも着けず、足取りも輕く快活に話してゐた。予は二三間コツ／＼と跡を付けてから聲を掛けた。

「貴下も會堂へ行つてゐらしつたの」、と細君が云ふ。

「先日は有難う御座いました、……今日は午后から日比谷へ散歩しようと云つてるんですよ、貴下も御一緒に行らつしやいましな」と、お愛が云ふ。愛嬌は惜しまぬ女だ。

「行つてもよろしい」と、予は無意味に答へて、青年に向ひ、「君は敎會が面白くなつたんですか、改革はどうてす」と云ふと、彼れは生眞面目になつて、

「今も考へてゐるんてす、しかし外形の改革で騷いだつて何にもならんと思ひます、てすから一人々々が精神的に自分を改革する外はないと信じます」と、辨解した。

「ぢあ、宮川君の口調て云ふと、靈的にやるんてすな」と、予は云つたが、青年は口を噤んで何とも語

らなかつた。

「ねえ、姉さん、日比谷を散歩したら、白井さんも連れて、一緒に私の家へ行きませう、御馳走しますよ、見せたい者も澤山あるわ、それにね、あの鸚鵡が佛蘭西語を覺えたんだから、聞いて御覽なさい。"Je vous aime." だけは片語で云へるんですよ」と、青年を顧みて、「白井さんもまだ聞かないでせう、私此二三日仕事のやうにして教へてたんだわ、"Je vous aime et Je vous aimerai toujours." つてね、口を酸くして教へたんですけど、とても皆んなは云へないのよ」と、早口にスラ〳〵と佛蘭西語を喋舌つては、ば無邪氣に黒い瞳を動かす。

青年はその佛語は分らぬ風であつたが、「僕は鸚鵡を聞くと非常にミスチリアスの感じがします」と云つた。

予は細君の側に並んで二三丁ついて行つた。かの二人の正面に日を浴びてヒラ〳〵袖や手首を動かして歩いてるのを見ると、光の搖籃にでも乘つてゐるやうだ。行手の道は高臺に樹木や建物がボカされたやうに見える。空は澄んで、木地の空色をしてゐる。

見てゐると、予の頭は變になる。太陽が舌を出して、ゲラ〳〵予を嘲つてるやうだ。殘りの雪が反射して、ますます目が疲れる。予は彼等に別れて踵をめぐらし、後をも見ずに宿へ歸つた。そして蒲團を被つて寢た。

短かい日は早く暮れた。殊に予の部屋は暗くなるのが早い。暗くなると頭に力が湧く。障子を開けて

外を見てゐると、一足づゝ光は退いて、屋根も樹木も沈んだ色を帶びて來る。自分の世が來たやうだ。

隣の垣根をブラ〱してると、買物の風呂敷を抱いて歸つて來た隣の下女が、懷つこい顏をして挨拶して「お寒う御座います」と、小聲で云つて行過ぎた。

九日。近時來訪者殆んと無し。予自身に出掛けることもなし。

この寒空に朝から金槌の音、鋸の音が聞える。コン〱ギイ〱と頭に響く。あの音が重なるにつれて、新しい家が出來上りつゝあるのだ。

それに隣の家では先日新に赤ん坊が生れて、今日は五月蠅く泣いてゐる。

もう歲の明けるに間もない。やがて春が來るのであらう。

故鄕では予が何時までも定つた職務もなく、下宿屋にゐるのを氣に掛け、それに此頃は腦も惡さうだと誰れからか聞いたらしく、頻りに歸鄕を勸めて來る。

しかし予には爲すべきことが殘つてゐる。予は强者である。

予は一日中考へては又考へた。

十七日。今日急に住馴れた部屋を去つて、臺所近くの騷々しい室へ移つた。此處は宿の客間としてあつたので、姿見が掛つてゐる。予は立つた拍子に、見るともなく我が顏の映るを見て、思はず顏を背けた。青黑い色、褪せた脣、窪んだ眼。予は身體の縮むを覺えた。父の顏、母の顏、亡き祖母の死相、Bの柚子の皮のやうな皮膚、Sの天狗鼻。色んな顏が頭に徂徠して、世はかゝる生物に滿ちてゐるやうに

感ぜられる。宮川の神樣は誤つてこんな人間を造つたのか。

そして隣の下女の肥つた顏が目に浮ぶ。輝に荒れたその手。予は昨夕それを握つたのである。唇をつけたのである。褪せた唇と荒れた手。戀はそれて初まつたのだ。戀の言葉は思ひ出すにも忍びぬ。書くにも忍びぬ。……

予は外に出るを恐るゝ如く密閉したこの部屋で、夕暮を送つた。臺所から目串燒く惡どい嗅ひが潜んで來て、鼻づらを突く。

十八日。輝の手、褪せた唇、

二十日。曇天がつゞく。宿の下女が冷笑を以て予を見る。

B曰く。この後數日間の日記は抄錄を憚る。

一月十日。歸鄉後數日は昏々として眠つた。頭腦稍々輕さを覺ゆ。予は昨秋强者としてこの鄉を去つて以來何をなしたてあらう。今日初めて外へ出て見ると、田は朽ち寒風枯林を吹いて、あの時分の影もない。田の畦に立つて、廣い原野の中にゐると、自分は其處に相應はしい一個の朽ちた案山子である。此の鄉に埋められて、朽葉て墓を蔽はれるに適した案山子である。

弟の鳥銃の音が幽かに響いて來る。

二月一日。一室に籠居すること久し。父母兄弟の五月蠅い程手厚き保護の許に生を貪れり。窓の外に

は梅が蕾を含んでゐる。塀の外には高い笑聲がしてゐる。鳥銃の音も聞える。予は耳を聳てた。自分に爲すべき仕事を殘してゐると思はれてならぬ。そして頭を持上げると、父の顔母の顔が予を取捲いてゐる。予は母の瘦腕に縋つて、最後の息を引かねばならぬのであらうか。(完)



四十女

徳田秋聲

一

七八年前、大阪に漂浪してゐた頃、私は其の一ト夏を天滿の磯野と云ふ男の家で過した。磯野は其頃もう四十一二であつた。國で石油發掘事業で財産を殘らず穴へ吸込まれてしまひ、文無になつて大阪へ飛出した其時から、附いて行つたお里と云ふ細君も、もう三十五六と云ふ年であつた。

磯野は其時、漸く金主がつきかけた處だとか云つて、神戸に小な機械油の製造場を持つてゐた。越後で散々石油て苦勞して、其から大阪へ出て、販賣店を持つとが出來るまでには、色々の苦しい瀬戸を越して來たので、頭髮はもう白髮だらけてあつたが、大い聲て、店の者を叱りつける勢はまだなか／＼烈しかつた。

磯野の家族は、主人公と細君のお里と、細君の父親と、磯野の弟、此四人であつた。が、毎朝茶の室で、づらりと膳の並んだのを見ると、何時でも二つや三つは餘分な客膳があつた。國から出て來た失敗者や、如何かした機會で、此處を足場に、一月二月と寄食してゐる、やくざな男が、始終一人や二人、ごろ〳〵ちやらして居た。

六月頃、私が貧しい行李を此處へ擔込んで、其から離房めいた建物の狹い二階の一室を配はれた折は、磯野の顏には、まだ絶えざる不安があつた。青い節糸の單衣に、山の入つた細い博多の帶を締めて、能く俥を梅田のステーションへ走らせた。大阪市中を駈廻ることもあつた。大阪風の綺麗な格子戸の箝つた店には、帳場格子が据えられて、レッテルを貼つた機械油の見本の瓶が、横手の棚に幾箇も駢んでゐた。背の低い弟は其帳場格子の中に坐つて、得意先へ手紙を書いたり、銀行へ金を受取に行つたり、車の端へ判取帳と油を載せて、安治川まで荷を出しに行くこともあつた。此男に、私は英語を敎へなどした。

私の居る二階は、小綺麗な六疊であつた。窓へ腰かけてゐると、隣の陸軍少將某の庭が一ト目に見られる。磯野の宅の座敷の椽側も半分見えた。私は其頃脚氣の氣味であつたので、此の部屋に閉籠つて、懶惰な日を送つてゐた。讀書に飽きると、寢轉んで、蒼空を漂ふてゐる白い雲を見てゐた。而して一身の方向などに就いて、靜に考へてゐた。

退屈な夏の永い日に飽いて、下へ茶を飲みに行くと、長火鉢の側には、目の大きい細君の父親が、茶簞笥の前に坐つて、菓子を摘みながら、濃い茶を飲んでゐた。元は贅澤に育つた人だと見えて、菓子や

茶の小言がなか〳〵喧しかつた。三度々々のお菜も難しかつた。

細君は能く急須へ湯を注がうとして、茶が一杯、溢れさうに入れられてあるのを見ると、丸い目を剝出して「御父さんのお茶の入れ方にも呆れまッせ。此て二三度出すと、もう棄てゝ了やはるやないか。」と窘めるやうに言ふ。

老人は骨組の太い、色の白い、丈夫さうな體格であつた。新聞の講釋や小說など讀みながら、此は事實と相違してゐるの、今の小說には八犬傳のやうな大仕掛のものがないのと、能く其樣暢氣な詮索をしてゐた。越路よりか津太夫が名人だの、雁次郎に騷ぐ大阪の人の氣が知れないのと、始終若いもの丶言ふことを笑ひつけてゐた。娘が一人の親の自分に同情がないとや吝なとを、蔭て私などに零してゐた。

細君は、一緒に大阪へ出てから、其日のお米にさへ差閊へて、寒い晚安治川の人の二階で、賣もの丶大福て腹を拵へた昔の苦勞を、能く話して聞した。石に噛ついても、磯野を一人前の商人にしやうと云ふ意氣込て、身分や外聞を忘れて、紐て箱を胸へ懸けて、人込の劇しい安治川て、一ト冬大福餅を、賣つて行いたとも、何かの折には口に出た。其から左に右、世帶らしい世帶を持つて、着物の一枚も引被けられるやうになつて、田舍から親を呼ぶまでの苦勞は一ト通てはなかつた。今漸く多少磯野の運が向いて來て、愜して父子揃つて茶飲話ても出來るやうになつたからと言つて、苦しかつた昔を忘れてはならぬ。いくら親ても、不足を言はれる處はない‥‥とツケ〳〵父親を遣込めてゐた。

體の小い、何處か力味のある、勝氣のやうな女てあつた。色の蒼白い、白目の可怕らしいやうな、少

しも愛嬌や優しみのない顔であつた。長い間の惡戰苦鬪のお蔭もあらう。

食物の爭などが、飯の時父子の間に能く起つた。晩になると、父親は娘から小遣をせびッて近所の寄席へ行くか、然もなければ、店の次の四疊半に入つて、按摩に腰を揉ましてゐる。

其處へ磯野が俥て歸つて來て、着物を脫ぎながら、今日の注文の模樣や、金の廻收などに就いて、弟と大な聲で話をするのだが、其間に細君は臺所でバタ／＼働いてゐる。岡持が外から持込れて、膳が緣近くに据えられ、磯野は苦味走つたやう顔に笑を浮べて、細君のお酌で酒々飲はじめる。

然した後では、磯野は直に自慢の義太夫を唸出す。能く通る、底のある聲で、此頃漸く揚つた日吉丸とかを遣出すと、お里は丁と手を膝に突いて、一心に男の顔を瞶めてゐる。が、自分には何の面白味もなかつた。

磯野は同じ處を、繰返し／＼やつて聞せる。而して、「ちよい／＼、此處、此處を一つ彈いてくれ。オイ、三味線を持つて來い、えゝやらう。」と云出す。

細君には、恁云ふ趣味はなかつた。手も無器用、記臆力も薄かつた。以前田舍で、常盤津など少し稽古したともあるが、唄も糸も、惡く力の入つた、癖の多い、可恐しい質の惡い筋なので、太棹となると一層それが激しく、少しも調子が出なかつた。

其ても磯野は脅かすやうにして行せる。お里は怨めしさうな顔をして、「私彈けやしめへん。覺が惡おますよつて……な、今晩は御免蒙りまッさ。」と賺すやうな、甘えるやうな顔を傾げて、不恰好な襟元を

直してゐる。

「おや己が教へてやろ。行る氣がなうては行れやせんて‥‥」

「私それ處やおまえんが‥‥」

「何を言ふてんのや‥‥早う持つて來いと云ふのに。」と磯野は其から、義太夫が、大阪の紳士仲間の交際には、是非必要だと云ふ事を說出す。何處の細君は、何と何とが得意であるとか、誰某は有名な誰とかに就いて幾年修業したとか‥‥然云ふやうな例を幾箇も擧げて、其から其女のお世辭の好い事や、交際の巧い事などを說いて聞かす。

「お前なんぞも、些と心がけて、あゝ云ふ風に行つてくれんと困るぜ、未だに安治川時代の氣習が脫けんやうぢや、放心人中へも出せやせん。」

負けぬ氣の細君は、丸い目を磯野の顏に見据えて居た。何か言はうとしては、幅の廣い割に毛の薄い其眉毛をピクつかせるのであるが、終には「ハアッ‥‥」と故意とらしい溜息を吐いて俛いて了ふ。少時すると、ペン〳〵と云ふ妙な糸の音が聞え出す。と、少しは手心があると見えて、所々引かゝるやうな調子で、漸と〳〵從いてゆく。が、然なると、語る方も彈く方も、妙に氣が脫けて、折角磯野が醉ひかけた酒も急に醒めて了ふ。

一時間も經つと、部屋が急に闃として來る。隣の邸の人聲が、廣い庭から此方へ聞えるくらゐ森として來る。階下へ降りて見ると、磯野はもう何處かへ出かけたと見えて、細君が獨り座敷の眞中に青い顏を

してゐた。猪口や椀が、其前に散らかつて、三味線も撥も其まゝてある。廣い往來から、風がスイ〳〵奥まで通つて、夕方の打水が未だ滴つてゐさうな小庭に、月が差してゐた。

二

磯野の家は、めき〳〵景氣づいて來た。注文も頻繁になり、得意先も擴つて、大分凝つた金が落ちて來るやうに爲つた。盆の頃には磯野が中國邊の得意場廻をするときには、立派な洋服を着て、衣兜から金時計の鎖を垂下げてゐた。二週間ばかりて、歸つて來ると、其方此方へ急に販路が擴がつたとか云ふので、盛んに製造場を見廻つて、ドシ〳〵油を作らせ、間斷なし荷造をして送出した。若い男が新らしく傭入れられ、勝手元へも婆さんを一人殖した。懸物とか香爐とか然云ふ裝飾品や手廻りの道具なども買込んだ。家も今少し荷出に便利な廣い場所へ出たいと言つてゐた。

細君には、慢性の下の病氣があつたので、其頃十四五の可愛い女の子を一人、何處からか貰ひ受けて來た。名をお鶴と云つて、目の切の好い、輪廓の正しい顏をしてゐた。利かん氣の、淸しい目て、ヂロ〳〵養母の顏を見るのが癖で、何を言つて聞しても、身に沁みて聽くやうな樣子は見えなかつた。其癖磯野には能く懷いて、身の周の用事などは、此子の方が使ひ心が好ささうであつた。磯野は此子の着物や食物や、躾の事に就いて、をり〳〵細君に說法して聽してゐた。細君は氣味の惡い白い目て、ちよい〳〵磯野の顏を見上げながら、返辭もしないて、額に皺を寄せて、溜息を吐いてゐた。一つも理窟の通らぬヿを言つて、甘へるやうな調子て突かゝるヿもあつた。磯野は笑つて取合はなかつた。

細君ばかりではない。細君の父親も此子には蔭で情なく當つた。娘が無法を言つて、訝つてゐると、

「然う言はツしやるな。如何せ魂情の僻んだ子ぢや。言ふて聞すだけ此方が莫迦を見る。其目容を御覽、如何して〳〵、年こそ行かんが、腹はなか〳〵毅然したもんや。」と上目遣をしながら、低い聲で言つた。

磯野が居ないと、お鶴は物陰へばかり隱れてゐた。飯も食はず、一日外で遊んで來る事もあつた。歸つて來た姿を見つけると、細君は剛情もの〻、意地惡だと言つて、其處へ突飛した。

然かと思ふと、或時は娘を手懐けるやうな調子で、「貴方が大きくなつたら、阿母はんを養うておくれやすや。棄てるやうな事ぢや明きまんぜ。愍して私が氣を揉んで、好いお衣も拵へてあげたり、お美いものを食べさしてあげるよつて、其恩返に、年老つたら、阿母さんをあんじよしておくんなはれや、え、よろしいか。私も貴方も他に力になる女達がないのんやよつてな、……。其心算で、是からもつと仲善う暮さうやないか。」とシミ〴〵言聞す。

子供はパツチリした、悧巧さうな目を睜つて、母親の顏を穴の開くほど瞶めてゐた。而して、其うちに汝を見て、

「阿母さん、然したら私ちよいと遊び行つても、宜うおまッか。」と淋しい笑顏を見せる。

「直き戾つてお出んなはれや。遠い所へ行かんやうにお爲なはれや。お衣も汚さんやうにな、可いか……。」

娘はもうツイと起つて行く。

「ちよいと〱、貴方今日は豪う大人しかつたよッて、阿母はんがお駄賃あげまッさ。」とお里は長火鉢の抽斗から、粟おこしを出して、割つて手に持した。

お鶴は「どうも……」とお辭儀をすると、下駄を突かけて土間へ降りる。而してからりと格子戸を開けたかと思ふと、可恐いものから逃げるやうに、一散に横町の方へと驅出した。

お里は店の格子を透して、其影を見送り、淋しい顏をして、獨て溜息を吐いてゐた。何だか氣味の惡い子のやうにも思はれる。年の少いお鶴が、始終自分を壓へつけやうとしてゐるやうにも思はれる。何時かは其力のために、自分が除け者にされるやうな氣がしてならなかつた。主も弟も——出入の者まで、皆なお鶴の味方ばかりであつた。

其日は、一日家が閑寂してゐた。父親は土佐堀の方の、古い昵近の家で、棋會があるとか言つて出かけた。弟は神戸へ、傭男は安治川へ判取帳を提げて、車を挽いて行つた。主はと云ふと、一昨日の晩、天滿宮の裏手の路次の、師匠の處へ行くと云つて、ふらりと出かけた限、此も一日二晩歸つて來ない。—其頃は能く愚云ふ事があつた。

お里は胸が快々した。坐りつけた火鉢の側へ座を取つて、莨を喫して見たが、此處も何だか寄つき端がないやうに感じた。其から帳場へ坐つて、散かつてゐる周を取片つけた。するうち、盲の若い義太夫のお師匠さんが、戞然と格子を開けて、

「今日は……」と鼻にかゝるやうな、太い聲をかけながら上つて來た。

額の大きい、何處かずぼらッとしたやうな女で、もう二十四五になるが、丸ッちい手から、未だ少しも汚れたとのないやうな血色の、顔がポキ〳〵してゐる。同じ田舍の產で、十三の年から大阪へ來て、義太夫を稽古したのであるが、高座へ上るには技術に未だ磨のかゝつてゐない處がある。一ト通りには語れるが、巧者とか器用とか云ふ側ではなかつた。聲の使ひ方も、一向ぶッきらぼうで、人との附合にも根ッから、掛引がなかつた。田舍では繼母の手に育つたとか聞いたが、大阪へ出ても他人の飯を食つて、散々人中で揉れたにしては、不思議なくらゐ廻氣と云ふものがなかつた。人並よりか優れた標致でゐて、目の見えないのか、側目には如何にも哀れとも思はれるが、本人の心持は一向暢びりしたもので、其胸にはたいした希望がありさうにも見えぬ代り、何時業が衰えると云ふやうな樣子も見えぬ。のんどりした淵の水を見るやうな女で、曾て女らしい細々した身の上話をしたとがない。それで町内では可也の連中がある。出稽古も少くはない。贔負にしてくれる親切ものも澤山あつた。

師匠は薄暗い茶の室と店との境の、芭蕉布の暖簾の蔭に坐つて、袂から手拭を出して、高い鼻頭に滲出た玉のやうな汗を拭いた。

お里は、「お出やす。」と布團を侑めて、茶を煎れながら一ツ二ツ話を爲始めた。

「今日は大將お留守だッか。」と師匠は家内が閑してゐるので、訊出した。

「今日は、誰も居やしめへん。」とお里は、此の心の暢々したやうな師匠の前に坐つて、熟々其顔を眺めた。

「お師匠はんは氣樂だッすな。」

「氣樂なともおまへんぜ。」師匠は笑つたやうなやうな笑はぬ顏を、店明の方へ向けた。店からは好い風が通つて、暖簾がバサ〳〵と、其のふッくりした鬢の邊を撫でた。

師匠は手探りに茶碗を取上げて、咽喉をゴクリと言はせて三口ばかりに飮干した。

「お宅の大將みたいな旦那はんを持つてるやはッたら、其こそ眞實に氣樂だッしやろ。腕はお有だッし……氣の爽々した、物解の好いお方だすよッて……。」

お里は溜息を吐いた。

「人はんには好うおまッすやろがな、家內には薩張好いとはおまへんぜ。」

師匠は默つて了つた。

少時すると、お里は、紊れた銀杏返の頭髮をゴシ〳〵搔きながら、妙に顏を顰めて「お師匠はん、えらうお氣毒やがな、私今日は少し鹽梅が惡うおますよッてな、お稽古は休めにしときまッさ。」

「ア、然いだッか。」師匠は見えぬ日を瞠るやうにして言ふ。

「それア可けめへんな。えらう惡うおまッか。」

「何やらな…暑さ負でもしましたのんやろ……此の頭の痛いんが、私の持病てな。お師匠はんは、疾病氣がなうて宜しうおまんな。」

「お蔭さんて、私まだ病うた云ふこと知りやしめへんぜ。十二の時眼を患ふたんて、大方疾病ぬけがしま

したんだしやろ。私いつても然う思うて、諦めてをりますのえ。」

師匠が三四十分油を賣つてゐるうちに、午頃から磯野を搜しに、方々へ問合させに出しておいた女中が歸つて來た。

女中は上框へ上つて、閾際に膝を突くと、可怕なさうにお里の顏を見た。而して天滿の師匠の家から、河向の松屋町、ずツと離れて船場から靱あたりの知邊の家を先々尋ねて行いたが、何處でも此二三日、磯野さんがお見えにならんと云ふ返辭だと云ふ事を、怵々報告した。

お里は、目を皿にして聞いてゐたが、聞畢ると、顏が一層曇つた。而して、「フン、然う。」と言つた限、見向きもしなかつた。

師匠が歸つて了ふと、もう徐々日の暮方に近かつた。家には灯が點されて、庭の燈籠にも薄い灯影がちらついた。外では近所の若いものが、向の材木屋の前で、高い聲で何やら面白さうに話をして居た。弟が神戸から、男衆が安治川から、それ〲歸つて來る時分には、お鶴も遊びに疲れて、ウツ〲家へ入つて來た。其が一所に、ドカ〲と茶の間の夕飯の膳に集つて來る頃、お里は奥の室の片隅に床を延べて、持病の癪が起つたとか言つて臥てゐた。

衆は陽氣に飯を食ひはじめた。此の團欒では、ませたお鶴が大もてであつた。

お里は仰山に、ウン〲呻吟いてゐたが、飯の濟むまでは、誰一人寄ついて、介抱しやうとする者もなかつた。

明日十時頃、熱い日のカン〳〵照つける眞中を、磯野は腕車で歸つて來た。磯野の顏には、劇しい疲勞の色が見えた。汗ばんだやうな頰から額の邊に、何やら薄い埃でも被つてゐるやうで、唇にも紅味がなかつた。

三

ひよろ〳〵と上る處を、お里は眺めるやうに眺めると、

「お歸りやす。」と其處に兩手を突いて、更まり切つた挨拶をした。而して、茶の室へ通らうとする背後から、可恐しい權脈で、店の帳場格子の横へ押こかさうとすると、ドヤ〳〵と人が續いて三人まで上つて來た。一人は佐藤と云つて、此頃磯野の事業を一口持つた男である。西區で金貸をしてゐると云ふ話だが、金の指環やら、細い鎖やら光らせて、反歯の、色澤の惡い四十年輩の男である。一人はつい見たともない男で、年も若く、木綿ものに角帶を締めて、堅い身裝をしてゐた。

其外に、女が一人、間に挾まれて入つて來た。三十位の年恰好で、眉の痕が蒼く、目の淸しい、些と頰骨の出た女である。金歯が露はれると、少し凄くなるが、然もなければ愛嬌のある優しい顏である。身裝も垢拔がしてゐた。髮を引詰めて、少し後寄の方で髮を捲つけてゐた。脊がすらりとしてゐて、お里のやうな小女は、些と氣遲がする位である。

三人は順々に、茶の室でお里に挨拶しやうとした。

お里は、「お越しやす。」と手を突いて、「マア〳〵ずッと……。」と奧へ通らせた。

三人は皆な疲れたやうな顔をしてゐた。女の顔には櫻色に血の氣が差してゐた。

お里は私と、礒野を店の方へ呼出した。礒野がツカ／＼と出て來ると、お里は突如手首でも抓つたらしい、礒野は、「あ痛、痛……。」と莫迦げた聲を出した。

「今まで何處にお出ンなはッた。あの女子の方は、何處の誰方だす。」と云ふやうな詰問の聲が洩れる。

「あれはお前、佐藤さんの親戚の方や。久々か豪い上手なんて……。」

「阿呆らしい。佐藤はんに、あんな親戚がおますもんかいな。嘘も大概にしておきなはれ。」

二人は隅ッこの方で、低い聲で捫著してゐた。少時經つと、礒野の調子が少し嚴くなつて來た。

「交際の必要と云ふとを、些と辨へて貰はんと、商人は立行きまへんぜ。廣く交際をせんとにや、到底金儲は出來やせんと云ふとは、已が諄いほど言うて聞せておいた筈ぢやないか。極道でやつてゐるのぢや有やしめへんぜ。些と其處らで御飯一つ食べるにしてからが、何ぞ金儲の種子にしやうと云ふのんが、大阪商人の手なんや。」と言つて聞せた。

お里は承知しなかつた。此頃の素振が變だとか、何處へ行つてゐたか、白狀しろとか、づうづしく、能くも彼樣女を引張つて來られたもんだとか……國訛のある速辨で、執念く責立てた。

礒野は爲うことなし、笑つて宥めた。

冷いものを取寄せて、主客四人無駄話をしてゐた。お里は始終耳を引立てゝゐた。而して、目を丸くして、一々礒野と女との擧動を注視した。

女は物馴れた、優しい調子てお里に話かけた。お里も叮嚀な口を利いて、時々挨拶をしてゐた。辨るとにかけては、誰にも劣を取らぬ方であるが、作つけたやう空世辭を言ふのが癖で、女らしい、シンミリした情愛に乏しかつた。今日は殊に其が目立つて、ヒステレー性の笑聲が、一際耳に障つた。ても磯野は、自分の女房を外すやうなとは、可成爲ないやうに力めてゐた。

「あのな、此から來て八八を行るよつて、お前も用事を片づけて、お相手をすると好い。」

「然いだッか。」とお里は、笄て髪の根を掻きながら顔を顰めた。「私今日は氣分が惡うおますよッて、除けて貰ひまッさ。」と些と首を顫はした。

「ちよッ、爲樣もない。また彼樣とを言ひよる。惡い癖や。お客さまに失禮に當ると云ふとを知らんか。」磯野は窘める。

「そんなら其で、其方へ行つてお出んなはれ。」

お里は切ないやうな、怨めしいやうな目て、磯野の顔を見た。而して、「へ……。」と低聲て返辭をした。

が、急に其處を起ちさうにも爲なかつた。

「離房の六疊を、綺麗にしておきなはれ。」と磯野は優しい調子て命じた。

お里は女中ヶ手傳はせて、六疊を片着けた。而して座敷の縁側に膝を突いて、

「誰方も、切望彼方へお越しやして……。」と叮嚀に言つた。

卅

四人は席を立つた。女は連にお里を誘うてゐたが、お里は「エヘ……」と輕蔑らしい笑方をして、

「マア、後にても行きます。」と言つてゐた。

惡い遊は夜まで續いた。岡持か二度も三度も持込まれて、ビールが幾本となく拔かれた。ビシツ〳〵と云ふ札の音が、微かに洩れて、低い人聲が折々聞えた。

お里も九時頃から仲間入をした。夫婦の間には、もう何の事もなかつた。が、お里は花が少しも興まなかつた。

明日八時頃に、私が起きて階下へ降りると、札の音は未だ聞えた。人々は障子を開放して、朝の新らしい空氣が、自由に流れ込んでゐた。赫とした朝日が、黃色い其顏を照して、曇然した目が、物凄く血走つてゐた。女の顏も、お里の顏も、酷く興奮したやうであつた。

洗手を使つて、朝飯を食つて了ふと、男連は廣い座敷に枕を並べて、ゴロ〳〵寢て了つた。女は私と茶の室へ出て來て、お里に話を爲かけた。

「初めて寄せて貰ひまして、えらうお世話になりました。」など挨拶した。而して、お里の髮が濃いとか、小柄なのが可羨しいとか云ふやうな、お世辭を言つてゐた。

お里は話してゐるうちに、此女の世界が、自分よりは迥に明るいとが解つた。此と云ふ取纏まつた話はなかつたが、派手な社會を見てゐるとだけは確であつた。芝居や流行の話が初まると、負けぬ氣のお里は、弱味を見せまい〳〵と、妙な處へ力瘤を入れて、左に右話の辻褄だけは合して行つた。

男連は晝少し過ぎに、一人起き二人起きして、起揃うた。客は茶を飲むと、二三十分間無駄口を利いて、ぞろ／＼と歸つて行つた。

磯野は店へ出て、男衆に何やら吩附けてゐたが、手紙の返辭を二三本書くと、直に奧へ引込んで、其から風呂に行つた。女のとこに就いて、お里はもう何にも言出す機會がなかつた。

三時頃に、天滿の師匠の若い弟子が、三味線を提げて、雪踏をチャラ／＼言はせて入つて來た。

「えらう晝おます。」と言つて、座敷へ通ると、直ぐに鳴しはじめる。二十になつたかならぬ小體の男である。ヘナ／＼したやうな首を掉つて、咽喉を引絞るやうな聲を出すのであるが、絲捌の輕い手頭が、可恐しい器用てあつた。師匠は名のある三味線彈てある。

此の若い彈手は、お里と差向に座つた。平い膝の長い男て、胴を折つて、輕い調子て、瓜頭で彈出すのであつた。

お里は絲を此の青年に教はつてゐる。が、何時も手が脱け勝て、一つ我流の癖のついた處となると、幾度直しても直切れらなかつた。耳も鈍いのであらう。

若い師匠は、責立てるやうに、幾度も／＼同じ處をつけて遣つた。幾度つけてもお里には出來なかつた。磯野が嗤ひ出すと、お里は撥を下に投出して、ホッと溜息を吐いた。而して、

「年取つてからの修業は、無理だすわ。」と言つて、莨を喫出した。

「ドレ己がつけてやろ。も一度遣つてごらん。」

磯野は口三味線て、妙な手容をしながら、熱心に行り出した。お里は二三度つけて見たが、終には手か無意識に動くばかりてあつた。苦しいとも、面白いとも……何の感じもしなかつた。頭脳の中には、折々他の問題が閃めいて居る。

四

磯野が益其事業を盛立てゝ、安治川縁の廣い住家へ引移つたのは、秋の頃てあつた。

私は其時分、都合て京町堀の寺の二階へ引移つてゐた。

月に二度くらゐは、磯野の家を訪ねた。磯野は不在勝てあつたが、家族は行く度毎に、殖えてゐた。何時かの媚めいた年増が、不斷着て働いてゐる姿も、時々私の目を惹いた。

冬になると、家族は益殖えた。家の中は、如何にも賑やかさうてあつたが、何だか取締がないやうにも見えた。何の部室も〳〵、何時見ても取散かしたまゝて、客やら、家族やら衣體の解らぬやうな、色々の男や女が、ごちや〳〵して居た。

北海道て失敗して、困つてゐたとか云ふ、磯野の弟も來て、兄の事業を手傳つてゐた。其の細君と娘の子も、此の家族の中に紛れ込んてゐた。國からも甥やら、從弟やらが來てゐた。

此大勢の家族の間には、家族的の親みも、情愛も通つてゐないらしく見えた。皆がてんやわんやて、手々に慾を渇かし、蔭口を吐合ひ、懐を肥し合ひしてゐるやうにも見えた。皆は寄つて集つて、大將磯野の機嫌を取り、我勝に氣に入らうと焦心つてゐるのてあらう。

お里は蒼い顏をして、神經性の目を光らし、一生懸命それを拒がうとしてゐるらしかつた。

中にはお里の肩を持つものもあつた。けれど肩を持つもの程、倘危險が多かつた。お里はもう拒ぎ切れなくなつて、妙な意氣地無しのやうな風で、茫然して了つたやうにも思はれた。

「姉さんが毅然してゐんので、此處の家は手々我々や。」と言つて、お里を非難する者もあつた。

「あの人に、此家の宰領が出來ますもんかいな。第一薄情て明きまへん。」と蔭で不平を言ふ者もあつた。

然かと思ふと、「マア〱、貴女は是迄に仰山苦勞して來なはつたお人やよつて、此からは、芝居でも見て、氣樂に日を送つてゐなはつたら好いやないか。家のことに、世話やくとはおまへん。」と言つて聽かす者もあつた。

暮から春へかけて、三月ばかり、お里は希しく磯野に連れられて、中國から九州へ、商用旁幸福な旅行をした。行く先々て、磯野の信用の厚いのを見て、二人で昔の苦勞を語合つてゐた。溫かい海邊や、景色の好い山や、溫泉場などへ行くと、お里は暢々したやうな心持て、せせッこましい家の事を忘れるのであるが、其ても折々、除けものにされるやうな氣がしてならなかつた。家が又連と氣になつて來る。

三月の末に大阪へ歸つて來ると、家は蜂の巣を突ついたやうてあつた。留守中の破綻が、彼處からも、此處からも出て來た。其から段々紛擾が續いて、お里と磯野との間には、色々のものが挾まつて來た。

* * * *

私は其後一度大阪へ行つた。野中に用事があつて、鷺洲村を通つた時、私は此女の零落れた姿を見た。

お里は髪を蓬々と亂して、垢染みた目倉縞の上ッ張を着て、貧しい町を竦んだやうな姿をして、ひよこ／＼と横截つて行つた。顏が蒼腫れたやうになつて、光澤も血の氣もなかつた。手に何やら竹の皮包を持つてゐた。

私は磯野の家が、多勢の弟や從弟のために、滅茶苦茶に瓦解した事だけは、人傳に聞いてゐた。が、磯野の其後の消息を知らなかつた。私は此女の迹をつけて見た。

お里の入つて行つたのは、田圃を背にした、寒さうな長屋建の一つであつた。

二月の中頃で、畑には其方此方に、青い菜葉が、霜に怯けてゐた。日影の薄い日で、空氣も濁つてゐた。町には吝な寄席や、小い醫院などがあつて、東京の龜井戸と云つた形があつた。悒欝しい溝や、埃深い榎の垣根が多く目に着いたし、色の毒々しい饅頭を賣る家や、古い股引足袋を並べた、低い棟も見えた。

私は女の入つて行つた、家の前まで來て立停つた。間口は其でも三間、一間が入口で、二間は格子を締めてあつた。格子の裏は、破障子が閉切つてあつて、砂埃が白く溜つてゐた。入つて見ると、お里は臺所に居た。臺所は入口から通脱けの土間で、其處から直ぐ田圃が見えた。私は茶の間の火鉢の邊まで通つて、土間から聲をかけた。

お里は私の顏を見ると、「マアー」と言つて、腹のどん底から溜息を吐いた。瞠つた其の目のうちには色々の意味が讀まれた。

「ヤア、お上りやす。こないな汚くるしい處で、お氣毒だすけれど……。」と不相變舌ッ足らずのやうな調子で、私に碌に挨拶もさせず、國訛の除れ切れぬ大阪辯を振廻した。

お里は手を拭き〳〵、「もう何年になるいな。貴方もお變りやしたが、私も豪う變りましてしやろ。」と火鉢の前へ廻つて、鐵の性の惡い、黒い鐵瓶を卸して、火を引搔廻して炭を注いだ。

「一體、あれから磯野さんは如何なつたのです。」と私は其處の板敷へ布いてくれた、薄い蒲團を敷いた。

「如何も恁うも、お話にも何にも成りや爲めへんがな。」とお里は毛の疎な太い眉根に皺を寄せた。而して口速に、磯野の家の瓦解を語つた。

「磯野が阿呆だす。些とばかりお尻か暖もると、もう有頂天になつて了ひよるのが、あの人の癖だッせ。」と其から磯野の薄情な事を並べ立てた。

「けど、言ふたかて、もう明きやしめへん。あの人の、あれが病だすよッて……。」とお里は目に涙を溜めた。

少時すると、裏から十六七の女が上つて來た。顏のふッくらした、目の切の好い、鼻筋の通つた子である。頭髮を束髮に結つて、裄の短い袖口から、肉附の好い手が、赤く見えた。愛嬌はないが、何處か情の深さうな目の色である。

「ア、貴方覺えてゐやはりましやろ。これ、私ン處のお鶴だつせ。」と笑つて見せた。而してお鶴に向つて、

「お辭儀しなはらんかいな。」

お鶴はヂロリとお里の顏を見て、其から叮嚀にお辭儀をした。

お里は奧へ入つて行くお鶴の迹を追ふて、其から帶の間から、バラ錢をチヤラ〱云はせて、少許持たして、何やら買ひに出した。

お鶴が出て行つてから、お里はお鶴の事を話した。磯野と別れる時、磯野には女があつた。お鶴を此方へ取つたのは、然しておけば、何かに口が利き易いからで……と云ふ事も話した。ごたくさ紛れに、父も死んで、自分は世帶道具を少許持つて、着の身着の儘で、磯野の家を逐出された始末も附加へて話つた。自分はもう、四十面提げて、何の望も慾もないが、お鶴に養子でもしたらばと、其事で氣を揉んでゐるのだが、此程までに目をかけて大きくしてやつても、母子の情愛が、少しもお鶴の胸に通じない……と云ふ愚痴も出た。而して、お鶴の癖の惡い事や、情の剛いとを低聲で訴へた。

不意にお鶴の駒下駄の音がすると、お里は怯ついたやうな目を瞠つて、急に口を噤んだ。而して未話し足りなさうな顏で、深い溜息を吐いた。

お鶴は小い風呂敷包を持つて、奧へ入つた。少時すると、駄菓子を瀬戸物の菓子器に盛つて、私と猫板の上に置いて行つた。

「貴女な……。」とお里はお鶴を振顧つて、「彼處の煮物を些と見といておくれやすや。」

「煮物て何だす。」お鶴は氣のない顏をして訊いた。

「牛肉が煮てあるやないか。貴女も失心家やな。」
「私裏にゐて、知りやしめへんが……。」とお鶴は出て行つた。
お里は、ヂロリと私の顔を見上げて、又溜息を吐いた。而して、ブリキ落の火鉢の灰を均しながら、
「貴方東京の茅場町いふ處知つてゐなはるか、本所區だす。」と訊いた。
「ハ」
「貴方ン處から遠うおまッか。」
「一體何です。」
お里は伏目がちに、磯野が其の茅場町にゐる事を話した。而して人の風評に聽くと、磯野は其處で小い機械油の販賣店を開いてゐるさうなが、東京へ歸つたら、一度尋ねて見てくれと云ふ事を頼んだ。
「是非訪ねませう。」
「若しお尋ねやしたらな、私少し貴方にお頼みしたい事があるのシやが、聽いておくれやすか。」
お里は念を押して話出した。――今は恁した小ッぽけな素人下宿をしてゐるが、此ては迚も見込がないから、少し場所へ乘出して、公然の營業にしたいが、其には二三百纏つた金が要る、其事を磯野に交渉して見てほしいと云ふのであつた。而して、縋るやうに、幾度も繰返して頼んだ。
此時學生が二人歸つて來た。黑い制服を着た二十二三の青年で、孰も營養の稀薄さうな顔をしてゐた。淺裏草履を引摺つて、手を衣兜へ突込みながら、ノロクサと入つて來ると、

「オヽ寒い／＼。」と顫へながら茶の間へ上つた。

二人はヂロ／＼私の顏を見た。

「お戻りやす。寒うおましたろな。」お里はお世辭を言ひながら、「サア、火鉢に澤山火を取つて上げまッさ。」と其處にあつた火鉢に火を移した。

書生は二人とも、其處に座つて、默つてヂロ／＼私の顏を見た。

「此方はんはな……。」とお里は初めて元氣らしい調子で、「私が天滿に居た時、暫らく宅に居やはつた方だす。」と其から私の身のうへを掻撮んで話した。

學生は、默つて聽いてゐたが、少時すると、二人同志で、低聲で話を始めた。話は醫學上の問題であつた。其間も二人は臆したやうな、輕蔑したやうな目で、ちよい／＼私の顏を見た。

するうちに、お鶴が食卓を二人の前へ擴げる。食卓のうへには、温かさうな蒸氣が立つた。薄い皿に、靑い葱と牛肉の片が、ちよんびり盛られてある。學生は、お鶴のお給仕で飯を食始めた。

「貴方にも、今何ぞ御馳走しまッさ。」とお里は、又火鉢へ炭を注いで、「久振だすよつて、寛り遊んで行つておくんなはれや。」

私が起たうとするのを、お里は頓むやうに引止めた。

お鶴と書生との間には、折々クス／＼と笑聲が洩れた。書生が何やら、私と揶揄つてゐる。お鶴は給仕盆を持つたまゝ、此も負けぬ氣で輕口を利いてゐた。

「お鶴はん、給仕の爲振が好いよつて、今に私のお嫁はんに貰ひませうな。」
「院長はんてにもお成だしたら、私お嫁になと何になと行つて上げまッさ。」
「孰が好うおます。」
「サア、孰だッしやろ。」
「何を言うてゐなはんのや。」お里は窘めるやうに言ふ。眉をピリ〳〵させて居た。
飯が濟むと、書生は二人とも二階へ上つた。お鶴は食卓の上の、皿小鉢を臺所へ運ぶと、少時隅の方で、二人の話に耳を傾けてゐたが、其うちに、此も二階へ上つて了つた。
二階では、若々しい笑聲が起つた。お里は其度に話の腰を折られて、目に稜立てゝ段階子の上を見上げた。
別れる時、お里は汚い姿で、町の角まで送つてくれた。
私は其限お里に文通もしない。東京へ歸つてみたが、磯野はもう茅場町には居なかつた。(をはり)



笹鳴

繞石

笹鳴や宇治は茶の木の丘の家
奥の院鎖しに上る落葉かな
水鳥や月にしるけき澪
乾鮭の泣くや鼠の逃る音
干大根隣の梯子借りにけり
紺足袋に惜しき面ざし湯女若き
襟巻の儘に老師や夜の膳
次の間や助炭の上の羽根箒
漢竹と松と盆栽冬さるゝ
宵火事の消えて霙となりにけり

長詩三章

太田正雄

盲唖院落日調

盲唖院の濁りたる白壁に、
赤と黄と紫と黄と――
喇叭の音も消えてゆく秋の日、
憂たげの二重瞼にひそひそと四邊見まはし、
櫻の葉らはかたみに歌うたふ。
赤と黄と緑と赤と、
こたびはた黄と格魯密母と。

銀の如き十月の、空氣は重し。

赤と黄と黄と憂愁と、
こたびはた黄と格魯密母と。……

忽ちに
さと雲間より火の如き斜日さし添ふ。
破れたる古釣鐘は驚きてららと鳴りそふ。

赤と黄と黄と憂愁と、
こたびはた…あれ玻璃窓に日の反照し。
子等は皆庭に出でひたすらに大日を仰ぐ。

下足へ

『あまりに明し。あまりに明し。
あなまばゆし。眼くるめく。』

何ぞ、彼の奇しき叫びは？
知らずとや、かれこそ、青き
羅曼底、その森奥の
月光の泉の底に
棲みなれし鯢魚が
電燈におどろけるのみ。

『あまりに明し。あまりに近し。
燈をすこしうすめよ。』

三味線が今し鳴りやむ。
白き森静かに下る。
生物は下足へ急ぐ。

秋の朝の調

燻銀うるふが如く朧げる――けさは朝なり。
冷き空氣葉末に凝りて身顫へる
そが一叢の後には、古白壁に、
はつかにも薄紅き優心ひとりゆらめく。
薄紅に冷き秋の壁の前、首うなだれ、
わが心黑上衣して徘徊り、あるは佇み、

何物か求めわづらふ。
されど無し、芙蓉の瓣に、銀緑のそが葉柄にも。
變らぬに、なべては舊と—否、時は夏なりしかど—
四年前、初めての日はわが胴衣稚く紅く、
葉洩れ日に醉ひ羞澁ひてわが眼惑したれど——
その折はしかと見たるを。

黑き精神いま追懷の薔薇より覺めて濁りぬ。
されど無し。充血の眼は尋ねても何も見ざりき。
變らぬになべては舊と—否、時は夏なりしかど。
ただ赤き雛芥子の座に白芙蓉代りてはあれど。

和歌　紫舟選

○　　太田生麥

悲しみは半ば去りたりいさゝかは安きこゝちになりなむとする

淋れたる野に君を見つまたおもふ何時ぞやありし悲しき事を

あゝかなし囚へんとして囚へ得ぬ影のかたちのまた浮び來て

君見れば鈍きを指を頬にあてゝ只管泣きしわれなりしかな

野をゆけばふと古のおもひでの國をしおもひうなだるゝかな

物見れば物に映えあり君見れば君に映えありかくてわれ生く

あはれわが來し方遠しゆくすゑはなほ遠からむ苦しみの道

好き御衣(かんぞう)召さばゆかしき平安のむかしながらの
うつくしき君

あゝその日いふべかりしを一日してまた一日し
て遂に果さず

悲しみに面をむけて喜びをつくろふわれの弱々
しさよ

あゝ泣きて悲しきなりもかなしきは涙もとめて
得ぬゆふべなり

けふもまた多くの人の中に居てもだせし故にさ
びしうなりぬ

○　小松皐堂

天地を放たれてあるものゝやう今日も送りぬう
つら〳〵と

細眉のさまにも月の照らせるにまたも浮ひぬ悲
しき面輪

淋しき子並べる中に君もまた加はりてゐぬ秋の
夜の街

夜の阪あとに髮ひくものありとかへりみしては
また歩みゆく

日向葵の日を戀ひめぐる如くにも吾れを離れぬ
君の影かな

戸によりて秋の陽を見る淋しさに心なれてやも
の云はぬ人

息はむに野はみないばり立ちてあり遠き路來し
疲れの吾に

君の心我が胸と合ひ日の光青きが中に興じては
舞ふ

喜は今胸に滿つ盃に綠の酒のみなぎれるごと

○　大石天裳

ほてらひの性の總てをなげうちてたゞ君を見る
日頃となりぬ

波を背同じ形に逝く水は歸らぬ性をかざらむと
する

枯草は心のやうにさりげなく崩えむとすなる芽
の包みゐぬ

心淋し灯火もなき夜の街を饑ゑし乍らにゆく吾
を見る

たど〳〵と秋の街ゆく人のむれ饑ゑたるさまを
なほかざりつゝ

さかしくもものを求むと勞れたる心の頭もだげ
くる日よ

眼もはるに秋は澄みけり幾百の靑き小さき鳥空

をゆく

朽ちはてむ運命も知らず老木の春來れはたゞ芽をふきてゆく

○　　かほる生

若白髮思ひすてにし美くしき人の數ほど生ひにけるかな

額の皺父にかゝ似る笑ふ時頬によるゑくぼ母にかも似る

京の街白雪ふりぬ舞子等が朝湯がへりのその姿見む

空車青物市のわらくづの中に並べり霜光る夜を

我れ八百日うづまきのぼる大熱の炎の中に君を想ひき

誓ひ給へ共に火ともえ灰となり死に行く運命ほりしとあらば

○　　鈴木春洋

人はみな樂の音に醉ふ我れひとり戸の外にゐてもの思ふ時

鬼灯や母は遊女と涙ぐむ髮長き子のおもかげも見ゆ

人妻は手毬つきたるそのかみの樂しかりきとあかず云ふかな

北極の潮に似たるひやゝけき水は流れぬ思ひ出の海

花やかた灯したれど淋しさはせまりくるなり追ふすべもなし

○　　樋渡花明

吾が胸は雨し風する天地のこれかのごとし君を思ふ日

春の月はつゝまし人の瞳にも似て雲の暇洩れ吾が肩に照る

落日の光の中に大銀杏白樺立てりすくすくとして

なにとなき寂しさ身をばおかしけるわれを見給へ涙はてなし

○　　野の水

あぶみなき馬に乗り行く心地して求めしものを悲しさに見る

○　　鎌田雅美

若うしてうれしき涙うきつらき涙おぼえぬなつかし人に

ゆきずりやためらふ心せきたてゝあゝ何者か君が名呼びぬ
うら寂し椎の實落つる夜な夜なをひたにわが魂ふる里へゆく

○　西　内　白　穗

あゝ二人別れてはともにうとましき心おぼえて涙ながるゝ
迷ひきて月照る丘に我立ちぬ少さき愁のかずをかぞへて
あゝ冬の月てりいてぬ街をゆく人のおもわの悲しき色よ

○　井　淵　み　た　ま

かく生れし性質こそ世にはいれられぬあゝ我のみは如何に死すべき
何となく心ときめく夕かなまがごとならば如何にのがれむ
つゝましき寢顏みらるゝ朝はふとかなしきことの身にはもしむかな
大なる扉の前にたちしごと君をし見れば胸うたれけり

○　山　村　龍　子

このかたき冷たき氷君思ふ吾に似る火にかく解けぬ見よ
夕月夜君來る路を二三丁辿れば笛の音ぞ聞え來る
服高き胸に手あてゝある夕見し青白き顏を思ひぬ
騷がしき胸よ靜かにうかとへば君たゞ一人在しますのみ
知らぬ人に物を貰ひしてゝちすれあまりに易く君を得たれば

○　小　島　ま　す　子

我がこゝろ野越え山越えはしなくも君がみ胸のおもひに合ひぬ
故もなく物なつかしき身と生れ菊咲くゆふべ君にまみえぬ
あるか中に其の御胸の一の座を占めぬと思ふ心驕りよ
針入るゝ箱かたよせて暫時を夢のやうなる物の日記綴る
おもむろに花開けゆく春の日の思してまつ君を見む日を

天地にみ胸一つをたのみつゝわかなつかしき母に別るゝ

今日といふ今日は來つれと君としてうち仰ぐべき幻のなき

○　　　尾崎渡水

我が胸に紅き鳥すみ心得て翼ならすや君を見る時



手鞠

やり羽子の袂に邪魔な手鞠かな　へき
姉妹のよく似し聲や手鞠唄　同
つきそれの唄ぞ殘れる手鞠かな　同
よき手鞠かゞる針子や福壽草　同
回り椽三回りつきし手鞠かな　同
妹のよごして返す手鞠かな　同
左手に右手に鞠やつきかはす　同
つけば勝つ下女妬ましの手鞠かな　同
嫁になるよな年しての手鞠かな　同
子無き妻の淋しくかゞる手鞠哉　同
やり羽子に遊びの移る手鞠かな　同
唄のふし母の癖似る手鞠かな　同
ころ／＼とどこ迄ころぶ手鞠かな　同

けさ借りし三貫かへす手鞠かな　同
酒の酔禿と手鞠つきにけり　同
羽子の勝ち鞠の負けに酬ひけり　同
手鞠つくに姉は妹に劣りけり　木蓮
日の丸をかゞり出したる手鞠哉　荻里
燈火に手鞠のひゞき通ひけり　一歩
庭池に落ちし手鞠をかこつかな　一雫
鞠それて驚く鶏や庭日南　洛陽
振袖にすねても見たる手毬かな　素江
つく鞠を見まもり顔の子猫かな　峡花
手鞠ついて正月日和うれしけれ　青雉
拜領の手鞠に誇る老女かな　化翁
手毬唄一貫ついて渡しけり　瀦水
髪結ふて輕らかにつく手鞠かな　櫻崖
手鞠つく友達多き妹かな　呑哉
草の戸や手鞠の音もなかりけり　飛十
手鞠つく椽に雪ふりかゝりけり　杏
かし借りに販ふ椽の手毬かな　靜阜
小女の日南に酔ふて手鞠かな　月耕
手毬つくしばしを幼な心かな　蓼南
知れぬ鞠屏風の陰に一日かな　樵子

投げて取る手毬は屋根を落ちて來る　小雨丸
手毬唄鄙めく京の町家かな　哲郎
物の名の覺へ始めや手鞠唄　松翠
貰ひ得て飾手鞠や夢に入る　黑星
怡々として孫の手毬を音頭かな　汀斉
母人に頼む手毬のかゞりかな　寒山老
手鞠唄交る／＼に唄ひけり　如水
手毬つく君が腕の美しき　枕橋
朝霜の庭や疾や來る毬の友　鯨舟
山里や幾代傳はる手毬唄　奇溪
使して手鞠貰ふてかへりけり　胡村
手鞠唄覺束なげに覺えけり　木瓜
小役者の女に交る手鞠かな　吟朗
公事敵の隣へはねし手毬かな　壺人
左手に手鞠つく子の功者かな　吼天
男われ一人交れる手毬かな　背南
お使の返事待つ間を手毬かな　其櫻子
すね者と呼ばれて憂き手毬かな　郊人
繪襖の梅にそれたる手鞠かな　刀川
貰ひたる手鞠くらぶる姉妹かな　槐山
麻の葉に金絲をかゞる手鞠かな　太郎

手鞠歌京の糸屋の娘かな　五得
替手毬ちよと百ついて渡しけり　秋灣
東門の羽子南門の手毬かな　草童
舞弟子の訪ひ來る手毬日和かな　驟雨
手毬つく優しき子よと覺えけり　同
七貫の借りで別れし手毬かな　桃里
意地惡き子のかくしたる手毬かな　同
五つ子に乳母はんべりて手鞠かな　雪花
いたいけの手鞠の歌や幼稚園　同
百ついて受授の約ある手鞠かな　起堂
姉のより妹の小さき手鞠かな　同
石女の手鞠をついて見たりける　もも
二貫かりて椽に日暮れし手鞠かな　同
九十九をつきて手毬のころげけり　人生
つく手毬のあなや障子にあやまちぬ　同
吉田屋の門に禿が手まりかな　糸水
桝かゞりつかぬ手毬を袖袂　同
鄙言まじる里子や手毬唄　凉郎
宿の子の我になづきて手毬かな　同
つきかへる手もとそれたる手毬かな　蝶人
かゞり糸ほぐれそめたる手毬哉　同

糸ためて作る手毬や老の母　溪外
振袖の重さをかこつ手毬かな　同
十皆のかゞり遠ひの手鞠かな　亞烏朗
よく上る手毬上らぬ手毬かな　同
帯解いてやれば手鞠の落ちにけり　梨山
飛石をそるゝは負と手鞠かな　同
手毬つく女見て居る鸚鵡かな　花星
唄上手手毬上手の一上り　同
いさゝかの汚れを惜む手毬かな　茶童
鞠兩手女の子の心豊なり　同
武家町や塀のうちなる手毬唄　朝影
弟は護謨毬ついて歌は無し　同
絹毬の塵打ち拂ふ袂かな　花舟
護謨毬の投ぐればかへる板戸哉　同
手毬つかぬ日も無し妹が日記かな　澁翁
山茶花の日向にころぶ手毬かな　同
すかす姉泣く妹や揚手毬　不言
うた三度終れど果てぬ手毬かな　同
京に住んで育つ我が子や手毬唄　四水
毬いさゝか御庭の上よこれけり　同
針子みな日南の庭に手毬かな　蓼水

つき廻る手毬うれしき廣間哉　同
振袖を背にかへして手毬かな　秋紅蓼
京土産手毬も中にありにけり　同
蔵の棟までや上れと手毬かな　灘雨
高ついてくるりと廻る手毬かな　同
子の泣かぬ暇鞠つく子守かな　鶴々樓
毬つきの子等集ひ來る日南かな　同
手毬かゞる妹の膝の子猫かな　同
響を落とす手鞠のはづみかな　患多
手毬つく妹が映る鏡かな　同
手毬つく畫の祇園の舞子かな　同
手鞠つく廊下や猫の走り來る　春溪
鞠つくや大根干しある椽の端　同
鞠歌は國の名山名寺かな　同
振袖に手鞠の丸き見ゆるかな　のぶる
小さきは末の妹の手鞠かな　同
手鞠歌五人揃ふて歌ひけり　同
遣羽子の連と分れて手毬かな　抱虎兒
手毬歌椽に訪ひよる女の子かな　同
手毬つく椽の二人や同い歳　同
霜解の庭にあやまつ手鞠かな　桂村

雨手つき一つころびし手毬かな　同
階をつき〳〵上る手毬かな　同
禿二人其角に鞠をせがみける　其蜩
突く手毬十貫姉に貸し申す　同
すねて振る袖から落ちし手鞠哉　同
手鞠唄京は女のよき處　梁村
手鞠つくを見て笑み去りし禮者哉　同
羽根つくや手鞠つく子と入り亂れ　同
數へ唄入つまでつきし手毬かな　渭南
手毬抱いて雨に愁の眉毛かな　同
手毬唄廓に育ちなまめかし　同
手毬つく禿は知らず落としもの　滴翠
洋妾の子は踈まるゝ手毬かな　同
三つ手毬一つ過つ潦　同
學校の包ふくれし手毬かな　春夢
毬唄や富士に始まる山盡し　同
手毬つくお七十六つゝましき　同
まりつくや振の袂を膝の上　方外
姫君を遊ばせ申し手毬から　同
まゝほるゝ見ほるゝ毬の上手哉　同
手鞠つく姦しき兒や妾腹　魯笄

乳姉妹仲よく手鞠つきにけり　同
戀知らぬ知る兒も交る手鞠哉　同
綾とりにあきてつくなる手毬かな　暮雨
貧ゆゑに賣られたる子の手毬かな　同
こゝろみにつく絹毬やはづみけり　同
國々の戀さま〳〵や手毬唄　同
百よとて渡すうれしき手毬哉　盛花
下京や紅屋が家の手毬唄　同
京紅の唇寒し手毬唄　同
三人が輪になつてつく手毬かな　同
手毬つて羽子つての友來りけり　總子
手毬うた姫の夜伽に歌ひけり　同
手毬唄手毬はつかず唄ひける　同
ふり袖の手毬の泥を佗びにけり　同
はこせこに痞へる胸や手鞠つく　洛燕居
突き〳〵て鞠唄早き巧みかな　同
色糸の足らで映えなき手毬かな　同
老刀自の鞠せがまるゝ暇かな　同
意地惡の姉につきかつ手鞠かな　同
さりげ無く乳母がかへ〳〵手鞠哉　鱗洲
子の數に手毬かゞるやかゝり人　同

毬歌や女の道の數へ草　同
子心に借貸思ふ手毬かな　同
身丈より高くはづみて毬嬉し　同
護謨毬に墨汁（しる）さながらの目鼻哉　尺水
護謨毬に恨の針や姉の留守　同
絹糸の毬つき惜しむ大地かな　同
手毬唄雨に淋しき廊下かな　同
壁を背に手毬の丈や丈くらべ　同
二階から手毬ころがる庇かな　同
人妻の手毬もつくや松の內　青城
京の紅手毬に添へて貰ひけり　同
メイリイの赤き腕輪や護謨手毬　同
幼稚園の幼な仲間や紙手毬　同
油屋の一人娘や絹手毬　同
よき仲の取かへてつく手毬かな　同
手毬唄うたひ返して一つかな　碧雲居
何處てつく手毬の音や障子の日　同
敎子が來て一日や手毬つく　同
ころび合ふ袂の手毬密柑哉　同
春や昔誰がつき古りし手毬哉　同
手毬唄お染の戀もありぬべし　同

暮るゝ椽手毬の挨拶ひけり　同

山の手の羽子下町の手毬かな　雛泉

三千歳が手毬一念數へけり　同

育たねば此子女裝の手毬哉　同

椽をする振袖重ふ手毬かな　同

敗ける氣の妹がきほふ手毬かな　同

妹の日記や手毬の貸しもあり　同

夜をこめて五色の手毬かゞりけり　同

番山が政治教化の手まり歌　同

ありし村の貞女の事を手毬歌　同

手鞠つく娘いとしと人や見ん　茶青

糸長く手鞠のかゞりほどけけり　同

目に浮ぶ亡き兒が顏や手鞠歌　同

屠蘇の醉手鞠つく子の邪魔もして　同

お定りの妹が泣き出す手鞠かな　同

まばゆさに日を背にしたる手鞠哉　同

綿手鞠つけばいびつになりにけり　同

一人ついて一人が唄ふ手鞠かな　同

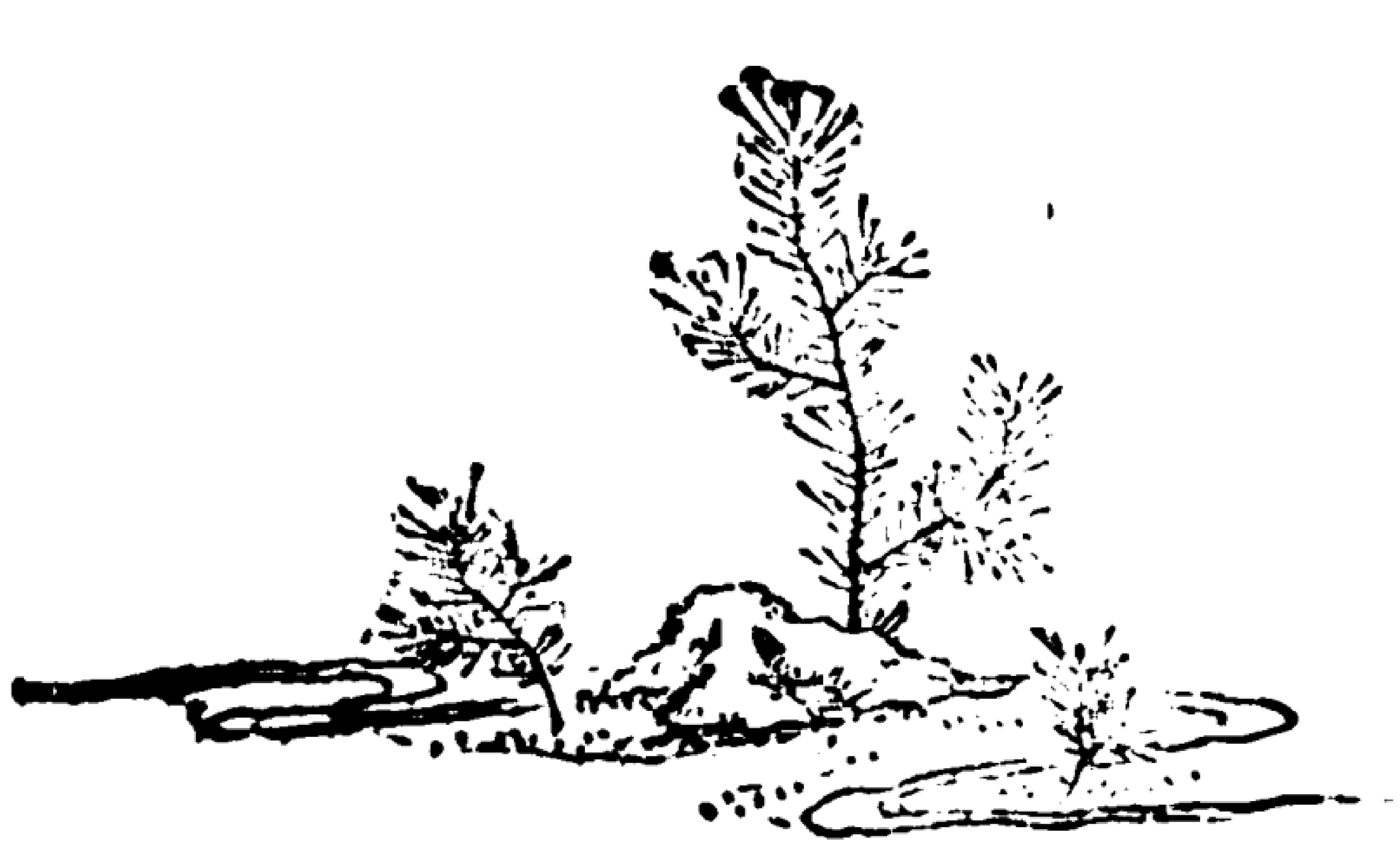
一貫借りて二貫貸したる手毬かな　同

よくはづむ手毬なりしが行衛哉　同

本號應募者總て百二名、句數千八百五十二句、應募句數の多かりしは、穂子氏の五十四、忠多氏の五十、深雨氏の四十、溪外氏の三十九、茶青氏の三十七、雛泉涼郎二氏の三十六づゝ、化翁氏の三十五、背南氏の三十三、杏氏の三十二、飛十木瓜暮雨三氏の三十一づゝ、緋花滴翠紅鬆三氏の三十づゝなりき。

募集課題　出代　一月十五日締切
　　　　　雀の子　二月十五日締切

應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁十九番地大谷正信宛の事。



過去一年間の政治、外交、宗教、文學

△政治及外交

XY生

第二十四議會に於て、最も著るしき事業は増税案通過なるべし。

西園寺内閣は四十一年度豫算の編製に行詰まりしが、一方には松方井上諸侯の實業家を代表して極力其の財政策を攻撃するあり、而して増税は政友會の代表者たる松田、原の兩相肯はず、且つ事業繰延に就ても阪谷、山縣の兩相と衝突ありて竟に其の辭職とまでなり、議會召集の眞際頃には、内閣動搖の巷説さへ立ちたりき、幸ひに桂侯の調停あり、一方には事業繰延を斷行すると共に、一方には酒造税及び砂糖消費税を引上げ、石油税を新設し、且つ煙草專賣の收益を増加して、以て兎も角も歳出入の均衡を保維することとなれり。

阪谷藏相罷めて松田法相之を兼れ、山縣遞相の後任は原内相之れを兼れたりしが、此の増税案をして議會を通過せしむるが爲めには、政友會實に大なる苦心を爲したりき、彼等は眼前に總選擧を控へて、増税黨の名目を受くるの甚だ不利なるを知るがために、百方増税に反對したりしも、去りとて内閣は明け渡す可らず、如何にしても總選擧を自黨内閣の下に行はざる可らずとして、竟に極力増税案を支持することとなれり、桂侯の調停緣故により、大同倶樂部も亦同案に贊成し、而して貴族院の多數まで之を助けたりしが故に、案は幸ひにして通過し成立したるなり。

然れども實業家の多數及び進歩黨猶興會等は非増税を唱へて極力之に反對したりき、西園寺内閣の命脈を縮めたりし一の原因(然り、一の原因のみ)は確かに此の増税にありしを疑ふ可らず。

此の議會は極めて平凡なりき、政黨は勝敗總て頭數の多寡によつて決し、また主張の眞否に由らずとして、多く議論に重きを措かず、但だ猶興會の人々は、盛んに饒舌を逞しくしたりき、然り、吾人は敢て饒舌といふ、彼等は立憲政治の眞髓、少くも議院政治の本領は議論にありと確

信するもの丶如く、有らん限りの聲を以て演說したりき、然かも形勢には些の影響を與ふることなかりき。

議會閉會の後間もなく、貴族院の千家男は入て法相となり、堀田子は拔かれて遞相となれり、政友會員は西園寺首相の此の英斷を稱して嘆美措かず、一般の政界も亦殆んど阿然自失の姿なりき。

五月には總選擧行はる、其の結果、比較的に市部に非增稅否非政府派の議員出て丶、政友會聊か顏色を失へるも、進步黨の稍々減じ、大同俱樂部の大に減ずるに比して、政友會が聊かながら多數を出し得たりしは、勉强して內閣を維持したる効果なることを言を俟たず、但し豫期の如く絕對に過半數を出し得ざりしと雖も、尙ほ各地方に入會の豫約者あり、政友會は此の豫約の實行によりて僅に過半數を占むべきを豫期したりしが如し。

政友會(寧ろ內閣の幹部)は衆議院に於ては最早多く憂ふるに足るもの無しとし、寧ろ力を貴族院に用ゆることに專らならんとし、現に千家男堀田子の入閣を動機として、殊に手を同院に伸ばしたりしが如し、伯爵議員の選擧に於て、先づ川村對大木の競爭に、密かに後者の背後に立ちしも、同點にして年長のため川村伯當選し、次の補欠に、更らに大木對芳川の競爭となるに及び、大木伯をして竟に芳川伯を倒すことを得せしめ、勢に乘じて伯爵間の形勢は一變せんとしたり。

政友會及び內閣の斯る意氣込みを見し各政黨は、拱默して徒らに自から小なるを忍ぶ能はず、先づ進步黨大同俱樂部中心となり、實業派をも誘致して以て非政友會大同盟を作らんとし、事略々緒に就かんとする形迹ありしが、此の運動は意外なる內閣更迭に由て頓挫したり。

西園寺侯は七月三日を以て突然辭職の意あることを公けにしたりき、政友會員中には實に泣いて之れを諫止したるものありしも、竟に侯を動かすこと能はざりき、政界の多數は、總選擧の形勢の寧ろ內閣に利あるに當つて、却つて此の辭職あるを怪めるが、實は四十二年度豫算の編製の甚だ困難なるがためなりしと蔽ふ可らず。

四十一年度に於て、所謂六ヶ年の繰延は斷行せられたりき、然かも四十二年度に於ては、增稅斷行の後尙ほ歲出入の均衡を得がたき虞あり、然かも此の上の事業繰延は到底之を行ふ力あらず、且つ公債募集も、內外の形勢之を許さず、抑も財政に對する西園寺內閣の不信用は、當時殆んど絕頂に達したりき、南滿州鐵道の社債は、辛ふじて其の半を得たるのみ、然かも甚だ不利なる條件なりき、外國の資本家中には、最早何等の事情あるも日本の公債に應ぜずと放言する者すらあり、國內に於ては、實業家を擧げて殆んど內閣を咒詛するもの丶如く、松田藏相が財政上何等の成見なきを視て、竟に正面より內閣の敵たらんとする態度を執り、松方井上兩侯を透して最も苛烈に愁訴の聲を高めたりき、若し此の形勢にして底止する所なくんば、西園寺內閣は、僅かに一政友會の恃むべきあるのみ、四面楚歌の重圍に陷らんとす、否、政友會にすら叛者出て丶、殆んど收拾す可らざるに至らんと欲す、大勢を視るに敏なる西園寺侯は、決して項羽の如く愚ならず、形の未だ窮せざるに先つて、早く自から其の局を去れるのみ。

西園寺侯の辭職後、約半月にして桂內閣は成れり、此の內閣は財政整理を標榜し、時恰かも暑中休暇中なるにも拘らず、桂侯は其の自慢の財政通を振廻して銳意調査に從事し、秋風稍々人に可なる時に至つて略々財政の大方針を定め得たり、其の方針とは他なし、西園寺內閣の六年計畫を十一年計畫として大に事業を繰延べ、以て歲出入の均衡を維持すると共に、公債償還高を增加して、以て中外の信用(殊に公債に對する)を博するにありき、乃ち經常歲出を節約すること五百餘万圓、事業を繰延ば

して一億六千餘万、而して公債償還額を五千萬圓以上としたりき、吾人は茲に其の大要を明かにするため、貴衆兩院議員に内示されたる四十二年度豫算の大要を左に抄出すべし。

明治四十二年度豫算を編成するに當りては主として歳入出を整頓し財政の基礎を鞏固にして其信用を厚くし併せて一般經濟の調和を計るの趣旨を以て大要左の方針に依り之を編成することゝせり

一、確定歳出に對しては確定歳入を以て之に應ぜしむることゝし從來公債を財源としたる經費は之を一般歳入の支辨に移し新規公債の發行は特別の性質を有する臺灣事業公債の外當分之を見合すことゝせり

二、一般經費は努めて之を緊縮し急切已むを得ざるもの、新規要求は成るべく之を見合せ既定の計畫に屬するものにありても出來得る限り之を節減することゝせり

三、既定の經營に係る繼續事業を財政經濟上適當なる範圍に止め且實際に於ける事業進行の程度に應ぜしむるが爲め既定の年限及年割額に相當の變更を加ふることゝせり

四、公債の信用を維持し漸次其價格の恢復を計り以て公債所有者の利益を保護し併せて一般經濟界に良好なる影響を與ふるが爲め公債償還額を增加し每年度少くとも五千萬圓を償還することゝせり

五、鐵道の經營を全然獨立自營のものとするの方針に依り適當なる經營を爲さしむるが爲め之に適合する特別會計を設置し從來に於けるが如き一般會計との關渉を避くることゝせり

明治四十二年度總豫算の大體を擧ぐれば

歳入

金四億七千六十六萬七千九百七十圓　經常部

金四千五百五十三萬二千八百二十五圓　臨時部

内

金三千七百七十七萬七千八百三十圓　通常收入

金千七十五萬四千九百九十五圓　前年度剰餘金繰入

計金五億千六百二十萬七百九十五圓

歳出

金四億九十一萬二千百二圓　經常部

金一億千五百二十八萬八千六百九十三圓　臨時部

計金五億千六百二十萬七百九十五圓

にして歳入歳出差引增減なし

明治四十二年度歳入豫算の内譯及其前年度に對する增減を示せば左の如し

明治四十二年度歳入豫算額及前年度豫算額比較表

（△は減）

種目	四十二年度豫算額	四十一年度比較增減
歳入經常部		
租税	三二〇、五三四、一三三	二〇、九二七、三四七
印紙收入	二二、六九五、三八〇	二、五二〇、七九八
官業及官有財産收入	一一三、七二六、〇九七	六、四九九、三四四
郵便電信收入	四六、一二三、八七九	七、五三八、二八三
森林收入	一〇、五二八、四一一	△二、四三五、四四三
專賣局益金	五四、二五一、九五八	三、六八〇、七四五
官有物貸下料其他	二、八二一、八四九	一二二、一〇〇
鹽專賣收入	――	△二、四〇七、三四〇
雜收入	三、三一二、四七九	一、〇七九、九九二

預金利子繰入	六、九六二、四一三	五九五、一四八
臺灣事業公債及借入金償却繰入	三、四三六、四六九	七五八、八四〇
歳入經常部合計	四七〇、六六七、九七〇	三一、九八一、四七一
歳入臨時部		
官有物拂下代其他	一八、六二八、二〇七	八、四五四、九三四
港灣設備納付金	六〇〇、〇〇〇	△ 一、〇一〇、〇〇〇
公債募集金	一一、一〇〇、〇〇〇	△三八、九七一、一一六
臺灣事業費繰替借入金	二、一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
公債募集金	——	△三九、〇七一、一一六
軍艦水雷艇補充基金繰入	一〇、六八九、五八六	△ 二五〇、〇〇〇
貨幣整理資金繰入	一四〇、〇三七	△ 一、五一五、八八一
一時借入金	二、六二〇、〇〇〇	八五四、〇〇〇
前年度繰入金	一〇、七五四、九九五	△六五、〇七五、八一四
日本大博覽會開設納付金	——	△ 一、〇〇〇、〇〇〇
歳入臨時部合計	一四五、五三二、八二五	△九八、五二三、八七七
歳入總計	六一六、二〇〇、七九五	△六六、五〇二、四〇六

(備考)帝國鐵道の益金は四十二年度より之を一般歳入に繰入れざることに改むるに依り四十一年度豫算六億千九百七十九萬七千六百七十一圓の内該金額三千七百五十五萬四千四百七十圓は比較上便宜の爲め之を控除したる金額を掲上す

明治四十二年度歳出豫算の各省所管別金額及前年度に對する增減を示せば如左

明治四十二年歳出豫算額及前年度豫算比較表(△は減)

所管別	四十三年度豫算額	四十一年度比較增減
帝室費	三、〇〇〇、〇〇〇	
經常部		
外務省	三、六六八、一四八	五五、五四一
内務省	一一、三一九、六二四	六六二、四二九
大藏省	二二三、七二七、五二〇	一、三九〇、二三二
陸軍省	七二、二九一、八四二	二、〇八二、〇六三
海軍省	三五、三二三、一七二	五一二、四三五
司法省	一一、三六三、六九九	三八五、七三三
文部省	六、二六〇、九〇四	七五、三七〇
農商務省	六、七五六、四一五	△ 七七七、四三〇
遞信省	二七、一〇〇、七七八	一、四三三、七二九
經常部合計	四〇〇、九一二、一〇二	五、八二〇、一〇一
臨時部		
外務省	三、二一二、〇〇〇	△ 四〇六、二三三
内務省	一二、八九二、八〇一	△ 五二一、四九九
大藏省	二〇、五五五、九九八	△ 七、九〇九、七三五
陸軍省	一五、四四〇、二二三	△二一、七六六、七七一
海軍省	三六、七〇五、〇六三	△ 九、四四五、七九二
司法省	六六三、五一六	一八、二〇九
文部省	一、一一二、四七一	△ 六一五、三四六
農商務省	六、一三一、〇八六	△ 三、八二四、二五五
遞信省	一八、五七五、五三五	二四八、〇三〇
臨時部合計	一一五、二八八、六九三	△四四、二二三、三九二
總計	五一六、二〇〇、七九五	△ 八、四〇三、二九一

(備考)帝國鐵道に關する公債費及鐵道の資金は四十二年度より之を一般會計と分離するとに改むるに依り四十一年度豫算六億千九百七十九萬七千六百七十一圓の内該公債費三千二百十萬二千七百九十二圓

諸資金三千三百九萬七百九十三圓合計六千五百十九萬三千五百八十五圓は比較上便宜の爲之を控除したる金額を掲上す

明治四十二年度總豫算に計上すべき通常の歲入歲出の外臨時軍事費特別會計より繰越したる事業費及明治四十一年度より繰延べたる費に付併せて明治四十二年度に於ける支辨の計算を示せば左の如し

歲　出

一金五億千六百二十七萬七百九十五圓　通常歲出

內

金四億九十一萬二千百二圓　經常部

金一億千五百二十八萬八千六百九十三圓　臨時部

金千百九十一萬千二十四圓　臨時軍事費使用額

金千四百十三萬千八百三圓　四十一年度より繰延使用額

計金五億四千二百二十一萬五千六百二十二圓

右に對する財源

一金五億五百四十四萬五千八百圓　通常歲入

內

金四億七千六十六萬七千九百七十圓　經常部

金三千四百七十七萬七千八百三十圓　臨時部

金三千六百七十六萬九千八百二十二圓　前年度剩餘金

計金五億四千二百二十一萬五千六百二十二圓

明治四十二年度歲出豫算中前年度に比し增額を要する事項金額の重なるものを擧ぐれば左の如し

經常部

內務省所管

地方改良事業獎勵費	四三、〇〇〇圓
地方感化院費補助	一四九、〇〇〇
沖繩縣地方費補給	二〇〇、〇〇〇
計	三九二、〇〇〇

大藏省所管

國債整理基金繰入增加	八、四四三、〇五二

但し前年度豫算額の內戰遂關係の公債利子等を控除したる殘額に對し增加する金額なり

陸軍省所管

軍實充實及二年現役制に係る經費增加	一、七〇六、七五三
糧秣費の相場騰貴に依る增加	五七二、四三六
一年志願兵及幼年學校生自費支辨に係る諸費	七四五、七六八
計	三、〇二四、九五七

海軍省所管

新艦艇及戰利艦艇經費增加	六四八、五二二

司法省所管

改正刑法實施に關する經費	一五四、一三七
奏任判檢事增俸	二七二、〇〇〇
計	四二六、一三七

文部省所管

學校圖書館支出金增加	六九、八七七

遞信省所管

電話交換擴張維持費	四九〇、二四二
遞信事業增進に伴ふ經費	二九三、四五七
計	七八三、六九九

經常部合計一千四百七十八萬八千二百四十四圓

臨時部

内務省所管

横濱市水道費補助　一〇、〇〇〇

但總額百七十五萬圓にして明治四十二年度以降十三ヶ年度に亘るものなり

小倉市水道費補助　三〇、〇〇〇

但總額二十八萬七千圓にして明治四十二年度以降五ヶ年度に亘るものなり

甲府市水道補助費　一〇、〇〇〇

但總額二十一萬八千圓にして明治四十二年度以降六ヶ年度に亘るものなり

釧路築港費　二三九、一七五

但總額四百七十五萬九千五百四十一圓にして明治四十二年度以降十二ヶ年度間の繼續費なり

敦賀港改良費　二〇〇、〇〇〇

但總額八十萬圓にして明治四十二年度以降四ヶ年度間の繼續費なり

計　四八九、一七五

大藏省所管

東洋拓殖會社補助　三〇〇、〇〇〇

臨時事件行賞諸費　七六六、〇二九

韓國派遣部隊豫備費増加　一、六七〇、〇〇〇

計　二、七三六、〇二九

陸軍省所管

小倉衛戍各部隊給水設備支出金　五〇、〇〇〇

但し總額二十萬圓にして明治四十二年度以降四ヶ年度間の繼續費なり

營繕資金支辨に屬する修繕費及土地建造物利用費　三〇一、三六九

計　三五一、三六九

海軍省所管

舞鶴火藥庫冷却裝置費　二六〇、〇〇〇

吳海軍監獄移築費　二五七、四一四

吳射的場移築費　一二三、九四〇

計　六四一、三五四

司法省所管

市谷監獄建築費　二〇八、三四四

但し總額六十三萬七千七百二十圓にして明治四十二年度以降五ヶ年度間の繼續費なり

農商務省所管

製鐵所据置運轉資本補塡の増加　二六〇、〇〇〇

遞信省所管

航路補助費の増加　一、二四八、二九七

航海奬勵費の増加　五二八、四七〇

電話交換擴張費の増加　一、二〇〇、〇〇〇

但し繰延額と差引總額四百二十萬圓にして明治四十二年度以降四ヶ年度間の繼續費なり

計　二、九七六、七六七

臨時部合計金七百六十五萬三千三十八圓

總計金二千二百四十五萬千二百八十二圓

明治四十二年度豫算に於ける國債整理基金繰入額は一般會計より繰入

るゝもの一億五千三百十餘萬圓、鐵道特別會計より繰入るゝもの二千九百九十餘萬圓、合計一億八千三百餘萬圓にして内公債の償還に充つべき金額は五千八十萬圓なり

明治四十二年度に於ける帝國鐵道の純益金は三千八百十餘萬圓にして内鐵道に關する公債其他の利子拂等に充てんが爲め國債整理基金に繰入すべき金額二千九百九十餘萬圓を差引くときは八百餘萬圓の純益を生ずる計算なり右の内六十餘萬圓は之を積立て殘額七百五十餘萬圓を建設及改良費の財源に充つるものとす而して建設及改良費の豫算は二千九百十餘萬圓を要するが故に差引約二千百六十萬圓は借入金を以て之を支辨する見込なり

明治四十二年度豫算を編成するに當り同年度以降既定繼續費等にて繰延及減額を爲したる金額は一億六千八百十八萬六千四百八十三圓にして其事項金額を示せば左の如し

在外公館新築費	二五、〇〇〇
北海道道路橋梁排水費	二、一五四、四〇〇
小樽築港費	一、五八一、〇九五
横濱税關海面埋立及陸上設備費	一、〇四六、四〇七
横濱港水堤修築費	五二、〇一三
神戸税關海陸運輸聯絡費	四、四九四、四〇三
煙草製造專賣創業建設費	三、五八一、八九九
理事廳新築費	四九、八四四
内閣所屬廳舍及倉庫移轉改築費	二三、四五一
統監官舍新營費	一四三、一五六
印刷局機械增設及工場其他築費	五六、二五九
造幣局擴張費	一七二、三〇六
東京灣砲臺建築費	一、二四六、九〇〇
陸軍營繕及初度調辦費	二、〇七三、〇七三
陸軍復舊費	二一、一二五 一一七
陸軍倉庫建築費	二、六〇二、一六〇
軍艦製造及建築費	一〇、一〇八、九六四
海軍整備費	二七、六六〇、六四九
補充艦艇費	五〇〇、〇〇〇
監獄建築費	二〇三、〇二〇
諸學校改築並改築費	三八七、二三九
足尾國有林復舊費	一七三、五六四
日本大博覽會費	六、九六九、一〇五
電話交換擴張費	六、三五〇、〇〇〇
帝國鐵道建築及改良費	二、七四六、四九〇
韓國鐵道建設及改良費	一、〇〇〇、〇〇〇

計金一億六百五十二萬六千五百十四圓

外

金千九百六十五萬五千九百四十三圓　四十一年度繰延額に對する再繰延

金四千二百萬四千二十六圓　臨時軍事費

合計金一億六千八百十八萬六千四百八十三圓

右繰延及減額に係る費途の内一般會計に屬する明治四十二年度以降既定總額費の年度割繰延及減少額並に改定年割額を示せば左の如し

年度	既定年割額	繰延及減少額	繰戻額	差引改定年割額
四十二年度	七五、八六六、七一二	一五、二四〇、八二六	〇	六〇、六二五、八八六
四十三年度	六〇、一〇二、九四三	一一、八四三、八三一	六八八、九二〇	四八、九四八、〇三二

年度				
三十四年度	八四、八四八、八六七	三、〇二三、〇五八	八六七、二三五	八八、七三九、一六〇
三十五年度	六七、三五九、三二七	一八、一七五、七八四	一、五九四、四四七	五〇、四五七、八六〇
三十六年度	三七、〇五〇、六五六	一三、五四五、六六八	五、七五一、八八八	四八、一五八、八五六
三十七年度	四五、八〇四、七九四	一三、八〇五、九六九	一五、三三一、五七三	四六、三五〇、五七九
三十八年度	三二、三七一、七九九	一五七、八九八	二、八五二、五九六	三五、九四五、二九七
三十九年度	二五、四〇五、六五七	〇	三、一六五、一三五	二七、五七〇、七八三
四十年度	五、〇三七、六三一	〇	八、二六七、九三四	一五、二九五、五五五
四十一年度	一、九八三、九一二	〇	八、六七七、七九四	一〇、六六一、七〇六
四十二年度	一、九八三、九二二	〇	八、五六四、五一八	一〇、五四八、四四〇
計	四三七、二六六、〇五九	一〇三、七八〇、〇二四	八九、四六〇、九一九	四三四、三八六、九五四

（備考）本表の外特別會計所屬既定繼續費の帝國鐵道建設及改良費繰延及減少額二百七十四萬六千四百九十圓、韓國鐵道建設及改良費繰延額百萬圓、計三百七十四萬六千四百九十圓を合計するときは一億六百五十二萬六千五百十四圓となるの計算なり

明治四十二年度豫算に於て各省の既定經費に對し節減を加へたる金額は經常臨時を通じて五百二十五萬七千六百七十圓なり其所管別金額を示せば左の如し

外務省所管	二二七、二六六
內務省所管	四二四、六八八
大藏省所管	五九〇、三九三
陸軍省所管	一、八〇二、三六一
海軍省所管	一、〇九二、〇三一
司法省所管	一七二、九八三
文部省所管	二〇九、七六〇
農商務省所管	四七九、三二七
遞信省所管	二五七、八六四
合計	五、二五七、六七三

此の計畫は果して大に外國の信用を高め得たり、大博覽會の延期によつて、其の市民に諮問せざりしを非立憲なりといひ、或は之に失望して怨嗟するものは多きも、然かも機宜の英斷として一般外國人は賞揚を禁ぜざりき、外國市場に於ける日本公債は頗る昂騰し、延きて一般の有價證券をも騰貴せしめて、市場頗ぶる活氣を帶べり、之を見て少くも實業家は謳歌せり、曾て西園寺內閣を咒詛せる實業家は、總て新內閣の功績を讃々せざるなし、桂內閣は此の點に於て疑ひもなく成功したりと謂ふべし。

桂侯は政黨に對して一視同仁說を標榜しつゝあり、蓋し其の財政計畫の深く民心を得たるを確信し、政友會が多く之に反對し得ざるを察して、暫らく其の鋒鋩を斂むるなるべし、此かため接近を豫期せし進步黨は失望し、大同俱樂部も屛息し、而して非政友會同盟も自然に解散されぬ。

外交の刷新も、亦桂內閣標榜の一たり、西園寺內閣が淸國の感情を害し、滿州に於て屢々彼と確執し、甚だしきは同盟國たる英國人の反感をすら招き、一般に列國の同情を失はんとする傾向あり、殊に辰丸事件に就て徒りに强硬なる態度を執れるがため、益々淸國との交情を傷れるが如きは、心あるものゝ嘆惜する所なりき、新外相小村伯は、將さに此の形勢を一變すべく、一變せざる可らずと豫期せられたりき、但し外交上の施設多く世に現はれざるが故に、未だ俄かに可否を口外す可らざるも、淸國の交情は幾分か之を回復し得たる傾向なきにあらず、兩宮崩御以來、我が眞情の漸く彼の官民を感孚せしめたる如きは、必らずしも國民が善隣の不幸に同情を表したる結果のみと做す可らず、外交當局の施設宜しきを得たるも實に其の主因とせざるを得ず。

米國艦隊の來航に當りて、我が國民が全力を擧げて之を歡迎し、由て以て米國民が日本に對する疑惑を一掃したりし効果は意外に大なりき、而して我が外交當局が此の機會を逸せず、最近に兩國政府間に覺書を交換したるは、亦外交上の一成功とす、思ふに之に由て清國の平和を保證すると同時に、また我が方針の平和に外ならざることを明かにし、殊に滿州に於ける列國の疑念を掃蕩するを得ば、其の功や小ならじ、我が日本は滿州に於て殆んど第二の露國と視らるゝが如き形勢あればなり。

戊申の思想界

(一) 國家對世界教論

科學を以て獨り萬有の扉を開く秘鑰と信じ其力の及ぶべからざる所には何等の知解をも入るべからず何等の信仰をも置くべからずとする加藤弘之博士の胸には、到底唯一神の性質の曉得せらるべくもあらず、偏に人間の妄想に畫かれたる化け物視せらるゝと同時に、一面又博士の利己的根本動向說よりして導かれたる道德論と國家論とあるあり、之と一視同仁の德を有する唯一神とは枘鑿相容れず、汝北せんと欲せば我南せんと言ふが如き關係に立てりと見らるゝも是非なかるべく、遂に「我國體と基督教」の一書となりて世に公にせられたるは、事一昨年の八月に屬し、今猶ほ吾人の記憶に新なる所、靜なる思想界の止水は忽ち擧石の一投下に驚き、時ならぬ萬波の淘湧を丁未末の論壇に飈けぬ、此波戊申に入りても猶ほ未だ全く平靜に復せず、廣井辰太郎氏の六合雜誌に於て三回に亘る長駁文を揭げ、中に國家と宗教と各其立脚地を異にし、此と彼との間何等の衝突すべき關渉あらず、況んや基督の教には國家の主權者にも從ふべき義あるを示し、博士の引いて非難の材料とせる原語の意義を明解したるあり、井上哲次郎博士の雜誌東亞の光に於て批評を試み、加藤博士の物質といふもの、之を純正なる認識論的見地より、更に物質とは何ぞやの一問を放たば如何といひて、一擧直に唯物論の根據を破らんと欲し、更に加藤博士の道德が獨り第三段階有機體たる國家に迄は及ぶべしとし乍ら、更に第四段階有機體たるべき全人類を豫想し、一歩を進めてそれに迄及ぶを得ざるかと詰るあり、浮田和民博士の丁酉倫理會講演集に於て自見を揭げ、宗教の害ありとせらるゝ場合は單に族父統治の國と世界教とのみの關係は存せず、害有らば如何なる國體に於てもあり、而してその有りとせられん場合は、宗教が宗教は政治を超越したるものなりとて一切國家の命令を奉ぜざるの態度を取る時にあり、左れど此の如きの態度を取るは、偏狹にして理義に徹底せざりし過去の宗教のなせしに過ぎず、即ち中世のアナバプチスト若くはカルヴイニズムのなせしに過ぎず、進歩したる宗教は最早今日此ゝる主張に立たざるが故に、其處に何等國家に對する衝突あるべきなしとし、斯くてバイブル其者の儒教の經典にも優りて國家に有害なる分子を含まざるを說き、更に理想の重んずべきは現實に出立して現實に復歸すべきエネルギーに富むにあり、而してその力を強くするには之に十分なる信仰の念の加らざるべからず、神格觀の必要斯くして大に起ると述ぶるあり、兎角する中渡瀨常吉氏の「國體と基督教」なる一書を刊行して基督教徒としての批評を試むるあり、鑑谷聖響氏の「我國體と佛教」なる一書を刊行して佛教徒としての批評を試むるあり、その他種々なる人の種々なる駁論種々なる雜誌に出でたるも、而かも絕えて一人の讚辭を呈するあることなし、加藤博士は此間に立ちて、頑老の身乍ら少しも撓まず、敢然初一念を持して遂に七月、再び迷想的宇宙觀の一書を著す、之には初に自家立論の根底を

約說し次いで諸家に對する駁駁論を收めぬ、博士が本著に於て猶ほ補說したるものの重なる者を拾はんか、

世界教が今日の歐州諸國に害なきは、その主權者が悉く臣民と同一唯一神教の信奉者なるが故に、國家の主權者の上に更に神なる主權者を加ふるとも絕えてその權威の冒瀆とはならず、我國は然らず、聖上は世界教の信徒にましまさず、即ち天上天下唯我獨尊にておはす、而るにその上に唯一神の存在を認むることは、これその聖上の絕對權と杆格す、故に彼にあつては害なきものも我に在つて害ある事を知らざるべからずと說ける事、物質は物質のみ、予一人のみならず凡ての科學者は盡く答ふる事此の如くなるべし、好しそれが吾人に攝取せられて意識となる迄には、感官を經て感覺となり知覺となるのプロセッスあるべしとはいへ、物質は物質なり、本來の面目を維持して外界に發すること恆久なるべしといへる事、第三段階の有機體に行はるる道德が更に第四段階の有機體にも推擴せらるべきことは豫想せざるにもあらず、去れど現在に於ては去る有機體の未だ全く組織せられざるにあらずや、萬國平和會議等のあるありと雖もそれ等は未たし、予が所謂第四段階有機體なるものは嚴密なる意義に於ける世界帝國ならざるべからずと斷ぜる事等それなるべし。

予の玆に勉むる處は單に紹介のみ、敢て寸評を加へんとするにはあらざるも、而かも具眼者は如上の論爭裡に自ら發見し發明する所あらん、加藤博士の自論は誰も知る如く、靈肉共滅の說なるが、その唯物論を破するに有力の辯證たる、延長ある物質が如何にして只思考のみなる心を生ずるか、有如何にして無となり無如何にして有となるかの形式を用ふる迄もなく、如何にして博士は我攝取する物質、即ち認識の材料たる外界以外に、更に渾一體をなせる恆有の外界を認識するを得るか、博士には信仰といふを許さず、飽く迄認識を以て究めざるべからず、博士は何の實權實證、即ち何の權威を以てさる斷定を敢てするぞ。又博士は知ありて信あり、知は將帥なり信は士卒なり、即ち知の後に信あり、信の前に知ありと斷ずるが、是れ知信の關係の實際に暗きものに非るか、博士は利他を變性的利己と名け凡てを利己說に約するものなるが、そは先づ問はずもあれとして、博士はその利己の義を精神界に迄推及して說くものにあらずや、然らば祖國を愛し平和を喜ぶことも當然その利己中に含まれざるべからず、然らば又此世の國家組織を以て單に鬪爭の目的により自護の手段に出づるものと斷ずるは妄ならざるか、既に然らば、第三段階たる有機體を超えて更に全人類にも及ぼすべき道德の可能を見ざるか、必ずしも第四段階有機體の名稱を要せずもあらなん、採らば倘あるべし、兎もあれ如上の數點は博士の更に闡明すべくして論者の更に問はざるべからざるものなるべしと信ず、巳酉の論壇は此問題を再び活かすべき意氣ありや否やは知らず。

（二）　自然主義論

加藤博士の科學萬能論には何人の贊辭をも見るに至らざりしとはいへ、而かも一般の趨勢として現實に重きを置くの傾向ある事は昨今爭はれざる事とすべし、自然主義なるものは元と文藝上の一主義、即ち描寫の際に注意を與ふる一主義と見る方當然とせらるべきものたりと雖も、此聲を好機とし好方便とし、それに縋りてさる鬱積の思を人生觀上に試むるものの現はるゝを致せり、雜誌太陽に據る長谷川天溪氏は先づその張本と見らるべき位置にあり、之も既に丁未の歲よりその意見を明にしたりと雖も、戊申に入りては更に一層論鋒を銳うしぬ、氏は哲學宗教倫理美學等の一切を一束して凡て論理的遊戲に成るものの理想は現實と緣なき

架空の妄想なりと斷じ、それ等の一切を扣除し去つて、殘るべきものは獨り現實あるのみ、而して信憑すべきものは只之のみ、而して信賴すべきものは之を取扱ふ科學的眞理あるのみとなしぬ、即ち彼の自然主義は決して單なる文藝上の一主義にはあらず、根帶する所實に人生觀に在つて存すと明言せし如く立派なる人生觀上のものとなりしなり、而かも之に根帶すといふ氏の文藝觀は如何、人生既に理想なし、而して文藝には唯眞あるのみ、眞の描寫なるのみ、故にその作物將た無理想ならざるべからず、無脚色ならざるべからず、無技巧ならざるべからずと、遂に無念無想禪家の三昧に入るが如くにして始めて自然派の文藝は成るの意を迄洩すに至りぬ、片上天弦氏は稍天渓氏と着色を異にするも尙ほ文藝上の自然主義をば人生觀より導くものたり、然れども人生觀に迄自然主義なれとは言はざる所前者との相違點とす、氏は現下の人生は未解決なり、而して未解決といふこと單に現在には限らず、永遠に持續すべき性質なり、年少氣鋭の時には斷えざる懷疑の跡を逐ふてその解決を求むるの精進あるも、年老ひ氣倦みては懷疑の苦痛を免るべく間に合せの人生觀を作りて滿足するに至る、間に合せの人生觀は、後の更に年少氣鋭なる思想家の滿足を得ず、壯者と、老者と斯くして斯くの如きを人生の實相とすれば、之を題材とし之を忠實に描寫する文藝將た解決あるべからずとし、而してその無理想無脚色無技巧を唱導しぬ、自然主義論者としては生田長江、田山花袋等その反對論者の對象とせられしもの猶ほ多く存すとは雖も煩しければ省くとして、此處には直に島村抱月氏の所論を窺はん、氏の所見は早稻田文學の五月號に現れたる自然主義の價値なる長論文之を盡す、その所論に尊敬を拂ふべく、且つ讀者の印象を深からしむべく茲に氏の文字其の儘を引照せんか、曰く、「自然主義は文學をして道德應用の門に降らしめた者ではない、眞といふ事を特に標榜するのは在來の文藝

お漸く妄嘗に陷つて單なる空想の遊戲形似の遊戲とのみならんとするに對し、反動的に他の一面を提起して文藝に實際的意義の價値加らざるべからざるを明にしたに過ぎぬ、更に實際に近づけて言へば、たゞ遊び事として娛樂を與へてゐる樣な藝術は無意義で劣等である樣に思はれて眞面目にやる氣がしない、もつと嚴肅な意義が見出したい、そこで人生の眞相を露出せしめやう、科學の眞理を敷衍しやう、社會問題を研究しやうといふが如き、實際的意義を標榜して來た、所謂眞は實を完成する一材料たるに外ならぬ、最も多く美を有價なしむる範圍に於て眞は文藝上に價値を有する」と、氏は斯くの如くして自余多くの論客が眞々と呼號せる眞をば、唯美を完成する一材料たらしめんが爲にとなし、敢て之を深く人生觀に結ばんとはせず、人生觀上の自然主義とは、之を分つても論じ得べきの態度を示せり、之に對して新小說誌上に樋口龍峽氏の精細なる論評あり、その抱月氏が分つて四段境となせる心理的說明の不妥を正し、無思念の解に一解を加へし等のことありとはいへ、概ねその所見の公平なるを認め、讀賣新聞に自然主義雜評の長論文をものせる踏背氏は、抱月氏以外の多くの自然派論客に鋭き譏鋒を向けたるに拘らず、氏の所見には十分なる同意を表して筆を收むるに至りぬ、獨り岩野泡鳴氏のあるあり、自己の別に唱道する新自然主義なるものが、人生と文藝との間に一線を劃するを嫌ひ、文藝は人生の描寫のみ、文藝即人生のみ、剎那的燃燒の心熱已み難きまゝを紙上に呈露したるもの是れ總て文藝の作品なりとするよりして、抱月氏の所論より慊らぬ節を指摘しぬ、後藤宙多氏は始めより一貫して凡ての自然主義者に反抗し雄辯を酬え來れるが、抱月氏の此所說にも猶ほ承服せず、そは徒に包括を勉めてその實平坦に歸し、凡々たる無力の文字となりて別に一主義として唱說すべき價値あるなしと詰りぬ、此他田中喜一氏のあるあり、一種遊軍の觀をなす、

氏は眞は科學にのみ限るべからず、科學の眞あると同時に文藝の眞もあるべし、眞を科學に限り美を文藝に限るが如き偏見あるべからず、科學と文藝と其他哲學宗教倫理の一切を擧げて、凡ては吾人の生活を統一すべき各々の機關たり、さればその各機關には人生の全體が自らにして現るべきを忘るゝ勿れとの見地より、一切の文藝上の作物に相當する價値を論定すると同時に、自然主義にも相應の功を認めながら、その往々にして過去の文藝は美を目指せるも自然派の文藝は眞を目指すといふものあるの妄を破し、抱月氏の所論にもその心理的說明其他に非難を試みぬ、抱月氏は前論文に次いで、同じく早稻田文學誌上に、文藝と人生との間に横はる一線なる論文を明にし、以て一派の攻擊に對する自家の主張を一層明白となしぬ、その他哲學者側にも多くの評家ありしと雖も、中に於ける二三は除く、自然なる文字に泥みて直に論評の筆を取れるもの多く爲に鐵牛をせゝる蚊子の如く、左迄痛痒を覺えしめざるもの多かりしは遺憾とす。

（三）　プラグマチズム其他

文藝上の自然主義に縋りて現れし人生觀上の同主義には、論理の精明なる組織を見るに至らず、爲に多くは惡罵漫嘲の中に葬られしの觀ありと雖も、そは論陣の齊整に慣れぬ文士側に發せられたる事とて已むなかるべきか、兎もあれ現實に重きを置き、凡べて架空なる分子を排斥せんとする努力の潜在は否定すべからず、而してこは白松南山氏の早稻田文學誌上にて少しく語れる所あるが如く、一道の暗潮徹に此一派を帶ぶるものたり、田中喜一氏は自らシラー、ジエームス等の流れを汲んで而かもその流は元の流れに非るの見地に立てりとなし、自ら我國に於けるプラグマチストと稱す、前章に說ける氏が凡ての論評は皆此見地より來るもの、此に於てか金子筑水氏のプラグマチスムの眞相と批評なる長文十二月の早稻田文學誌上に現るゝ事となりぬ、一面に於て在來の絕對唯心論に對する人格的唯心論の紹介の倫理學界に現るゝも亦言ふ迄もなく脉胳を右に有するもの、吾人は己酉の論壇に於て此プラグマチツクセナリ——に對する盡されたる論評の大に起らんことを渴望す、その他戊申の思想界に於て聲の大をなせるものに孔子敎の復興あり、人心日に非にして風敎月に頽るの現勢なりとし、之を挽回すべく圓滿なる人格者の感化を要すとせる一派の主張に基くもの、之にも浮田、三宅等の諸博士、島田三郞氏等の所見多くありと雖も餘白なきの憾を遺して盡く言約の筆に任して責を遁るゝことゝしぬ、請ふ諒とせよ。

戊申文壇概觀

樗陰生

一言にしていへば戊申文壇は丁未文壇の續きであつた。今少し遡つていへば自然派勃興以來の文壇の續きであつた。自然派文學と呼ぶ全じ一つの流れが流れ〳〵て次第に幅と深さを加へ、今や汪々として殆んど對岸が見えざる程の大河となつたやうな傾きがある。勿論嚴密にいへば、歷史上の出來事は總て因果の連續であつて、何一つ前々からの續きでないものはあるまい。一寸見には突飛と見え、意外と感ぜらるゝことでも、靜かに思ひ深く考ふれば、そこに一々因緣の尋ぬべきものがあるに相違ない。けれど、其續き方にはいろ〳〵ある。殆んど根本から新らしき別物になつたと思はるゝ程に異ることがある。革命といつてよからう。又內容の一部、少くも外觀や形式の一部が異つて來て、舊の物と同一の名

を隔けて置くのが不似合に思はるゝやうな事がある。變化といつてよからう。又反動といつて謂とは反對の方向に逆戻りすることさへある。革命も變化も反動も歷史上からいへば、皆物の續きである。然しながら通俗にいふ所の續きとは違ふ。通俗にいふ所の續きとは內容も外觀も形式も略ぼ全一であつて、且つ全一の方向に全一の目的を以て進んで行くのをいふのである。

僕が戊申文壇を以て丁未文壇の續きである、自然派勃興以來の文壇の續きであるといふのは全く此通俗的の續きといふ意味に於ていふのである。

然らば自然派勃興以來とは何時頃からのことをいふか。これも嚴密にいへば原因の原因あり、潜伏したる運動あり、なか〳〵面倒なる穿鑿が要し、又穿鑿をした所で議論の餘地のある問題である。が之れも亦通俗の意味に從て三四年以來の文壇を指していふたのである。

更らに繰り返していふ。戊申文壇は丁未文壇の續きであつた。自然派勃興以來の文壇の續きであつた。茲に何等の革命がなかつた。變化がなかつた。反動がなかつた。只進步があつた。發展があつた。描寫の方法でも、人間の見方でも皆一層の進境を示した。粗なるものが密に、骨立つたものが肉附よく、貧弱なものが充實に、淺く狹いものが深く廣きものになつた。而して此傾向がます〳〵續いて汪々たる大河が終に浩蕩渺茫たる海洋の壯觀雄姿を恣まゝにするの秋の來らんことを祈るの情に堪へぬ。

一年間の文壇、之を箇々の作品について評騭を試み批判を下すならば、雜誌の三四十頁を埋めることは譯のない事である。が、それは雜誌の紙數も許さぬし、又編輯〆切の時間も許さぬ。で、主もなる作家の主もなる作物を列擧紹介する丈けに止めて置かうと思ふ。

僕が茲に主もなる作家といつたのは、島崎藤村、田山花袋、小栗風葉、德田秋聲、眞山青果、正宗白鳥、夏目漱石、高濱虛子、小杉天外の九名を指すのである。

曩きに「破戒」を著はして一躍大家となつた島崎藤村氏は其後自重して濫りに作せず、一昨年は僅かに「並木」「黃昏」の二短篇を草したのみであつたが、昨年の春から其第二の長篇たる「春」の稿を起し、一度新聞「朝日」に連載し、後更に之を單行本として出版した。新聞で一回づゝ讀まされた時には何となく興が乘らず、世間も亦一般に惡評を加へ若くは冷淡に看過して居たが、之に多少の改删訂正を加へて單行本となり、讀者も亦一息に之を讀む事が出來るに至て見れば、殆んど全く別の作物に非ずやと思はるゝ程感興深く、內容といひ、描寫といひ、「破戒」などに比して數等の上にある出來榮、僕などは初めて氏の腕に感服したのである。明治廿七八年時代の思想界に於ける革新的青年の一團を描き、或は自殺し、或は自殺せんとして僅かに一條の通路を見出したる如き深酷なる性格を描くにも極めて外側より淺く筆を着けて內部の苦悶は讀者自ら之を想像し得る如き書振り、何となくユトリありて奧床しく、自然又は事件の描寫も素朴にして全然脂粉の氣を遠ざけたる處に洗髮の年增美人を見るが如き清楚の趣あり。戊申文壇に於ける長篇中最も傑出したるもの一、或は最も傑出したるものといふべきである。氏は此外に「壁」(早稻田文學十月號)「收穫」(文章世界十月號)の二短篇を草したが、元より文學上「春」に比すべきものではない。只何れも充分にコンデンスして、印象派的の書振り、容易に他人の摸倣を許さぬ所がある。然し「壁」とか「收穫」とかいふ題名は如何にも象徵的に內容に理屈をつけたやうな趣があつて面白くない。又氏の作全體に亘つて文章又は句法に時々直譯らしき處、新體詩らしき處の出るのは改めて欲しいやうな氣がする。然し此等は白璧の微

象、殆んど氏を累はすに足らぬかも知れぬ。要するに氏は氏獨自一個の緻密觀察な氏獨自一個の文章文字を以て描寫する人であつて、將來も益々發展して行くことが確かな人である。

田山花袋氏は「生」(一度讀賣に連載せられて後單行本として出版せらる)と「妻」(日本に連載中)の二長篇を作つた。「妻」の方は未だ讀まぬから何ともいひ難いが「生」に比べると餘程華やかであるが作としての價値はいくらか落ちるだらうと評した人があつた。「生」は藤村氏の「春」と殆んど全時に出て、出た當時の評判は遙かに「春」を凌いで居たが單行本になつてからはいくらか「春」に押された氣味がある。僕は新聞に連載中讀んだが、人間の見方の眞實なると、描寫のゆきにして深く突込んであるには處々敬服した。叙事などには少しくゴタゴタした處もあつたが全體としては實に老手たるに耻ぢずと思つた。一昨年評判になつた「蒲團」などに比べるとなんぼういゝか分らぬ。戊申文壇に於ける長篇中最も傑出したるものゝ一つである。氏は短篇としては「土手の家」(中央公論一月號)「一兵卒」(早稻田文學一月號)「縣道」(太陽一月號)「古驛」(文章世界一月號)「放火犯」(趣味二月號)「弟」(新潮三月號)「祖父母」(中央公論四月號)「死屍」(文章世界十一月號)等を草したが「土手の家」「祖父母」最も傑れ、「一兵卒」「弟」等之に次ぐべきものであつた、「死屍」も一種の變つた書き方で、人をして悪感を催さしむる程筆力勁健であつた。氏の一年間の活動もなかなか目覺しかつたといはればならぬ。

小栗風葉氏は長篇を一つも書かぬ。短篇も亦多いといふ程は書かぬ。「ぐうたら女」(中央公論四月號)と「世間師」(中央公論十月號)の二つ丈けは短篇といつても相當の長さがあり、又出來榮も遙かに他の諸篇を凌ぎ、其精緻にして潤澤ある描寫、一種の調(トーン)ありて卒讀し能はざる程の妙文章、到底他人の追從を許さゞるものがあり、其他の短篇「わき道」(太陽三月號)「草分の家」(早稻田文學三月號)「腕力」(早稻田文學八月號)等も皆なかなかよい處かあつたが「亞力」(中央公論一月號)「擬死人」(趣味十一月號)「徒道」(中央公論九月號)の如きは寧ろ失敗の作といはればならなかつた。氏の文章は益々垢拔がして殆んど圓熟の極に達し、如何に失敗の作とはいへ、其筆には捨てられぬ味はあるが昨年に於けるの活動は寧ろ目覺しからぬ方といふべく、殊に時々妙な作物が氏の名前て出るので一層世間の氣受を惡くした。然し「ぐうたら女」「世間師」の二篇は氏の在來の作中最も傑れたる短篇たるは疑がない。

昨年に於ける徳田秋聲氏は其數を以ていへば眞山青果氏に次いで多作した方であつて、長篇「凋落」(讀賣所載後單行本)の後半。長篇「新世帶」(國民所載)長篇「多數者」(時事所載後單行本)。の外短篇には「かくれ家」(文章世界一月號)。「背負揚」(趣味一月號)。「一夜の家」(趣味三月號)。「二老婆」(中央公論四月號)。「診察」(文章世界五月號)。「大工の妻」(新小說五月號)。「甥」(中央公論七月號)。「出產」(中央公論八月號)。「北國產」(太陽九月號)。「數寄」(趣味九月號)。「あの女」(江湖)。「富知」(中央公論十月號)。「稍谷氏」(新天地十月號)。「さびれ」(趣味十月號)。「入院の一夜」(新潮十一月號)等の諸篇がある。此中ある二三のものは餘り大した

ものでもないが、多くは氏獨得の寂しみがシミジミと感ぜられて、眞實の多い、餘韻のある、情趣のある立派な作品である。殊に「二老婆」「自畫」「診察」等最も優れ、「裏の家」「敵寄」「猪谷氏」「北國產」等之に次ぎ、短篇作家として氏の右に出づるものは今日の處一人もない。氏の短篇は短篇のやうな氣がしない。或る人間なり運命なりが全體書き盡されて決して食ひ足らぬやうな氣がしない。此の深みある、パックのある書き方は氏獨得のもので氏の性格自ら之を然らしむるものと思ふ。只氏の書く人物も事件も餘りに類似して居るといふ批難はあるが、而し氏は自巳の見得る人生、感じ得る人生は其どん底まで見又感じて居るといふ傾きがある。之れより一轉して今少し別方面の地を開拓し得れば此上なからうが、今のまゝでも確かに後代に傳はるべき作家である。氏の長篇では勿論「新世帶」が第一等の出來である。氏の在來の長篇中第一等の出來であるのみならず、又戊申文壇の長編中最も傑れたものゝ一つである。氏の技術は此篇に於て殆んど項點に達して居り、又男主人公の新吉といふ人物も副人物のお國も氏にあつては確かに新たなる試みであつた。又女主人公お作の如きは氏の好んで描く人物ではあるが恰かも生きて居るやうて、此三人が銘々に氏の筆によつて動き居る樣到底所謂小說とは思はれぬやうである。只あの位よく出來て居るに關らず、氏の短篇の上乘なるものに比しては全體として、いくらかウイークな點があるやうに思はるゝのは、矢張り其日々々に一回づゝ書いて行く爲めであらうと思ふ。氏の如き人は五十枚なり百枚なりのものを一息に續いて書いたならば非常によいものが出來やうと思ふ。氏の戊申年の文壇に貢獻する所極めて大なるは何人も認むる所である。

其數を以ても其量をても戊申文壇に於て最も多も作したる人は眞山青果氏であらう。而して其質に於ても或二三の惡作を除いては皆實に立派なものである。惡作といつても氏の作には力がある。熱がある。決して讀まれぬといふ作はない。兎に角面白く讀ます。只讀み畢つてから何だか物足らぬやうな感じを起させるのは、氏が餘りに達者過ぎて書きなぐる爲めてないかと思ふ。長篇「死戀」(讀賣所載中絶)は、其題材に對して、筆力が勁健過ぎ、空氣がカッキリし過ぎた嫌はあつたが、單に文章として讀むならばあの位きびきびした、ハキハキした、力ある、男らしき文章を書く人は現時の小說家に斷じてない。故獨步氏の文章もキビキビしてゐたが到底青果氏の敵てはない。描寫が非常に明瞭で恰て浮彫を見るやうだ。あれが中絶したのは惜しむべきてある。

短篇は僕の知れる限りに於て十九篇――「男五人」(中央公論一月號)。「癡蟲」(新潮一、二月號)。「紫」(文章世界一月號)。「妹」(趣味一月號)。「敵」(中央公論二月號)。「鎌倉まで」(趣味四月號。「家鴨飼」(早稻田文學四月號)。「守の杉」(新潮五月號)。「南小泉村第三」(中央公論五月號)。「母と子」(未完新潮六月號)。「知巳の一人」(中央公論七月號)。「乳母」(新潮八月號)。「阿名のお牛」(中央公論九月號)。(養育院」(新潮九月號)。「南小泉村第四」(中央公論十月號)。「煙硝」(中央公論十一月號)。「幼稚心」(新潮十一月號)。「崖」(中央公論十二月號)。「六月二十三日」(趣味十二月

號）—と脚本一篇—「生れざりしならば」（中央公論四月）—とある。此中「知巳の一人」「乳母」「養育院」「家」の如きは非常に見劣りし、又「河名のお半」「六月二十三日」の如きは文章の巧みなる外、小說として價値少きが、其他の諸篇は文も內容も何人も眞似のならぬ出來榮である。殊に「家鴨飼」「南小泉村」「爐側」等は殆んど完全に近い作物である。又「癌腫」は少しダラ〱とした所はあるが、又眞果氏の特徵を最もよく發揮した佳所妙所がある。「男五人」「敵」等は著者の精細なる描寫を取るべく「母と子」未完であるが又捨て難い。若し夫れ其脚本「生れざりしならば」に至ては、世間いろ〱の批難もあるに拘らず、現在の處、之れ位力ある大きい脚本を書いた人は一人もなく殆んと青果氏獨り舞臺の氣味がある。氏は正宗白鳥氏と共に新進よりして一躍して堂々たる大家となり、意氣實力殆んと先進大家を呑んで了ふやうな槪を示した。

　眞山青果氏と相對立して輕々しく其優劣を斷じ難い位置にある人は正宗白鳥氏である氏は昨年の文壇に於て最も眞面目なる態度を取て眞面目なる作品を數多く出した點に於て何人よりも尊敬を拂はるべき資格を以て居る。氏は文章に於ては到底青果氏の敵ではない。言葉使にも無理な處があり、文章の句調もよくない。何となく素人じみてゐる。けれども其描かんとするもの、又は描いたものには非常に眞面目なる分子を含んでゐる。決して人を强いはしないが、何となく或物を見せられたか或は感ぜさせられたやうな氣がする。觀察にも辛辣な處があり又デープな處がある。而して一種の風變りな、個物のみしか書けないやうに見えた氏が漸々廣く人世を見渡して各種の性格が描き得るやうになつて來た。若し今のやうな速力で進むなら氏の前途が恐ろしいやうな氣がする。殊に「早稻田文學」の九、十、十一、十二の四號に連載されて而かもまだ半分位しか出て居ない「二家族」の如きを讀めば實に氏の觀察、技術の進境に驚嘆せざるを得ない。之れが若し終りまであの調子で行たならば恐らくは非常に傑れたる作物であつて正宗氏の名聲をして更らに一段の高きに至らしむるものと思ふ。世間では「明日」（中央公論十月號）を以て氏在來の第一等の出來と襃めた人もあつたが「二家族」はあれよりも遙かに上の作物と思ふ。若し昨年中に完結したら無論戊申文壇に於ける長篇の最も優れたるものであつたらうと思ふ。又「玉突屋」（太陽一月號）の如きは寥々たる五六頁の短篇であるが氏の傑作と推すべく、「閑日月」（中央公論十二月號）又仝じ位の長さにしてなか〱よく出來て居る。其他「五月幟」（中央公論三月號）。「凄い眼」（太陽八月號）成功の作といふべく、「何處へ」（早稻田文學一、二、三、四月號）「世間並」（趣味七月號）等氏の眞摯なる努力を多とする。「六號記事」（文章世界一月號）。「彼の一日」（趣味三月號）。「村塾」（中央公論四月號）は餘り大したものではないが、讀まれぬものでは無論ない。又「新藥師寺」とかいふ短篇が「文章世界」に出て居るさうだが見なかつたから知らぬ。氏の昨年に於ける眞摯なる態度に感服し、更らに前途の發展を祈るの情に堪へぬ。

　夏目漱石氏は「朝日新聞」に據て殆んど一年の半分以上は其作物を掲載して居る。人は先づ氏の淡々として溢れて止まざる詩想の豐富なるに驚

く。一昨年の末より昨年の始めに亘つて掲げられた「坑夫」は非常の不評判で、僕なども亦口を極めて之を悪口したが、一冊の本になつてから（「草合」中に收めらる）讀み返して見たら、全く見直す様な出來榮で、讀み行くに從て氏の思想に化せられ、半分以下は實に非常なる興味を以て一息に讀下し、氏の描寫の精細緻密にして而して一種の觀念（アイデア）とムードが深く讀者を魅するの力に驚かされた。坑夫溜りに坑夫が集つて惡謔し、室隅に呻吟する垂死の病人を拉し來て、鐘叩きつゝそぼふる小雨の中を通り行く葬式を見せつけ、遠くカアン〳〵といふ音の聞える處などどうしても忘れない種の印象を殘す。又坑内の描寫など幽を剖き微を解くの概があつて、而かも全體として又活きて眼に入つて來る所矢張り氏は高き能力を有する詩人てある。又氏は「夢十夜」「文鳥」等の短篇を草したが僕は感服しなかつた。又今殆んど其終りに近きつゝある長編「三四郎」は僕は四十回ばかりて廢したから全體の出來榮は分らないが、讀んだ丈けていへば半分は面白く、半分は不平てあつた。何だか作者が作中の人物を茶化して居るやうて嫌な氣のする處が少くなかつた。て少してやめて了つたが一冊の本になつたら又感服するだらうと思つてる。何故かといふに、新聞て一回〳〵に讀めば、何時ても自己の頭て批判する氣になる。物の見方ても描寫の仕方ても自己と立場の異る人のはどうしても感服する氣になれぬ。處が十回廿回と纏めて讀めば段々と作者の見方なり描寫法なりに同化させられて、其以後は作者と共に見又は描く様な氣になる。だから新聞て讀むと本になつて讀むとは大變な相違てある。此事は實に夏目氏とか島崎氏とか全體に眞目的を置いて自己眞に書き、一回一回には必ずしも讀者に喜ばれんことを欲しない作者になる程甚しく感せらるる。僕は夏目氏及び島崎氏の如き人は新聞小說を書かぬ方がよいと思ふ。筆は横道に外れたが、氏は獨り時潮に動かされずして屹然として立ち、其自由自在なる筆を以て獨自一個の信ずる處を書く。其態度の偉なる、どうしても眞目ある堂々たる大家といはねばならぬ。只僕一個の趣味よりいへば新聞に書かれてから少しアーチフイシアルになられた様に思ふが、今少しナチユラルな作物を出されんことを希望するのである。

夏目漱石氏と同じく俳諧派の作家なりとせられた高濱虚子氏は一昨年中傑れたる短篇數種を書いたが、昨年も亦短篇にあつては「病兒」（ホトヽギス一月號）の如き佳作を出し、（「三十五歲」（ホトヽギス二月號）は餘り感服しなかつた）又「國民新聞」には長篇「俳諧師」。短篇「肌寒」を出した。「俳諧師」は後半しか見なかつたが其寫生的なる部分は實に手際よく描かれ、處々に輕過ぎる批評的語句を挾んだのは厭てあつたが、感じも充分によくあらはれて居た。昨年の長篇中の最も傑れたるものゝ一つてある。「肌寒」も皆讀まなかつたが二三回讀んだ處ては垢拔けのした清楚なる筆つき非常に氣に入つた。虚子氏は作家として將來極めて有望の人てある。

小杉天外氏は其の久しく精力を傾注したる長編「コブシ」の稿を脫するまては殆んど一篇も他の作をなさず、雑誌の讀者をして氏の短篇を見んことを切望せしめたが、昨年に入つて初めて「校長の二子」と題する五十

枚許のものを四、五月の「中央公論」に掲載した。讀書壇は可なりの好奇心を以て之を迎へたが、其描寫の方式幾分時代の趣味と添はざる處あり、誇張に失せり、若くは常套を脱せず等の批難の下に葬られて了つた。固より會話にかけては現代第一、又描寫にかけて永年苦心した氏の事であるから、他人の眞似が出來ぬよい處は澤山あるが、全體の調子が幾分俗受け的、通俗的になり過ぎて、進歩したる讀者を喜ばず分子の少かつたのは爭はない事實であつた。氏は其後更らに新たなる取材に構想して大いに文壇を驚かさんとの意氣を以て長篇「長者星」を「讀賣」に連載し初めた。實業界の傑物を描かんとしたるもので、實業社會では目を留めて居るらしいが、中央文壇では比較的冷淡に見て居るが如き嫌ひがないでもない。僕は誰のに限らず一體新聞小説を續けて讀んだ事のない男だから、之もポツ〳〵としか讀まぬが、會話の巧みなるに拘らず地の文はどうも感心しない。何だか新らしき工夫に乏しいやうな氣がした。然し天外氏は今の文壇に對して決して安心しては居られぬ地位にある。今度の「長者星」が失敗に畢れば、氏は少壯なる讀者を失ふかも知れぬ。勿論價値ある作物は人氣あると否とに拘らず價値ある作物である。けれども久しく人氣を得て居た作家か之を失ふといふ事になれば、感情上其作家が、活動を鈍くして、感興の湧出を防ぐるが如き氣味あるを恐れる。僕は元來天外氏の非常なる愛讀者である。故に此苦言を呈するのである。「長者星」完結の日、若し非常に價値ある作物ならば實に氏及び我文壇の大幸であらう。

僕の所謂主もなる作家の主もなる作物の列擧紹介は之で濟んだ。が之に一言附加して置かねばならぬ事がある。「中央公論」一月號に「竹の木戸」。「文章世界」一月號に「二老人」。「文章世界」二月號三月號？に「渚」を草せる國木田獨歩氏が六月下旬、茅ヶ崎に於て病死し、川上眉山氏は六月上旬？自殺を遂げたるが如きは昨年の文壇に於て最も痛悼すべき事實であつた。又水野葉舟。小山内薫。岡本靈華。中村星湖。秋田雨雀。等の新進の人が漸次に其力量を認められ來つたことの如きも大いに注目すべきことである。德富蘆花氏。佐藤紅綠氏大いに小説壇に活動せん計畫あつて而して未だ出てず。三島霜川氏刻苦大いに努めたるも世を動かすの佳作なく、柳川春葉氏暫らく劇壇に隱れて多く作せず、偶ゝ作するも生彩あるもの少く、後藤宙外氏頻りに自然派に反對せる作物を出すも讀書壇の注意を惹かざるが如く。雜誌を以ていへば「中央公論」「早稻田文學」に最もよき作物出てゝ「趣味」「太陽」「新潮」「文章世界」之に次ぎ、「新小説」「文藝倶樂部」の如き從來の小説雜誌に價値あるもの殆んど出てざるが如き、新聞を以ていへば從來の「讀賣」「朝日」の外、「國民」「二六」「日本」が新たに文藝に力を入るゝに至れるが如きも注意すべき顯象の一つてある。（完）



廿五議會の夢

黒顔子

——衆議院の豫言——

平生國事を憂ふるといふものは恐ろしいもので、ちよいと病氣をしても、夢は日比谷の方へ飛んで行く、新聞のチリン／＼に驚き覺めたあとまでも、髣髴として猶ほ其夢はまざ／＼と見える、可笑しいやら、おもしろいやら、不圖思付いて取敢へず書いて見る。

△長谷場氏の議長振

蠻音を揮絞つて、宣告は能く場の四隅に徹底す、杉田よりは、その評判は蓋し此點に於て也、黒人筋よりは其裁決か餘りに手前勝手なる爲め、却て議長典故の教授方困難なりとの說、書記官連の口より洩る、是亦尤なるが如し、

△議長室のお召替

長谷場氏、臨時參內を要することあり、例のモーニングを議長室にて脱ぎ代ふ、偶々通り掛れる新聞記者、之をスキ見して、議長の大喝を喰ひ縮み上る、

△戸水博士の八百長

戸水博士其珍竹林なるフロックコートを演壇に運びて、議會に於ける處女演說を爲す、東亞の形勢に關する質問の理由を詳說せるなり、小村外相の答辯簡單に過ぎたるより、更らに再質問書を提出して、大演說を爲すべく期待されたりしが、時機を逸したりとて止む、一部政界は前者をすら八百長演說なりとなし、後者は無論、其筋に囚はれたる結果なりと猜するもの多し、

△藏原氏の長演說

藏原惟郭氏、某新聞記者に對し、今期議會は緘默主義を守るべしといへるに拘はらず、越えて數日、教育問題に關し約一時間半に涉る長演說を試み、政友會の鳩山氏を始め、盛に之を妨害し、議員亦た過半退場せしも、氏は熱心に其所說を演了し、今は昔の夢となれる望小太氏を想起せしめたるのみならず、彼の紳藤才

一氏と好一對の名聲を(?)を博す、

△福井三郎氏の愚痴

請願委員會に於て某問題の爲め、福井三郎氏主査席を他に讓りて大に論爭し、得意の快辯底止する所を知らず、第二喋郎の名益々高し、シカモ採決の結果、一に對する十餘にて悉く反對す、三郎氏曰く「喋舌り過ぎたか知らん」と、

△山根氏の政府攻擊

山根正次氏例の傳染病豫防問題を提げて、政府當局を攻擊すること頗る痛烈、身宛かも直參黨たるを忘れしが如し、臼井哲夫氏、安達氏を顧みて曰く「淺羽と山根は夢中になるから困るね！」

△淺羽氏振はず

大同派の淺羽靖氏、常に北海道問題を捕えて彼の所謂「人民」の爲めに氣を吐くと最も旺也、然るに今期氏は殆と絕對に沈默主義を守りて振はざると甚しく、人其の意外に驚く、氏曰く「斯うして置かんと可かんです」と其何の意たるやを知らず、

△中野氏と稅制整理

中野武營氏、早く軟化の風說を流布せられ、心私かに憤慨せり、豫算案討議に當り、武營氏決然起て大に稅制の整理を說き、惡稅の改廢を論ず、之に對して若槻大藏次官、例の簡潔、人を愚にせるが如き辯明を爲したるが、中野氏再起せず、爲めに其軟化說依然として衰へず、

△新議員の戶惑ひ

新選議員の戶惑ひは敢て珍らしからざるも、各種委員會に於ける最も甚たし、就中某博士議員が會議中に飛び込みて、直ちに堂々と意見を陳述す、列席の人、呆然凝視するのみ、蓋し其の未だ質問を了らざりし案なるのみならず、全然、別案に對する議論を吐いて洒然たりしが爲め也、

△大博延期の質問

東京市政關係者より提出さる、肥塚龍氏咽喉を害して演說する能はず、尾崎學堂に讓る、學堂事を構えて之を辭し、お鉢は新議員にして市の助役たる田川大吉郎氏に廻る、先生蓋し大得意也、

△航路助成金問題

今期議會に於ける醜問題の第一也、之に對する衆議院は例に依て、否な例以上の醜劣を極めんとせり、其の實情は予等門外漢の知り得べき筋にあらざれど、唯た外形に現れたる處によるも、政友會の一部は三河屋

組とみどりや組とを作り、其他の諸派亦た暗闘に暗闘を重ねて、問題の切迫と共に漸く陋狀を暴露せんとす、シカモ結局、議場に現はれたる處を見るに、頗る平々凡々たるものなりき、

△後藤醬爵

鐵道豫算の議事、後藤遞相の出る幕頻々たり、新團體に屬する某辯護士議員、常に警句を以て名あり、極めて眞面目なる言論中、屢々『後藤醬爵』醬爵と呼ぶ、男爵苦笑し衆皆な失笑す、蓋し平生の口癖より誤て出でたるも、彼れ遂に其謬りを遂行し了る、

△遠藤淸子

衆議院婦人傍聽席に毎期、連日、黑紋付、紫袴を着し、胸間常に美しき花卉を挿める一女史あり、姓は遠藤、名は淸子、治安警察法問題、請願委員會を經て今期又た復た本會議に現はる、蓋し淸子女史の熱心なる運動に係り婦人に政談を許さんとする案也、採決に疑義あり、結局氏名點呼を行ふの騷ぎとなり、少數を以て否決せるに、女史痛憤の氣を眉宇の間に洩らし、蹶然として去る、一種の女傑也、

△ソマトーゼの看板

拓殖會社保護案に關して論爭を生じ政友會の奥繁三郎氏、六尺豐かの體軀を演壇に上せて攻擊軍の急先鋒たり、之に對し直參黨として忠勤を抽んづべく、大同派の柴四郎氏入れ代つて登壇せり、身長僅かに四尺幾す、翌朝の新紙筆を揃へて曰く『ソマトーゼの看板』—

△岡邦の足

政友會に於ける岡崎邦輔氏は九州の野田卯太氏と並むで、事實上の院內指揮官なり、問題の起るや、彼每に議席を空うして右往左來、奔走到らざるなし、一日氏病みて出でず、偶々一問題を生し形勢混沌たり、策士議長席に上り議長と諮り、其決定を延期せんと試みしも、反對派勢に乘して即決を迫り、結局僅少の差を以て政友派見事に敗衄せり、後、同派幹部の人笑て曰く『今日は岡邦の足が無かつたので』

△翰長の密書

議案平凡、問題皆無、某日の議場頗る閑也、粹翰長私かに鉛筆を走せて當夜例の溜池に遊ばんとの一書を裁し、給仕に命して之を某惡友A議員に致さしむ、給仕手に別に面會人の名刺を携ふ、誤て之を議場內のA氏に渡し、重要なる密書は無殘、新議員B氏の手に致さる、滑稽は實に這個偶然より生ずるを以て其の上乘とす、A氏未知未見の名刺を掴んで小首を傾け、B氏雲

梯の誘惑を與としつゝ、尙ほ快諾の返書を送る、好個のポンチ也、後時、其給仕の誤りなるを發見して、三者相寄り大笑之を久ふし車を連ねて衆議院を出づ、

△陸相の鼻息

豫算の討議漸く進んで、猶興派連、例に依て質問を連發し、政友會員亦た時に愚論を喋々するや、軍事費に關し答辯の衝に當れる陸相寺内氏、音吐怒氣を含むて『帝國の自衞』を喝破し、鼻息荒きと近年嘗て見ざる所と稱せらる、

△質問演說

前期議會に於て最も多く質問演說を爲せるは進步黨の澤來太郎氏なりき、自から稱して二十五問題を提ふべしと、恐るべき事共也、今回は其多く政友會側より出づるは甚だ現金なり、竹越與三郎氏の『淸國問題』森本駿氏の『非募債主義に就て』齊藤珪次氏の『樺太漁場問題』など、二三のみ、

△前藏相と現次官

豫算案討議に於て最も注目せられしは松田前藏相が政友會の一員として意見を述べたるとなりき、而して其不得要領を發揮し了るや、現次官若槻禮次郎氏之が辯明の衝に當る、面白き對照也、次官が例の長き體軀に勿體を着け、落付拂ふ演說振は太く政友會の末輩をして憤激せしめ、少なからぬ妨害を加へたるも亦た當日の議場を賑はせる好材料にてありき、

△武富氏起つ

寡言沈默久しく飛ばず、鳴かざりし武富時敏氏は『豫算編成に關する建議案』提出者として登壇し、一場の演說を試む、莊重、森嚴、好く議場を傾聽せしめ、進步黨議員は拍手を以て之を送迎せり、

△出雲大社補助案

前司法大臣千家尊福男、出雲大社分祠を東京に設け、婚禮儀式一切を受負ふべく運動却々に如才なし、『分祠奉置國庫補助に關する建議案』なるもの先づ貴族院を通過し來る、神宮奉齋會側の妨害運動ありと傳說せられ、政友會幹部はその前内閣の義理合として贊成の態度を示し、平田内務大臣亦た同意を仄めかせしも、各派は之を自由問題として、結局委員會の手に握潰しぬ、

△淸國問題の秘密會

淸廷に於ける某國の活動頗る旺んにして、列國使臣會議開かるとの報あり、時局漸く急ならんとすと傳へられ、衆議院各派交涉會は小村外相を擁して實情の報告を要請す、外相乃ち秘密會となして巨細に陳辯せし

が、要するに大事に及ぶべき模様なく、事々多くは例の誇大に通信せられつゝありといへり、

△解散風

所謂新團體より提出せられたる例の三税廢止案中鹽專賣に就ては政友會中にも廢止に賛成せんとするものあり、動もすれば絶對多數に勝誇つたる同派の事なれば、少々位の運動にては容易に纏りが付かず、結局政府は其慣用手段たる解散風の奥の手を持出せり、濱口局長などの鼻息は頗る荒く、御用黨議員の如きは傲然として曰く『此の內閣で、モ一度總選擧をやつて貰うかナ』と、

△所謂硬派

三税廢止案、解散風によりて僅かに多數の盲從者を出したりと見るや、謂所硬派と稱する團體中の軟骨連中は、ホッと一息するや否や、頗る猛烈なる硬論を主張し、中にはおかしき迄に其態度を一變せるものあり、心あるものは其いつもながらのサモンさに慨憤せざるなく、某新聞の如きは一々其氏名を明記して痛快なる評論を加へたり、

（未た隨分珍なと、ヒョンなとも澤山あつたが、さまてはとて。議會開會前しるす）、

攝津大椽の一座

南部と越路の初日

空明子

攝津大掾が文樂の一座を率ゐて、歌舞伎座に乘込んだ。初日匆々三階は申すに及はず、棧敷迄も賣れ切れると云ふ大いした勢である。以下重なる太夫について登出口を利いて見やう。

南部の宿屋、味のある語口(かたりくち)であつた。朝顔は慥かに瞽女(ごぜ)と聽き取れた。「身の尾張さへ」も甘かつた。「ひれふろ山」も出來したが、取りわけ「チヽ、其侍は今の先渡つたが、俄の大水て川が留つた、川留々々」と川越共の呼び聲は出色のものであつた。語口の情趣に富んで居る事は現下此の人の右に出つる者多くはあるまい。難を言へば、發音が鮮明の氣味て、緒に足らぬ所がある樣だ。「飛石さぐる足元も」の足許など殊に此の缺點が目立づ。全躰に付いて言へば、何處となく迫つて餘裕のないの が疵た。尤もあの體格ては、かう云ふ方が無理かも知れぬ。もう少し圓味があらば、言ひ分のないに惜しいものだ。蔚は最早此の人の到り得べき頂點に達して居るらしい。從つて此の上進步すべき將來は餘りない樣に見受ける。これは僕が直覺的にさう感じたたけてあつて、固より獨斷たるを免れない。兎に角南部は大立物として耻ちざる堂々たる太夫である。眞に義大夫らしき義大夫とはこんなのを言ふのたらろう。

越路の合邦、仲々よく語つた。南部に比すると大味て、川魚と海魚位の差はある。「身を盡したる心根を、不便と思ふて共々に、俊德樣の行末を導れ、女夫にして下さんすが、親のお慈悲と手を合せ、拜み廻れば」

のあたり、絃は好かつた。流石は吉兵衛たけの事はある。戀の一念迎さて屋ふか、邪魔しやつたら蹴殺すと、飛び掛つて俊徳の御手を取つて引立る」は突込み方に頗があつた。兎に角これ位に語れば、全く越路の名を辱かしむるものでないと思ふ。

聲は南部より精錬と云ふ點では餘程劣つて居る。從つて南部のやうな味はない。が大柄の質で、語口も固まつて居らぬから進歩し得べき餘地はまだ〳〵ある。

攝津の酒屋、何う贔屓眼に聽いても、これが日本一の大夫とは思はれなかづた。黒人筋の人々は多く大隅を揚げて、攝津を貶するがマサカ之れ程とは思はなかつた。極端に云ふと、語口に緊張興と云ふものが添ふて居ない。熱なく情なく、氣の抜けた麥酒のやうだ。聲は後から〳〵と遅れ走せに節を追つて驅け廻してる氣がした。眞正の調子は何うしても出ない。それでもお觀客様方は流石は大掾だと噪いてるのが不思議と云へば不思議だ。口上に依れば大掾行年七十三の高齡と云ふ事だ。騏驎も老ぶれば駑馬とやら情けないものだ。今日の彼れは倒底南部、越路に及ばぬ。併し、歌舞伎座のこの大景氣は、彼れが上置として祭り立てられて、大招牌を揚げて居るお蔭だつと思ふと、名と云ふもの丶勢力は恐ろしいものである。歌舞伎座は儲かつて結構だろうが、彼に取つては浅間しくも無殘なる一世一代の興行である。

新刊批評

▲ツルゲネフ短篇集

吉江孤雁譯
内外出版協會發行

ツルゲーネフの短篇中、その自然に關するもののみを選んで譯したもの、即ち森林の旅二篇、ヒエッンの曠野、死、森の清水、散文詩、森と原野、犬、山番の九篇である。精緻なる描寫の底には幽婉なる趣の潜んて居る原著者の筆致は今更いふを要せぬか、大自然の懐に包まれ、その感化に浴して自ら鳴り出づる詩人の心絃には特に深き深き味がある、孤雁氏元と自然を絶愛する人、而して好む所に長を爲すの謂で、その自然描寫には他家の窺ひ得ざる妙諦を秘むるとの世評を得て居る人である、然らば原著に對して譯者實にその人を得たといはう、讀みもて行くに清徧なる用筆地の文對話共に能くこなれて居つて、一味の詩思の外圖ものらしからず、浮んて來るのは推賞の値がある（定價金五十錢）

▲名家書簡集

藤田淳介同鶴二共編
民友社

書簡又は文章の洗錬に於て不用意の間に成るものが多く、而して不用意の間の文字は最も能く其人の眞率なる點が見えるのである、書簡文は一面に於て作者の性格詐らざる自白である、此點に於て文章以外にも一種の妙趣があるのだが、本著には家康、秀吉、南州等の如き諸豪もあるけれど、大部分文人俳人のものが網羅してあるから、雅潤ある文字の甚だ喜ぶべきものがある（定價六十五錢）

新刊批評外十數件あれど頁の都合上次號に組置としたり

中央公論第廿三年總目錄

自明治四十一年一月
至同　十二月

社論

增税問題の由來及び前途……號數一
演劇論……一
意外なる政變……二
國家前途の大問題……三
米國艦隊來航の眞意……四
辰丸事件を許す……四
政局の變勢……五
政友會大同派併合論……六
首都の總選擧……六
我が國家國民の使命……七
内閣更迭の眞相……八
西園寺、桂兩侯の對照……九
政黨界將來の分野……九
興味ある大博覽會延期問題……十
元老大臣の品行……十
黑岩周六論……十一
東京市の拙劣なるコメデー……十一
兩宮崩御後の清國情勢……十二
出版界の悪傾向……十二

公論

日米兩國の關係……池邊吉太郎……號數一
時勢の推移……金子筑水……一
讀稿本石田三成……松井柏軒……一
獨逸と日本及日本人……藤井健治郎……一
桂、西園寺時代……無名氏……一
海舟論……三宅雪嶺……一
出でよ新靖献遺言……山路愛山……一
憲政の現狀……田中穗積……二
大變せんとする支那……竹越與三郎……二
投機的悪風を排すべし……安部磯雄……二
レーク、ドウエラース論……青柳有美……三
ナポレオニズム、とメッケリニズム……建部遯吾……三
對清教育政策の今昔……樋口龍峽……三
將來のローマンス類……三宅雪嶺……四
青年とアンビシヨン……竹越與三郎……四
自然主義の理論的根據……中島德藏……四
最近の二大論文……向軍治……四
世界の平和と國家……浮田和民……四
社會主義とカント……藤井健治郎……四
自然の意義に就いて……松本文三郎……五
二ツの要求……手島精一……五
明治暗殺史の趣味……戸川秋骨……五
文藝論二則……田中喜一……五
西園寺内閣と桂派との政爭……部觀居主人……五
旅店國となる勿れ……鎌田榮吉……五
藝術の眞……田中喜一……五
吾國財政の現狀……田中穗積……五
生活の情味……金子筑水……七
選擧權擴張……安部磯雄……七
文藝上の二問題……上田萬年……七
答問二則……新渡戸稲造……七
時論二則……福本日南……八
清國と我が國民……青柳篤恒……八
歐洲彫刻の音樂化……青柳有美……八

內閣更迭所感……………靜觀居主人……八
韓國に於ける統監政治……竹越與三郎……九
大磯雜感……………芳賀 矢一……九
家族主義に對する疑問……藤井健治郎……九
立憲制の本義……………副島 義一……十
性慾敎育問題……………富士川 游……十
支那に對する列國政策一變の機……………無 名 人……十
三種の疑惑……………金子 筑水……十
支那論……………池邊吉太郎……十
上野展覽會を見て日本畫の將來を思ふ……………藤岡 東圃……十一
平田篤胤論……………山路 愛山……十一
儒敎の復興を論ず……………浮田 和民……十一
時代の謳歌……………竹越與三郎……十二
優勝民族と其素質……………鎌田 榮吉……十二
勤儉貯蓄の說……………建部 遯吾……十二

海外

△獨逸上流社會の腐敗―歐洲經濟界の米國民と空乏なる其陸軍―日本に對する反動―社會主義は戰爭を防止すべきか [illegible]
―富を作るは罪惡なり……………一
△大西洋艦隊の回航―一世紀間の世界の進步―英國社會黨首領の日本觀―英國名士の日本觀―南米の排日論……………二
△米國艦隊の弱點―英國新聞の墮落……………三
△空中の征服―米人の消滅―鼠の征伐……………四
△露墺の關係―亞細亞起たば如何―獨逸に於ける工業の進步―メレデス翁……………五
△職工の見たる米國人―ルドウヰク、アレサヰ氏―英王ドワード陛下のスカンヂナヴィア訪問―米國大統領の海軍擴張案―瑞典と諾國の侵入―葡萄牙新政後の總選擧―セルヴィアの新內閣―佛國首相と社會主義者との論爭……………六
△職工の見たる米國人(二)―詩人コッペ―列國近事一班……………七
△職工の見たる米國人(三)―列國近事一班……………八
△淸國新敎育―列國近事一班……………九
△新露國みやげ―列國近事一班……………十
△信仰の色分け―海外消息……………十一
△滯歐所感―海外消息……………十二

說苑

アイヌの文學……………金田一花明……一 [illegible]
社頭の松と曲玉……………坪井正五郎……一
非寫實小說……………佐々 政一……一
文藝上に於ける陶庵侯と早稻田伯……………數十名家……一
アイヌの文學……………金田一花明……二
平凡なる小說……………佐々 醒雪……二
原 敬 論
日南以下五氏……………二
アイヌの文學……………金田一花明……三
必要なる性慾文學……………戶川 秋骨……三
夏 目 漱 石 論
風葉以下十三氏……………三
齊籍談……………德富 蘇峰……四
漱石先生……………馬場 孤蝶……四
仝……………柳川 春葉……四
大 石 正 巳 論
愛山以下四氏……………四
露國の叙事民謠……………馬場 孤蝶……五
大石正巳……………黑 頭 巾……五

閑話……………………桑原[illegible]……五
田山花袋論
秋聲以下四氏…………………………五
江月文談と滑稽趣味……佐々醒雪……六
白河樂翁公と教育……德富蘇峰……六
德富蘇峰論
愛山以下五氏…………………………六
包圍されたる伊藤公……黒頭巾……七
嘉納氏と新渡戸氏……笹川臨風……七
小杉天外論
花袋以下八氏…………………………七
ツルゲネフの虚無主義……片山孤村……八
後藤新平論
雪嶺以下六氏…………………………八
國木田獨歩
青果以下八氏…………………………八
包圍されたる伊藤公……黒頭巾……九
イプセン論……………安成貞雄……九
小栗風葉論
青果以下十氏…………………………九
聞多と事………………三宅雪嶺……十
那須野…………………大町桂月……十
月下清談………………樋口龍峽……十
オペラは亡ぶべき乎……島村抱月……十
メタルセン教授……片山孤村……十一
包圍されたる伊藤公……黒頭巾……十一
島崎藤村論
風葉以下八氏…………………………十一
佐藤信淵論……………新渡戸稻造……十二
三宅雪嶺論
建部博士以下八氏……………………十二

海内

△豫算問題の趨向—曾はんとする心—
丁未文檀に對する世評……………一
△現内閣の運命觀—金井博士の工場法案……………二
△代議士と總選擧問題—基督教と我が國體に關する世評……………三
△東洋拓殖會社法案……………四
△五月十五日……………五
△總選擧の結果……………六
△鐵道特別會計—政友會示威大會……………七
△自然主義論の餘波……………九
△財政整理案と世論……………十
△清國の情勢に對する世論……………十二

小説

竹の木戸……………國木田獨歩……一
引越……………鈴木三重吉……一
男五人……………眞山青果……一
土手の家……………田山花袋……一
歪力……………小栗風葉……一
敵……………眞山青果……二
當世……………國木田治子……二
五月幟……………正宗白鳥……三
捧手振……………柳川春葉……三
池畔……………野上八重子……三
ぐうたら女……………小栗風葉……四
祖父母……………田山花袋……四
村塾……………正宗白鳥……四
生れざりしならば(脚本)……眞山青果……四
校長の二子……………小杉天外……四
二老婆……………德田秋聲……四
校長の二子……………小杉天外……五
村の世話方……………眞山青果……五
甥……………德田秋聲……六

苦熱……草野柴二…六
切株……吉江孤雁…六
知己の一人……眞山青果…七
八幡山……杉山美峰…七
出產……德田秋聲…八
私生兒……岡本靈華…八
後進……小栗風葉…九
河岸のお牛……眞山青果…九
世間師……小栗風葉…十
舊知……德田秋聲…十
南小泉村……眞山青果…十
漂泊……岡本靈華…十
明日……正宗白鳥…十
爐傍……眞山青果…十一
モデル……國木田治子…十一
時計……水野葉舟…十一
墓……眞山青果…十二
昔の女……三島霜川…十二
閑日月……正宗白鳥…十二

詞藻

鼻……與謝野鐵幹…一臨增
慵き鳥……北原白秋…一
古猫……岩野泡鳴…二
晩鐘……太田正雄…二
惱の龕……北原白秋…二
黑燈集……長田秀雄…二
小曲十篇……吉江　男…三
阿片……長田秀雄…三
沈丁華……秋庭俊彥…三
樂聲……北原白秋…四
野の印象……太田正雄…四
死の華……秋庭俊彥…四
露西亞詩華……秋元蘆風…五
途上……秋庭俊彥…五
しろみ酒……加藤介春…五
黑と白……吉江　男…五
褪せたる色……秋庭俊彥…六
幽潭外十篇……北原白秋…七
新詩五篇……北原白秋…八
法樂……吉野臥城…八
新詩六篇……北原白秋…九
さすらび……三木露風…九
空腹……吉野臥城…九
渦……山本露葉…九
葬の曲外三篇……長田秀雄…十
一ぜんめしや……吉野臥城…十
薔薇の花……大谷繞石…十一
英詩三篇……野口米次郎…十一
長詩二章……太田正雄…十二
長詩二章……吉江　男…十二
英詩四篇……野口米次郎…十二
和歌……尾上柴舟選…
俳句……大谷繞石選…

評論

反省記者に問ふ……志賀矧川…一臨增
一年間の政治外交社會……鳥山…一
丁未の宗教界……松逕子…一
丁未文壇概觀……檸陰生…一
パウルゼン氏と自然主義……片山孤村…二
新春文壇に於ける各作家……檸陰生…二
世界教と國家……松逕子…三
君代議士となる勿れ……烏山生…三
青果集を讀む……生田長江…三
諷刺文と問題文藝……松原至文…三
新興の文學は宗教の牙營に

切り込めり……………戸川　秋骨…四
その曲執れにあるぞ……觀濤屋主人…五
社會的教育の必要……風顛　逸人…五
注目すべき近刊小說……樗陰　生…五
文士と道德…………城　水　生…六
社會主義者の態度……鳳　雲　子…七
小說の世界…………刀　尺　生…七
信すべき新聞紙……野逸　道人…八
病牀錄を讀む………樗　陰　生…八
中學校の漢文科………默　笑　子…九
三面記事の改良……野逸　道人…九
東洋趣味を忘るな……松　運　子…十
小說の語尾……………半　可　通…十
スエン、ヘデキル氏來る…默　笑　子…十一
電話使用料度數制に對する
當局者と新聞紙との態度…野逸　道人…十二

雜爼

我輩も猫である……小室　白色…
（一、三、四、六號連載）
丁未の暮………………狂　太　郎…一
やまがらす漫筆……鳳　南　山…一

初夏の思ひ出……………城　水　生…七
鬼面囈語………………京　橘　子…七
倫敦だより……………無水月生…八
囈水狂語………………曲肱　山人…八
存友帖…………………戸川　殘花…九
警察の一と昔……………黑　顏　子…九
小品三篇………………兒玉　花外…十
鬼面囈語………………白　雨　生…十
出鱈目…………………空　谷　子…十一
歌舞伎座と市村座………酔　笑　生…十二

新刊紹介數十件

社告

各號の部數は僅少なれとも全部取揃へて高需に應ずることを得べし、特に第八號及第十一號は、發行日を以て一旦賣切れたるものなれは、號切缺本の爲め迷惑し居らるゝ讀者は、速かに申込まるべし

△代價一號は金廿八錢、四號は金四拾錢、十號は金卅八錢、其他は總て金二十一錢五厘

第四卷第一號

趣味

本號三拾五錢　普通一部廿三錢　半年壹圓三拾五錢

文壇の趨勢　夏目漱石
爐邊漫語　小杉天外
來るべき劇壇　巖谷小波
民衆の自覺　中澤臨川
最近の露國文壇　エリセエフ
△伯爵夫人　島崎藤村
△おやぢ　德田秋聲
△最初の記憶　正宗白鳥
△晩餐の後　永井荷風
△鼠　小山內薫
△吐息　水野葉舟
△九段坂下より　岡田八千代
△好意　小栗風葉
△ふれ賣　田山花袋
處女地　馬場孤蝶
革命的喜劇家　高安月郊
俳句の將來　內藤鳴雪
梗概物につき　金子筑水
忙中一閑錄　內田魯庵
音樂雜話　幸田延子
肖像畫につき　前田健次郎
清國美術談　今泉雄作
鉢の木につきて　池內信嘉
雪と松　畔柳芥舟
小品三篇　薄田泣菫
綠の印象　蒲原有明
僕そのよ　岩野泡鳴
ありのすさび　與謝野晶子
四十二年の文藝界に對する要求　島村抱月　柳川春葉　德田秋江　長谷川天溪
殿樣の養雞　戶川秋骨
雛の繪畫　鈴木華村
雛娘夫戀櫻　中井浩水
支那婦人の正月　清藤秋子
雜誌編輯難　長谷川天溪
新聞の艶種　渡邊默禪
攝津と越路　岡本綠川
昨年の野球界　白雲子
劇界瑣話　中村芝翫
婦人と遊藝　下田歌子

東京麴町區飯田町　易風社　振替一二〇三四番

信用ある書店及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●本號に限り 定價金四拾錢郵稅貳錢五厘

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵稅共

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本鄕西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵劵代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年十二月廿七日印刷
明治四十二年一月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所（電話下谷九一九） 東京市本鄕區駒込西片町十番地 反省社

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
卸小賣
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、帯留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新の流行品目録郵券六銭封入御申越次第進呈す
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌシ)コ八
振替口座七八〇七
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價